

海外平安文学 研究

ジャーナル 4.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.4.0



伊藤鉄也 編

<謝辞 Acknowledgement >

本研究は JSPS 科研費 25244012 の助成を受けたものです。

This was financed with JSPS KAKENHI Grant Number 25244012.



あいさつ

平成 26 年秋に創刊したオンライン版『海外平安文学研究ジャーナル』(ISSN:2188-8035)は、お陰さまで好評のうちに号を重ね、今号で4冊目となりました。さまざまな分野の方々から、温かく迎えていただきましたことに、篤くお礼申し上げます。

年2冊の刊行も順調に進捗し、その内容も多彩な論稿を並べる異色の電子ジャーナルとして話題にいただいています。ありがたいことです。

今号も、科研のメンバーに留まることなく、広く国内外の研究者に投稿を呼びかけたこともあり、さまざまな切り口で海外の平安文学が取り上げられています。日本の文学をこのような角度から見ると、また違った姿が見えてきます。

本課題では、国際的な視野で日本文学および日本文化を見つめることを意識して、さまざまな問題に取り組んでいます。多角的な視点で平安文学を論じた、みなさまからの意欲的な投稿を歓迎します。

これまでに、多くの方々のご理解とご協力をいただきました。改めて、お礼申し上げます。

そして、これからも変わらぬご支援のほどを、どうかよろしく願いいたします

2016年3月30日

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)

「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する
総合的調査研究」(課題番号:25244012)

研究代表者

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立大学法人総合研究大学院大学

国文学研究資料館 伊藤鉄也

■ 『海外平安文学研究ジャーナル』原稿執筆要項■

本ジャーナルの原稿を募ります。平安文学に関する論稿等をお寄せください。

- 1 論文分量 400字原稿用紙換算で30枚以上(12,000字以上)
小研究(20枚以下)、研究余滴(10枚以下)、翻訳実践(自由)
- 2 原稿表記 原則として日本語表記・横書き
- 3 原稿締切 随時(応募希望者は、〈氏名・所属・仮題・簡単な原稿内容・パソコンのメールアドレス〉等を明記して、あらかじめ執筆意向を【itokaken@gmail.com】まで連絡のこと)
- 4 電子公開 毎年春・秋(予定)
- 5 体裁 A5版の版面を想定したオンライン画面
- 6 推奨版面 ・活字11ポイント、27行×34字詰、余白上下左右20ミリ
・フォントは、MS明朝、Times New Roman
・節ごとに小見出しを付す。
・注は版面ごとにそれぞれ下部にアンダーラインを引いて付す。
注番号は本文の当該箇所丸括弧()付きの数字で示す。
(参考文献の書式例については、「海外源氏情報」内「海外平安文学研究ジャーナル」(<http://genjiito.org/journals/>)参照のこと)
- 7 原稿入稿 ワード文書またはテキストファイルをメールに添付して送付。
問い合わせ・送付先 【itokaken@gmail.com】
- 8 採否/校正 採否はメールで連絡。執筆者の校正は初校のみ。ただし、公開から1年以内に1度だけ改訂版に差し替え可能。
- 9 図版・写真など 掲載許可が必要な場合、原則として資料手配や使用料は執筆者の負担。図版・写真は、原稿枚数の中に含む。

目次

あいさつ 伊藤 鉄也 3

原稿執筆要項 4

❁ 研究論文

ロシア語訳『源氏物語』とウォッシュバーンによる
新英訳の比較研究～〈語り〉・和歌・「もののあはれ」の観点から
土田 久美子 11

スペイン語版『伊勢物語』について 雨野 弥生 37

❁ 研究会拾遺

ウルドゥー語訳『源氏物語』の完本発見 伊藤 鉄也 51

❁ 翻訳の現場から

「十帖源氏」ヒンディー語訳の問題点 菊池 智子 61

ウルドゥー語版『源氏物語』の色の世界 村上 明香 65

『十帖源氏』の多言語翻訳と系図について
～「母の堅子」と「祖父の惟正」はどこから来てどこへ行ったのか
浅川 槇子 76

❁付録

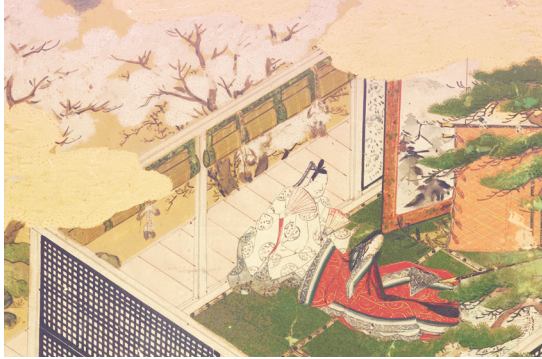
各国語訳『源氏物語』・『十帖源氏』「桐壺」翻訳データ	99
『源氏物語』「桐壺」モンゴル語	104
『十帖源氏』「桐壺」英語	122
ロシア語	137
ヒンディー語	147
ウルドゥー語	158
<u>執筆者一覧</u>	167
<u>編集後記</u>	168
<u>研究組織</u>	169

(色紙詞書)

深き夜のあはれを
しるも入月△
おほちけならぬ
契△そお△△

*表紙・前扉・扉 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵
『源氏物語屏風』「花宴」巻の色紙
(金箔散下絵入の詞書、金泥彩色画／番号：ラ1ー18)

研究論文



ロシア語訳『源氏物語』とウオッシュバーンによる 新英訳の比較研究

—〈語り〉・和歌・「もののあはれ」の観点から—

土田 久美子
(つちだ くみこ)

❀ はじめに

筆者は2007年に学位を取得した博士論文¹において「ロシア文化を背景とするロシア人翻訳者が『源氏物語』をどのように理解したのか、その『源氏物語』観に基づいてどのような翻訳テキストを生み出したのか」という問題意識の下、タチアーナ・リィヴォヴァ・ソコロワ＝デリュエシナ氏によるロシア語訳『源氏物語』（1991－93年）を〈語り〉の手法・和歌・「もののあはれ」といった観点から考察した。

『源氏物語』は、語り手による物語内容の〈語り〉と和歌から成る。本居宣長の「もののあはれ」論は今日では手放して認められている訳ではないが、この言葉が本物語の美的理念を表わす重要な語であることに変わりはないだろう。原文とロシア語訳を読み比べたところ、やはりこの三点に同訳の特徴が表れていた。

考察の結果、ロシア人翻訳者の『源氏物語』理解が訳文に反映されたところは、末松謙澄（1882年）・ウェイリー（1925－33年）・サイデンステッカー（1976年）・タイラー（2001年）の英訳、シフェールの仏訳（1977・1988年）、バーネル²の独訳（1966年）、林文月（1973

1 拙論『ロシア語訳『源氏物語』の研究—〈語り〉・和歌・もののあはれの観点から—』（2006年度青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻博士論文）。2015年、関西学院大学出版会よりオンデマンド出版された。以下、拙論からの引用出典は、2015年に出版された書籍のページ数で示す。

2 1の拙論では独訳者を「ベンル」と表記したが、常田禎子氏がユディット・アロカイ氏の論文に基づいて「バーネル」と表記しているため、本論でもそのように表記する。

常田禎子「バーネル訳『源氏物語』における和歌の翻訳：英訳・仏訳との比較

－ 78 年）・豊子愷（1980－84 年）の中国語訳には見られない、あるいは大多数の他の外国語訳には見られない特徴になっていたことが明らかになった。

その後 2015 年、デニス・ウォッシュバーン氏による新しい英訳が加わった。

そこで本論では、上記の拙論でロシア語訳の特徴および独自性だと結論付けたことが、新英訳と比較してもなお有効であるかどうか、検証する。

❁ 1. <語り>の手法の翻訳

1.1 人物呼称

デリュエシナ氏は、世の中の全ては移り変わると同時に全ては変わらずに残ると言う、「不変性（постоянство）と無常（изменчивость）の一体性の感覚（ощущение единства）」が『源氏物語』を貫いていると考えた。氏の理解では、それは後に芭蕉が「不易流行」として定式化したことである。すなわち、四季は常に移り変わるが、四季の交代そのものは規則的である。人間の世代も交代するが、人間の社会自体は不変である。そのため『源氏物語』の呼称の流動性を翻訳でも維持することが非常に重要だと思えたという。というのも、源氏の呼称が中将、大将、大納言と変化することに無常が表現されていると同時に、後の世代の夕霧や薫も同じ「中将」と呼ばれることに不変性が表現されているとデリュエシナ氏は考えたからである。

もっとも、同様の翻訳は仏訳でも行われていた。シフェールも、『源氏物語』は終わりのない川のようなものであり、それは『方丈記』や芭蕉の「流行」と「不易」を対照させる思想に通じているとの見解を有していた。そして原文通りの呼称の変化を仏訳でも維持することによって、人間の世の中は流れが絶えない川のごときものという思想を伝えること

から」『海外平安文学研究ジャーナル』(vol.1.0)、p59、2014 参照。

ができる、仏訳書の序文で述べていたのである。フランス人翻訳者は「『流行』と『不易』を対照 (opposition) させる思想」、ロシア人翻訳者は「不変性と無常の一体性の感覚」と述べており、「対称」と「一体性」という違いはあるが、人物呼称についての理解と翻訳実践には共通点がある³。

英訳においては、先行するウェイリー訳・サイデンステッカー訳と異なり、タイラー訳になって原文通り変化する呼称が用いられるようになったことが指摘されている。タイラー訳の人物呼称は、語り手が帰属する社交圏を明確化したり、日本語の敬語体系を英訳でも表現したり、原文における視点ないし叙述の焦点の移動を英訳にも反映させたりする効果を生んでいる⁴。ただし、タイラー氏の人物呼称についての理解には、デリュースナ氏と重なる点は見られない。

それでは、最新のウォッシュバーン訳ではどのように翻訳されているだろうか。

まずは源氏の呼称の移り変わりを、原文・ロシア語訳・ウォッシュバーン訳の順に示す。以下、下線は全て源氏を指す呼称である。

原文① 中將の君も、おどろおどろしう、さま異なる夢を見給ひて、⁵
(若紫巻)

露 訳 ① Между тем господину Тюдзэ приснился удивительный, странный сон. (その間チュウジョウ殿は驚くべき、奇妙な夢を見

3 詳しくは前出(1)第一部・第一章人物呼称(p56-105)で論じた。デリュースナ氏の人物呼称に関する理解は、講演「『源氏物語』の翻訳作業について若干の言葉」(2002年2月22日、於モスクワ市・外国文学図書館)の記録 <http://graf-mur.holm.ru/gerb/gerb10.htm> 参照。シフェールの見解は、Murasaki Shikibu. Le Dit du Genji. Vol. 1. pXXII-XXIII. Traduction du japonais par René Sieffert. Paris. Publications orientalistes de France. 1988 参照。

4 緑川真知子『『源氏物語』英訳についての研究』p289-323(武蔵野書院、2010年)

5 原文はデリュースナ氏が翻訳の底本とした岩波大系より引用する。『日本古典文学大系 源氏物語(一)』p207、山岸徳平校注(岩波書店、1958)

た。) ⁶

ウォッシュバーン訳 (以下「W訳」) ① One night Genji had a weird and terrifying dream. ⁷

原文② まるり給ふ夜の御供に、宰相の君も、仕うまつり給ふ。 ⁸

(紅葉賀巻)

露訳② В ночь, когда новая Государыня-супруга вступила во Дворец, ее сопровождал и господин Сайсё.

(新しい皇后が参内した夜、サイシヨウ殿も彼女に随行した。) ⁹

W訳② The night Fujitsubo formally entered the palace as Empress for the first time, Genji, in his role as Consultant, was in her retinue ¹⁰.

原文③ 宰相中將、

「春」といふ文字たまはれり」

とのたまふ聲さへ、例の人に異なり。 ¹¹

(花宴巻)

露訳③ Вот выходит господин Сайсё-но тюдзё:

– «Весна-чунь», – объявляет он, сразу же привлекая к себе восторженное внимание собравшихся, ибо даже голос у него не такой, как у других.

6 Murasaki Shikibu. Повесть о Гэндзи (Гэндзи Моногатари). Кн.1. p99. Пер. Т.Л. Соколовой-Делюсиной. Москва. Наука. 1991. 露訳には筆者による再和訳を添える。なお、訳語がロシア文字による日本語の音の表記になっている場合、「チュウジョウ」などと片仮名表記した。

7 Murasaki Shikibu. The Tale of Genji. p113. Translated by Dennis Washburn. New York. London. W.W. Norton&Company. 2015. 英訳の再和訳は、紙幅の都合上割愛させていただく。

8 前出 (5)p299

9 前出 (6)p148

10 前出 (7)p171

11 前出 (5)p303

(そこへサイショウノ チュウジョウ殿が出てくる：

『春(チュン)』、と彼が発表すると、直ぐに参集した人々の歡喜に満ちた注目をひきつけた、なぜなら彼の声ですら他の人々とは異なっているからである。) ¹²

W 訳③ Genji, who was now a Consultant in the Council of State,
announced in his incomparable voice, "I have drawn the character
for *Spring*." ¹³

原文④ (筆者注：退位した桐壺院は春宮のことを) 大將の君に、よ
ろづ聞えつけ給ふも、 ¹⁴ (葵巻)

露訳④ Государь весьма часто прибегал к помощи господина
Дайсё, (帝は非常にしばしばダイショウ殿に支援を求めたので) ¹⁵

W 訳④ ...he asked Genji to look after the boy's affairs - ¹⁶

原文⑤ (春宮は) たゞ、源氏の大納言の御顔、二つにうつしたらん
やうに、見え給ふ。 ¹⁷ (滯標巻)

露訳⑤ ...как две капли воды походил лицом на Гэндзи-
дайнагона. (ゲンジ・ダイナゴンの顔に瓜二つであった。) ¹⁸

W 訳⑤ ...with a face that was an exact replica of Acting Major
Counselor Genji's. ¹⁹

原文⑥ 内のおとゞのみなん、御心のうちには、煩はしく思し知らるゝ

12 前出 (6)p150

13 前出 (7)p172

14 前出 (5)p317

15 前出 (6)p158

16 前出 (7)p181

17 前出 (5) 二 p103 (1959 年刊)

18 前出 (6)p270

19 前出 (7)p319

事ありける。²⁰

(薄雲巻)

露訳⑥ Один лишь министр Двора догадывался о причинах, и тревожные мысли неотступно преследовали его...

(一人宮内大臣だけが理由について感じていた、そして、不安な思いが彼につきまとして離れなかった…) ²¹

W 訳⑥ Genji alone understood the meaning of all these things, and his heart was deeply troubled, since he knew he was the cause. ²²

原文⑦ 召ありて、太政おとど、まゐり給ふ。²³

(乙女巻)

露訳⑦ По особому указу в церемонии участвовал и Великий министр. (特命によって儀式に太政大臣も参加した。) ²⁴

W 訳⑦ His Majesty had summoned Genji to join him on the progress, ²⁵

原文⑧ あるじの院、菊を折らせ給ひて、青海波のをり、おぼし出づ。²⁶

(藤裏葉巻)

露訳⑧ Хозяин, велев одному из своих приближенных сорвать для него хризантему, вспомнил, как танцевали они когда-то танец «Волны на озере Цинхай»:

(主人は、彼のために菊を折るよう側仕えの一人に命じて、かつて彼らが「青海の波」という舞を舞ったことを思い出した。) ²⁷

W 訳⑧ Genji, remembering how he and Tō no Chūjō had once performed the dance “Waves of the Blue Sea,” had some

20 前出 (5) 二 p227

21 前出 (6) К н .2.p40-41 (1993 年刊)

22 前出 (7)p397

23 前出 (5) 二 p317

24 前出 (6) К н .2.p87

25 前出 (7)p451

26 前出 (5) 三 p205 (1961 年刊)

27 前出 (6) К н .2.p253

源氏の呼称は、ロシア語訳では原文に即して①「チュウジョウ殿」、②「サイショウ殿」、③「サイショウーノ チュウジョウ殿」、④「ダイショウ殿」、⑤「ゲンジ・ダイナゴン」、⑥「宮内大臣」、⑦「太政大臣」、⑧「主人」と変化していく。このような移り変わりに、デリュースナ氏は「無常」を感じたというわけである。(ただし、後の例に見られるように、「ゲンジ」という呼称も平行して用いられることもある。)一方ウォッシュバーン訳では、③に「a Consultant in the Council of State (国政評議会顧問)」、⑤には「Acting Major Counselor Genji (臨時上級参与官ゲンジ)」と官職名も併記されているものの、一貫して「Genji」が用いられている。

次に、同一の呼称が世代を超えて物語内に繰り返し登場する例を見てみよう。紙幅の都合上、本稿では⑨夕霧と⑩薫が「中将」と称される場面のみを引用する。

原文⑨ 中將の君を、こなたには、けどほくもてなし聞え給へれど、²⁹
(蛭巻)

露訳⑨ Министр запретил господину Тюдзё приближаться к Весенним покаям,
(大臣はチュウジョウ殿に春の間へ近づくのを禁じた)³⁰

W 訳⑨ Genji had always kept his son away from Murasaki,³¹

原文⑩ 中將は、世(の)中を、深く、あぢきなき物に、思ひすまし

28 前出 (7)p639 本箇所から、葵の上の兄であるいわゆる「頭中将」が太政大臣になっても「Tō no Chūjō」と称されていることも確認される。ロシア語訳では固定した「頭中将」という呼称は用いられていない。

29 前出 (5) 二 p436

30 前出 (6) К н .2.p151

31 前出 (7)p522

たる心なれば、³²

(匂宮巻)

露訳⑩ Тюдзэ же, презирая мир с его преходящими утехами

(チュウジョウは、はかない慰みばかりの世の中を軽蔑しており)³³

W 訳⑩ Kaoru had a deep sense of the insipid nature of mundane affairs,³⁴

ロシア語訳では原文に従い、源氏の息子の夕霧も、その次の世代の薫も、かつての源氏と同じ「中将」として登場する。この呼称の不変性に、デリューチナ氏は人間社会の不変性を感じ取ったのである。

だがウォッシュバーン訳では、夕霧は「彼（源氏）の息子」、薫は「カオル」である。デリューチナ氏が考える呼称の不変性は、同訳から読み取ることはできない。

ウォッシュバーン氏は翻訳書の序文で、翻訳の際に最優先したのは明確さと理解しやすさであるため、伝統的な通称の使用が適切と考えられる人物にはそれを用いたと述べている³⁵。

よって、『源氏物語』の人物呼称から「不変性と無常の一体性の感覚」乃至「流行と不易を対照させる思想」を読み取った上で、それを翻訳でも維持していたのはロシア語訳と仏訳のみであることに変わりはないことが判明した³⁶。ロシア語訳唯一の独自性とまでは言えないが、最新の

32 前出 (5) 四 p227 (1962 年刊)

33 前出 (6) К н .3.p218 (1993 年刊)

34 前出 (7)p889

35 前出 (7)p. xxxviii. なお 811 頁の注で、夕霧は伝統的な通称の使用は避けたとの説明がある。この通称の基になった和歌が物語に登場するのが遅いこと、夕霧の官位への執念や父親との性格のコントラストといった人物の要となる要素が、伝統的な通称では十分とらえられないことが理由だという。

36 仏訳での原文①～⑩の呼称は次の通りである。①「Le Commandant (指揮官)」(前出 (3) の仏訳書 p112. 以下頁数のみ記す)、②「le Sire Conseiller (評議員殿)」(167)、③「le Commandant Conseiller (指揮官・評議員)」(169)、④「(au) sire Général (大将殿)」(177)、⑤「le Grand Conseiller Genji (大審議官ゲンジ)」(308)、⑥「Le Ministre du Dedans (内大臣)」(387)、⑦「le Grand Ministre (太政大臣)」(439)、⑧「Le maître de céans (この家の主人)」(628)、⑨「Le seigneur Commandant (指揮官の君)」(509)、⑩「(au)Commandant (指

英訳で原文通りの呼称翻訳が行われていないことに照らせば、その特殊性はさらに際立つであろう。

1.2 時制の交替

次に、〈語り〉における時制の用法をロシア人翻訳者がどのように理解し、どのように翻訳に活かしたのかという問題を論じる。

デリューシナ氏は『源氏物語絵巻』を眺めて、「吹抜屋台」の描写法が物語本文の性格をよく映し出していると感じた。すなわち、読者の視野の真ん中に次から次へとエピソードが立ち現れて、それがあたかもアップで迫ってくるかのようだという印象を受けたのである。この効果を翻訳文でも伝えるべく、現在形と過去形の文法的交替という手法の導入を決めたという³⁷。語りの基本時制は過去形で、主として作中人物の会話・詠歌を中心とした場面、及び男性が女性を垣間見する場面で現在形に切り替わることが多くなっている³⁸。

前者の例として須磨の巻より、都を去る源氏と都に残る紫の上が和歌を詠み交わす場面を挙げる。(以下イタリックは原文、下線は筆者による)

原文⑩ 「こよなうこそ、衰へにけれ。この影のやうにや、瘦せて侍る。

あはれなるわざかな」

との給へば、女君、涙をひと目浮けて、見おこせ給へる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡のかげははなれじ

と、きこえ給へば、

わかれてもかげだにとまる物ならば鏡を見てもなぐさめてまし

揮官)」(Vol.2, 268)。なおデリューシナ氏は仏訳を読んでおらず、両者に影響関係はない。

37 タチアーナ・L・ソコロワ＝デリューシナ『タチアーナの源氏日記』p21、法木綾子訳 (TBS プリタニカ、1996)

38 ロシア語訳における現在形の使用場面一覧は、前出 (1) の拙論 p116-124 参照。

いふともなくて、柱がくれに居隠れて、涙をまぎらはし給ふさま、「なほ『こゝら見る中に、たぐひなかりけり』と申し知るゝ、人の御有様なり」と、まもられ給ふ。みこは、あはれなる御物語きこえ給ひて、暮るゝ程に歸り給ひぬ³⁹。

露訳① — Как я похудел! — сказал он. — Неужели я и в самом деле такой, как в этом зеркале? Право, невольно начинаешь испытывать жалость к самому себе.

Он взглянул на госпожу, которая смотрела на него полными слез глазами, и сердце его сжалось от боли.

(「何と私は痩せたことか！」と彼は言った。「まさか私は、実際にこの鏡に映った通りなのか？本当に、思わず自分自身が衰れに思えてくる」

目にいっぱい涙を浮かべて彼を見つめる夫人に彼は目をやった、そして彼は心が痛みで締め付けられた。)

— Пусть меня самого (私自身には)

Ждут долгие годы скитаний,
(長い流離の年月が待ち受けているとしても)

Рядом с тобой (あなたの隣に)

Останется зеркало это, (この鏡が残されるだろう、)

А в нем — отраженье мое. — (その中には — 私の影 —)

говорит Гэндзи, а она отвечает:

(とゲンジは言い、彼女は答える：)

— Когда бы со мной (もしも私と共に)

В дни разлуки твое отраженье
(別れている日々にもあなたの影が)

Остаться могло, (残るならば、)

Я бы, в зеркало это глядя, (この鏡を見ながら、)

Забывала о горе своем. (悲哀を忘れることでしょう。)

39 前出 (5) 二 p20-21

Эти слова она произносит совсем тихо, словно про себя и, прячась за столбом, пытается скрыть слезы. «Многих женщин я знал, но ни одна не сравнится с ней!» — думает Гэндзи, не отрывая от нее глаз.

Принц Соти долго беседовал с Гэндзи, всем видом своим выражая сочувствие, и уехал, когда стемнело⁴⁰.

(この言葉を彼女は独り言のごとく全く静かに口にして、柱の陰に隠れ、涙を隠そうとしている。「多くの女性を知っていたが、彼女と比べられるのは一人もいない！」と彼女から目を離さずに、ゲンジは思う。

ソチ皇子は、あらゆる態度で同情を表わしながら長い時間ゲンジと語った、そして暗くなった頃に辞去した。)

W 訳① “Look at me...I’m no longer the man I was. Am I really all that thin? What a miserable state of affairs!” Noticing the tears in Murasaki’s eyes, the pity he felt for her was unbearable.

Though my body must wander in exile

My image will never be far away

Reflected in this mirror by your side

Murasaki replied:

Though we are apart, I may find solace

If perhaps by gazing in this mirror

I should glimpse your image lingering there

She tried to hide her tears from him by sitting behind a pillar. Seeing her like that, Genji realized that none of his other women could compare to her.

Sochinomiya continued his mournful conversation with Genji until dusk, at which time he returned home⁴¹.

40 前出 (6)p221-222

41 前出 (7)p260-261

ロシア語訳では、源氏の和歌を契機に現在形に切り替わり、帥の宮が出てくる文から過去形に戻る。原文で「女君、涙をひと目浮けて、見おこせ給へる、いと忍びがたし」と言われているように、人は感情が高まった時に和歌を詠む。デリュエシナ氏は、こうした詠歌の場面が読者にアップで迫ってくるかのようだという印象を受けて、現在形を用いることにしたのだろう。

一方、同場面の従来の英・仏・独訳は過去形で統一されており⁴²、ウォッシュバーン訳でもやはり下線の動詞は全て過去形であった。

垣間見場面の例としては、空蟬の巻より、碁を打っている空蟬と軒端萩を源氏が垣間見する箇所を引用する。

原文⑫ 火近うともしたり。「母屋の中柱にそばめる人や、わが心かくる」と、まづ目とゞめ給へば、濃き綾の単襲なめり。何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに、小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔なども、さし向ひたる人などにも、わざと、見ゆまじうもてなしたり。手つき、やせやせとして、いたう、ひき隠しためり。今一人は東向きにて、残る所なく見ゆ。(中略)すべて、「ねぢけたる所なく、をかしげなる人」と見えたり。「むべこそ、親の、世になくは思ふらめ」と、をかしく見給ふ。(中略)小君出でくる心ちすれば、やをら出で給ひぬ。⁴³

露訳⑫ Рядом с женщинами горел светильник. Одна из них сидела у столба, боком к Гэндзи. «Это она», — обрадовался он и принялся ее разглядывать.

(女の隣で燈が燃えていた。彼女たちのうち一人が、柱の側、源氏に対し横向きに座っていた。「あれが彼女だ」と彼は喜び、彼女を凝視し始めた。)

На ней темно-лиловое нижнее платье из узорчатого шелка, а

42 詳しくは、前出(1)の拙論 p153-156 参照。

43 前出(5)p111-113

сверху еще что-то, что именно — не видно. Маленькая головка, изящные мелкие черты — ничего яркого, бросающегося в глаза. Даже от гостыи своей, сидящей напротив, она старательно прикрывает лицо. Тонкие руки прикрыты рукавами.

Вторая сидит лицом к востоку и видна вся как на ладони. (中略) На первый взгляд наружность ее кажется безупречной.

«Право, не зря ее отец так ею гордится, — думает Гэндзи, с любопытством разглядывая эту прелестную особу.

(彼女は模様のある絹でできた、暗い藤色の下の衣を着ていて、その上にさらに何か、それは何であるかは — 見えない。小さな頭、優雅な小作りの顔立ち、一目に付くような際立ったものは何もない。向かいに座っているお客にさえ、彼女は努めて顔を隠そうとしている。細い手は袖で覆われている。

二人目は東向きに座っていて、手に取るように丸見えである。(中略) 一見したところ彼女の容貌は非の打ち所がないように感じられる。「本当に、父親があんなに彼女を誇りにしているのは無理もない」とゲンジは、この魅力的なお方を興味深く凝視しながら思う。)

(中略) но тут послышались шаги Когими, и Гэндзи тихонько проскользнул обратно к выходу на галерею⁴⁴. (だがそこへコギミの足音が聞こえてきて、ゲンジは静かに廊下への出口に抜け出た。)

W 訳⑫ A lamp had been set next to the Go board. While trying to make out the figures in the dim light, he guessed that the woman lying in profile near one of the central pillars was the young wife who preoccupied him, and so he ran his eyes over her first. Her under robe appeared to be a singlet of simple design, died a deep violet hue. He could not clearly make out the pattern or color of the outer robe. She did not strike him as an exceptional beauty, but her head was slender, she was of slight build, and she was careful to

44 前出 (6)p50-51

keep her face hidden even from her playing partner. She also went to great lengths to make sure her hands and wrists did not protrude from her sleeves. The other woman was facing east, so he could see all of her. (中略) Nothing was out of place or amiss, and she looked stunning. No wonder her father treats her like a priceless treasure! Genji thought, savoring the pleasure of gazing at her.

(中略) Just then, however, the boy appeared and he had to quietly withdraw⁴⁵.

ロシア語訳では、源氏の垣間見開始を境に時制が切り替わり、源氏の目に映る空蟬と軒端萩は現在形で語られる。小君が出てくる気配がして源氏が垣間見を終えると、再び過去形に戻っているのである。

このような時制の交替は同場面の従来の英・仏・独訳のみならず、ウォッシュバーン訳にもやはり見られないことが判明した。ただしウォッシュバーン訳では「*No wonder her father treats her like a priceless treasure!* (彼女の父が彼女を、値がつけられないほど貴重な宝のように扱うのも当然だ)」という源氏の内的独白をイタリックで強調させ、現在形にしている。内的独白を際立たせるのはむしろ、ロシア語訳にはないウォッシュバーン訳の特徴である⁴⁶。

以上、ロシア語訳では会話・詠歌を中心とした場面、及び垣間見の場

45 前出 (7)p55-57

46 詳しくは、前出 (1) の拙論 p135-138 参照。もっとも、心内語に現在形を用いるのは独訳やタイラー訳などにも見られる。

ロシア語訳でも別の場面では、心内語に現在形が用いられることがある。例えば浮舟が匂宮と密通していることを知った薫の心理描写 (前出 (5) 五 p257 (1963 年刊) にはロシア語訳にも現在形が使用されている (前出 (6) К Н .4.p166 (1993 年刊))。ただし、該当のウォッシュバーン訳 (前出 (7)p1205) のように主語を「私」にしたり、イタリック体にしたりということは見られない。

ウォッシュバーン氏は序文で、英語の訳文にも日本の古文の痕跡が見えるようにした工夫の一つとして、内的独白をイタリックで際立たせたと述べている。前出 (7)p.xxxvi

面が現在形になることが多く、デリュージナ氏はこうした場面に視覚臨場性を感じていたことが分かる。

ロシア語の言語学的研究によれば、ロシアの文学作品でも「言う」のような発話の動詞、及び「見る」のような視覚行為動詞は、過去形による語りの中でも現在形が多く用いられる傾向がある。それにより、作者があたかも作中人物と同じ時間内にいるかのように思わせ、さらに読者も作中世界に引き入れるような効果を生むのである⁴⁷。

ロシアの文学作品に根ざした時制の交替という手法は、最新の英訳にも用いられていないことが確認できた。

❁ 2. 作中和歌の考察

2.1 リズムの翻訳

デリュージナ氏は翻訳された和歌がロシア語の詩としても味わえるようにしたいと志して、翻訳にあたってリズムを重視した。ただ、ロシア語の作詩法はアクセントのある音節とない音節の組み合わせでリズムを作るものであり、和歌の31音節をそのままロシア語に当てはめることはできないと氏は考えた。検討の末、ジュコフスキイ(1783-1852)の『彼女に』(1811年頃)という詩の韻律を参考にして次のようなリズムを考案した。引用するのは、重病の桐壺更衣が帝に詠んだ別れの和歌である。アクセントのある音節を「-」、ない音節を「U」で表わす。

原文^⑬ かぎりとして別るゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり⁴⁸

露訳^⑬

В сердце тоска.

心には憂鬱

- U U | -

47 詳しくは、前出(1)の拙論 p114、152、164-167 参照。

48 前出(5)p31

Подошел к своему пределу

果てに近づいた

U U- | UU - | U - U

Жизненный путь.

命の道。

- U U | -

А ведь мне так хотелось и дальше

UU - | UU - | UU - | U

私はこんなに先へも行きたいのに

По нему с тобою идти...⁴⁹

その道をあなたと共に…

U U - | U - U | U -

このように、五行詩でアクセント数をそれぞれ2-3-2-3-3としたものが、ロシア語訳における和歌の基本的な翻訳形式である。デリューチナ氏はこのリズムによって、和歌の韻律をロシア語でも伝えることができる考えたのである。

五行詩という点は従来の英訳とは異なり、仏訳および独訳と同じである。ただし、仏訳と独訳は音節数を5-7-5-7-7に揃えている点で、ロシア語訳と異なる⁵⁰。

ウォッシュバーン氏も、英語で31音節にしても、和歌の意味も美的雰囲気も表現できないことが多く、また必要な音節数にするために語を加えるのも誤りだと考えた。試行錯誤の末に考案したのは、音節が同じ数の三行詩という形式である。音節数は和歌毎に異なる⁵¹。例えば⑬の和歌は、次のように一行が11音節から成っている。

W 訳⑬ *Now in deepest sorrow as I contemplate*

- U - U - U UU - U U

Our diverging roads, this fork where we must part

U U - U - U - - U - -

49 前出 (6)p9

50 詳しくは、前出 (1) の拙論 p169-207 参照。

51 前出 (7)p.xxxvii

*How I long to walk the path of the living*⁵²

— U — U — U — U U — U

以上、ロシア語訳の和歌の翻訳形式はウォッシュバーン訳を含む英訳、仏訳、独訳とは異なる独自のものと言うことができる。ただ、31音節で翻訳するのではなく翻訳される言語で和歌に近いリズムに聞こえるような形式を考案しようと試みた点は、デリュエシナ氏とウォッシュバーン氏の共通点である。

2.2 和歌の修辞技法の翻訳

デリュエシナ氏は、ロシア詩の修辞技法である比喻と掛詞が異なる点として、掛詞は原則として自然界と人間界を表わす同音異義語の組み合わせから成っており、その基盤には人間と自然の不可分性という『源氏物語』の、ひいては日本人の世界観があると考えていた⁵³。

もっとも、掛詞を深く理解していたとは言え、実際の翻訳では成功例の数は限られてしまっている。それでも、以下のような非常に興味深い例がある。いずれも源氏が末摘花を想って詠んだ和歌である。(斜体は原文、下線は筆者による。)

原文^⑭ なつかしき色ともなしになにゝこの末摘花を袖にふれけん⁵⁴

(末摘花巻)

露訳^⑭

Вряд ли цветом своим, 自らの色では恐らく、

О шафран, ты прельстить меня можешь,

おおサフランよ、私を魅了できまい、

52 前出 (7)p6

53 デリュエシナ氏の掛詞に関する理解について詳しくは、前出 (3) の Web サイト参照。

54 前出 (5)p263

Но с красным цветком — だが赤い花〔鼻〕とは —
 Почему, я и сам не знаю — なぜか、私自身にも分からぬが —
 Расстаться никак не могу⁵⁵. どうしても別れられぬ。

原文⑮ くれなるの花ぞあやなくうとまるゝ梅のたち枝はなつかしけれ⁵⁶
 (末摘花巻)

露訳⑮

Не пойму отчего, なぜかは分からない、
Но с алым цветом всегда я だがいつも私は紅色〔鼻〕と
 Был не в ладах, 不和であった、
 Хоть и пленяли меня 花咲く梅は私を
 Цветущие сливы...⁵⁷ 魅了したけれども…

原文⑯ ふる里の春のこずゑにたづねきて世の常ならぬ花を見るか
な⁵⁸ (初音巻)

露訳⑯

Зашел посмотреть 古い庭に
 Я на деревья весенние 春の木々を見るため
 В старом саду 私は立ち寄った
 И случайно набрел на редкостный, そして偶然、珍しくて、
Но с давних пор милый цветок...⁵⁹
だが昔から愛しい花〔鼻〕と出会った…

「はな」が「花」と「鼻」の掛詞である。ロシア語訳では、いずれも

55 前出 (6)p127

56 前出 (5)p268

57 前出 (6)p131

58 前出 (5) 二 p387

59 前出 (6) К н .2.p125

「*Ho c*」が斜体で強調されている。「*Ho*」は接続詞「～だが」、「*c*」は前置詞「～とは」に相当し、「*Hoc*」一語で「鼻」という名詞になる。つまり、ロシア語訳には「鼻」という語が読み取れる仕掛けが施されているのである。これは掛詞よりはむしろ物名（隠し題）という和歌の修辞技法に似ているが、「はな」の掛詞がロシア語の言葉遊びによって翻訳されたことは極めて興味深い。

同様の訳し方は他の外国語訳には見出せなかったのだが⁶⁰、ウォッシュバーン訳ではどうだろうか。

W 訳⑭ *This color suits me not and now I wonder*
Why have I let my sleeves touch the safflower
Plighted my troth to Suetsumuhana

W 訳⑮ *These spreading branches of plum stir longings...*
Yet for some reason their scarlet blossoms
Are, like red noses, repulsive to me

W 訳⑯ *Having come to view the blossoms of spring*
At the abode I lived in long ago
*What strange, mysterious flowers I see*⁶¹

⑭と⑯⁶²は「花」のみ訳出、⑮は「紅花は赤鼻のように嫌悪感を催させる」と両義訳出されているが、ロシア語訳のような言葉遊びは使われ

60 詳しくは、前出 (1) の拙論 p238-245 参照。ただし、和歌⑭のタイラー訳では「brush (軽い接触)」と「blush (赤色)」という発音が類似した語が用いられており、言葉遊びと見なすこともできる。Murasaki Shikibu. *The Tale of Genji*. Vol.1. p127. Translated by Royall Tyler. New York. Viking. 2001

61 ⑭は前出 (7)p145、⑮は同 p149、⑯同 p494

62 この和歌に続く「きゝ知り給はざりけむかし。」(前出 (5) 二 p387) という文をウォッシュバーン氏は「though she would not have guessed in any case that his mention of flowers, *hana*, was also a reference to her nose.」(前出 (7) p494) と訳しており、ここから読者は掛詞の意味が理解できるようにはなっていない。

ていなかった。

以上より、ロシア語訳における掛詞の翻訳方法は新英訳にもない独自の技法であることが明らかになった。

もっとも、ロシア語でも言葉遊びにするために、意味は離れたところがある。⑭では「なにゝこの未摘花を袖にふれけん」が「だが赤い花とはどうしても別れられぬ」に変わり、⑮でも「あやなくうとまるゝ」が「紅色 [鼻] と不和であった」、⑯でも「花を見るかな」が「花 [鼻] と出会った」に変わっている。

しかし、これらの和歌における最も大切な妙味は、「花」と「鼻」の掛詞にあるはずである。デリュエシナ氏は逐語的な意味の正確さよりも掛詞の持つ遊びの精神を優先的に読者に伝えたことが分かる。

❁ 3. 「もののあはれ」の翻訳

3.1 美的理念としての「もののあはれ」の翻訳

「もののあはれ」は本物語にとって重要な理念でありながら、外国語への翻訳が非常に困難な語ではないだろうか。本節ではまず、理念としての「もののあはれ」をロシア人翻訳者がどのように理解して翻訳したのかを検討する。

比較のために他の外国語訳を挙げると、『光源氏の世界』の著者アイヴィアン・モリスは「the pathos of things」⁶³、タイラー氏は「(無常の思想と結びついた) pity of things」⁶⁴と英訳した。

1959年に桐壺巻を仏訳したアグノエルは「la rencontre d'un objet *mono* (avec un sujet, ou vice-versa) 客体 (もの) の (主体との) 出会い、またはその逆」であり、「une résonance sentimentale dans le cœur *kokoro* 『こころ』の中に感情的共鳴」という形で現れるものだ、と述

63 Ivan Morris. *The World of the Shining Prince*. p208. London. Oxford University Press. 1964.

64 前出 (60) Vol.2, 817

べた⁶⁵。ベーネルは「殆ど翻訳不可能な語」とことわった上で「Wahrheit des Herzens（心の真実）」と独訳していた⁶⁶。林文月氏による中国語訳はそのまま漢字で「物之哀」である⁶⁷。

ロシア語訳では、デリューシナ氏は訳書の序文で「例えば、伝統的に「モノノ アハレ」（печальное очарование вещей モノの哀感をたたえた魅力）という概念で言い表され、誘惑する物の世界の美という主題と、その物の世界の不安定性、非永続性についての思想を結びつけている、『物語』の主要なモチーフの一つの読み方は、非常に果てしなく多様である。」⁶⁸と述べていた。すなわち、「もののあはれ」は「モノの哀感をたたえた魅力」と訳されていたのである。

「もののあはれ」に悲哀の要素があることは、モリス訳やタイラー訳、林訳に通じている。だが「魅力」というとらえ方は従来の他の外国語訳には見られず、ロシア語訳の独自性ではないかと筆者は考えていた。

ここでウォッシュバーン訳を参照すると、序文に「もののあはれ」について「無常の自然や人間存在のはかなさに含まれている崇高な、哀感をたたえた美 (sublime, sad beauty) に対する直感的な感受性を他の何よりも重んじる「モノノアハレ」という、表面上独得な美的感性 (ostensibly unique aesthetic sensibility)」⁶⁹という説明がなされていた。

「魅力」という訳語がなおもロシア語訳独自であることは確認できたものの、「哀感をたたえた美」というウォッシュバーン訳は、これまでの外国語訳と比較すれば、ロシア語訳に非常に近い英訳である。英語圏

65 Murasaki Shikibu. Le Genji Monogatari. p28. Introduction et traduction du livre 1 par Ch. Haguénauer. Paris. Presses universitaires de France. 1959.

66 Verfaßt von der Hofdame Murasaki. Genji-monogatari. Die Geschichte vom Prinzen Genji. Band-1, p.xviii. vollständige ausgabe aus dem original übersetzt von Oscar Benl. Zürich. Manesse Verlag. 1966.

67 紫式部『源氏物語（一）』p25、林文月訳・台北・洪範書店有限公司・2004。

68 前出(6)p4 デリューシナ氏の「もののあはれ」理解について詳しくは、前出(1)の拙論 p291-316 参照。なお「魅力」という訳語は、同氏より前の世代の日本文学研究者も用いていたもので、全くの独創というわけではない。

69 前出(7)p.xiv

での「もののあはれ」のとらえ方が、ロシア語圏でのとらえ方に近づいてきたと言えるだろう。

3.2 物語本文における「あはれ」の訳語

美的理念としての「もののあはれ」と物語本文における「あはれ」の意味は、必ずしも一致するものではない。しかし、デリュージナ氏が「もののあはれ」を「モノの哀感をたたえた魅力」と訳していたことが、物語本文の「あはれ」の訳語にも反映されている興味深い例があるので示したい。

⑰は末摘花の巻で、源氏が朝の光で末摘花の赤い鼻を見て驚愕した後、急いで彼女の屋敷を出て行く場面である。

原文⑰ 御車寄せたる中門の、いといたう、ゆがみよるぼひて、夜目にこそ、しるきながらも、萬かくろへたる事多かりけれ、いと、あはれに淋しく荒れまどへるに、松の雪のみ、あたゝ(か)げに降り積める、山里の心地して物あはれなるを、「かの人人のいひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし。げに、心ぐるしく、らうたげならん人を、こゝにすゑて、『後めたう、戀し』と思はゞや。(後略)」⁷⁰

露訳⑰ Срединные ворота, к которым подают его карету, совсем обветшали и скосбочились. Ночью многочисленные изъяны не были так заметны, хотя догадаться об их существовании не составляло труда. Теперь же перед Гэндзи открывается картина такого унылого запустения, что сердце его мучительно сжимается. Только снег, пухлыми шапками покрывающий ветви сосен, кажется теплым и придает саду то печальное очарование, какое бывает у уединенной горной усадьбы.

«Так вот они, „ворота, увитые хмелем“, о которых говорил

70 前出 (5)p258

тот человек. Когда б я мог поселить здесь женщину беспомощно нежную, томиться от любви, ждать встреч!..»⁷¹

(彼の車が寄せてある中門は全く老朽化し、傾いていた。数多くの欠陥があることは容易に想像できたが、夜はさほど目立たなかった。今や源氏の前にはとても陰気で荒廃した光景が開かれて、彼の心は苦しく締めつけられる。ただ、ふかふかした綿帽子のように松の枝をおおう雪だけが暖かそうで、人里離れた山荘で見られるような哀感をたたえた魅力を庭に添えている。

「これこそが、あの人の言った『ホップの巻きついた門』だろう。ここに頼りなげな優しい女性を住まわせて、恋に悩み、逢瀬を待ち焦がれることができたなら！)」

一番目の「いと、あはれに淋しく荒れまどへるに」のロシア語訳は「彼の心は苦しく締めつけられる」なのだが、二番目の山里の心地がする情景の「物あはれ」は「哀感をたたえた魅力」と訳されているのである。

この「物あはれ」に関しては「『山里の心地してものあはれなる』、すなわち荒廃した侘しさ・寂しさを美的情趣に転化する。荒唐幻想が再びここに顔を出す。その転換を可能にしているのが『松の雪』である。荒廃の中で『松の雪』だけがかろうじて彼（筆者注：源氏）に美的情趣ある『山里』を連想させる」という指摘がある⁷²。すなわち、本箇所「物あはれ」は侘しさ・寂しさが美的情趣に転化された情景だと言える。デリューシナ氏も、ちょうどこの「物あはれ」に「モノの哀感をたたえた魅力」と訳した「ものあはれ」の本質を感じ取り、そのように訳したのであろう。

同様の翻訳は他の外国語訳には見られず⁷³、ウォッシュバーン訳も「Like a rustic abode in the mountains, the place was deeply

71 前出 (6)p125

72 熊谷義隆「末摘花・蓬生巻の廃園：末摘花と自然描写」『山形女子短期大学紀要』(21)、p92、1989

73 詳しくは、前出 (1) の拙論 p389-391 参照。

affecting. (山の質素な住まいのように、深く心を打つ場所であった)」⁷⁴となっていた。

よって、この「物あはれ」に美的情趣を読み取り「哀感をたたえた魅力」という訳語を当てたのは、ロシア語訳のみであることが確認できた。

もう一箇所は御法の巻で、病身の紫の上が法華経の供養を行った場面である。

原文¹⁸ 陵王の舞ひて、急になる程の、末つかたの樂、はなやかに、にぎはしく聞ゆるに、皆人の脱ぎかけたるものゝ色々なども、物の折からに、をかしうのみ見ゆ。みこたち・上達部の中にも、物の上手ども、手のこさず遊び給ふ。上・下、心ちよげに、興ある氣色どもなるを、見給ふにも、「のこり少なし」と、身を思したる御心のうちには、よろづのこと、あはれにおぼえ給ふ。⁷⁵

露訳¹⁸ Но вот начался танец «Князь Лин-ван», и, когда танцор под громкие звуки музыки делал заключительные па, гости сбросили яркие верхние платья, чтобы поднести ему. Восхитительное зрелище!

Замечательные музыканты, которых немало было среди принцев и сановников, услаждали слух собравшихся чудесной музыкой. И высшие и низшие предавались безудержному веселью. Нетрудно себе представить, сколько печали и сколько очарования таил этот миг для госпожи, знавшей, как близок ее конец⁷⁶.

(だがそこへ「陵王公」の舞が始まり、そして、大きな音楽の音に合わせて舞人が最後のステップを踏んだ時、彼に授けるべく客人たちは鮮やかな上衣を投げてやった。見事な光景である！

素晴らしい音楽家が皇子や高官の間に少なからずいて、絶妙な音

74 前出 (7)p142

75 前出 (5) 四 p176 (1962 年刊)

76 前出 (6) К н .3.p191

楽で集まった人々の耳を楽しませていた。身分の高い者も低い者もとめどなく興にふけていた。最期がいかに近づいているかを知っている夫人にとって、この瞬間がどれほどの哀感と魅力をはらんでいたかは想像に難くない。

正確には「哀感をたたえた魅力」ではないが、「печаль (哀感)」と「очарование (魅力)」の二語で合わせて「あはれ」に対応する訳語となっている。そのためこの箇所も、「もののあはれ」という理念を「モノの哀感をたたえた魅力」と訳していたデリュシーナ氏の認識が反映されたものとして考えたい。

確かに、ただ悲しいだけでなく美しくもある情景である。「ここでは、余命意識は情趣に対する感性を鋭敏にさせている」⁷⁷と指摘されている。仏事の有難さ、花鳥の美しさ、素晴らしい舞と音楽、それに興じる人々、そして生命に対する無常観 — これらが融合した本箇所の「あはれ」に、デリュシーナ氏は「もののあはれ」の本質を見てとったのであろう。

他の外国語訳では、「哀感と魅力」という訳語のうち「哀感」の方はウェイリー・シフェール・ベンル・豊・林訳でもとらえられていた。しかし、「魅力」という訳語が当てられた例はない⁷⁸。ウォッシュバーン訳でも本箇所は「Murasaki experienced a gamut of emotions (ムラサキはあらゆる領域の感情を経験していた)」⁷⁹である。感情の種類を特定しない分、ウォッシュバーン訳の方が「よろづのこと、あはれにおぼえ給ふ」という原文に近いとも考えられるが、少なくとも「魅力」という訳語に関しては、やはりロシア語訳の独自性であると言えよう。

77 塚原明弘「死を見つめる心：御法巻の紫の上」『國學院雑誌』(第96巻第1号) p60、1995

78 詳しくは、前出(1)の拙論 p391-394 参照。

79 前出(7)p854

❁ 結論

以上、第一節で〈語り〉の手法として人物呼称と時制の交替、第二節で和歌のリズムと修辞技法、第三節で美的理念としての「もののあはれ」と物語本文における「あはれ」の訳語について考察した。

これらの点に関するロシア人翻訳者の理解が訳文に反映されたところは、英訳・仏訳・独訳・中国語訳には見られない、あるいは大多数の他の外国語訳には見られない特徴になっていたと筆者は博士論文で述べたのだが、本稿で最新のウォッシュバーン訳と比較した結果、上記の結論は現在も変える必要はないことが明らかになった。

考察した観点のうち、時制の交替と和歌の翻訳のリズム、そして掛詞「はな」の言葉遊びによる翻訳はロシア語の言語的特性に根ざしているため、全く同一の特徴を有する他の外国語の新訳が現われる可能性はあまり高くないと考えられよう。一方、人物呼称と美的理念としての「もののあはれ」、物語本文の「あはれ」の訳語は翻訳者の理解にかかわるため、今後も新しい『源氏物語』の新訳を注意して見ていく必要がある。実際、人物呼称に関しては既に仏訳と共通点があったし、美的理念としての「もののあはれ」を「哀感をたたえた美」とするウォッシュバーン訳は、ロシア語訳に近づいてきている。

本稿は、あくまでロシア語訳の独自性を探ることを目的とした。そのため、「他の外国語訳にはないロシア語訳の特徴」と言っても、必ずしもロシア語訳が他の外国語訳より優れた翻訳だと主張するつもりはない。今後の課題として、ロシア語訳の問題点をむしろ他の外国語訳が解決している例を探ることも必要であろう。他の外国語訳の研究者とも連携して、「海外における『源氏物語』の受容と翻訳」という大きな研究にさらに貢献していきたい。

(東京工業大学および青山学院大学 講師)

スペイン語版『伊勢物語』について

雨野 弥生
(あまの やよい)

❁ 一、目的

本科研（科学研究費補助金「基盤研究A 海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的研究」）では、『源氏物語』のダイジェスト版である近世作品『十帖源氏』（野々口立圃）の現代語訳を作成し、さらに世界各国語へ翻訳をするという取り組みが行われており、2015年8月の第2回研究会では「桐壺」巻の翻訳の検討がなされた。

2015年8月の時点で、科研の多国語翻訳作業の中でも比較的早く進行しているのが、スペイン語である。それを受けて、特に『十帖源氏』の「桐壺」翻訳案に出現する語彙や翻訳文については、すでに浅川槿子氏によって比較検討がなされ始めている¹。浅川氏による発表では、『十帖源氏』「桐壺」訳の各国翻訳作業員によって訳出困難とされた語の傾向を踏まえ、「女御」「元服」「観音」などの語彙に着目され、科研の成果である「訳し戻し」を用いて訳文の比較が行われている。

研究発表の質疑応答の席において、稿者（雨野）は、浅川氏により掲出された情報をさらに発展させる材料として、スペイン語版『伊勢物語』におけるスペイン語翻訳の訳出例を挙げさせて頂いた。『十帖源氏』「桐壺」の翻訳を科研研究会で検討するにあたり、他作品における同じ語彙（類義語を含む）の翻訳例を例示することが、翻訳語の検討材料になり、今後、他の平安文学をスペイン語翻訳する際にも参考資料となるのではないかと考えたためである。予め、『十帖源氏』に出現する古典特有語

1 浅川槿子「各国語訳『源氏物語』「桐壺」について—スペイン語訳・イタリア語訳を中心に—」および「各国語訳『十帖源氏』「桐壺」について」（2015年8月於国文学研究資料館）、『海外平安文学研究ジャーナル』vol.3.0、2015年3月、48-80p 参照。 <http://genjiito.org/journals/journal3/>

のうち、『伊勢物語』にも共通する語彙をリストアップし、それらの語彙が、『伊勢物語』のスペイン語版ではどう翻訳されているかを調査した上で、席上、例を挙げさせて頂いた。

『伊勢物語』スペイン語翻訳文については、後述するように、清水憲男氏、福嶋教隆氏などスペイン語研究側からの言及が近年相次いでなされているが、一方で、国文学・日本古典文学研究の側からの検討は、まだ無いようである。とはいえ、本文注釈および本文研究の観点から、『伊勢物語』本文がどのように解釈され、スペイン語によってどのように表現されているかを検証したり、有職故実などといった当時の文化的背景の観点から、スペイン語翻訳における歴史背景の反映のされ方を検証したりする目的では、日本古典文学研究側から貢献できる面もいくばくかあるのではないかと考える。また、『伊勢物語』受容史の観点からも、各翻訳書の原文理解のありようは、検討すべき課題であると言えよう。

この小稿では、スペイン語版『伊勢物語』本文を比較分析するのに先立ち、まずはスペイン語版『伊勢物語』翻訳の概要を挙げ、最近の研究状況にも触れる。平安文学の概念や語彙について、スペイン語への翻訳方法を整理していくための端緒としたい。

❁ 二、『伊勢物語』スペイン語版翻訳書

『伊勢物語』のスペイン語翻訳の現状について、清水憲男氏「スペインにおける平安文学事情」²では以下のように紹介されている。

「『伊勢物語』は仏語からのスペイン語訳もありますが、1977年（パンプローナ）、1988年（マドリード）と続けて、同じ Antonio Cabezas による日本語からの訳が出ており、訳者はスペインにおける日本文学紹介の草分けの一人です。2010年には別種のスペイン語訳も出ているようですが、（略）。」

2 清水憲男「スペインにおける平安文学事情」（『海外平安文学研究ジャーナル』（vol.3.0, 2015年3月、<http://genjiito.org/journals/journal3/>）105-108pによる。

『伊勢物語』スペイン語版の書誌データを、清水氏の言及に沿って整理すると、以下に挙げる①②③の3種類となる。

① 清水氏が「伝語からのスペイン語訳」と紹介されている翻訳書

タイトル：Cuentos de Ise (Ise Monogatari)

翻訳者：Jorge N. Solomonoff

出版地：Barcelona

出版社：Paidós

出版年：1980

頁数：196 p

メモ：G. Renondeau によるフランス語版からの重訳

本稿では以下、この翻訳者を「ソロモノフ」と称する。

② 清水氏が「Antonio Cabezas による日本語からの訳」と紹介されている翻訳書

タイトル：Cantares de Ise (Ise Monogatari)

サブタイトル：obra anónima japonesa del siglo XI

翻訳者：Antonio Cabezas García

出版地：Madrid

出版社：Hiperión

出版年：初版は1979年、第2版は1988年。

頁数：166 p

本稿では以下、この翻訳者を「カベサス」と称する。また、本稿での本文引用には、第2版（1988年）を用いた。

なお、「スペイン語圏における日本文学」³では、この②の翻訳書につ

3 文部科学省科学研究費補助金交付《基盤研究B》平成15・16・17年度研究成果報告書（研究課題番号：15320034）、研究代表者 伊藤鉄也「外国語による日本文学研究文献のデータベース化に関する調査研究」平成16年度成果報告

いて、次のように概要を示す。

「Antonio Cabezas García (アントニオ・カベザス・ガルシア) による『伊勢物語』のスペイン語訳。初版は1979年で、その第2版。本書はシリーズ *poesía Hiperión* の17にあたる。表紙には50段の絵(嵯峨本)を用いる。解説はAntonio Cabezas García自身による。翻訳の問題・9世紀の日本の社会・作品と史実・地理・タイトル・『伊勢物語』の系列について述べている。本書は全段翻訳。全体を7つの系統に分け、それぞれ以下のような見出しをつける。第1系統：高子の愛と業平の流浪(2段～15段)・第2系統：業平のロマンス(17段～22段)・第3系統：恋とは何か(25段～62段)・第4系統：高子(65段)・第5系統：斎宮恬子(69段～75段)・第6系統：都にて(77段～105段)・第7系統：歴史と伝説のなかの業平(108段～123段)。さらに各系統の間には *Interludio* (間奏) が置かれている(16・23・24・63・64・66・67・68・76・106・107段)。挿絵は嵯峨本より(1・4・6・9・12・18・23・45・50・63・69・78・87・95・119・125段)。なお、附録として巻末に歴史の流れ・天皇の系図を示したものがある。[森田]

③清水氏が「2010年には別種のスペイン語訳も出ているようです」と言及された翻訳書

タイトル：Cuentos de Ise

翻訳者：Jordi Mas López

出版地：Madrid

出版社：Trotta

出版年：2010

頁数：198 p

以下、本稿では、この翻訳者を「マス」とする。

(<http://www.nijl.ac.jp/~t.ito/HTML/kaken04/spain.html>)

なお、このマスには、スペイン語版より前の2005年に、Servei de Publicacions de la Universitat Autònoma de Barcelonaから刊行された「カタルーニャ語版」の『伊勢物語』“*Contes d'Ise*”もある。

さらに、『伊勢物語』のスペイン語訳にはもう1点、Mario Merlinoによる“*Cuentos de Ise*”(Hyspamérica,1985)が存在するようである⁴が、未見である。

❁ 三、ソロモノフ訳のスタイル

ここで、これまで挙げた先行研究ではほとんど触れられていない「ソロモノフ訳」の、スタイルについて補足しておきたい。前節で挙げた3種のスペイン語版、すなわち①ソロモノフ訳、②カベサス訳、③マス訳を並べて比較してみると、ソロモノフ訳には、[]の多用や数多い注記など、ほかの2種とは異なるスタイルが見受けられる。古典特有語を例にとって、スペイン語版3種のスタイルを比較してみよう。

たとえば、『伊勢物語』第一段冒頭には以下のように「初冠」という古典特有語が見られる（なお、前述したように、浅川氏の研究発表では、『十帖源氏』に現れる「儀式を表す語」の一例として「元服」などの翻訳語が挙げられている⁵）。以下の下線は稿者による。

「むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。」⁶

この「男、初冠して」を、①ソロモノフ、②カベサス、③マスの三氏

4 「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」2013年度 基盤研究 (A) 課題番号：25244012 研究代表者 伊藤鉄也 (http://genjiito.org/heian_trt/heian_history/) による。

5 注1に同じ。『海外平安文学研究ジャーナル』vol.3.0, 2015年3月、<http://genjiito.org/journals/journal3/> の79p 参照。

6 本稿では『伊勢物語』の本文は、すべて新編日本古典文学全集『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（福井貞助校注、小学館、1994年）によった。

がどう訳したかを以下に示す。なお、丸カッコ内の日本語訳は稿者が私に付したものである。

①ソロモノフ訳：**un [joven] hombre que había adoptado el tocado viril** (成人男子の冠を得た [若い] 男が)

ソロモノフ注：Es decir, poco más o menos hacia la edad de quince años. Se cortaba el pelo largo que usaban los niños, se les hacía un rodete y se los cubría con un cubrecabeza masculino. (すなわち、だいたい十五歳頃。子供がしていた長い髪を切り、髻を結び、男性の冠をかぶった。)

②カベサス訳：**un muchacho que acababa de cumplir quince años** (十五歳になったばかりであった若者)

③マス訳：**al poco de alcanzar la mayoría de edad** (成人の年齢に達してすぐに)

比較すると分かるように、ソロモノフの訳では、ブラケット [] が使用される。この [] は、原文『伊勢物語』にない語彙を補ったことを示すようである。たとえば上記の例では、ソロモノフの訳では原文にない語彙 [joven (=若い)] を補っている。

さらにソロモノフ訳では、「初冠」という古典特有の有職故実に関して注で具体的に補っている。カベサスやマスが、基本的に注を使用せずに、訳文の中に文化的背景を含み込ませるスタイルをとるのは、一見して異なっている。

このソロモノフの翻訳は、ルノンドー (G. Renondeau) によるフランス語版『伊勢物語』⁷ からの重訳である。元のフランス語訳に遡ると、

7 *Contes d'Ise*, G. Renondeau, Paris, Gallimard, 1969, 185 p.

ソロモノフの訳文は、原則的にルノンドー訳を忠実にスペイン語に移したものであり、スタイルまで含めてルノンドー由来のものであることが確認できる。該当箇所を以下に示す。

ルノンドー訳：un [jeune] homme ayant pris la coiffure virile
(成人男子の冠を得た [若い] 男が)

ルノンドー訳 注：C'est- à-dire vers l' âge de quinze ans, à quelques années près. On coupait les cheveux longs que portaient les enfants, on leur faisait un chignon et on les coiffait d'une coiffure d'homme. (すなわち、数年の差はあるが、15歳くらい。子供がしていた長い髪を切り、髷を結び、男性の冠をかぶった。)

ソロモノフの翻訳語彙を検討する際は、スペイン語圏のみならず、重訳の元となったフランス語版も包括して考える視野が必要となる⁸。

❁ 四、翻訳者 Antonio Cabezas García (アントニオ・カベサス・ガルシア) について

ここで、②の翻訳者アントニオ・カベサス・ガルシアについて、現在までに知られるところを補足したい。

カベサスは、京都外国語大学や大阪大学などで教鞭をとったスペイン人であり、スペイン語やスペイン文学の論文執筆者として名前が見られるほか、日本語で刊行されたスペイン文学についての共著『スペイン語文学選集』⁹などもあるが、一方で、日本古典をスペイン語に翻訳する翻

8 なお、原文にない語彙をブラケットで補入するスタイルは、F. Vos による英語版『伊勢物語』に先に見られる (*A study of the Ise-monogatari*, F. Vos, 's-Gravenhage, Mouton, 1957)。

9 『スペイン語文学選集』アントニオ・カベサス／アンヘル・フェレール／ジャ

訳者としての活躍もめざましい。前述の「スペイン語圏における日本文学」¹⁰では、以下のように紹介する。

「Antonio Cabezas García はウエルヴァのラ・パルマ・デル・コンダド生まれ。スペインで高等教育を修めた後、1957年から日本在住。京都の大学数校でヒスパニック学教授を務める。『Cantares de Ise (伊勢物語)』(1979)・『Manioshu (萬葉集)』(1980)・『Jaikus inmortales (俳句選)』・『Hombre lascivo y sin linaje (好色一代男)』(1982)・三島由紀夫『La perla y otros cuentos (真夏の死)』(1987)・松尾芭蕉『Senda de Oku (奥の細道)』(1993)等、翻訳書多数。Hiperión (イペリオン)は Georges Bataille (ジヨルジュ・バタイユ)『El azul del cielo (Le Blue du ciel)』や Jack London (ジャック・ロンドン)『El talón de hierro (The iron heel)』等、外国文学の翻訳を刊行。(可児)」

また、カベサスは太田靖子氏の「スペイン語への俳句の翻訳の可能性を考える」(『龍谷大学国際センター研究年報』20, 2011年)では、以下のように言及されている。

「アントニオ・カベサス (Antonio Cabezas, 1931-2008) の場合 カベサスは、長年日本の大学で教鞭を執り、日本語が堪能であった。彼は『おくのほそ道』を1993年に出版、1998年には再版されている。2003年には勲四等旭日小綬章を受賞している。」

さらに、近年、カベサスの翻訳について集中的に取り上げておられるのが、スペイン語学の福寫教隆氏である。福寫氏は、「イスパニア語に翻訳された日本文学に関する一考察」¹¹および、講演録『スペイン語世

スティン・ロドリゲス編注、あぼろん社、1981年

10 注3に同じ。

11 『神戸外大論叢』60-1、2009年9月、65-83p

界のことばと文化 (2014)』に採録の「Una ojeada a la traducción de la literatura japonesa al español por Antonio Cabezas García (アントニオ・カベサスによる日本文学のスペイン語訳について)」¹²、さらに「日本文学のスペイン語訳についての一試案」¹³で、古代から現代までの日本文学が、カベサスをはじめとするスペイン語圏の翻訳者によってどのように訳されているかを例示され、その訳文を、スペイン語学の見地から検証している。そのうち、カベサス訳『伊勢物語』スペイン語版に関しては、和歌3首、すなわち第二十三段(いわゆる「筒井筒」)の「風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」歌、第九段(いわゆる「東下り」)の「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」歌、「名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと」歌を取り上げ、訳文が検証されている。

福嶋氏は、カベサス訳とマス訳を比較した上で、

『伊勢物語』にも2つのスペイン語訳が存在する。早く出た Cabezas 訳の方が、後から出た Mas 訳よりも優れている箇所が多い。(「日本文学のスペイン語訳についての一試案」)

と述べておられる。さらに、カベサス訳が「から衣」歌の原歌にある「折句」の技法をスペイン語に適用し、スペイン語5行詩の行頭に LYRYO (lirio = カキツバタ) の文字を含み込ませることで、和歌の修辞技巧をも伝えられていることを評価している。

また、「風吹けば」歌と「名にしおはば」歌については、カベサス訳、マス訳それぞれの問題点を指摘し、福嶋氏ご自身による修正案を提示している。

12 「Una ojeada a la traducción de la literatura japonesa al español por Antonio Cabezas García(アントニオ・カベサスによる日本文学のスペイン語訳について)」(講演録『スペイン語世界のことばと文化 (2014)』京都外国語大学スペイン語学科編、2015年2月) 83-102 p

13 『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』1、2015年3月、21-40 p

カベサスの翻訳方法については、清水氏や、福嶋氏のようなスペイン語学研究からの言及に見るべき点が多いことは言うまでもないが、一方で、日本古典文学研究側からも、検討の余地があると考えられる。というのも、スペイン語版『伊勢物語』カベサス訳、マス訳、そして注記を多用するソロモノフ訳を比較すると、それぞれ三種三様の個性やスタイルが見られるのであるが、そのうち、カベサスの翻訳には、日本古典からの直訳であるという特徴のほかに、平安時代の文化（和歌文化や歴史背景など）を踏まえながら、注記という形を用いずに、しかしなるべく具体的にスペイン語圏の読者に伝えようとしている箇所が散見されるからである。福嶋氏が指摘された、「折句」の修辞技巧をスペイン語で伝える翻訳手法のほかに、地の文においても、平安時代の文化的背景や有職故実の知識がさまざまな形で訳文に織り込まれており、特筆すべきである。

本科研において『十帖源氏』スペイン語翻訳にあたられた猪瀬博子氏は、日本古典文学の翻訳について、「翻訳テキストの読者が原文読者と「可能な限り等価の読書体験」を得る」ために、「原文テキストに直接書かれていないがテキスト理解に必要と思われる文化的背景知識を補う、または原文テキストに使われている文化的レファレンスを読者に理解可能な形で翻訳するにはどのような翻訳方略（手法）が存在するのか。」¹⁴と問いかけられている。

これまでの『伊勢物語』翻訳の先例においては、どのように翻訳語が選択され、どのような手法と工夫によって原文およびその文化的背景知識が伝えられてきたのか。日本古典文学研究側にも、（語学面の障壁はあるにせよ、）これまでの古典注釈の蓄積を活かしながら、同じ問いに向き合い、検討していく役割があると考えられる。

14 猪瀬博子「『十帖源氏』スペイン語翻訳における文化的レファレンスの取り扱い」（『海外平安文学研究ジャーナル』vol.3.0, 2015年3月、91-98p）<http://genjiito.org/journals/journal3/>

❁ 五、まとめ

本稿では、主に本科研における『十帖源氏』の翻訳研究に関連して、スペイン語版『伊勢物語』3種の書誌データを挙げ、それを取り巻く現在までの研究状況についても触れた。

スペイン語版『伊勢物語』翻訳例を比較検討することは、日本の古典作品の中にある特有の文化事情や語彙のニュアンスをどのような方法で伝えるかを考えるための先例となり、その手法を今後踏襲するかしないかに関わらず、今後の日本文学スペイン語翻訳にとって一つの資料となると考える。また古典受容史の観点からも興味深い点がある。

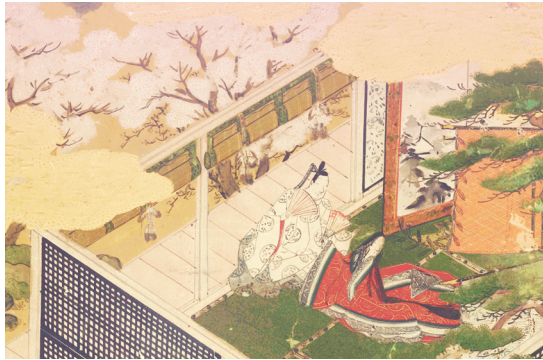
スペイン語版『伊勢物語』の翻訳文について、日本古典文学研究の立場から行った比較検討の詳細は、別稿に譲ることとしたい。

〔付記〕

京都外国語大学スペイン語学科の先生方には、資料閲覧にあたり便宜をおはかり頂きました。また、フランス語翻訳例の語意について、在日フランス大使館の相川千尋氏よりご教示を頂きました（論旨の責任は稿者にあります）。記してお礼を申し上げます。

（株式会社三省堂 辞書出版部・古語辞典編集者）

研究会拾遺





ウルドゥー語訳『源氏物語』の完本発見

伊藤 鉄也
(いとう てつや)

アラハバード大学図書館の書庫で、ウルドゥー語訳『源氏物語』の完本を、偶然とはいえ司書の方が見つけてくださったのです。

あればいいが、との思いで、あてもなくとにかく書庫に入れていただきました。



書庫内の通路で、アラハバード大学大学院生の村上明香さんがいつもお世話になっているというレハマトウッラー司書と、たまたま出会いました。ひょっとして何かご存知ではないかとの思いから、ウルドゥー語訳『源氏物語』の本のことを聞いてもらいました。

レハマトウッラーさんは初めて聞く本の名前だとのことで、何もご存知ではありません。それでも村上さんが食い下がって、ありったけの情報を語り続けると、一つの書棚の列

に入られました。そこは、ウルドゥー語に翻訳された外国語のお話のコーナーでした。

レヘマトウッラーさんが、最初に一冊の本の小口に指を掛けて引き出されたものを見て、村上さんが声を上げました。何と、それが探しているウルドゥー語訳『源氏物語』だったのです。レヘマトウッラーさんも私もびっくりです。



偶然とはいえ、一触で『源氏物語』が出てきたのです。

伊井春樹先生がおっしゃった、本は探し求めている者においでおいでをする、という秘技をまた体験することになりました。

ネルー大学でウルドゥー語訳『源氏物語』を発見した時のことは、「[ウルドゥー語訳『源氏物語』をインドで発見](#)」(2009/3/5) に書いた通りです。あの本は、表紙や奥付がないものでした。また、東京外国語大学にある本も、一部が欠けています。今回みつかった本は、すべて揃っている完本です。刊行された時のままなのです。経年変化だけの、誰かが開いた形跡もない本です。



またもや、偶然が現実のものとなりました。

この本の両隣は別の分野の本です。また、背文字は薄くて読み難い上にめくられています。ウルドゥー語で「げんじものがたり」と書かれた「じ」の終筆部分からしか読めないのです。この書棚の中からこの本と行き当たったのは、まさに奇跡です。

この本は、1971年にサヒタヤアカデ

ミーから刊行された8種類の言語の内の一つです。

アラバード大学に収蔵された経緯を調べてもらうことにしました。何と言っても、このウルドゥー語訳を担当したのは、1971年当時アラバード大学で学科長をしていたウルドゥー語の文学批評者だったエヘテシャーム・フセイン教授なのです。フセイン教授の献本であれば、もう少し資料がありそうです。

かつてわたしがネルー大学で見つけた時のように、まず図書カードを調べてもらいました。この本の書誌は、まだ書籍化も電子化もされていないからです。

目録カードでは、この本の番号に当たるものが飛んでいました。カードがないのです。

勝手にカードを引き抜いて持って行かれることが、よくないことながらよくあるそうです。

そこで次に、この本の図書番号を、受け入れ図書の登録簿と照合して、基本台帳の情報を見てもらうことにしました。こうした点は、帳簿管理としてシステム化されていることに感心しました。

手前勝手なお願いにもかかわらず、テキパキと調べてくださいます。

司書の方々には、ほんとうにお騒がせしました。

台帳保管庫にあったノートに記載されていた図書番号から、受け入れ当時のことがわかりました。1971年にサヒタヤアカデミーから刊行されたこのウルドゥー語訳『源氏物語』の受け入れの事情などについて、いくつかのことが判明したのです。

サヒタヤアカデミーから刊行された翌年



の1972年に、アラバード大学図書館が6ルピー50ペイサで買い上げたものだったのです。これで、今回見つかった本が初版本の完本であることがわかりました。

ただし、フセイン先生は1972年にお亡くなりになります。このことは、後でも確認します。

アラバード大学図書館に収蔵された御自身の翻訳になるこの本を、フセイン先生が実際に手に取られたかどうかは不明です。

村上さんがこの本を借り出したいと言うと、全館的に図書の電子登録を進めているところなので、まずはこの本の書誌を優先的に電子情報として登録し、その後に貸出手続きができるようにしてあげよう、ということになりました。

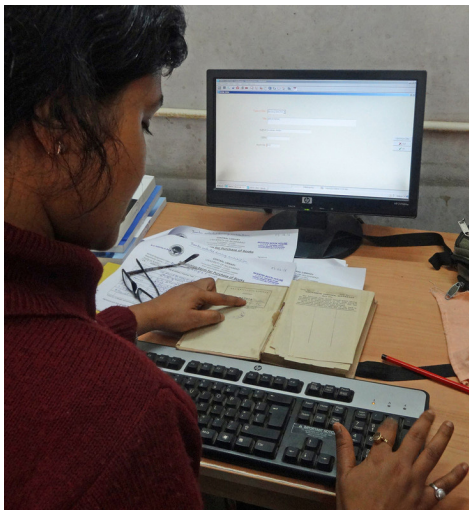
学生の向学心を最大限に尊重して支援する図書館側の計らいには、あらためて感激しました。ありがたいことです。

さっそくこの本の書誌をコンピュータに優先的に登録してもらえました。図書の登録作業も見ていてもいいし、撮影もいいとのことでした。

ウルドゥー語訳『源氏物語』の完本が今回初めて見つかり、それをコンピュータに登録した記念に、担当の司書見習いのプリヤーさんが登録

するところを記念写真として撮影することになりました。

プリヤーさんは、この大学の出身者だそうです。こうしてウルドゥー語訳『源氏物語』がコンピュータにアラバード大学図書館の蔵書として登録されたことにより、一人でも多くの方がこの本を見ることができるようになったのです。イン



ドの方々が、日本の『源氏物語』に興味をもっていただき、勉強に役立
てただけたら幸いです。ウルドゥー語訳『源氏物語』の研究も、こ
れで進んで行くはずです。とにかく、今は村上さんしかいないのですか
ら。

プリヤーさんは、司書としてこうした学問的なお手伝いをしているこ
とを自覚なさったようで、共に喜んでくださいました。ますます活躍し
てほしいと思いました。

もっとも、まだアラハバード大学の OPAC は一般には公開されてい
ません。日本からこの本を検索することはできないのは残念です。

この大学のキャンパスは、積極的に整備が進められていて、草花が校
舎を背景に咲き誇っています。いい環境です。

村上さんの指導教授であるノシャバ・シャルダール先生の部屋へ挨拶
に行き、今回の成果を報告しました。



村上さん、筆者、ファトミー学科長（写真中央右）、シャルダール先生（右端）

先生は、翻訳者であるエヘテシャーム・フセイン先生に、修士課程 1
年目に口頭試問を受けたそうです。しかし、『源氏物語』をウルドゥー
語訳しておられたことはまったく知らなかった、とのこと。そして、
シャルダール先生もサヒタヤアカデミーから刊行されたこの本のこと
はご存知なくて、村上さんに日本の『源氏物語』のウルドゥー語訳の

研究もするといいいね、とおっしゃっていました。

この本が見つかったことで、これから『源氏物語』が研究されることだろう、とおっしゃっていました。

学科長のアリ・アフマド・ファトミー先生にも挨拶と報告に行きました。ファトミー先生も学生時代にフセイン先生の指導を受けておられました。しかし、文学批評がご専門のフセイン先生が何かを翻訳なさっていたことは知っていたし、論文に翻訳のことが書かれていたように思う、ということです。しかし、それが日本の『源氏物語』だったかどうかはまったくわからないし、資料もお手伝いした人がいたかどうか不明だそうです。

この部屋には、歴代の学科長の写真が掲げられており、フセイン先生



の写真もありました。

ファトミー先生の席の後ろには、歴代の学科長の名前と在任期間が記されています。

第3代がフセイン先生で、在任期間は、1961年から72年までの11年間。フセイン先生は、1972年にお亡くなりになりました。

第9代と第12代がシャルダール先生、第10代と当第13代がファトミー先生です。

今回は、フセイン先生が在職中に学生であり、歴代の学科長をそれぞれ2代ずつ務めておられるお2人の先生に、直接お話をうかがいました。しかし、『源氏物語』のウルドゥー語訳に直結することは何も出てきませんでした。

そもそもが、サヒタヤアカデミーのプロジェクトは、アーサー・ウェイリーの英訳『源氏物語』の第1巻目だけを、インドの8言語で翻訳することでした。ウルドゥー語訳はサヒタヤアカデミー側からフセイン先生に依頼された、という事情があります。

日本に対する理解や、『源氏物語』に関する興味や関心がなくても、ウェイリーの英訳をウルドゥー語に翻訳することが、この背景にあることは重要です。

海外における日本文学について調査するときに、こうしたことは十分に承知して対処すべきことのようにです。



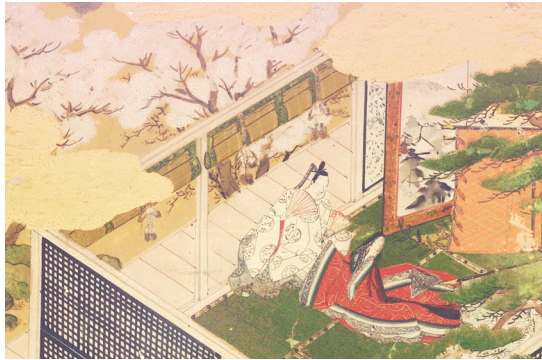


お2人の先生に感謝しつつ、入口近くにあったフセイン先生を顕彰し
記念するホールを拜見しました。学生達が授業を待っているところでした。

(出典) 鷺水亭より:「ウルドゥー語訳『源氏物語』の完本発見」2016年2月19日(金)

(国文学研究資料館 教授)

翻訳の現場から



『十帖源氏』 ヒンディー語訳の問題点

菊池 智子
(きくち ともこ)

ずいぶん前から『源氏物語』の翻訳にはたいへん興味がありました。『源氏物語』は、インド現地の大学の授業でヒンディー文学の教授が日本の代表的な文学として紹介するほど、知識人の中で人気のある作品なのです。いまだ日本語からヒンディー語への直接翻訳は実現していないので、私は学生の頃から是非翻訳したいと考えていました。しかしその量と難解な言葉になかなか手を出せずにおりました。その後『十帖源氏』プロジェクトに出会い、古文が現代文になったテキストを頂け、さらに適度な量でもあり、翻訳には最適ととても嬉しく思いました。しかし実際に翻訳作業を初めてみるとさまざまな問題に直面しました。2012年2月、ニューデリーでセミナーを開催し、翻訳の問題点を参加者と話し合う機会もありました。以下、当時の発表を基にいくつかご紹介したいと思います。

『源氏物語』にはたくさんのお妃が登場します。「皇后、中宮、女御、更衣」の翻訳は難儀でした。発音表記の訳にすると脚注をつけなければなりません。読みづらくなるので、私は脚注はなるべく避けたい方針でした。インドには日本と同じように一つの城に多数の妃が住む文化がありますが、上記のような妃の位に完全に一致する概念はありません。「皇后」は「maharani」と訳すことが可能です。「中宮」は「patarani」（第一王妃、正妃）と訳すこともできますが、一人とは限らず、王に一番寵愛を受けている妃との説もあり、適訳とは言えません。「女御」、「更衣」の適訳は見つかりません。一応の解決策としては、ヒンドゥー王朝で一般的に妃を意味する rani、イスラム王朝で一般的に妃を意味する begam を使う案です。しかしこの二つの単語の間に位の上下はありません。ただ立て分けて使用できるだけです。これでは誤解が生じないとも限りません。しかも、「桐壺」の巻には、「女御とか更衣とか、そういったお后が

大勢いらした」という文があります。これを上記の2単語を使ってヒンディー語訳すると、ヒンドゥー教徒の妃とイスラム教徒の妃が同一の城内にいるというあまりなじみのない状況となり、読者に違和感が生じる恐れがあります。後日、インド人の方より、皇后「maharahi」、中宮「manjhali rani」、女御「sanjhali rani」、更衣「chhoti rani」にしてはどうかとのアドバイスをいただき従うことにしました。manjhali ,sanjhali は兄弟姉妹などで真ん中に位置する者のための言葉です。Choti は小さい、幼いという意味です。

「桐壺」には「玄宗」と「楊貴妃」についての記述があります。このふたつの発音は日本語では「genso」「yokihhi」となりますが、日本以外の国では一般に「xuanzong」「yang guifei」で知られており、インドでもこちらのほうが一般的と言えます。ヒンディー語訳では、「玄宗」の前に皇帝を意味する「samrat」をつけ、また「楊貴妃」の前には妃を意味する「rani」をつけて、日本で流通している発音をメインにして、後者の発音を括弧に入れ、両方表記しました。つまり「玄宗」の場合は「samrat genso (xuanzong)」にしました。

前述しましたが、読者が読みやすい本を作るには、脚注はなるべく少ない方が良く考えています。「桐壺」で脚注や説明が必要な例としては、「引き入れの大臣」「袴義の儀式」「左馬寮」「蔵人所」などがあげられますが、「左馬寮」「蔵人所」については、脚注を入れるのではなく、本文中で説明する形にしました。つまり「左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有するタカを添えて」のヒンディー語訳は「左馬寮という名の馬の飼養などを司る政府役所から馬を、蔵人所という名の政府役所では鷹について司っていたので、そこから鷹を添えて」という形にしました。インドで人間の成長に伴う儀式は、生まれる前の母胎にいるときから始まり、その数は16とも数限りないとも言われます。基本的には古代インドの四住期制度(aashram)つまり学生期、家住期、林棲期、遊行期と関係が深いとされます。これほどの多くの儀式があっ

ても「元服」や「袴義の儀式」など日本の儀式と完全に概念が一致するものはありません。また「袴義の儀式」の場合、「袴義」の「男子が着用する下の服」という説明と「袴義の儀式」自体の「幼年期から少年期への移り目の儀式で初めて袴を着る儀式」という二つの説明が必要になります。「袴義の儀式」については、巻の末尾もしくはページ最後に脚注を入れるのではなく、読み手がスムーズに読み続けられるように、該当部分の直後の括弧内に説明を注入する形をとりました。

『源氏物語』に出てくる仏教関連の人名、経典、教義などの翻訳も難しい問題です。インドは仏教発祥の地、仏教関連の原文はサンスクリット語で存在します。『源氏物語』に出てくる仏教用語も原文のサンスクリット語の単語が存在する可能性があります。その検索は容易ではありませんが、ヒンディー語とサンスクリット語は密接な関係にあり、文字表記も類似していることから、単語をそのままヒンディー語訳文中に使用できる可能性があります。しかし問題のひとつは、このサンスクリット語起源のヒンディー語の単語がインド人読者にどれだけ流通しているかということです。単語自体はあっても、一般のインド人は知らない場合があります。日本人が古文の難しい単語を理解できないことに似ているでしょう。「桐壺」の翻訳においては、もうひとつの問題が生じます。この章では天台宗関連の仏教用語が頻出します。天台宗の発祥は中国なので、経典等の原文はサンスクリット語ではなく中国語になると考えられます。中国語から語源を逆にたどり、サンスクリット語の単語を見つけるのは至難の技です。私の力量では難しいので、本翻訳においては仏教用語の解釈を基に訳しました。

翻訳においては、常に対象読者を念頭に起かなければなりません。一般向けなのか識者向けなのかで使う言葉も違ってきます。一般に流通している平易な言葉にするか、難解でも文学的な言葉にするか選択しなければなりません。『源氏物語』は日本文学の源ともいえ、インドではどちらかというと識者に人気のある作品なので、後者の単語を使って翻訳

すれば重厚感がでます。しかし一般の読者には敬遠されるでしょう。『十帖源氏』の翻訳においては、老若男女広い読者層に届けることのほうが重要と考え、平易な言葉を中心に翻訳することに努めました。

『十帖源氏』に限らず、翻訳における最大の問題点は文化の違いにあると感じています。翻訳作業の中で生じる問題点のほとんどは二言語の背景にある文化に基づいています。ご存じのように、二言語において完全に意味の一致する言葉を探すのは不可能です。このような状況下で翻訳においては、もっとも意味の類似する適当な言葉を見つけ文章を構成しなければなりません。翻訳は二文化間の差異を克服していくプロセスのように感じます。そして完成した翻訳作品は二文化の人々が互いの文化を理解する手助けをし、文化交流に貢献していくことになります。その意味からも、日本文化の源ともいえる、『十帖源氏』をヒンディー語という約四億人の世界第三位にしてインド国内最大の話者を抱える言語に翻訳することは非常に意義深いと考えています。

(ヒンディー語翻訳者)

ウルドゥー語版『源氏物語』の色の世界

村上 明香
(むらかみ あすか)

❁ 1. はじめに

「文学を介せば、その国を容易に知ることができる」

20世紀を代表するウルドゥー語女性作家イスマット・チュグターイー (Ismat Cughtā'ī, 1915-1991) がこう述べたように、わたし達は文学作品を読むことで異国の社会や文化、風土などの一端を容易に垣間見ることができる。しかし外国語作品を読む際、わたし達は多くの場合において翻訳に頼ることとなる。翻訳者は言わば作者と読者をつなぐ架け橋であり、その役割は大変重要である。なぜならば、翻訳者の訳し方ひとつで作品の世界観が一変してしまう恐れがあるからだ。

『源氏物語』には平安時代の色彩豊かな王朝文化が、作者紫式部のその鋭いながらも繊細なる色彩感覚によって見事に描き出されている。しかし、こうした絶妙な色彩を翻訳に反映させることは非常に困難である。色の捉え方は国や民族、そして時代によっても異なることに加え、まったく同じ色を指す語彙が翻訳の対象となる言語に存在する可能性は極めて低いからである。例えば、『源氏物語』に登場する日本の伝統色が草花や動物などの風物の名前、染めの材料の名前など、当時の生活や文化にちなんだものであるように、ウルドゥー語の色名もまた、インド亜大陸の自然や風土と密接に結びついている。それ故、翻訳前後の色彩感覚にどうしても差異が生じてしまうのである。さらに、ウルドゥー語版『源氏物語』はアーサー・ウェイリーの英訳からの重訳(詳細は第2節を参照)であるため、ますます原作の色彩感を保持することが困難となる。

『源氏物語』の中に描かれた多彩な色の中でも、「紫」は特に重要である。平安時代、高貴な色として好まれた「紫」は、『源氏物語』の中にも紙や着物などの色として何度も登場するほか、光源氏の母、桐壺の更衣の名前の一部である「桐」、そして光源氏の憧れ女性、藤壺の名前の

一部である「藤」はいずれも紫色の花を咲かせ、藤壺の姪であり光源氏の最愛の伴侶の呼称は「紫の上（紫の君、若紫）」と、光源氏と特に密接にかかわる女性たちの名前はみな「紫」に由来している。故に、「紫」は『源氏物語』を代表する色であると言っても過言ではない。本稿ではこの「紫」に焦点をあて、ウルドゥー語版『源氏物語』の読者の視点からみた色の世界と、翻訳者の役割の重大性についての一例を示したい。

❁ 2. ウルドゥー語版『源氏物語』について

1971年、インドの国立文学アカデミー (Sahityah Akādami)¹より『源氏の物語 (Genji kī kahāni)』が刊行された。これは現在までに刊行されている唯一のウルドゥー語版『源氏物語』で、文筆家、評論家としてウルドゥー文学界に名を馳せるサイヤド・エヘテシャーム・フサイン (Sayyid Ihtishām Husain, 1912- 1972) によって翻訳され、「桐壺」～「葵」までの9巻が収録されている。底本についての明確な記載はないが、訳文を吟味するとアーサー・ウェイリーの英語訳に忠実に訳されていることがわかる。また、ウルドゥー語版巻末には付録Aとして紫式部の略歴が、付録Bとして「斎宮（斎王）」についての説明が収録されているが、エヘテシャームは付録Bの標題「伊勢と賀茂のデーヴダースイー (devdāsi)² たち」に脚注を付し、次のように説明している。

「英語に翻訳したアーサー・ウェイリーはローマ神話のウェスタの巫女を念頭において、この日本の未婚の女性たちを寺院に奉仕する「ウェスタの処女たち」と呼んでいる。この習慣は、インドにおけるデーヴダースイーに似ているものと思われる。それ故、わたしは彼女たちを

1 国立文学アカデミーは、公用語の英語やヒンディー語を含むインド主要言語の文学研究・発展支援を目的として設けられた政府の独立機関である。翻訳事業にも力を入れており、その一環として世界の古典的名作を翻訳、刊行する活動を行っている。『源氏物語』もこの活動のひとつとして刊行されたものと思われる。

2 主に南インドで見られるヒンドゥー教徒の慣行で、寺院に属して神に歌や踊りを奉納する女性のことを指す。

デーヴダースィーと記すことにした。[Mūrāsākī 1971: 364]

以上の記述からも、ウェイリー訳が底本であると考えて間違いはないであろう。

さらにこの注記から、エヘテシャームが「齋宮（齋王）」を「デーヴダースィー」というインド特有の単語に置き換えることで、ウルドゥー語版の読者への便宜を図っていることがわかる。こうした工夫は衣服や建築物、調度品などの名前にもみられる。その結果、ウルドゥー語版『源氏物語』の中で光源氏は「直衣」の代わりに「ラバーダ (labādah)」(図1) と呼ばれる外套を着用し、若紫は「難波津」の代わりにアラビア文字のアルファベットである「アブジャド (abjad)」を学ぶのである。



[Zafarurrahmān Dihlavī 1976: 142-143]

図1 ラバーダ

❁ 3. ウルドゥー語版『源氏物語』に見られる「purple」の訳

アーサー・ウェイリーは「桐壺」から「葵」までの9巻中で「purple」という単語を計12回使用している。以下ではこの12箇所にあたるウ

ルドゥー語の語彙について考察することで、ウルドゥー語版読者の目から見た『源氏物語』の色の世界の一部を浮き上がらせてみたい。

初めに「purple」が登場するのは「桐壺」巻の光源氏の元服式の場面である。ウルドゥー語版のこの場面を日本語に訳し戻すと、以下のようになる³。

【ウルドゥー語訳①】

「源氏は昼の三時ちょうどに（日本では申の刻と呼ばれている）到着した。子供らしい頭髪がとても美しかった。お披露目のために差し出す者の役目は、この子の頭髪を花蘇芳色 (arg_h_avānī)⁴ の紐で結えることだったが、もうこの子のこの姿が無くなってしまうのを残念に思っていた。[Mūrāsākī 1971: 40]」

「花蘇芳色 (arg_h_avānī)」とは、マメ科の低木ハナズオウの花の色で、紅がかった紫色をさす。

次に「purple」が現れるのは同じく「桐壺」巻の中で、光源氏の元服を祝って桐壺帝と左大臣が和歌のやりとりをする場面である。

【ウルドゥー語訳②③】

「その後、天皇は自分の特別な杯で酒を飲ませると、一編の詩を詠んだ。この詩の中には、arghavānī の紐で頭髪を結える儀式が両家をひとつの縁で結ぶ象徴となるように、という祈りが込められていた。大臣は返答した。arghavānī の紐があせぬ限り、いかなる力も両者を引き裂くことはできない。[Mūrāsākī 1971: 41]」

以上、3か所で言及された「花蘇芳色 (arghavānī)」はいずれも元服

3 本稿内の日本語訳はいずれも筆者によるものである。

4 英訳の「purple」にあたるウルドゥー語の語彙には下線を引いて記した。以下、他のウルドゥー語訳においても同様である。

の際に光源氏の髪を結う糸の色を指しており、原文では「濃き紫」、英訳では「purple」である。ウルドゥー語には他にも「茄子色 (begānī, 紫紺)」、「ウーダー (ūdā, 青紫)」、「ファールサイー (シナノキ科ウオトリギ属の小木) の実の色 (fālsāi, 紫、モーブ色)」、「ムラサキフトモモの実の色 (jāmni, 紫黒色)」など、「紫」に関連した語彙が豊富に存在する中、エヘテシャームは「purple」の訳として紅がかった紫である「花蘇芳色 (arghavānī)」を選択しているのである⁵。

次に「purple」が登場するのは、「空蟬」巻である。空蟬の弟、小君に手引をさせて紀伊守邸に忍び込んだ源氏は、格子の隙間から空蟬の姿を覗き見る。その時に空蟬が着ていた衣装が原文では「濃き綾の単衣襲」、英訳では「裏地のない濃い紫の衣装 (unlined dark purple dress) [Murasaki 2000: 45]」である。この場面を日本語に訳し戻すと以下のようなになる。

【ウルドゥー語訳④】

「中柱に寄りかかってランプの傍に座っている女性について、彼女こそが自分の恋人に違いないと思い、源氏はそのひとをじっと見つめた。そのひとは濃いクリームゾン色 (gahrā qirmizī) の簡素な衣装を着ていた。[Mūrāsākī 1971: 101-102]」

クリームゾン色とは深紅色のことである。「purple」に対応する訳が「花蘇芳色 (arghavānī)」、さらに「dark purple」に対応する訳が「濃いクリームゾン色 (gahrā qirmizī)」であることから、日本の伝統的色彩感覚で

5 色を表す語彙としての「蘇芳」は、『源氏物語』の第17巻「絵合」にも登場する。「左は、紫檀の箱に蘇芳の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり」という一文がそれである。しかし、原文で言う「蘇芳」色とは蘇芳の樹皮や心材などを染料として染めた暗い紫みの赤のことで、ウルドゥー語の「花蘇芳色 (arghavānī)」とは別色である。また、ウルドゥー語に訳されたのは第1巻～9巻のみであるので、エヘテシャームがこの一文に影響を受けてこの語彙を選択した可能性は低い。

は「黒み」がかかるほどに濃くなるはずの「紫」が、エヘテシャームの色
の解釈においては「赤み」がかかるほど濃い紫であると捉えられていること
が読み取れる。

次に「purple」が登場するのは「若紫」巻である。病治癒の祈祷を受け
けるために北山を訪れた源氏は偶然、藤壺の姪にあたる若紫を垣間見て、
祖母である尼君に彼女を引き取りたいと熱心に懇願する。その源氏が若
紫を想って詠んだ和歌「手に摘みていつしかも見む 紫の根に通ひける
野辺の若草」にあたる部分がそれである。この和歌を日本語に訳し戻す
と以下のようになる。

【ウルドゥー語訳⑤】

「オレンジがかった黄色 (zard) の根より出でて湿原⁶の端に生え
る草、いつわたしの手に入るのか見てみることにしよう [Mūrāsākī
1971: 201]」

さらにこの和歌の「オレンジがかった黄色 (zard)」の部分には注記が
付されており、その内容を訳し戻すと以下のようになる。

【ウルドゥー語訳⑥】

「日本では「オレンジがかった黄色 (zard)」を「ムラサキ
(mūrāsākī)⁷」と言う。この詩ゆえに少女の名はムラサキ (mūrāsākī)
として知られるようになった。それにちなんで作者はこの名前を採用
し、そしてその名で有名になった。 [Mūrāsākī 1971: 201]」

6 本文中には「湿原 (daldal)」ではなく「心 (dil)」と記されているが、これ
は書家による誤りであると思われる。ウルドゥー語版『源氏物語』が出版された
当時、ウルドゥー語の出版物は書家の筆写したものを写真製版し、オフセット印
刷をする方法を採用しており、その過程で書き間違いが生じたものと思われる。

7 ウルドゥー語訳中に「ムラサキ (mūrāsākī)」と記されている部分は、ウル
ドゥー語版の中でもアラビア文字で「ムラサキ」と記されていることを示す。以下、
他のウルドゥー語訳においても同様である。

【ウルドゥー語訳⑤】および【ウルドゥー語訳⑥】の下線部にあたる語は、ウェイリー訳ではどちらも「purple」である。「桐壺」巻の【ウルドゥー語訳①】および【ウルドゥー語訳②③】の例から考えると、ここでも同様に「花蘇芳色 (arghavāni)」と訳されなければならないはずが、なぜか突然「オレンジがかった黄色 (zard)」に変化しているのである。

次に「purple」が登場するのは同じく「若紫」巻の中で、祖母君逝去の後、若紫を二条院に引き取った光源氏が、彼女に書の手ほどきをする場面である。

【ウルドゥー語訳⑦】

「それからムサシノという名の詩の一節をその子のために書いた。その子は「オレンジがかった黄色 (zard)」の紙に黒いインクで書かれたその太々とした文字がとても気に入った。少し小さな文字で、そのひとはこの詩も書いた。「元の根を見ることはかなわないが、それでもその若芽、つまりムサシノ湿原に生える濡れた若木を愛している。」 [Mūrāsākī 1971: 217]

この抜粋中の「その子」は若紫、「そのひと」は光源氏のことである。さらに「ムサシノ」、「元の根」、「若木」にはそれぞれ注記が付されており、日本語に訳し戻すと以下ようになる。

【ウルドゥー語訳⑧】

(「ムサシノ」の注記)

「わたしはそれがどこか分からなかったが、ムサシノの湿原のことだと教えてもらった時、わたしの頭の中にすぐに思い浮かんだ。この地の草はすべて「オレンジがかった黄色 (zard)」(ムラサキ)なのだから、他にどこがあるというのか。 [Mūrāsākī 1971: 217]

【ウルドゥー語訳⑨】

（「元の根」の注記）

「藤の花もまた「オレンジがかった黄色 (zard)」(ムラサキ)である。
[Mūrāsākī 1971: 217]」

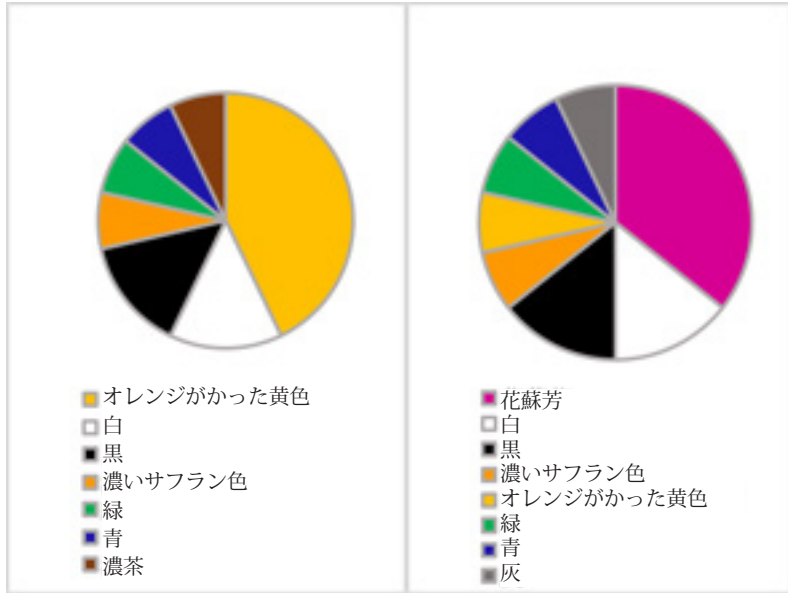
【ウルドゥー語訳⑩】

（「若木」の注記）

「藤壺の姪である紫。ムサシはその地の草の根から抽出されるこの
「オレンジがかった黄色 (zard)」で有名であった。[Mūrāsākī 1971:
217]」

このように【ウルドゥー語訳⑤】以降、「purple」に対応するウルドゥー語訳はすべて「オレンジがかった黄色 (zard)」として定着してしまっているのである。さらに、エヘテシャーームは英訳の「yellow」にあたる語としても「オレンジがかった黄色 (zard)」を使用している。なぜ「purple」と「yellow」の訳が同じ語彙になってしまったのかは不明であるが、これによって、ウルドゥー語版『源氏物語』が受ける作品の色のイメージはがらりと変わってしまっているのである。

「purple」が「オレンジがかった黄色 (zard)」として訳されることで、ウルドゥー語版読者の目から見た色の世界がどれほど変わってしまっているか。その一例として、「若紫」巻に登場する色とその回数をグラフ化してみると、違いは明らかである。



左はウルドゥー語版『源氏物語』通りに「purple」を「オレンジがかった黄色 (zard)」としてカウントした場合、右は紫としてカウントした場合に、各色の占める割合を円グラフにしたものである⁸。なお、右のグラフでは【ウルドゥー語訳①】および【ウルドゥー語訳②③】の例に習い、「花蘇芳色 (arghavānī)」を「purple」に対応する色とした。円グラフをみると、「purple」が「オレンジがかった黄色 (zard)」と訳されたことにより、ウルドゥー語版『源氏物語』の色の世界がなんとも黄色く様変わりしていることが分かる。

それだけでなく、【ウルドゥー語訳⑥】の説明により若紫と紫式部、

8 ウルドゥー語版『源氏物語』の「若紫」巻に現れる色名とその回数は次の通りである。本来紫として訳されるべきである「オレンジがかった黄色 (zard)」5回、「白 (safed)」2回、「黒 (kālā/siyāh)」2回、「濃いサフラン色 (gahrā za'frānī)」1回、「オレンジがかった黄色 (zard)」1回、「緑色 (harā)」1回、「青色 (nilā)」1回、「濃茶色 (gahrā bhūrā)」1回。なお、本稿では「紫」のみに注目したため割愛したが、ウルドゥー語版では英訳の「gray」にあたる語彙が「茶色 (bhūrā)」、「dark gray」にあたる語彙が「濃茶色 (gahrā bhūrā)」と訳されている。

そして【ウルドゥー語訳⑨】により藤壺のもつ個々人としてのイメージカラーまでもが、ウルドゥー語版『源氏物語』の読者には「オレンジがかった黄色 (zard)」に映ってしまうのである。桐壺については、ウルドゥー語版全体を通して特に注記等はなく、本文からも彼女個人の持つイメージカラーを特定することはできない。これにより、原作の中で光源氏にとって大切な女性たちを繋いでいた「紫」のつながりが完全に崩壊してしまっているのである。

次に「purple」が登場するのは「末摘花」巻で、末摘花が光源氏の後朝の文に対する返事をしたための場面である。

【ウルドゥー語訳⑩】

「彼女は、その女性たちみなが強引に勧めるので、それを以前はオレンジがかった黄色 (zard)であったが、今では色が褪せてしまった状態のよくない紙の切れ端にしたためた。 [Mūrāsākī 1971: 241]」

最後に「purple」が登場するのは同じく「末摘花」巻で、光源氏が末摘花の姿を目にした時の様子が書かれた場面である。この場面では末摘花の容貌について詳細に述べられるが、この中で彼女が着ていた一襲の色が原文では「聴し色」、英訳では「imperial purple」と訳されている。この場面を日本語に訳し戻すと、以下のようになる。

【ウルドゥー語訳⑪】

「皇帝の金色 (shāhī ṭilā' ī)」の細工の大変古いチョーリー (col ī)⁹の上に、金色の細工があまりにも時が経ちすぎて黒くなってしまったカバー (qabā)¹⁰を着ていた。 [Mūrāsākī 1971: 245]」

ここで「imperial purple」にあたる語は「皇帝の金色 (shāhī ṭilā' ī)」

9 中世の女性の丈の短い上衣。打ち合わせて着用し、脇でひもを結ぶ。

10 ひざ下まである長そでのキルトの衣服。

である。「purple」の訳が「オレンジがかった黄色 (zard)」であったように、ここでも黄色系の色があてられている。

❁ 4. おわりに

以上、アーサー・ウェイリーの英訳の中に 12 箇所登場した「purple」は、ウルドゥー語版では「赤みがかった紫系」が 4 箇所（「花蘇芳色 (arghavānī)」3 箇所、「濃いクリームゾン色 (gahrā qirmizī)」1 箇所）、「黄系」が 8 箇所（「オレンジがかった黄色 (zard)」7 箇所、「帝王の金色 (shahī tilā' ī)」1 箇所）と、実にその 3 分の 2 が黄系統の色に変化してしまっている。さらに、赤系以外の紫は一度も登場していない。そして、その名前から紫を連想させるはずの桐壺、藤壺、若紫、紫式部のうち、桐壺を除く 3 人のイメージカラーがウルドゥー語版の読者の目には「オレンジがかった黄色 (zard)」として映ってしまっている。その結果、ウルドゥー語版読者から見た『源氏物語』の色の世界は、なんとも黄味がかったものになっているのである。「purple」というたった一単語の訳が変わるだけで、作品にこれだけの影響を及ぼすことになるのであるから、翻訳者の担う役割はわたし達の想像する以上に大変重大なものであると言えよう。

【参考文献】

Mūrāsākī, Leḏī. *Ginjī kī kahānī*. ; Ḥusain, Sayyid Iḥtishām tr., Na'ī Dihlī: Sāhitiyah Akādēmī, 1971.
Zafarurrahmān Dihlavī. *Farhang-i iṣṭilāḥāt-i peshahvarān: Pāk o Hind ke mukhtalif funūn aur ṣan'aton ke iṣṭilāḥī alfāz va muḥāvarāt kā jāmi' majmū'ah jild 2*. Karācī: Anjuman Taraqqī-yi Urdū Pākistān, 1976.

Murasaki, Lady. *The Tale of Genj* ; Arthur Waley tr., New York: Dover Publications, 2000.

(インド国立アラナーハーバード大学大学院 博士後期課程)

『十帖源氏』の多言語翻訳と系図について — 「母の堅子」と「祖父の惟正」は どこから来てどこへ行ったのか—

浅川 槇子
(あさかわ まきこ)

❁ はじめに— 『十帖源氏』の多言語翻訳について

本科研は、『十帖源氏』「桐壺」巻を現代語に訳したものを多言語に翻訳し、日本文化の変容をみることを研究の柱の1つとしている。2014年～2015年度は、国文学研究資料館の初雁文庫蔵『十帖源氏』¹ (万治四年荒木利兵衛板) を底本として、畠山大二郎氏 (國學院大學兼任講師) が「桐壺」巻の翻字および現代語訳の作成をし、稿者が補訂を行った。具体的には、欧米とアジアから選択した英語・スペイン語・イタリア語・ロシア語・ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・中国語の8言語を選択し、それらの言語を母語とする者 (母語話者) と母語としない者 (非母語話者) に「桐壺」巻の翻訳を依頼した (表1)。『海外平安文学研究ジャーナル 3.0』² と内容が重複するが、以下に翻訳した言語と翻訳担当者の属性をあげる。なお、スペイン語については諸事情により非母語話者2名に翻訳を依頼した。

まず、日本の古典文学を専門としない翻訳担当者もいることから、『十帖源氏』を現代語に訳する際はさまざまな注意点を加えた。詳細な凡例については、前述した『海外平安文学研究ジャーナル 3.0』³ を参照されたい。具体的には、(1)主語を明確にする(2)敬語は帝のみにつける(3)

1 国文学研究資料館 初雁文庫蔵『十帖源氏』(請求記号 12-486-1、次ページにあげる系図は4コマ目)

2 『『十帖源氏』翻訳のルール』(『海外平安文学研究ジャーナル 3.0』p.118～120、URLは<http://genjiito.org/journals/juornal3/>、2015年9月30日閲覧)

3 「各国語訳「桐壺」(『源氏物語』『十帖源氏』)翻訳データについてのディスカッション報告 (第6回研究会)」(出典およびURLは前出2、p.77～80、2015年9月30日閲覧)

表1 他言語翻訳の言語・翻訳者一覧

【多言語翻訳を依頼した言語と担当者の属性】(2016年2月現在)		
言語	母語話者	非母語話者
英語	海外の大学教員	日本の大学教員
スペイン語	(ナシ)	スペイン在住の大学教員 スペイン語の通訳案内士
イタリア語	日本在住の大学院生	(ナシ)
ロシア語	ロシア在住の大学院生	日本在住の大学教員
ヒンディー語	(ナシ)	インド在住の翻訳者
ウルドゥー語	(ナシ)	インド在住の大学院生
ベンガル語	日本在住の大学院生	(ナシ)
中国語	日本在住の大学院生	(ナシ)

抽象的な語はさける(4)和歌を訳さない(5)名詞は平易なものにたとえて説明的に訳出し、固有名詞を使わない工夫をするなどである。その結果、数人の翻訳担当者から指摘と質問を受けた。指摘と質問は本文の解釈や語句の意味ではなく、本文の前に置かれた系図の内容であった。翻訳を依頼した側としては、翻訳をする際のもととなった、『十帖源氏』の現代語訳について質問を受けることになると思っていた。予想は異なるものであった。

言うまでもなく、これらの問題は『十帖源氏』のメインである本文からは離れている箇所である。しかし、翻訳担当者からの質問に答える意味でも考えてみたい。なお、この論稿は2014年度の研究業績にあげたものを加筆修正したものである。

❁ 1 『十帖源氏』多言語翻訳における

翻訳担当者からの質問と指摘

(1) 翻訳担当者からの質問と指摘

前提として『十帖源氏』の冒頭には、紫式部が『源氏物語』を執筆する発端を書いた『源氏物語のおこり』にあたるものがおかれ、その後ろに、紫式部の曾祖父である藤原兼輔から式部本人に至るまでの系図が掲載されている。数名の翻訳担当者から質問と指摘があったのは、この系

図に関することがらであった。具体的には、「堅子」という名前の読みと、紫式部の母である「摂津守為信女」は「堅子」という名前ではないかということである。後者については翻訳担当者から、与謝野晶子「紫式部の母は常陸介藤原為信の娘で名を堅子と云ひました」という一文⁴の紹介があった。また「紫式部の母が堅子という名であった」ということについては、山中裕氏が『日本歴史』に掲載した論文⁵にも掲載されているものの、どちらもこの説に関する出典を記載していなかった。

まずは、底本に掲載された系図と、2014年度に公開していた該当部分の現代語訳を確認してみる。

(底本)
堤中納言兼輔— <u>惟正</u> (傍記=因幡守)— <u>為時</u> (傍記=越前守)— <u>女</u> (傍記=紫式部) 母ハ <u>為信</u> (傍記=摂津守) 女 <u>堅子</u> (2丁表)
(2014年度に公開していた現代語訳)
紫式部の系図 堤中納言兼輔— <u>因幡守惟正</u> — <u>越前守為時</u> — <u>女</u> (紫式部) 母は <u>摂津守為信女</u> 、娘に <u>堅子</u> (賢子) があります。

当初、系図にある「堅子」という記述について、紫式部の娘である賢子と同じように音読みで「けんし」と読めることから、「堅子」と「賢子」を混同したのではないかとの解釈をした。なお、この説については、角田文衛氏により「賢子の草体を『堅子』と判じたのではないか」という指摘⁶もある。いずれにしてもこの段階では、「堅子」に紫式部の娘である「賢子」であるとの補足説明を含んだ訳とした。また「摂津守為信

4 与謝野晶子「紫式部の伝記に関する私の発見」p.33 (『鉄幹晶子全集 18』勉誠出版、2005年)

5 山中裕「紫式部伝記考—香子説再検討—」p.57 (『日本歴史』第201号、吉川弘文館、1965年2月)

6 角田文衛「紫式部の本名」p.37 (『紫式部伝—その生涯と源氏物語』吉川弘文館、2007年)

なお、上記に引用した部分に続いて、同じページに「紫式部の系図は学者が問題としていないことである」との指摘もある。しかし前述したように、翻訳担当者からの質問に答えるためにも考えていきたい。

女」こと藤原為信女についても、紫式部の母とされる女性を為信女とする以外の異説が見当たらなかったため、詳細に調べることはしなかった。

あわせて翻訳担当者からの指摘にはなかったものの、紫式部の父方の祖父にあたる「雅正」の名前と官職に史実との相違があるため、こちらについても考えてみることにした。

❁ 2 『十帖源氏』の系図について－4種類の諸本から

そもそも「堅子」と「因幡守惟正」は、今回の翻訳に使用した底本⁷のみに登場する名前なのか。それとも『十帖源氏』の他の諸本にも掲載されているのであろうか。これについて、『十帖源氏』の4種類の諸本とそこに掲載されている系図を確認した。

(1) 『十帖源氏』の諸本

底本を含む4種類の諸本を以下にあげる。

表2 4種類の『十帖源氏』

1	万治四年荒木利兵衛版	国文学研究資料館初雁文庫蔵→今回の底本
2	無跋無刊記本 ⁸	古典文庫本
3	立圃自跋無刊記本 ⁹	早稲田大学図書館蔵
4	万治四年立圃自跋本 ¹⁰	酒田光丘文庫

7 国文学研究資料館 初雁文庫蔵『十帖源氏』（請求記号 12-486-1、次ページにあげる系図は4コマ目）

8 野々口立圃著『十帖源氏』上 p.5（古典文庫、1989年）

9 早稲田大学図書館蔵『十帖源氏』（請求記号へ12 02847、系図は4コマ目、URLはhttp://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he12/he12_02847/index.html、2015年3月11日閲覧）

10 酒田光丘文庫蔵『十帖源氏』（請求記号 814、系図は4コマ目、URLはhttp://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0026-16102、2015年3月11日閲覧）

(2) 系図について

中納言兼輔—惟正（傍記＝因幡守）—為時（傍記＝越前守）—女（傍記＝紫式部） 母ハ為信（傍記＝摂津守）女 堅子

底本と同じく、4種類の諸本はいずれも上記の系図を有している。これらの系図同士に差異が見られなかった。なお、『十帖源氏』の編纂者である立圃が編纂した「表3 62、63『おさな源氏』」では、系図自体が削られているので、「堅子」と「因幡守惟正」の記述がない。一度、『十帖源氏』の底本とされる本に戻って、系図と記述を確認したい。

(3) 『十帖源氏』の底本とされる無跋無刊記本『源氏物語』と系図

『十帖源氏』とは拙稿¹¹でも説明しているように、雛人形師および俳諧師である野々口立圃が、『源氏物語』54巻を10帖にダイジェスト化したものである。ただし、現在、最も読まれる機会の多い大島本を簡潔にまとめたものではない。清水婦久子氏にお聞きしたところによると、『十帖源氏』は無跋無刊記本『源氏物語』を底本としており、松永貞徳が跋文を記した注釈書の『萬水一露』¹²の版本を作成するときに使われた本であるとのことである。また、編者である立圃は貞徳の弟子であることから、注釈自体も入手しやすい貞門の周辺で編纂された本を使用した可能性があり、注釈に相違が生じるのはどの時期に誰から伝授されたかによるとのことである。

しかし、そのような背景を持った無跋無刊記本¹³を確認してみると、系図や紫式部の母や父方の祖父に関する記述はなく、いきなり「桐壺」

11 「各国語訳「桐壺」（『源氏物語』『十帖源氏』）翻訳データについてのディスカッション報告（第6回研究会）」（出典およびURLは前出2、p.77～80、2015年9月30日閲覧）

12 清水婦久子著「版本『万水一露』の本文と無刊記本『源氏物語』」（『源氏物語版本の研究』p.261～288、和泉書院、2003年）

13 九州大学付属図書館（九大コレクション）『源氏物語（無跋無刊記製版本）』（URL <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/411265?hit=1&caller=xc-search>、2016年1月31日閲覧）

巻の本文が始まっている。最終巻である「夢浮橋」巻の後にも紫式部に
 関する情報が記載されていない。つまり、4種類の『十帖源氏』にある
 系図は底本の影響を受けていないことがわかる。それにしてもこの系図
 は何を元にして作られたのであろうか。底本に系図が存在しない以上、
 他の書物や記録にある内容をまとめた可能性もある。そのことから『尊
 卑分脉』を確認する。

❁ 3 『尊卑分脉』の系図との比較

1にあるように、2014年度末に受けた質問と指摘をまとめた上で、
 『尊卑分脉』において紫式部の父方・母方両方の系図を確認してみること
 にした。まず父方は、藤原冬嗣の6男である良門に始まる。良門の
 子である利基の子が、堤中納言と呼ばれた兼輔である。

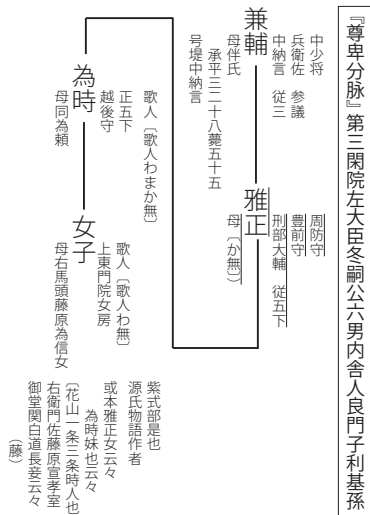


図1 紫式部の父方系図¹⁴

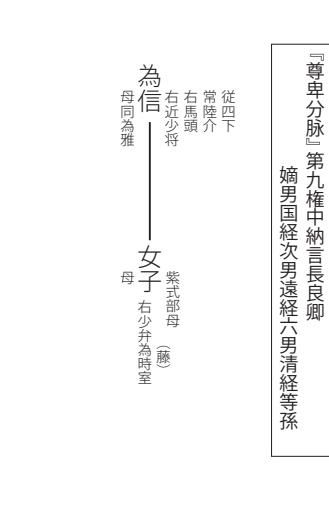


図2 紫式部の母方系図¹⁵

14 黒板勝美編輯『国史大系 第五十九巻 尊卑分脉 第二篇』(吉川弘文館、1966年)

15 黒板勝美編輯『国史大系 第五十九巻 尊卑分脉 第二篇』(吉川弘文館、

この系図において、兼輔の子で紫式部の祖父にあたる人物は、『十帖源氏』の系図にある「惟正」ではなく「雅正」となっている。なお「雅正」に「因幡守」の記述はなく、紫式部の母は「右馬頭藤原為信女」となっている。為信の官職も「摂津守」ではない。次に母方の系図を見てみる。

紫式部の母は為信女であるが名前は記されておらず、為時の室であることが書かれている。また、こちらも為信の官職に「摂津守」という記述がない。『十帖源氏』の系図とこれらの『尊卑分脉』における、紫式部の父方・母方双方の系図を比較して判明したことは、母にあたる為信女の名前が記述されていないことと、父方の祖父にあたる人物の名前と官職が異なっていることである。『尊卑分脉』は諸家の系図に関する全ての情報を網羅しているわけではなく、全てが事実であるとも言い切れない。しかし、『十帖源氏』の系図に見られる「堅子」と「因幡守惟正」はいったいどこから来たのであろうか。

❁ 4 『源氏物語』の注釈書・梗概書と紫式部に関する系図

まず、先行する諸説をまとめており、基本的な事柄を網羅しているとされる『湖月抄』に掲載されている系図から確認してみる。なお、2(1)に前述した与謝野晶子は、『源氏物語』を口語訳にするにあたり『湖月抄』を参照したとされる。

(1) 『湖月抄』の場合

以下にあげる2種類の諸本を見てみる。

〈1〉国文学研究資料館蔵の版本¹⁶

・(冊数) 60冊

1966年)

16 国文学研究資料館蔵『湖月抄』(請求記号サ4-9-1、5～6コマ目、
URL http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&CODE=SA4-009-001-060-001&IMG_SIZE=&PROC_TYPE=ON&SHOMEI=湖月抄&REQUEST_MARK=サ4-9-1~60&OWNER=国文研&IMG_NO=5、2015年3月11日閲覧)

- ・(書肆) 林和泉・村上勘兵衛・吉田四郎右衛門・村上勘左衛門
- ・(印記) 「弘前医官渋江氏蔵書記」「三条之印」。

以下、本文と系図を引用する。系図については、紫式部に至る直系のみを記載する。

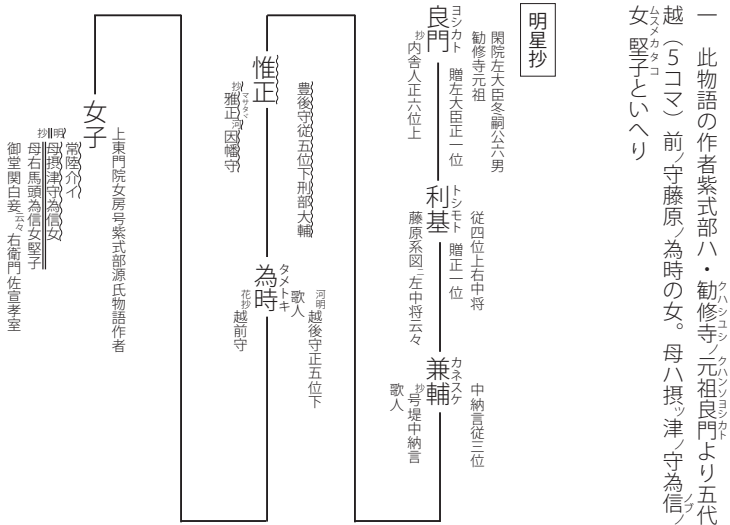


図3 『湖月抄』の系図

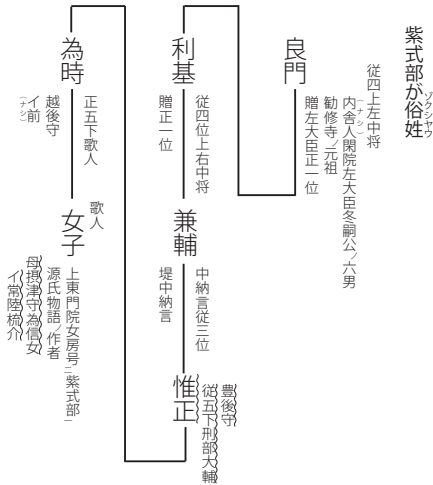
〈2〉 講談社学術文庫本¹⁷

この本は、本居宣長と彼の門弟である鈴木胤による書き入れがあるものを猪熊夏樹が校訂したものである。系図の前にある一文にあげられた、人名に付したフリガナに濁点が付いていること以外は、全て〈1〉と同じ内容であるので省略した。具体的には、勸修寺(ノ)元祖良門の「勸修寺」に「クハジユジ」、「元祖」に「グハンソヨシカド」という箇所である。

(2) 『明星抄』の系図について

¹⁷ 北村季吟著・有川武彦校訂『講談社学術文庫 源氏物語湖月抄(上)増注』p.3～6(講談社、1982年)

〈1〉と〈2〉で引用した系図は、どちらも『明星抄』との傍記がある。『明星抄』は『源氏物語 注釈書・享受史事典』¹⁸によると、三条西実隆の息子である公条により編纂され、天文10（1541）年までに成立したとされる注釈書である。写本と20冊からなる版本が現存する。写本¹⁹・版本²⁰ともに系図が掲載されており、ここではそれを見つめる。なお、



以下²¹に引用する系図は紫式部に至る直系のみを記載する。

図4 『明星抄』の系図

(3) 『湖月抄』と『明星抄』の系図について

18 伊井春樹編「明星抄」（『源氏物語 注釈書・享受史事典』p.453、東京堂出版、2001年）

19 宮内庁書陵部蔵 鷹司本『明星抄』（請求記号D I G - K S R M - 1 0 6 7 0 - 1、5コマ～6コマ目、
URL http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=KSRM-106701&IMG_SIZE=&IMG_NO=5、2015年3月11日閲覧）

20 中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第四巻 明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』3～4頁（武蔵野書院、1980年）

21 北村季吟著・有川武彦校訂『講談社学術文庫 源氏物語湖月抄（上）増注』p.3～6（講談社、1982年）

『明星抄』と『湖月抄』の系図のうち、それぞれの波線を付した箇所を比較すると、『湖月抄』の系図において「明」と略されている箇所は『明星抄』からの引用であることがわかる。また、『湖月抄』のどちらの系図にも紫式部の母を「堅子」とする記述があり、「抄」という略された注釈書からの引用が掲載されている。しかし、この注釈書の書名はわからず、『湖月抄』に本文が引用されていることから、『湖月抄』より前に成立した注釈書であるという推測しかできない。

(4) 対象とした注釈書および梗概書の一覧

それでは、紫式部の母を「堅子」とし、父方の祖父を「惟正（因幡守惟正）」とする説はどこからきたのか。『十帖源氏』および『湖月抄』が成立するまでの注釈書と梗概書について、成立の古い順番に並べた。系図が掲載されているかについての有無は「系図」の項目に○×を、また母および父方の祖父の記述があるかについての有無もそれぞれの項目に○×を付している。

なお、底本の出典は、最後に参考文献一覧として別途あげることにする。

表3 注釈書・梗概書一覧

No.	書名	著者・編者	成立年	底本	系図	母	祖父
1	源氏釈	藤原伊行	1175年までには完成か	冷泉家時雨亭文庫蔵、鎌倉期写本	×	×	×
2	奥入	藤原定家	1233年ごろには成立か	伝藤原為家筆、鎌倉期残欠本、北野克氏旧蔵（現九曜文庫蔵）	×	×	×
3	紫明抄（1）	素寂（親行の弟）	1294年以前	内閣文庫本系／東京大学総合図書館蔵本	○	○	○
4	紫明抄（2）	同上	上と同じ	江戸時代初期写／龍門文庫本	○	×	○
5	異本紫明抄	同上	1252年？ （1267年までには成立か）	ノートルダム清心女子大学蔵本	×	×	×
6	幻中類林（光源氏物語本事）	華洛非人桑門了悟	1274年ごろまで	天理大学付属天理図書館蔵本	×	×	×
7	弘安源氏論議	源具顕	1280年	国立歴史民俗博物館蔵本、南北朝時代書写との解説がある。1巻	×	×	×
8	原中最秘抄	行阿	1364年	国立歴史民俗博物館蔵本、室町時代後期、上下二冊本	×	×	×

9	源氏小鏡	不明	南北朝時代	慶安4(1651)年に秋田屋平左衛門が刊行	×	×	×
10	源氏大鏡	花山院長親(耕雲)	室町時代中期?	江戸時代初期書写、3冊本、宝玲文庫旧蔵	×	×	×
11	河海抄	四辻善成	1362～1367年までの間に成立か	天理大学付属天理図書館蔵、文禄5(1596)年書写記録がある、20冊本	×	○	○
12	仙源抄	長慶天皇	1381年	耕雲筆、京都大学附属図書館蔵本	×	×	×
13	珊瑚秘抄	四辻善成	1388年以降か	学習院大学文学部国文学研究室蔵本、三条西実隆筆本	×	×	×
14	千鳥抄	平井相助(四辻善成の講義をまとめる)	1419年	倉野本	×	×	×
15	類字源語抄	師成親王	1431年	内閣文庫蔵本	×	×	×
16	源氏物語提要	今川範政	1432年	稲賀敬二氏の架蔵本、6冊本	×	×	×
17	一滴集	正徹	1440年	文明11(1479)年書写、正徹の弟子である歌人の正広が書写した本	×	×	×
18	源氏和秘抄	一条兼良	1449年	宮内庁書陵部蔵の桂宮本、江戸時代初期書写	×	×	×
19	山頂湖面抄	祐倫(尼僧、連歌師)	1449年	(1) 神宮文庫本(永禄10年書写) (2) 大東急記念文庫(近世初期書写) (3) 静嘉堂文庫(文安6年自序で近世中期書写) (4) 島原松平文庫(近世中期書写) (5) 天理大学付属天理図書館(寛文9(1669)年書写) (6) 宮内庁書陵部(近世初期書写) (7) 内閣文庫(近世初期書写)	×	×	×
20	源氏物語年立	一条兼良	1453年	国立歴史民俗博物館蔵本、弘治3(1557)年書写の記録がある。1冊	×	×	×
21	花鳥余情	一条兼良	1472年	再稿本系統 僧正慈海所持本、江戸時代初期書写、中野幸一氏の架蔵本	×	×	×
22	源氏物語之内不審条々	一条兼良	1475年?	一条兼良自筆の答書をもつ、宮内庁書陵部蔵の原本、桂宮本、1巻	×	×	×
23	種玉編次抄	飯尾宗祇(連歌師)	1475年	宮内庁書陵部蔵の桂宮本、江戸時代中期書写	×	×	×

24	源語秘訣	一条兼良	1477 年ごろ	一条冬良相伝本系統の三条西実隆・中院通勝の奥書がある本、江戸時代初期書写、中野幸一氏の架蔵本	×	×	×
25	口伝抄	一条兼良	1480 年	宮内庁書陵部蔵の桂宮本、『源語秘訣』と合綴、江戸時代初期書写	×	×	×
26	紫塵愚抄	飯尾宗祇	1485 年	中野幸一氏の架蔵本、室町時代中期書写、4 冊	×	×	×
27	源氏物語聞書	肖柏	1489 年	國學院大學図書館蔵本	×	×	×
28	源語花錦抄	肖柏	1491 年	延徳 3 (1491) 年肖柏自筆本、京都女子大学蔵本	×	×	×
29	一葉抄	藤原正存(細川家の家人で連歌師)	1494 年ころ	刈谷図書館本	×	○	×
30	三源一覧	富小路俊通	1496 年	宮内庁書陵部本 (502 - 34)	×	×	×
31	源氏物語不審抄出	飯尾宗祇	1496 年までには成立か	江戸時代初期書写、中野幸一氏旧蔵本・九曜文庫	×	×	×
32	弄花抄	三条西実隆	1504 年	内閣文庫本、10 冊 (特 10 - 5)	×	○	×
33	細流抄 (1)	三条西公条	1510 年	内閣文庫本、10 冊 (特 90 - 11)	×	×	×
34	細流抄 (2)	三条西公条	1510 年	内閣文庫本、16 巻	○	×	○
35	最要抄 (源氏最要抄)	花山院長親(耕雲)	1517 年	宮内庁書陵部蔵の桂宮本、江戸時代初期書写、2 冊本	×	×	×
36	明星抄	三条西公条	1541 年までには成立か	無刊記版本、中野幸一氏の架蔵本、20 冊	○	○	○
37	休閒抄 (1)	里村昌休(連歌師)	1550 年	陽明文庫本	×	○	×
38	休閒抄 (2)	里村昌休	1550 年	ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵本	×	○	×
39	長珊聞書	猪苗代長珊(連歌師兼純の弟、公条の講義を受ける)	1555 年	陽明文庫蔵本、53 冊本	×	○	○
40	林逸抄	林宗二(饅頭屋宗二、肖柏の弟子で『古今和歌集』の奈良伝授を行う)	1559 年	天理大学附属天理図書館蔵『林逸抄 林宗二自筆本』、全 54 巻 45 冊	×	○	×
41	浮木	橋本公夏	1559 年	宮内庁書陵部蔵の桂宮本、江戸時代初期書写、5 冊本	×	×	×
42	紹巴抄 (1)	里村紹巴(連歌師)	1565 年春	稲賀敬二蔵『源氏物語抄』と題した江戸時代初期書写の横本 20 冊永禄 7 (1564) 年〜永禄 8 (1565) 年奥書	○	○	×
43	紹巴抄 (2)	里村紹巴	1565 年春	寛永古活字本覆刻版、九曜文庫蔵、合綴 10 冊、20 巻	×	○	×
44	覚勝院抄	覚勝院宗淳	1571 年	穂久遷文庫蔵本	×	○	×

45	孟津抄	九条植通 (公条の甥)	1575 年	和学講談所・浅野文庫旧蔵、 内閣文庫蔵『孟津』	×	×	×
46	萬水一露	能登永閑 (連歌師、月 村高宗碩の弟 子)	1571 年 (1545 年に初稿本成 立説あり)	承応元 (1652) 年松永貞徳跋 文がある、寛文 3 (1663) 年 の版本	×	○	×
47	山下水	三条西実枝 (公条の息子)	1579 年まで	宮内庁書陵部蔵本 (150・692)	○	○	○
48	花屋抄	花屋玉栄 (慶福院・近 衛植家の娘)	1594 年	ノートルダム清心女子大学蔵 本	×	×	×
49	岷江入楚 (1)	中院通勝 (公条の孫)	1598 年	蜂須賀家旧蔵専修大学図書館 所蔵本、55 冊	○	○	○
50	岷江入楚 (2)	中院通勝	1598 年	内閣文庫本	○	○	○
51	玉栄集	花屋玉栄	1602 年	築瀬一雄氏架蔵本	×	×	×
52	源氏抄	不明	1614 年	早稲田大学図書館蔵本、江戸 時代初期書写、1 冊、元和 10 (1624) 年 2 月の奥書がある。	×	×	×
53	続源語類字抄	猪苗代兼也 (会津諏訪神 社の宮司)	1639 年	内閣文庫蔵本	×	×	×
54	源義弁引抄 (1)	一華堂切臨 (時宗の僧侶)	1650 年	宮内庁書陵部蔵本、江戸時代 初期刊行の版本	○	○	○
55	源義弁引抄 (2)	一華堂切臨	1650 年	慶安 3 (1650) 年序文がある 国文学研究資料館初雁文庫蔵 の版本、19 冊	○	○	○
56	絵入源氏／源 氏目案 (1)	山本春正 (松永貞徳の 弟子、蒔絵師)	1650 年	「夢浮橋」の末尾、に山本春正 による慶安 3 (1650) 年 11 月 跋がある。出版地と出版者は 不明である。	○	○	○
57	絵入源氏／源 氏目案 (2)	山本春正	1654 年	承応 3 (1654) 年 八尾勘兵 衛版、「夢浮橋」の末尾に山本 春正による慶安 3 (1650) 年 11 月跋がある。中野幸一氏旧 蔵、九曜文庫	○	○	○
58	十帖源氏	野々口立圃 (松永貞徳の 弟子)	1654 年ごろ	底本は万治四 (1661) 年、荒 木利兵衛版。国文学研究資料 館初雁文庫蔵	○	○	○
59	絵入源氏／源 氏目案 (3)	山本春正	1660 年	万治 3 (1660) 年版 林和泉 掾版、村井順・中野幸一旧蔵、 九曜文庫	○	○	○
60	源氏鬘鏡	小嶋宗賢・ 鈴木信房 (両者とも松 永貞徳の弟 子)	1660 年	愛知県立大学付属図書館蔵本、 大 2 冊、万治 3 (1660) 年度々 市兵衛刊	×	×	×
61	源氏綱目	一華堂切臨	1660 年	刊本、9 冊	○	○	○
62	おさな源氏	野々口立圃	1661 年	国文学研究資料館初雁文庫蔵、 寛文 10 (1670) 年の山本義兵 衛版 (上方版)	×	×	×

63	おさな源氏	野々口立圃	1661年	寛文12(1671)年の松会版(江戸版)	×	×	×
64	首書源氏物語	一竿斎	1673年	寛文13(1673)年、積徳堂より刊行	×	○	○
65	湖月抄(1)	北村季吟	1673年	延宝元(1673)年冬至に林和泉・村上勘兵衛・吉田四郎右衛門・村上勘左衛門より刊行、国文学研究資料館蔵、60冊	○	○	○
66	湖月抄(2)	北村季吟	1673年	本居宣長と門弟である鈴木胤の書き入れがあるものを猪熊夏樹が校訂した本	○	○	○

(5) 注釈書の記述と分類

〈1〉母についての記述がある注釈書と内容

- A 為信の女である。(為信の官職に関する記載ナシ)
- B 摂津守(藤原)為信の女である。
- C 常陸介(藤原)為信の女である。
- D 右馬頭(藤原)為信の女である。
- E 一条天皇の乳母である。
- F 一条天皇の乳母子である。
- G 堅子という名前である。
- H 堅子という名前で歌人である。
- I 賢子という名前である。

表4 母についての記述がある注釈書・梗概書

	注釈書・梗概書名	系図の有無	母についての記述分類
3	紫明抄(1)	○	C
11	河海抄	×	C、F(清輔説)
29	一葉抄	×	C、E(清輔説)
32	弄花抄	×	C
36	明星抄	○	B(異本表記にC) F
37	休閒抄(1)	×	C、F(清輔説)
38	休閒抄(2)	×	C、F(清輔説)
39	長珊聞書	×	C、F(清輔説)
40	林逸抄	×	C、E(清輔説)
42	紹巴抄(1)	○	A、G
43	紹巴抄(2)	×	A、G
44	寛勝院抄	×	C
46	萬水一露	×	F

47	山下水	○	D (為時室との記述)
49	岷江入楚 (1)	○	(系図1) D、(系図2) C『河海抄』引用、B同書に掲載の「或説」引用、為時室、(系図外) F『河海抄』に掲載の「或説」引用、清輔の説との記述がある。
50	岷江入楚 (2)	○	(系図1) B、D、I「抄」という名称の注釈書からの引用、(系図2) A (傍記にC『河海抄』引用、B同書に掲載の「或説」引用)、(系図外) F『河海抄』に掲載の「或説」引用、その傍記に清輔の説との記述がある。
52	源氏抄	×	E
54	源義弁引抄 (1)	○	B、C、E、H
55	源義弁引抄 (2)	○	B、C、E、H
56	絵入源氏／源氏目案 (1)	○	B、C、F
57	絵入源氏／源氏目案 (2)	○	B、C、F
58	十帖源氏	○	B、G
59	絵入源氏／源氏目案 (3)	○	B、C、F
61	源氏綱目	○	B、C、H
64	首書源氏物語	×	C『河海抄』からの引用、F
65	湖月抄 (1)	○	B『明星抄』からの引用文転載、DおよびG「抄」という略称の注釈書からの引用文転載、E
66	湖月抄 (2)	○	B『明星抄』からの引用文転載、DおよびG「抄」という略称の注釈書からの引用文転載、E

上記の表にあるように、紫式部の母が、「E 一条天皇の乳母である」または「F 一条天皇の乳母子である」という説を掲載している注釈書・梗概書の中には、これらを「清輔」の説とするものがある。これは藤原清輔が書いた『袋草紙』の記述によるものである。以下にその本文²²をあげる。

(筑波大学図書館本)

紫式部 (ト) 云名有二説一 (ニハ) 此／物語中 (ニ) 紫卷 (ヲ) 作 (甚) 深也故得此名一 (ニハ) 一条院御乳母之子也／而上東門院 (ニ) 令奉 (トテ) 吾ユカリ (ノ) 物也アハレト思召 (ト) 令申給／之故有此名武蔵野之義也 (以下略)

22 筑波大学図書館本『袋草紙 (清輔袋草紙)』(請求記号 6-81-2、95 コマ、

URL http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0006-008102&IMG_SIZE=&PROC_TYPE=ON&SHOMEI=%E8%A2%8B%E8%8D%89%E7%B4%99&REQUEST_MARK=%EF%BC%96%EF%BC%8D%EF%BC%98%EF%BC%91%EF%BC%8D%EF%BC%92%2C+120%E3%82%B3%E3%83%9E%2C+B%EF%BC%A3%EF%BC%91%EF%BC%93%EF%BC%98%EF%BC%97%2C+120%E3%82%B3%E3%83%9E%2C+B&OWNER=%E7%AD%91%E6%B3%A2%E5%A4%A7%E5%9B%B3&IMG_NO=9,2015年3月11日閲覧)

これについて『新日本古典文学大系 袋草紙』²³、『袋草紙注釈 上』²⁴、『袋草紙 雑談篇』²⁵ はいずれも、紫式部を一条天皇の乳母子であるという説（つまり母が一条天皇の乳母）は根拠不詳としている。一応、一条天皇の乳母をつとめた女性²⁶について調べてみたが、該当者は見当たらなかった。

表5 一条天皇の乳母

	氏名	呼称	系譜	官名	位階
1	藤原繁子	藤三位	藤原師輔の7女、 女御尊子の母	典侍／乳母	従三位
2	橘徳子	橘三位	橘仲遠の娘、 藤原有国室	典侍／乳母	従三位
3	不詳	宮内	藤原忠幹の娘（？） 源奉職妻	乳母	—
4	不詳	衛門 または右衛門	源師保の娘、 藤原嘉時妻	典侍／乳母	—

〈2〉父方の祖父についての記述がある注釈書と内容

- A 惟正（因幡守の記述はない）
- B 因幡守惟正
- C 因幡守雅正
- D 雅正（因幡守の記述はない）

23 「四 この説の根拠不詳」（藤岡忠美校注『新日本古典文学大系 袋草紙』p.138、岩波書店、1995年、底本は里村昌純筆による、筑波大学図書館蔵寛文10年本である）

24 「○一条院御乳母之子 典拠未詳。一条院は前出（→一七）」（小沢征夫、後藤重郎、島津忠夫、樋口芳麻呂編『袋草紙 上』p.412、塙書房、1974年、底本は国会図書館蔵本）

25 「○一条院御乳母之子也 この説、根拠不詳。紫式部母は一条天皇の出生以前に没したと考えられている。」（藤岡忠美、芦田耕一、西村加代子、中村康夫編『研究叢書 102 袋草紙考証 雑談篇』p.349、和泉書院、1991年、底本は貞享2年本）

26 角田文衛著『日本の後宮』p.386（學燈社、1973年）

表6 父方の祖父についての記述がある注釈書・梗概書

	注釈書・梗概書名	系図の有無	父方の祖父についての記述分類
3	紫明抄（1）	○	C（傍記に因幡守）
4	紫明抄（2）	○	C（傍記に因幡守）
11	河海抄	×	C
34	細流抄（2）	×	A
36	明星抄	○	A
39	長珊聞書	×	C（「正」にふりがな「タ、」）
47	山下水	○	D
49	岷江入楚（1）	○	C（『河海抄』からの引用として因幡守、左傍記にマサタ、）
50	岷江入楚（2）	○	C（『河海抄』からの引用として因幡守、左傍記にマサタ、）
54	源義弁引抄（1）	○	A
55	源義弁引抄（2）	○	A（「惟」にふりがな「これ」）
56	絵入源氏／源氏目案（1）	○	A（ふりがな「これたゞ」）
57	絵入源氏／源氏目案（2）	○	A（ふりがな「これたゞ」）
58	十帖源氏	○	B（傍記に因幡守）
59	絵入源氏／源氏目案（3）	○	A（ふりがな「これたゞ」）
61	源氏綱目	○	A（ふりがな「これまさ」）
64	首書源氏物語	×	B（『河海抄』からの引用であるとの記述がある）
65	湖月抄（1）	○	A（『河海抄』からの引用として因幡守、「抄」という略称の注釈書からの引用として雅正、このふりがなにマサタ、）
66	湖月抄（2）	○	A（『河海抄』からの引用として因幡守、「抄」という略称の注釈書からの引用として雅正、このふりがなにマサタ、）

〈3〉「堅子」と「惟正」という記述の初出について—2人がやって来た道

上記の表3によると、注釈書および梗概書に系図があらわれるのは、『紫明抄』からであり、ここには母と父方の祖父についての記述も見られる。しかし、母については表4のように「C 常陸介（藤原）為信女」という説明のみとなっている。ここでは「堅子」という名前は出てこない。「堅子」という名前が出てくるのは表3の42、43にあげた『紹巴抄』が初出である。

42 『紹巴抄』(1)

堤中納言(傍記/堤=父)、為時ノ女(傍記/為時=越前守、後イ) 花鳥には越前 河海には越後と在之、為信(傍記/為信=母) カ女ノ子堅子ト云人ノ腹也

43 『紹巴抄』(2)

堤中納言(ふりがな/堤=ツ、ミノ) 為時女(ふりがな/為時女=タメトキムスメ) 花鳥には越前くト) 河海には越後在し之、為信女子堅子(ふりがな/堅子=カタコ)と云人の腹也

『紹巴抄』²⁷とは、連歌師である里村紹巴が永禄8(1536)年に編纂した『源氏物語』の注釈書であり、三条西公条の『源氏物語』講釈をまとめたものである。現在は写本と版本があり、54巻12冊。版本には寛永古活字版・同覆刻版・無刊記版が存在する。『休閒抄』と合冊となっている本²⁸もある。

作者の紹巴は、連歌師である周桂および里村昌休の弟子であり、自身も連歌師として活躍した。師匠である昌休は、三条西実隆のところへ出入りしていた。その縁か実隆の息子である公条から『源氏物語』の講義を受け、後年には近衛権家より古今伝授を受けた。『十帖源氏』の底本である無跋無刊記本『源氏物語』を用いて、『萬水一露』に関わった松永貞徳は、この紹巴の弟子である。

一方、「因幡守惟正」についてはどの注釈書が初出であろうか。「因幡守」と「惟正」がともに掲載されたものでは、表3の34『細流抄』が初出である。『細流抄』は永正7(1510)年に三条西公条により編纂された注釈書である。ただし、紫式部の父方の祖父である「雅正」について、「因幡守」という官職の説明がされるのは、同表3、4『紫明抄』が初出である。『紫明抄』²⁹は永仁2(1294)年以前に、僧侶である素寂により編纂された注釈書である。素寂は、河内本『源氏物語』に関わった

27 伊井春樹編『紹巴抄』(『源氏物語 注釈書・享受史事典』p.407～408、東京堂出版、2001年)

28 国文学研究資料館蔵『休閒 源氏物語聞書』(請求記号99—35、URL http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi、2016年1月31日閲覧)

29 伊井春樹編『紫明抄』(『源氏物語 注釈書・享受史事典』p.393～395、東京堂出版、2001年)

源光行の息子で親行の弟にあたる。2回にわたり、鎌倉幕府第8代将軍である久明親王に献上されたらしい。

いずれにしても、「堅子」という名前と「因幡守惟正」（傍記に因幡守という記述も含む）が同時に掲載されるのは、『十帖源氏』を待たなくてはならない。

〈4〉拡大していく「母」と「父方の祖父」—2人はどこへ行ったのか

突如、注釈書に現れた「堅子」と「因幡守惟正」は、後に続く注釈書や梗概書ではどのように扱われたのか。『紹巴抄』で登場した紫式部の母「堅子」を見てみると、表4の54、55『源義弁引抄』で「歌人」であったという記事が加わる。

54『源義弁引抄』（1）

母ハ常陸ノ介。摂津守藤原ノ為信力女堅子也。堅子も哥人也。（p.6）

55『源義弁引抄』（2）

母ハ常陸ノ介。摂津守藤（ふりがな=へ）原ノ為信（ふりがな=ためのふか）女堅子（ふりがな=かたこ）也堅子も哥人也（7コマ目）

それでは、「堅子」が「歌人」であるという説はどこから出てきたのか。

まず、『源義弁引抄』³⁰は、慶安3（1650）年に一華堂切臨³¹により編纂された注釈書である。切臨は時宗の僧侶で、同じく時宗の僧侶である一華堂乗阿の弟子であり、師の乗阿は三条西公条から教えを受けている。この系譜を見ると、切臨は師匠の乗阿を通じて公条の影響を受けたと考えられる。しかし、公条が編纂したとされる『細流抄』と『明星抄』には「堅子」が「歌人」であるという記事はなく、師弟関係で受け継いだ説とは考えにくい。また、『源義弁引抄』の料簡には「師云」として、乗阿の説が見られるものの、そこにも「堅子」が「歌人」であるという説は見当たらない。そして、この説は10年後の万治3（1660）年に、

30 伊井春樹編『源義弁引抄』（『源氏物語 注釈書・享受史事典』p.71～77、東京堂出版、2001年）

31 前述した清水氏によると、松永貞徳の門下にいた山本西武を切臨の甥とする説があるとのことである。西武を通じて立圃など貞門に伝わる注釈書に関する情報を得た可能性もあるものの、それについての詳細は不明である。

同じ切臨により編纂された61『源氏綱目』に引き継がれるものの、『湖月抄』には掲載されなかった。

61『源氏綱目』
母ハ常陸介摂津守藤原為信女堅子也 堅子亦哥人也 (p.10)

一方「因幡守惟正」を見てみると、55『源義弁引抄』からは「惟正」という名前にふりがながふられるようになる。

55『源義弁引抄』
惟正 (ふりがな／惟=これ) 刑部大輔豊後 (ふりがな／豊後=ふんこ) /守従五下 (p.6)

しかし、61『源氏綱目』になると、その「ふりがな」の読みに変化が生じる。63『首書源氏物語』³²では「因幡守」を傍記とせず、官職と名前をセットで表記し、『河海抄』からの引用であるという記事が加わる。なお、この本は『源氏物語』の本文を全て掲載しており、傍注・頭注の形で諸注を付して注釈を施すという、版本では初めての形式である。『河海抄』の他にも前述した『紹巴抄』からの引用も掲載されている。

61『源氏綱目』
惟正 (ふりがな=これまさ) 刑部大輔豊後守 従五位下 (p.10)
64『首書源氏物語』
因幡守惟正 (河海抄からの引用 / 4コマ目に「河海抄巻第一」の記述あり) (9コマ目)

❁ 5 おわりに—「堅子」と「惟正 (因幡守惟正)」はどこから来てどこへ行ったのか

『十帖源氏』の多言語翻訳をとおして文化受容をみていくという研究から、『源氏物語』の古注釈の世界を見ることになった。結論として、『十帖源氏』の系図にある紫式部の母「堅子」は、『紹巴抄』が初出であり、この本に読みをあわせると「かたこ」と読むことになる。また、父方の祖父「雅正」を「惟正」とするのは『紫明抄』が初出であり、「惟正」に「因

32 伊井春樹編「首書源氏物語」(『源氏物語 注釈書・享受史事典』p.402～403、東京堂出版、2001年)

幡守」という官職の情報が傍記という形式をとらずに加わるのは『十帖源氏』からということになる。どちらにしても一般的な説とは言いがたく、過去の注釈書に見当たらない説も散見するものの、付加情報を取り入れながら、『湖月抄』まで生き残ったことになる。

当初、『源氏物語』のダイジェスト版ということから、翻訳していただく際の現代語訳のわかりやすさに力点をおいて考えていた。しかし、今回さまざまな注釈書と梗概書を確認していくことで、『十帖源氏』が、堂上の人々の編纂による古注釈書とは、別の道から得た情報を参考として編纂されたことがよくわかる結果となった。『紹巴抄』や『源義弁引抄』などがその良い例である。また、注釈書に書いてある説をそのまま継承するのではなく、伝統芸能の口伝のように文字に残さないで説を伝えたという可能性も考えることができた。多言語翻訳とは遥かに離れたテーマとなったものの、『十帖源氏』そのものを考える良い契機となったと思う。

このテーマについて考える上で、清水婦久子氏から多大なる教授を受けた。この場を借りてお礼を申し上げる。

【注釈書・梗概書の参考文献】

No.	書名	出典（系図や記述が掲載されている場合はその頁をあげている）
1	源氏釈	中野幸一、栗山元子編『源氏物語古注釈叢刊 第一巻 源氏釈 奥入 光源氏物語抄』（武蔵野書院、2009年）
2	奥入	1と同じ
3	紫明抄（1）	田坂憲二編『源氏物語古注集成 第18巻 紫明抄』p.10（おうふう、2014年）
4	紫明抄（2）	阪本龍門文庫『龍門文庫善本叢刊 第十巻 紫明抄』p.9（勉誠社、1988年）
5	異本紫明抄	1と同じ
6	幻中類林（光源氏物語本事）	今井源衛編『源氏物語とその周縁』（和泉書院、1989年）
7	弘安源氏論議	国立歴史民俗博物館館蔵史料編集会編『物語4 原中最秘抄 源氏年立抄 源氏書写目録 源氏物語初音巻聞書 弘安源氏論議』（臨川書店、2002年）
8	原中最秘抄	7と同じ
9	源氏小鏡	国文研マイクロ サ4—57—1～2
10	源氏大鏡	国文研マイクロ 99—83—1～3
11	河海抄	玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』186頁、188頁（角川書店、1978年）

12	仙源抄	岩坪健編『源氏物語学古注集成 第21巻 仙源抄 類字源語抄 続源語類字抄』(おうふう、1998年)
13	珊瑚秘抄	紫式部学会編『源氏物語研究と資料 古代文学論叢 第六輯』(武蔵野書院、1969年)
14	千鳥抄	中島義彦著『倉野本 源氏御談義「千鳥抄」影印と解題』(武蔵野書院、2012年)
15	類字源語抄	12と同じ
16	源氏物語提要	稲賀敬二編『源氏物語古注集成 第2巻 源氏物語提要』(桜楓社、1978年)
17	一滴集	『源氏抄』国会図書館デジタルWA16—142
18	源氏和秘抄	中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第2巻 花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘訣 口伝抄』(武蔵野書院、1978年)
19	山頂湖面抄	今井源衛、古野優子編著『山頂湖面抄諸本集成:源語梗概・注釈書』(笠間書院、1999年)
20	源氏物語年立	7と同じ
21	花鳥余情	18と同じ
22	源氏物語之内不審条々	21と同じ
23	種玉編次抄	中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第四巻 明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』(武蔵野書院、1980年)
24	源語秘訣	18と同じ
25	口伝抄	18と同じ
26	紫塵愚抄	中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第五巻 源氏秘儀抄 浮木 源氏抄 紫塵愚抄』(武蔵野書院、1982年)
27	源氏物語聞書	伊井春樹編『源氏物語古註集成 第8巻 弄花抄 付源氏物語聞書』桜楓社、1983年
28	源語花錦抄	『京都女子大学本源語花錦抄』(京都女子大学、1973年)
29	一葉抄	井爪康之編『源氏物語古注集成 第9巻 一葉抄』p.7 (武蔵野書院、1984年)
30	三源一覽	国文研マイクロ 20—613—1
31	源氏物語不審抄出	早稲田大学古典籍データベース文庫 30 A0113
32	弄花抄	27と同じ
33	細流抄 (1)	伊井春樹編『源氏物語古注集成 第7巻 内閣文庫本 細流抄』(桜楓社、1980年)
34	細流抄 (2)	室松岩雄編『国文註釈全書第五巻 細流抄』p.1 (国学院大学出版部、1910年)
35	最要抄 (源氏最要抄)	26と同じ
36	明星抄	23と同じ
37	休閒抄 (1)	井爪康之編『源氏物語古注集成 第22巻 休閒抄』p.7～8 (武蔵野書院、1995年)
38	休閒抄 (2)	財団法人正宗文庫・国文学研究資料館・ノートルダム清心女子大学編『正宗敦夫収集善本叢書 第1期 第三巻 休閒抄 1』1丁裏・p.6、3丁裏・p.10 (武蔵野書院、2011年)
39	長珊聞書	国文研紙焼きE 1867『源氏物語註 一』1丁裏・3丁表
40	林逸抄	岡篤偉久子編『源氏物語古注集成 第23巻 林逸抄』9頁 (おうふう、2012年)
41	浮木	26と同じ
42	紹巴抄 (1)	稲賀敬二校『翻刻 平安文学資料稿 永禄奥書 源氏物語紹巴抄 一、二』p.2～3 (広島平安文学研究会、1976年)

43	紹巴抄 (2)	中野幸一編『源氏物語古注叢刊 第3巻 紹巴抄』p.4 (武蔵野書院、2005年)
44	覚勝院抄	野村精一編『源氏物語聞書：覚勝院抄』1丁裏・p.8 (汲古書院、1989年)
45	孟津抄	野村精一編『源氏物語古注集成 第4巻 孟津抄 上巻』(桜楓社、1980年)
46	萬水一露	伊井春樹編『源氏物語古注集成 第24巻 萬水一露 第一巻』p.5 (武蔵野書院、1988年)
47	山下水	榎本正純編『源氏物語山下水の研究』5頁 (和泉書院、1996年)
48	花屋抄	財団法人正宗文庫、国文学研究資料館、ノートルダム清心女子大学編『正宗敦夫収集善本叢書 花屋抄』(武蔵野書院、2010年)
49	岷江入楚 (1)	中田武司編『源氏物語古注集成 第11巻 岷江入楚第一巻』p.7～8 (桜楓社、1980年)
50	岷江入楚 (2)	室松岩雄編『国文註釈全書第18巻 岷江入楚』p.3～4 (国学院大学出版部、1910年)
51	玉栄集	築瀬一雄編『碧冲洞叢書 第87輯 源語研究資料集』(臨川書店、1995年)
52	源氏抄	26と同じ
53	続源語類字抄	12と同じ
54	源義弁引抄 (1)	島内景二、小林正明、鈴木健一編集『批評集成 源氏物語 第一巻 近世前期篇』p.6 (ゆまに書房、1999年)
55	源義弁引抄 (2)	国文研マイクログル 12-586-1 の7コマ目
56	絵入源氏／源氏目案 (1)	早稲田大学古典籍データベース (へ 12 00020 49) の10コマ目
57	絵入源氏／源氏目案 (2)	早稲田大学古典籍データベース (文庫 30 A0007 56) の8コマ目
58	十帖源氏	国文研初雁文庫蔵『十帖源氏』(請求記号 12-486-1) の4コマ目
59	絵入源氏／源氏目案 (3)	早稲田大学古典籍データベース (文庫 30_a0153 27) の7コマ目
60	源氏鬘鏡	島内景二、小林正明、鈴木健一編集『批評集成 源氏物語 第一巻 近世前期篇』(ゆまに書房、1999年)
61	源氏綱目	伊井春樹編『源氏物語古注集成 第10巻 源氏綱目 付源氏絵詞』p.10 (桜楓社、1984年)
62	おさな源氏 (1)	国文研マイクログル 12-597-1
63	おさな源氏 (2)	国文研マイクログル ナ4-1-1
64	首書源氏物語	国文研マイクログル サ4-95-1の6コマ目、9コマ目
65	湖月抄 (1)	国文研マイクログル サ4-9-1、5～6コマ目
66	湖月抄 (2)	北村季吟著・有川武彦校訂『講談社学術文庫 源氏物語湖月抄 (上) 増注』p.3～4 (講談社、1982年)

(国文学研究資料館 研究員)

【付録】

各国語訳「桐壺」翻訳データ

『源氏物語』（モンゴル語）

『十帖源氏』（英語・ロシア語

・ヒンディー語・ウルドゥー語）

❁ 『十帖源氏』 現代語訳のルール

◆ 現代語訳について

- ・ 海外の人が理解できるように、平易な文で訳すことを旨とする。
- ・ 公立高校入試を控える中学3年生くらいのレベルで現代語訳を作っていく。
- ・ 「です」「ます」体に統一する。
- ・ 主語を明確にする。
- ・ できるだけ理解しやすいように言い換える。
- ・ 文はできるだけ切る。
- ・ 敬語にはこだわらず、忠実でなくともよい。
- ・ 敬語は帝につける程度でよい。
- ・ 「何とか」といった抽象的な語はさける。
- ・ 「方」は、「女性(女)」「男性(男)」「人」などの語に置き換える。
- ・ 「もの心細げ」の「もの」は、心細い「様子」といったように訳出する。
- ・ 訳文は1文が長くないようにする。1文は50字くらいまでの長さが好ましい。100字以内に収めるようにする。
- ・ 「そば」という言葉を用いるときは、平仮名表記。
- ・ 和歌は訳さず、句ごとにスペースをおき、表記通りにする。
- ・ 「女房」は混乱をさけるため、「侍女」などの語に変換する。
- ・ 巻名に括弧はつけない。
- ・ 卒業論文を書くような大学生が手書きで書けないような漢字表記は平仮名にする。
- ・ 誤字や表記上誤解を招きそうな箇所には、翻字に(原文通り)を入れ、現代語訳では直して表記する。和歌の場合、翻字はそのままにし、訳は直して表記する。
(例) 翻字「じゝま(原文通り)」→訳「しゝま(末摘花巻)
- ・ 時制は、基本的に原文に従う。ただし、訳出する際に不都合・影響が出ない場合に限る。

- ・分量・数値は算用数字にする。
- ・「人は皆」といった場合は「人々」に変更する。
- ・その他、漢字表記や言葉の意味など、困った場合は、旺文社の辞書・日本国語大辞典を使用する。
- ・「対」は「館」にする。（「西の対」→「西の館」）
- ・逆接の「が」は極力使用しない。

◆注について

- ・注は原則つけない形とする。
- ・まず現代語訳を作り、訳者から注の依頼を受ける、という形にする。
- ・現在保留。公開時にどうするか検討。
- ・なるべく注がつかないように、名詞は平易なものにたとえる、説明的に訳出するなど、固有名詞を使わない工夫をする。

◆絵について

- ・絵は場面の説明をつける。説明は、5W1H (Who (誰が) What (何を) When (いつ) Where (どこで) Why (どうして) How (どのように)) を書く。
- ・絵のキーワードを現代語訳の中から5つ選び、訳に《》をつける。
- ・絵のキーワードは、ネット公開時に色をつけるか。

◆登場人物呼称

※登場人物名の一部は、本文の漢字表記を通行の表記に改めてある。

(例)「御休所」→「御息所」、「義清」→「良清」

※「頭の中将」「紀伊の守」など、「の」を補う形を基本とする。

※本文の呼称を載せる際は、「統一呼称(本文呼称)」の形とする。

※人物呼称の表記は、新編日本古典文学全集(小学館)に倣う。

◆主な登場人物

- ・巻の冒頭に主な登場人物の紹介を入れる。
- ・5～10人程度の人数を挙げる。

各国語訳『源氏物語』「桐壺」翻訳データ（モンゴル語）、『十帖源氏』「桐壺」翻訳データ（英語・ロシア語・ヒンディー語・ウルドゥー語）は、『源氏物語』『十帖源氏』の順番で次ページより掲載しています。

●モンゴル語訳『源氏物語』『桐壺』データ

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤先生作成）	底本（谷崎潤一郎訳『新々訳源氏物語』）	モンゴル語訳（ナルマンダハさん）	モンゴル語訳（青木さん）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いづれの御時〜」（0001／五①／一七）	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	何という帝の御代のことでしたか、女御や更衣が大勢伺候していました中に、たいして重い身分ではなくて、誰よりも時めいている方がありました。最初から自分こそはと思いついておん方々は、心外なことに思って蔑んだり嫉んだりします。	何という帝の御代のことでしたか、女御や更衣が大勢伺候していました中に、たいして重い身分ではなくて、誰よりも時めいている方がありました。最初から自分こそはと思いついておん方々は、心外なことに思って蔑んだり嫉んだりします。その人と同じくらいの身分、またはそれより低い地位の更衣たちは、まして気が気ではありません。	いつの時代の皇位の人の出来事であつたらうか、大小の后たちの行きかう天皇（以下「天皇」の定訳エゼン・ハーンは「天皇」と訳し、ハーンは皇帝と訳す）の宮殿で高位の出自ではないが皇位の人の気持ちを大いにひきつけ、愛と庇護をおしまず受けた女中の女（プスグイ、女、娘の意味、女性性は昔帯をしなかったことから（プス（帯）がウグイ（無い））がいた。天皇の寵愛は私にこそあるべきと、自身考える后たちは壊れるほど立腹し、どうしてこうなのかわけが分からないと、哀れな（フルヒー「哀れな／愛らしい」を意味する形容詞、感嘆詞としてもよく使う）女中に憎しみを向け、嫉妬によって隠し、平安な日を送られなかったという。皇宮ではよい父、兄弟たちの助力によって公務の終わる女中たち、それを望む領民や使用人たちにいたるまで気持ちを抑えることができずにいた。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031／五④／一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかすあはれなるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。	そんなことから、朝夕の宮仕えにつけても、朋輩方の感情を一途に害したり、恨みを買ったりしましたのが積り積つたせいでしょうか、ひどく病身になって行って、何となく心細そうに、ともすると里へ退って暮すようになりましたが、帝はいよいよたまらなくいとしものに思召して、人の非難をもお構いにならず、世の語り草にもなりそうな扱いをなさいます。公卿や殿上人なども不愛想に顔を背けるといふ風で、まことに見る眼も眩い御寵愛なのです。世間でも追い追い苦々しく思い、気に病み出して、	あの女中は皇居のルールで朝から夕方まで一生懸命に働いているにもかかわらず、側室たちや女性たちの悪魔の気持がもっと増え、羨ましがる気持が溢れ、その悪魔に襲われるかのように病気になる、体が弱まって、実家に帰って日々を送るようになった。王様はあの女性を可愛そうに思い、愛情がもっと溢れるばかりで、人々の嫉妬を全然気にしなかった。王様に働く者は皆この出来事を見て見えてないふりしているが、これは見た人は目を落とすほど愛情の溢れた恋愛である。	その女中の女は宮殿の仕事で朝から夕べまで《アレキス腫をかかめることもなく》働き続けたのに、后たちや女たちの黒く悪い心は増し続け、嫉妬は流れ出続け、黒い毒を頭からかぶるとはこのことか、まもなく病を得て、体は衰弱し続け実家で日が経過するようになった。天皇は哀れな女を大変憐れみ、愛する気持ちはさらに高まる他なく、人々の《黒い舌と口（悪口）》をも全く気にしなかった。天皇の宮殿の勤め人たちはこの成り行きを見ながらも見ない振りをして、これは見た人が正視できないほどの真実の愛であった。
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜（0073／五⑧／一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪かりにけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	唐土でもこういうことから世が乱れ、不吉な事件が起つたものですなどと取り沙汰をし、楊貴妃の例なども引合いに出しかねないようになって行きますので、更衣はひとしお辛いことが多いのですけれども、有難いおん情の世に類もなく深いのを頼みに存じ上げながら、御殿勤めをしておられます。	「皇居のこのような出来事によってタン王国の政治が擦れ合い、大勢の人が混乱を起こしたことがあった」と人々はお互いに密かに噂し、ゲンソウ女帝の心を限りなく奪った代価としてアンロクザンの蜂起を起こす原因となったタン国のヨウキ皇后の例をも語り合うようになったので、あの女中はいる場所もなく自分の悲しみが体よりも大きく益々苦しくなっていく。ただ、王様の悲しい恋愛は何よりも深いことに期待し、皇居の仕事に励んでいた。	「宮殿のこのような事件から発し、唐国で皇帝が政に軋みを生じさせ遍く生き物の混乱が相次いで起こったのです」と人々はひそひそ語り合い、ゲンソウ皇帝(Syuan'tszun(玄宗)という漢語からロシア語経由で入った歴史用語もあるが、日本語の音を直接写している)の愛情を計り知れないほど大きく惹きつけたためにアンロクザン(これもモンゴル国の歴史用語ではAn' lushman)の大蜂起を引き起こすにいたった唐国のヨーキ妃の例まで語るようになったため、その女中の女は居場所も見つけられず、起こった心労は体の重荷になりさらに重くなっていたのだった。ただ天皇の示した愛情を何よりも何よりも、より深く深遠に頼みに思い、宮廷の仕事をこなし続けていた。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」（0103／五⑩／一八）	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかし後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	父の大納言は亡くなりましたけれども、母北の方が、昔気質の人で、由緒ある家柄の生れなので、両親のある方々が現に評判もよく派手に暮しているのを見ると、娘もそれに負けないようにと、どのような儀式の折にも気をつけて上げておられました。これというしっかりした後見がないのですから、何かの時にはやはり頼りないらしく、心細そうにしておられるのです。	女中の父親ダイナゴンは幼い頃に亡くなったが、彼女の母親は名門の家に生まれ、知識のある人だったから両親のいる、わがままで幸せな側室たちの前に自分の娘を物不足にしない心がけ、皇居の様々な儀式に参加するたびに他の側室や女中に負けないように洋服を準備し、他の面でも十分に気を使っていた。それでも前後ろから応援する人がいないため何か問題が起きた時に任せられる人がいないことに母親が心配していた。	女中の女の父はダイナゴンは小さい時に逝去したが、彼女の母は古代の史料を守る家に生まれた学問の素養のある人なので、肝臓の全き、権力のある后たちの前で、自分の娘を物質的に不足させないという気持ちを置き、帝の宮殿のあらゆる儀式に参加するときに、他の后たち、女中より足りないものがないように衣服を用意し、あらゆる他の必要なものをまで完璧に準備し、注意を何も惜しまず向けていたのだった。とはいっても、どんなに後ろから前から支えてくれる人がいないとき、母の心はお疲れになるのだった。

<p>5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する 「前の世にも～」(0136／六①／一八)</p>	<p>前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづきこゆれど、この御句ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。</p>	<p>そのうちに、前の世からのおん契が深かったのでしょうか、またとなく清らかな、玉のような男御子さえお生れになりました。帝は早くお会いになりたくて、待ちきれなくおなりなされて、急いで呼び寄せて御覧になりますと、珍しい御器量のお見なのです。第一の御子は右大臣の女御のおん腹ですから、一般の信望が重く、疑いもない世継の君として人々も大切に存じ上げていますけれども、今度の御子のお顔だちの麗しさには、及ぶべくもないところから、第一の御子の方は一通りの表向きの御慈愛に止まって、この御子の方を御秘蔵児として限りなく御寵愛になります。</p>	<p>前世に運命を丈夫に結んだのか、間もなく王様と女中の中にこの世に始どない、宝物のような美しい男の子が生まれました。 王様が皇子を早く見たくて、待ち待って、急いで皇居に呼び寄せたのを見れば、油ついている手で触れないぐらい可愛い顔している男の子だった。 王様の長男を権力のある右大臣の娘コキデン 正室は何年か前に生んだが叔父の側から良く世話している上で、将来、王様の跡継ぎとなり、トウゲー につく運命の人と長男の皇子を人々が尊敬してきたのである。しかし、新しく生まれた小さな皇子の家を負う光を照らす美しさを彼と比較したい。 王様は正式な長男の皇子をととても可愛がっていたが、あの小さな皇子を自分の胸の子としてかぎりなく愛していた。</p>	<p>前世に運命を固く結ばれたものだったのだろうか。まもなく天皇と女中の二人の間からこの世に稀なる、宝珠のような美しい息子が生まれたという。 天皇は皇太子をとにかく早く見たいと、待ち、急ぎ、宮殿に呼んで来させ見ると、油のついた手では持てないほどはつきりとかわいい顔の容貌の男の子であった。 天皇の第1子である皇太子を権力の全き右の大臣の娘コキデン 妃が何年も前に生んで、母方の援助をよく受けた上に、のちのち天皇の家柄を継承し、トウゲー に任じられる定め的身分という第1皇太子を人々は大変尊敬してきたのであった。とはいっても新しく誕生したとても小さな皇太子の家はいつぱいの光に満ちた見た目の完璧な様相をこれと比べるべくもなかった。 天皇の公式な第1皇太子を大変かわいがっていたが、この小さな皇太子を自分の《胸の息子》と限りなく愛していたのだった。</p>
<p>6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く 「はじめより～」(0184／六⑦／一九)</p>	<p>はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まづ参上させたまふ、ある時には大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のあたまふべきなめり、と一の御子の女御はおぼし疑へり。</p>	<p>母君の更衣も、もともと普通の上宮仕えをするような御身分ではないでした。上臈として誰からも重く扱われていたのですが、とかく今までは、帝がむやみにお纏わりなさるあまり、御遊の折々や、何事によらず面白いおん催しがあつたりしますと、まずその人をお召しになる、時には朝おそくまでお寝みになっていらっして（ママ）、その日もそのままとめて置かれるという風に、無理にお側に引き寄せてばかりいらっしやいましたので、自然軽々しく見える嫌いもありましたが、この御子がお生れになってからは、すっかり為され方をお改めになりましたので、悪くすると、この御子が春宮に立たれるかもしれないと、一の御子の女御は疑念を抱いていらっしやいます。</p>	<p>生んで母親になる女中は、本当は普通の女中のように下級の人でもなかった。名門の出身として皆に尊敬された、上品な顔立を持つ美しい女性だった。 王様はコオイ に優しい、自分から一瞬も離したくない、宴会、祭り、儀式などがある時一番に彼女を呼び寄せていた。時々彼らは一日中ベッドの中に一緒にいて、何回も泊まることもある。 こうして昼も夜も離れなくなってことに、女中のくせにコイツと嫉妬する人は自然に出てくる。 小さな皇子が生まれたから愛人の女中に天皇は益々愛情を持ち、愛するようになった。もしかして、この小さな子を跡継ぎのトウゲーにつかさせる気かと長男皇子の母親が疑うようになった。</p>	<p>その生んだ母である女中の女は、基本的には普通の女中と同じく下の位階の人でもまた、なかった。名門の血統をもつと他人に尊敬された、高貴な生まれを完璧に備わった外見の美しい女性であったのだった。 天皇はコーク をとても気に入り、自分から一万分の一秒も遠ざけるのを嫌がり、宴会、儀式のあるたびにまず彼女を呼んでいた。 時々彼らは朝を迎え寝床に一緒にいて、何日も何日も続けて過ごすこともあった。 こうして、夜も昼も別れずにいたので、女中の方を、この悪いやつめと悪口を言われ斜めに見る者も出てきたのだった。 小さな皇太子が生まれた後、愛する女中を天皇は更に近くに思って、更に強く愛するようになった。不適當なら、この小さな息子に跡を継がせ、トウゲーに任じることはない、と第1皇太子の母妃は更に完全に疑いを持つようになった。</p>
<p>7 帝は弘徽殿女御を気遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦労は増す 「人より先に～」(0248／六⑩／一九)</p>	<p>人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。</p>	<p>何をいうにも、一番先に入内なされて、ほかの方々よりは大切にされておられますし、御子たちなどもいらっしやいますので、このお方のお恨みことばかりは、帝もうるさく、面倒に思っておいでなでした。 それにつけても忝ない思召しを頼みの綱にしておられる更衣は、自分のことを悪様に言い、越度を捜し出そうとする人たちが多いの、わが身はかよわく、力ない境涯なので、かえっていろいろな気苦労をされるのです。</p>	<p>王様はコキデン正室を最初の妻として尊敬し、また多くの子供を生んだのでこの正室の気持を無視することができなくて、彼女にかなり怖がっている。 王様の愛情にだけ期待して自分を任せている女中は小さなことで自分を責め、あら捜しする大勢の人々の中に生活し、精神的に充分苦しんでいた。 元々体が弱い上で、気持ち的な苦しみを充分味わっているから日々体が弱くなり、いつまで生きているかと心配する。王様の限りのない愛情が女性に苦難となり、体と気持の苦しみにには終りがなかった。</p>	<p>天皇はコキデン大妃をわが最初の奥方として、尊重していて、また沢山の男子を産ませたためこの妃の気持ちを見ることができないので、彼女に対してはかなりびくびくしている。 天皇の愛情を頼みに身をゆだねている女中の女は取るに足らない美点によって努めるか、足りないところを探しあらゆる努力をする彼女が、多くの人の中で暮らすのに心労は沢山見られた。 そもそも病弱な、その上心の万の苦勞を味わうため、日ごとに体はご病氣になり、いつまで命あるままいくか、と自ら苦しむ。天皇の過ぎたるほど大きな愛、かわいがりは女に害、心配となり、体と心の苦悩は絶える理由はそもそもない。</p>

<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」(0288 / 七③ / 二〇)</p>	<p>御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時もあり。</p>	<p>更衣のお局は桐壺なのです。ですから、帝がお通いになりますには、あまたの方々の局々の前をお通りにならなければなりません。それがこのようにしきりなしでは、朋輩方がいまいまして思うのも、まことにもっとも申さねばなりません。また更衣がお上りになりますにも、あまり度重なる折々には、打橋だの、渡殿だの、ここかしこの通り道に、けしからぬものが仕掛けてあって、送り迎えをする人々の着物の裾が台なしになって、始末に悪いことなどもあります。また或る時は、どうしても通らねばならない馬道の戸を、向うとこつちとでしめし合わせて閉じてしまい、まごつかせたり恥をかかせたりすることもしばしばです。</p>	<p>愛人の部屋はキリツボにあった。キリツボ宮殿は王様がいつもいるセイリョウ 宮殿から一番遠い。王様はキリツボ宮殿に上がるとしたらあたくさん側室の宮殿の前を通るしかない。いつもこんな風に行くので彼に無視された側室たちは嫉妬しているのは当たり前のことである。また、王様はコオイをセイリョウデン宮殿に招くのが増えるたびに側室たちは歩道やトンネルに下水などを垂らし、言うまでもなく汚い性格を出し、向かい人や送り人などの服を我慢できないぐらい汚すなど頭にも浮かばない憎らしく危害を加えていた。たまには必ず通るしかないトンネルのドアを両側から閉め、可愛そうな女性を随行員と一緒に拘禁するなどいじめて、立っても座ってもいられないぐらいにし、それを見て満足するのはたった一部である。</p>	<p>愛する女の宮殿はキリツボにあった。キリツボ宮殿は天皇のいつも住んでいるセイリョウ宮殿からは最も遠くにあった。天皇はキリツボ宮殿に行こうとすると、この多くの妃たちの宮殿の前あたりに出るほかない。いつもこうして行っているのが彼が見ても眼中に入らなかった妃たちは黒い毒の心を生じ嫉妬しているのはもちろんのことであった。また天皇はコオイをセイリョウデン宮殿に招くことが増えるごとに妃たちは歩道、廊下のここあそこに溜り水と共にこぼし、そうだと示さないくらい勝手に乱暴し、迎えたお付きの者の衣服までも我慢するしかないほど汚れていることなどが、気にせず、いやらしいほど汚いまま壊していた。時々、必ず強引に入るしかない廊下の扉を両側から塞いで、哀れな女をお付きの者と共に閉じ込めて笑いものにし、いる場所座る場所をなくして、方法無くしているのを見て、喜びを満たすだけだった。</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」(0344 / 七⑨ / 二〇)</p>	<p>ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはす。その恨みましてやらむ方なし。</p>	<p>そんな具合に、事に触れて数々の苦勞が増すばかりですから、ひどく気が滅入って、ふさぎ込んでいますと、それをなおさら不憫に思われて、後涼殿に前から住んでいた或る更衣の部屋を、別のところへお移しになって、そこを上局として賜りました。追い出された人の身になってみれば、その恨みはまして言いうようありません。</p>	<p>こうして数え切れない苦難は日々増えていたから可愛そうな女性益々苦しくなり落ち込んで、体調が弱まっていった。それを見て王様はただただ可愛そうに思うしかなかった。仕方がなくなった王様はコオリョウ 宮殿にいたある女中を他のところへ移す命令を出し、その代わりに愛する女をセイリョウ宮殿に招かれた時にそこにいさせることにした。追い出された女中はどんなに怒って、嫉妬していたかは想像しがたい。</p>	<p>このように眼中に入れる(数に入れる)のをやめるしかない苦悩は日に日に増し続けていたので、哀れな女は更に悩み苦しみ続けて心が折れ、体は弱り続けていた。彼女を見て天皇はいたずらに同情するのと同時に哀れに思い過ぎす。方法のなくなった天皇はコオリョウ 宮殿に住んでいたある女中を他のあちに移動させる命令を下し、代わりに愛する女をセイリョウ宮殿に招いた時にそこに留まらせ、いるように2つ向こうにして決めた。追い出された女中はどんなに大いに呪い、毒と黒が戻っていたのを想像するものつらいであることだ。</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378 / 七⑩ / 二一)</p>	<p>この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもおはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。</p>	<p>この御子が三つになり給うた年、御袴着のことがありましたが、第一の御子の時に劣らず、内蔵寮、納殿のものを悉く用いて、立派な式をお挙げになりました。それにつけても世間の非難が多いのですが、この御子のだんだん御成長になるお顔だちや性質などは、世に並びなく珍しいものに思われますので、そうそう妬みようもありません。ものの分った人などは、「こういうお方も世に生れていらっしやることあるんですね」と、あきれるまでに眼を圓くして驚いています。</p>	<p>あの小さな皇子を3歳になったときオンハカマガギ 式を行った。前、行った長男の式に負けることなく王国の資産から宝物や服などから一番きれいのを選んで小さな皇子に十分与えて式を行った。あちこちに悪口する人々が多いが小さな皇子は大きくなればなるほど顔も体もこれ以上はないと言うほど他を超えるようになったからあの側室たちまでこの子に羨ましがることができなかった。それどころか、複雑ことをも理解するようになった人々は人間の世界にも珍しいこんな人が我々の時代に生まれてきたかとびっくりしじっとしている。</p>	<p>この小さな王子が3歳になったときにオンハカマガギ の儀式を行った。前にやっておいた第一皇太子の儀式よりも不足するものないように、蔵の必要なもの、貴重品、衣装の綺麗で美しいものから選び、小さな皇太子に惜しまず微笑ませ、儀式を完璧に行ったのだった。(キリツボ2) こそあそこあらゆる悪口を言う人が多くくらくらいでも、小さな皇太子が育って大きくなるにつけ、顔、姿、立ち振る舞いは、彼に勝るものなしといたいぐらいと、他人から言われるようになったので、例の妃たちに至るまで、この男の子を憎み嫌うことができなないのであった。もっというと、あらゆることを分別し区別するようになった人々までも、人のこの世に稀なる外観のこのような人が我々の時代に生まれるとはこのことか、とぼーっと考えてしまうのだった。</p>

<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439 / 八② / 二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」 とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりに、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>その年の夏、御息所へは、何となく気分がすぐれないので里へ退ろうとされましたが、どうしても暇をお遣りになりません。この頃はいつも病気がちでおられますから、それを当りまえのようにお思いなされて、「もう少しこのままで養生をしてごらん」とばかりおっしゃるのですが、日に日に容態が重くなって、ほんの五六日のあいだに、たいそう衰えてしまいましたので、母君が泣く泣くお願い申し上げて、退らせてお上げになるのです。こんな場合にも、人々がどういふ恥をかかせるかもしれないと懸念して、御子をお留め申し上げて、自分だけこっそりと宮中を出て行かれます。</p>	<p>あの年の夏、女中はわけの分からない精神的な病気にもっと負われ、実家に帰って治療してもらいたいと王様に頼んだが彼女に自由を与えなかった。 何年間、体調が悪かったので王様はそれに慣れて“もうちょっと見てみた方がいいじゃないの”と言っていた。この間に病気がもっと悪化し、たった何日間の間に急激に弱ってきた。 女性の母親が涙を流して王様に跪いて頼んで、やっと実家に帰る許可を得た。 こうして帰る時も我々に色々な呪いをかけないか、子供にその呪いがかかってしまうかもしれないとして女性は小さな皇子を皇居に残して、自分ひとりで密かに出て行った。</p>	<p>その年の夏、女中の女は理由の見つからない心の病にさらに完全につかまり（おかされ）、実家へ行って、体を治したいと、天皇に懇願したが、彼女を自由にはしなかった。 何年も彼女の体はこうにご病気になっていたために、天皇はそれに慣れてしまい、「子供をずっとみていたらどうなんだ？」とおっしゃっていた。この間に、彼女の病気は昼に夜にもっと重くなり続けて、何日か過ぎる間に非常に大変弱っていった。 女の母は泣いて過ぎし、天皇に跪いて懇願し、どうか生まれた家に連れ帰るよう許しを請うた。 こうしていても、私たちにあらゆるのしりや呪いをするものもいるだろうか、わが息子にそれがふりかからないだろうか、と女は心配して、小さな皇太子を天皇の宮殿に残したまま、自分ひとり静かに出かけた。</p>
<p>12 帝は絶え入らばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧するに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし惑はる。</p>	<p>何事にも限りがありますから、帝もそうはお止めになるわけには行かず、見送ってやることさえできぬ心もとなさを、言いようもなくお思いになります。 平素はたいそうつややかで、美しい人なのが、ひどく面壁れがして、しみじみと物思いに沈みながら、言葉に出してはよう申し上げず、あるかなきかに消え入りにしているのを御覧になりますと、来し方のことも行く末のことも分らなくおなりなされ、いろいろのことを泣く泣くお約束なさるのですが、更衣はお答え申し上げることもできません。眠つきなどもたいそう物憂げに、一層なよなよと、夢うつつの体で横になっておられますので、どうしたらいいのかと、途方にくれておいでになります。</p>	<p>やめさせたかったけれど皇居のルールには制限があった。これ以上拘禁することが出来ない、また高位の王様の名譽を考えて思ったように見送ることができなかったことに王様の心が痛み、とても悲しんでいた。 女中は上品な美しい人だったが、痩せやつれていた。王様から別れていることが悲しかったが言葉に表すことが出来なく、ただ心の中で色々考え込んでいた。 これを見たら王様に過去の出来事も将来の道も真っ黒のようになり、ただ愛する女に涙を流して愛の誓いのする以上は出来ない。 女性もそれに返事出来ない。居眠りしているのも何か弱くて霞んで見えるし、意識があるのかどうかを分かりにくくなっていた。前よりもっと悪化し寝込むようになった。 王様が心が痛み、何をすればいいのか分からず心配していた。</p>	<p>引き止めたかったが、宮殿のしきたりの制限があった。もっと留まらせる法はなかったし、高貴な身分の天皇の威厳名譽などを考えると、残してやることができずに、天皇の心は痛み、大変悲しみ苦しんだ。 女中の女は美しく生まれた完全なる素晴らしい人であったが、やつれ果て目が落ち窪んでしまった。天皇と別れるとき大変悲しんだが、言葉でそれを表すことがどうやってできるだろうか、ただ心の中に全て思っただけなんだ。 これを見るにつけ、天皇にとって過ぎたことではあっても、これからの道のりが真っ暗闇のようで、ただ愛する女に泣き続け愛を言葉で誓う他なくなっていた。 女も彼に返事をするができなかった。ぼんやりしているのまで、一つ残らず、目の前がぼんやりして、賢いのも愚かなのを区別するのも困難になった。前よりもずっと弱って寝込んでしまったという。 天皇は心を痛め、何をしてもよいか分からず考えていた。</p>

<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537 / 八⑩ / 二二)</p>	<p>輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。 「限りあらむ道にも、後れ先たじ、と契らせたまひけるを、さりともち捨てては、え行きやらじ」 とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、 限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり いとかく思ひたまへましかば と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、 「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」 と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>輦車の宣旨などを仰せ出されましたけれども、またお部屋におはいらになってその人の姿を御覧になれば、何としても出してやる気におなりになれません。 「死出の旅路にももろともという約束をしたものを、まさか人を打ち捨てて行くことはできないであろうに」とおっしゃいますので、女もたいそう悲しく存じ上げて、 「限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり こうなることと前から分っておりましたら」と、息も絶え絶えになりながら、まだ申し上げたいことがありそうにしているのですが、ひどく苦しげに、大儀そうな様子なので、いっそのままここに置いて、始終を見とどけてやりたいものよと、お考えになっていらっしゃるかと、 「里の方で今日から御祈禱を始めることになっていまして、相当の験者たちが御用を承っておりますが、ちょうど今夜からなので」と、側から御催促申し上げますので、是非ないことと思ひながら、退らせておやりになります。</p>	<p>女中に特別に人力車を用意させ、外へ散歩させるが、また寝込むから彼女から離れることが出来なかった。 戻れない旅にも一緒にと誓いの言葉を言ったじゃないこの体をたった独りにして永遠の去ってしまうのか と涙を流す王様を女性が可愛そうに思い もし、死は私を追いかけていなかったら流れ出す運命に もっと長生きしたい たった独りで去って行くよ私 と言った。 “こうすることを早めに分かっていたら”と息切れしつつ言葉をよっと出して、また何かを言いたかったが力が弱まって出来なかった。 王様はどうしたらいいのか分からなくなり、そのまま隣にいて最後までまぶたを閉じないで見ていようと思った。しかし、皇居の大臣らは“今日から始まるべきゴキドウの時間になって、高位の遺族の皆が早めに来て待っています。祈りの儀式は今夜始まるべきである”と告げた。</p>	<p>女中の女に特別に手と籠に乗せる（救いの手を差し伸べる） 命命を下し太陽と風のもとに出したにもかかわらず、寝床に戻っていったので、彼女から離れることができなかった。 戻ってこない状況も一緒に、と返ってこない誓いをしたのではないのかこの体をたった一人で残し永遠に行ってくれるのではないのですか（4行ともEで頭韻）と泣く天皇を女は哀れに思い 死がもし私を追い落とさずに置いてくれたなら流れゆく運命の力で更にもっと長生きできたらと思うには今は少し遅すぎた若くただ一人で行く私（2行ずつ頭韻） と歌った。 「こうすることを古代から知っていたなら」と息切れ切れに言葉を言い、もう一度何か言いたそうだったが、できずに衰弱死したという。 天皇はどうすればよいか知り、元通りそばで庇護下に置き、最後までまたたきせず見ていようと思った。しかし宮中の大臣たちは「今日からもうゴキドウの時期になり、高僧たちはとっくに来て待っています。祈禱の儀礼を今夜始めなければなりません」と知らせた。</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)</p>	<p>御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、 「夜中うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心惑ひ、何事もおぼしめしわかれず、籠りおはします。</p>	<p>お胸の中はいっぱい、その夜はまんじりともなさらず、明かしかねていらっしゃるかと。お遣わしになった使の人がまだ戻って来る刻限でもないのに、気が揉めてならないとおっしゃりつけていらっしゃいましたが、 「夜中過ぎ頃にお亡くなりなされた」と里の人たちが泣き騒いでいるのを見て、使の人がたいそうがっかりして帰って来ました。それを聞き召すお心のうちはどんなでしょうか、今は何事も分らなくおなりなされて、引き籠っておいでになります。</p>	<p>王様は心が痛んだままに行くしかなかった。 王様はその夜悲しい、苦しい気持ちでいっぱい気持が落ち着かないまま寝ることが出来ずに朝を向かえた。女性の実家に行かせた使者がまだ戻って来る時間がなくなってなかったが王様が心配だった。 深夜が過ぎる頃に“亡くなった”と人々が混乱しているのを聞いて使者は慌てて皇居に戻ってきた。これ聞いた王様が誰よりも悲しんで、何でも忘れてボーッと、皇居から頭も出さずに追悼していた。</p>	<p>天皇は心労を抱えたままにする他なくなった。 天皇はその晩、悲しみと苦しみで一杯になり心はかき乱され、何もできず、夜明けを迎えた。女の親族のところへ行かせた使いが戻ってくる時間になってもいないのに、天皇の心は動揺し、大変心配した。 真夜中を過ぎる頃、「故人となった」と人々がお互い泣き騒いでいるのを見て、使いは大変焦り、天皇の宮殿に大急ぎで戻ってきた。これ聞いた天皇は 誰よりもずっと悲しみ、全て憂鬱に思え、宮殿から代表も送らずじっと嘆き悲しんでいたという。</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事があらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>それでも御子はそのままにお置きなされて、お顔を御覧になりたいのですが、かような折に内裏にとどまっていられる例がないので、これも里方へ御退出になります。待つ人々が泣き惑うたり、帝が絶え間なく涙を流していらっしゃるのを、何事が起ったともお思いにならず、不思議そうに見廻しておいでになるのですが、普通にありふれた親子の別れでも悲しいものなのですから、まして今の場合の哀れさは、言ってみてもしよがありません。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦られる「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りましたまひて、愛宕といふところに、いかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>ものには限りがありますから、普通の作法に従って葬ってお上げになるにつけても、母北の方は、自分も同じ煙になって空へ立ち昇ってしまいたいと言って泣きこがれ、おん送りの女房の車を慕うてお乗りになって、愛宕という所で、厳めしい儀式を執り行っている現場へお着きになりましたが、その時の心地はどんなでしたらうか。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)</p>	<p>「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」と、さかしのたまひつれど車よりも落ちぬべうまるびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。</p>	<p>「空しきおん骸を見ながらも、やっぱり生きていらっしやるような気がしてなりませんから、灰におなりになるところを拝みましたら、もうこの世にいない人だと、ふつり諦めがつくであろうと存じまして」と、けなげなことを言っておられたのですけれども、車から転び落ちんばかりに取り乱されるので、さればこそ、こうなることと思っていたのにと、人々は手を焼くのでした。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑥ / 二五)</p>	<p>内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひとぎざみ）の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。</p>	<p>内裏からは御使がありました。三位の位をお贈りになる由で、勅使が見えてその宣命を読み上げるのが、また悲しみを誘います。女御と呼ばれるようにもさせずにしたことを、この上もなく残念に思召されて、位を今一階だけでもと、昇せてお上げになるのでした。それにつけてもまたお憎みになる人々が多いのです。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑩ / 二五)</p>	<p>もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。</p>	<p>さすがに物事を弁えている方々は、姿かたちなどがめでたかったこと、氣立てが素直で、角が取れていて、憎めないところがあったことなどを、今こそ思い出すのです。体裁が悪いほどの御寵愛であったからこそ、そっけなく嫉んだりしたものの、そういつても人柄がやさしくて、心に情愛があったことを、お上付きの女官なども語り合うて恋慕うているのでした。ほんに、「なくてぞ人」とは、こういう折の心持でありましょう。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)</p>	<p>はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。</p>	<p>はかなく月日が過ぎて行きましたが、後々の御法事などにも、お里方へ御使を立ててねんごろにおとぶらいになります。ほど経るままに、やるせなく悲しくおなりなされて、おん方々の宿直なども、絶えて仰せつけられず、ただ涙に濡れて明かし暮していらっしやいますので、その御様子を見る人々までが湿っぽい秋を味わうのでした。「でも、まあ、何という御寵愛であらう、亡きあとまでも人の胸をすうとおさせにならないとは」と、弘徽殿などはいまだに氣持を和らげていらっしやいません。</p>	<p>愛する愛人を亡くした時から王様はそれと言うもない悲しみに負われ、側室や女中の誰でもを無視し、朝も晩も涙であふれていたからその秋に見た誰もが心が痛む。“亡くなった後も人の心を枯れさせている何と限りのない愛情だ”と右大臣の娘コキデン正室が嫉妬をやめようとしなない。</p>	<p>(キリツボ3) 愛する人を失った時から、天皇は悲しみに包まれ、妃たち、女中たちの誰とも共にせず、朝な夕な目に一杯涙をため座っているようになったので、その秋になっても、誰もが心を痛めた。「死んだ後まで人の内面を干からびさせる、なんと過ぎたる愛だろるか」と右大臣の娘であるコキデン妃は歯を食いしばり、憎悪やねたみの言葉を概して出さなかった。</p>
<p>21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に鞍負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)</p>	<p>一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、鞍負（ゆげい）の命婦といふを遣はす。</p>	<p>帝は一宮を御覧遊ばすにつけても、若宮のお可愛らしさばかりをお思い出しになって、心やすい女房やおん乳母などをお遣わしになって、様子をお尋ねになります。野分の風が吹いて、にわかに肌寒くなった夕暮の頃、常にも増して亡き人の上をお偲び遊ばすことが多くて、鞍負の命婦というのをお遣わしになります。</p>	<p>王様が女中と全く似ている小さな皇子に会いたくて、いつも、近くにいる人々や親戚の人々に消息を得るために亡くなった女中の実家に行かせていた。草の頭が揺れる、ある寒い夜、愛人を思い出すのはあふれていたからユゲイ・ミヨフと言うおばを使者に行かせて、</p>	<p>天皇は女中の女が病気の時生まれた皇太子が大変いとしく思え、近しい仲の人々、姻戚関係にある何人かの婦人を代わる代わる遣わして、消息を聞くために個人の親戚に常に行かせる。草の頭がそよぎ、寒さの冷えたある夜、愛する女を想い過ぎたために、ユゲイ・ミヨフという婦人を使いとして行かせて、</p>
<p>22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六)</p>	<p>夕月夜のをかききほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるもの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし氣配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。</p>	<p>夕月夜の面白い宵のほどに出しておやりになりまして、御自分はそのまま物思いに耽っていらっしやいます。あゝ、ほんとうにこういう折には管絃の遊びなどを催したものであったのにと、そんな御追憶が浮かぶにつれて、琴などをも趣深く掻き鳴らし、ふと口ずさむ歌のことばにも、何か常人の及ばぬものを持っていたその人の面影の、つとおん身に添うて離れぬような氣持がなされるのも、やはり「闇のうつ」に劣る淡い幻なのでした。</p>	<p>こんな満月の夜、音楽が響くパーティーがあって、愛する彼女が皆の前に音楽を素晴らしく引いて、勇ましい詩は本当に贅沢だったと王様は過去を思い出してため息していた。</p>	<p>このようなある満月の美しくある夜に、音楽の宴を開き、愛する彼の目の上で、驚くほど美しく楽器を奏で、旋律をつけて紡いだ詩は、しようのないほど甘美であったことだなあ、と天皇は過ぎたことを思い出し、ぼんやり座っていた。</p>

<p>23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かしこ〜」(0907 / 一一⑫ / 二七)</p>	<p>命婦（みょうぶ）かしこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつろひたてて、めやすきほどにて過くしたまへる、闇にくれて臥しづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎（やへむぐら）にもさはらずさし入りたる。</p>	<p>命婦は御息所のお里に行き着いて、車を門のうちに引き入れるより早く、あたりのけはいのものあわれなのに打たれます。この家のあるじの母北の方は、やもめぐらしをしていますけれども、御息所一人を守り立てて行くためにここかしこへ手入れをして、どうやら見苦しくない程度に過しておられたのが、子故の闇にかきくれて泣き沈んでいましたうちに、いつしか八重葎にも遮られずにさし込んでいます。</p>	<p>ユウゲイ・ミヨフさん亡くなった女中の実家に着いた。</p>	<p>ユウゲイ・ミヨフ夫人は故人の家に行ったのだった。</p>
<p>24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937 / 一二② / 二七)</p>	<p>南面（みなみおもて）に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。 「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。</p>	<p>車を母屋の南面に請じ入れて、命婦をお下し申した母君は、とみにはものも言われません。「今まで生き残っておりますことがたいそう辛うございますのに、こういう御使が蓬の露を押し分けてお越し下されましたにつけても、お恥かしゅう存ぜられまして」と言って、いかにも恠えられないようにお泣きになります。「せんだって典侍が参られました折、『まのあたりお目にかかっておりますと、何ともお傷わしく、心も肝も消え入るように覚えまして』と奏上しておられましたが、なるほど、私のようなもの分らぬ人間でも、たまらない心地がいたします」と、命婦はそう言って、少し気を落ち着けてから、仰せ言をお伝え申し上げるのです。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す「『しばしは〜』」(0987 / 一二⑦ / 二八)</p>	<p>『『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはずべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過くしたまふも、心苦しうおぼざるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつらむと、おぼしつたまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる』 とて御文たてまつる。</p>	<p>『あの当座はひたすら夢路を辿るようであつたけれども、ようよう心が鎮まって来ると、夢と思つたのが覚めるときもない真実と分つて、堪えがたい気がするのですが、どうしたら慰む術があるかを語り合う人もないにつけては、内々で内裏へ来て下さらぬか。若宮が、涙にとざされた家の中で、さも頼りなく過していることなども、心苦しう思われるから、早う連れて参られるように』などと、はかばかしゅうも仰せきらず、涙にむせ返り給いながら、人が見たらばあまり弱々しいと思はせぬかと、そんな御遠慮をもしていらっしやるらしい御気色のもつたいなさに、皆までもお聞き申し上げないような始末で出て参つたのでございます』 とて、おん文を差し上げます。</p>	<p>そして：“あの時からいつも夢ではないかと思いつつきた。でも今は落ち着いて、本当に訪れてきた悲しみ苦しみを感じている。こんな時にどうすれば良いか相談する人も私にいない。人目をしのででも皇居に上がればどうだあなた。</p>	<p>そうして、「あの時から後、時間がたち夢ではないのだなあ、と物思いを続けて今に至りました。でも今、とても静かになって、どうしようもなくなってきた嘆き悲しみを感じています。こんな時にどうするべきかを適切にアドバイスする人がうちにはいません。人の目を答えるようにもなった宮殿に来ていただければ、どうでしょうか。</p>
<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった「『目も見え〜』」(1043 / 一二⑬ / 二八)</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさを、今はなほ昔の形見になずらへてものしたまへ」 など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ とあれど、え見たまひはず。</p>	<p>「悲しさに眼も見えませぬが、忝ない仰せ言を光として読ませていただきます」と言って、母君はそれをお読みになります。「時がたてば少しは紛れることもあろうかと思ひながら暮しているのに、月日がたつほどいよいよ忍びがたくなるのは何としたことか。幼い人がどうしているかと案じながら、一緒に育てて行けなくなった心もとなさか、口惜しくてならないのですが、今となってはやはりわたしを亡き人の形見とあって、若宮を連れて来て下さい」などと、こまやかに書いておありになるのでした。 宮城野の露ふき結ぶ風のおとに 小萩がもとをおもひこそやれ とさるのですけれども、しまいまではようお読みになれません。</p>	<p>小さな皇子をもしばらく見てない。可愛そうな彼が別れの悲しみに沈んでいる人々に中にいるから大変だろう。彼を皇居に至急連れて来て会わせて、あなたも一緒に来て” との王様の言葉を伝え、王様の目がいつも涙でうるうるしているが他の人に見せないように努力していること話した。</p>	<p>小さな皇太子とも会わなくなって久しいです。哀れな彼は別離の苦しみに落ちた（ふける）人の間にいては、大変でしょう？彼を宮殿に早急に連れてきて会わせてくれませんか？ と天皇のお言葉を伝えて天皇の目には一杯の涙があふれているけれど他人にはそれを見せないでいるよう大変こらえていることについて懐古した。</p>

<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く「命長さの〜」(1094 / 一三⑥ / 二九)</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はんことだに、恥づかしう思うたまへはべれば、ももしきに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くなん。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんとをのみなむおぼし急ぐめれば、ことわりに悲しう見たりまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいまして、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「長生きをしておりますのはほんとうに辛いものだと、思い知りましたにつけても、まだ存えているのかと『松の思はんことも恥かし』 ゆうございますから、貴き百敷のあたりへお出入りいたしますことは、ましてなかなか憚り多く存じます。恐れ多いお言葉をたびたび承りながら、そういうわけで私はようお伺いいたしません。ただ、『若宮は何と思し召してか、内裏へ参られることばかりをお急ぎになっていらっしやるらしゅうございますので、それもお道理と、おいとおしゅう存じあげております』というようにでも、私が思っておりますことを内々で奏して下さいませ。何分私は不吉な身の上でございますから、こういう所にいらっしやいますのも縁起が悪く、もったいなく存ぜられまして」とおっしゃいます。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ「宮は大殿籠〜」(1149 / 一三⑩ / 三〇)</p>	<p>宮は大殿籠（おほのごも）りにけり。「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>若宮はもうお寝みになっていらっしやいます。「お顔を拜ましていただいて、おん有様なども詳しく奏上いたしとうございますが、お持ちになっていらっしやいましょうし、夜が更けて参りますから」と、命婦は帰りを急ぎます。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る「くれ惑ふ〜」(1163 / 一三⑭ / 三〇)</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかだたまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなくはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>「子を思う道にくれまどう心の闇の片端だけでも、お話し申し上げて胸を晴らしとうございますから、公の御使いでなしに、一度ゆっくりお越しなされて下さいませ。この年頃は嬉しいことや晴れがましい御用でお立ち寄りくださいましたのに、こういう悲しいおん消息の御使いとしてお眼にかかりますとは、返す返すもまならぬ命でございます。亡くなりました娘は、生れた時から望みをかけていた娘でございます、故大納言がいまわの際までも、『どうかこの人の宮仕への本意を必ず遂げさせて下され。私が死んだからといって、意気地なく挫けてはなりません』と、くれぐれも言い置かれましたので、立派な後身を持たぬ女の人交わりはなかなかなことと存じながら、ただ遺言に背かないようにと思ふばかりにご奉公に出しましたところ、身にあまるお志の幾重とも知れぬ忝さに、人に人とも思われぬような扱いをされるのを忍びながらどうかお付き合いをしておりますらしゅうございましたが、朋輩方の嫉みが深く積もり、苦勞の数々が増えてまいりまして、横死のような風に亡くなってしまいましたので、今ではかえってもったいないご寵愛をお恨み申しているようなわけでございます。これも親心の愚痴でございますか」</p>	<p>“亡くなった娘は生まれた時から我々に希望をもたらしただけの子である。亡くなられた父親ダイナゴンは生きていた時に“この人の皇居に働きたいという希望を必ずかなえてあげて。私は死んでも彼女の夢を無視してはいけません”と心から願って遺言残したので、世話する人はいなくても皇居に働くのはそれ以上の出来事になると知っていたが、ただ亡くなった父親の遺言を守るために皇居に行かせたのだ。そしたら王様から小さな体にも入りきれないぐらいの愛情をいただいて、どんな時にも心から応援していることに感謝し、他の側室たちの、人の頭にも想像できないぐらい悪口、いじめに歯をかんて我慢し、仕事し続けていたよ娘が。その間他からの嫉妬がますます心の中に増え、苦難が増えつつ結局戻らぬ人になり天国に行ってしまったのがこれである。そして感謝しなければならぬ王様の偉大な愛を裏切ったみたいになっている。これらは全て苦難に精神を失った荒っぽい母になる私の罪ではないか”と女性の母が言葉を終るや否や大泣きしている内に夜が明けてきた。</p>	<p>「私たちの、仏になってしまった人は生まれた時から私たちの望み、希望のしみ込んだ赤ちゃんです。故人の父のダイナゴンが存命中、「この人を宮殿に近づきになって働く切なる願いを必ずかなえてやって欲しい」といっていました。わたくしが見ても、その望みを潰してはいけませんよ。」と大変感情的に求めて遺言のようであったので、と見て向かう人がいない方向で 天皇の宮殿に役目を果たすのは彼女以外にないということを知り、ただ故人の貴族の家からのみの言葉を無碍にすることはないと知っていることで、宮殿に行かせたのだった。 しかし天皇が小さな体を抱えきれないほどの愛情を与え、どんな時でも、真心をこめるようにするのに、感謝し庇護の下に置き、他の妃たちの人の下に置くことはなく、悔しさで椀を食いしばりつけながら、仕事をし続けていた私の娘であった。 その間に他の妬みや憎しみは更に深くなり凝縮されて、苦勞と疲勞は大いに増え続けて、最後には帰ることない旅に出て仏の国に行ったのがこれである。そうして今、感謝すべき天皇の偉大な愛を裏切ったようなことになった。この全ての苦しみにぼんやりとなった無學な母である私の罪ではないのでしょうか。」と女の母は言ったが、声もなく嗚咽を漏らし泣いている間に曙光が白み始めた。</p>

<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ「「上もしか〜」(1256 / 一四⑩ / 三一)</p>	<p>「上もしかなん。 『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かうち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』 「うちがへしつづ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、 「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>命婦は、「上もそうおっしゃっていらっしやいます。 『わが心ながら、ああも一途に、人目をおどろかすように思ひ詰めたというも、やはり長くは続かない縁であったのかもしれぬと思うと、苦しい契を結んだものだという気がする。自分はいささかでも人の気持を書うた覚えはないのだけれども、ただこの人がいたために、恨まれないでもない人たちの恨みを負うたとどのつまりは、こんな具合に一人あとに残されて、心を取り直す術もなくて、いよいよみっともなく、頑になったのであるが、前の世でどんな約束がしてあったのを知りたい』と、繰り返し仰せになって、おん涙がちにいらっしやいます」と語るにつけても、話は尽きません。 泣く泣く、「夜がたいそう更けましたから、今宵のうちに御返事を奏上いたしましょう」と急ぎ立ち出でます。</p>	<p>王様はまたこう述べていた。 “私の心はこんな一つの方法へ憧れ、人々の嫌な目を引くほど女性を愛したのが結局長く一緒にいる運命はなく短い出会いだったからであろう。今振り返って見ると苦しい運命だったと思ったら心が痛む。今まで私は人の心を痛めたことを思い出せないが、ただこの人にたくさんの人の嫉妬を小さな体にも負わせ、結局こうして愛している人を失って、その残された寂しさが減れない。寂しさに縛られ、前よりも蒙昧になっていることを考えたら、前世にとどんな運命で結ばれたのかを知りたくなる”と振り替えて述べて涙を流していると言った。 双方こんなことを話していたら終わりが無い。 令嬢が泣きながら“もう遅くなっている、夜が明ける前に戻って返事を伝えませう”と行く準備をする。</p>	<p>天皇はまたこうおっしゃった。 私のこうなるまで一つの方向に向かおうとしていて、人の目の毒を引くほどまで、女を愛したのは最後に長く一緒にいる運命ではない、かなり短い出会いであった。今思い返すと、悲しい運命であることだ、というよりも、心を傷つけていたのを覚えておらず、いくらただこの重い非常に多くの人の憎しみを束にして彼女の体に負わせて、最後にはこのように愛する彼女を失い、後に残った後悔と悲しみは平静にならない。苦しみと悲しみに縛り付けられ、以前よりももっと蒙昧になっているのを考えると前世でこの人とどんな風な運命によって結ばれたのかを知りたくなっているのです”と何度も重ねて言って涙をこぼしているとのことだった。 どちらもこのように話していると終わらなかった。 婦人は泣く泣く「今ほとても晩くなりました。曙光の白む前に帰って答えを広く検討しましょう」と行く準備をした。</p>
<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡れるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。 鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな えも乗りやらす。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人 かことも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>月は山の端に入りかけて、清く澄みわたった空に、風がたいて涼しく吹いて、草むらの虫のこえこえの哀れを誘い顔なもの、立ち去りがたい風情なのです。 すず虫のこゑの限りをつくしてもながき夜あかずふる涙かな そう言って、車にもよう乗らないでいます。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲のうへ人 かような愚痴も申し上げとうございまして」と、母君が言ってお寄越しになります。</p>	<p>お月様が西の山の向うに沈もうとしていて、空に清々しい光を照らし、風邪が吹き、草の甲虫が人々の哀悼を分かっているように悲しそうに鳴くので戻るのは難しかった。 喉を出す鳴く 悪魔のコオロギのように 秋の夜を鳴き越える 涙がいつ終るだろう と言って令嬢が人力車に乗った。 “こんな情報を知らせなければならなくなった”と亡き娘の母から下記の連絡があった。</p>	<p>月が西の山の向こうに隠れ始めて空に透き通って一杯になるまで照り、風がそよぎ、草の先が人々の悲しみを知ったように悼んでいるのはしかたなく音を立てていたので帰る際は苦しかった。 声(喉)を知り泣く 害を受けたおろぎのように 秋の夜を嘆きつくす わが涙はいつ尽きるのだろうか と、使いの婦人はかごに乗った。 (キリツボ4) 「こんなことを知らせるより他なくなりました」と故人の母より下のような言葉を言わせた。</p>
<p>32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやど残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>風流なおん贈り物などがあるべき場合にはありませんから、ただ亡き人の形見として、こういう折の用にもと残しておかれた装束一領に、御髪上げの調度のようなものを取り添えて進ぜられます。</p>	<p>“まじめに考えたお土産を送る時間がなかった。ただ亡き娘の代わりに、この時に必要と残したかもしれない亡き娘が服に合わせて飾って使っていた髪飾り、くし、ヘアピン等を王様に差し上げたい、受け取ってください”と言った。</p>	<p>「ひそかに思い、大切にしたい贈り物を贈っている時間はありませんでした。ただ故人の」代わり身のみとして、このような時に必要なものとなるようにと、残したのかもしれない故人であるわが娘は服と共に二つにぎざぎざの髪留め、櫛、ハサミで心を天皇に広く掴んでいて、見舞いを受けて欲しい”と言った。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」(1378 / 一五⑩ / 三二)</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人間き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせてまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>若い女房たちなどは、悲しいことはいまでもないとして、朝夕の大内の暮しに馴れていたものが、寂しくてならず、帝のお有様などを思い出してお噂を申したりして、早く参内なさるようにおすすめているのですけれども、母君としては、こないまわしい年寄りがお供をするのは外間が悪いであろうし、そうかといって、少しの間もお別れ申していることは何だか心配でもあるので、この際になっても、すっぱり若宮を内裏へ参らせようとはなさらないのでした。</p>	<p>若い側室たちがコオイの死に敏感であることはもちろんのこと、また、今まで皇居と一緒に住んでお互い仲良くなっていたので悲しんでいた。王様の状態を考えたら、小さな皇子に早く会わせてあげてを女性の母に勧告するつもりだったが“私みたいな運命の悪い年寄りが一緒に行くのが人々の目耳は望ましくないだろう。また、こうして皇子と別れる精神的な力が本当でない。”と言って気持ちが混乱したお婆さんが小さな皇子を皇居に行かせることが出来なかった。</p>	<p>若い妃たちがコオイの死にびりびりしているのはもちろん、また今になるまで天皇の宮殿で暮らし、それぞれ慣れたのでお互い悲しい心になっている。天皇の様子を思うにつけ小さな皇太子と早く会わせることを女の母に説得するつもりであったが、私のところのように運の悪い老いた生き物(人間や赤ちゃんを「生き物」と表現することがある)一緒に行くのは、しっかりとした人の目や耳に適うことはないでしょうねえ。またこうしたて、皇太子と別れ別れる(既に上でも何度も出ているが、同じ意味の言葉を2度繰り返すことが多い。その多くは数学で言うベクトルのように2つの言葉で意味の定義を明確にしている)気持ちの元気さは私には実はありません”と言って、心が乱れたお婆さんである母親は小さな皇太子を天皇の宮殿に行かせられないとのことである。</p>

<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」(1420 /一六③/三三)</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前栽の、いとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貴之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>命婦は戻って来てみると、まだお寝みにならないでいらっしやるの色を、おいたわしく思うのでした。お前の壺前栽の花の色も面白く、今をさかりに咲いているのを御覧になるような様子で、嗜みのある四五人の女房だけを待わせて、しめやかにお話をなすっていらっしやるのでした。近頃は、明け暮れ亭子院がお書かせになった長恨歌の絵を御覧になり、その絵に添えてある伊勢や貴之の和歌だとか、または漢詩だとか、そういう筋のことばかりを語り草にしていらっしやいます。</p>	<p>皇居に戻ってきた使者の令嬢が、王様がまた寝ることも出ず来ずに座っているのを見て可愛いそうに思い、心をなやます。王様が公園に秋の草の花が今も綺麗に花が咲き、香り出していることをじっと見ながら、自分の周りにいて世話している4.5人の側室と一緒に淋しく歩き、静かな声で彼女たちに何かについて話っていた。彼はタン国のゲンソウ王とヨウキ皇后の愛情について述べられたハクラクテンのチョウゴンカ の絵を朝から晩まで眺めているのである。チョウゴンカは、あとうゲンソウ王、ヨウキ皇后二人の恋愛に基づいた詩で、それをテイジノイン 絵に描いた。その絵に基づいたイセ とキノツラキユキ の賛歌、中国の詩等、愛人から別れた、別れの悲しみを唄ったものを口にし、そんな課題で主に述べた本などを読んでいた。</p>	<p>天皇の宮殿に帰ってきた使いの婦人は天皇がまた眠れないでいるのを見て、大変哀れに思い心がうずいた。天皇は庭園で秋の草の花が今まで遅く咲き様子に見えて、しようのないほど花が咲き広がり香りが漂っているのを、自分を振り返って注意して世話している4.5人の妃と共に悲しみにくれて歩き、優美な声で彼女らに何か述べていた。彼は唐国のゲンソウ皇帝とヨーキ妃の2人の愛情について述べたハクラクテンのチョウゴンカ の絵を朝から晩まで見ていたのだった。そのチョウゴンカはそのゲンソウ皇帝、ヨーキ妃の二人の愛情から着想した詩で、それをテイジノイン が絵にさせたのだった。その絵から着想してイセ とキノツラユキ の歌、中国の詩など愛する人と別れた別れの嘆き悲しみを歌ったものを口頭で吟じ、そのようなテーマを主に述べた本とともに読むようになっていた。</p>
<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」(1469 /一六⑧/三三)</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、「いとまかしこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言に付けても、かきくらす乱り心地になん。 あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>御自分とても、何とかしてかような様子を人に見られまいと、泳えてごらんになるのですけれども、とても辛抱がおできになりません。始めてお逢いになった年ごろのことまでも取り集めて、いろいろとお思いつけになり、あの時分は束の間も離れていると気が揉めたものだが、よくまあこういう風にして月日を送ってられるものよと、不思議なようにもお感じになります。「故大納言の遺言を違えず、宮仕えの本意を立て通してくれた礼には、それだけの報いをして上げようと、いつもそう思っていたのに、それも甲斐なくなりました」と仰せになって、たいそう不憚にお思いになります。</p>	<p>王様も“こんな風に気持ちが混乱していることを他の人々に見せたくない”と自分を慰めようとしていたがとても苦しかった。初めて彼女に会った時の思い出をはじめ、色々なことを限りなく思い出していて、彼女が生きていた時にちょっとでも離れたら私が淋しかったのには今一人で生きていけるかと思ったら人間って小さい、虚偽なんだとまで思うようになった。「亡き父ダイナゴンの遺書を破らずに、皇居に勤めたいとの夢を果たしてあげた感謝として、いつかコオイを最後の側室にしようと思ってきたが、それは今けって果たさぬことになった」と王様が述べて愛人の母親を可愛そうに思い、悪くしなかった。</p>	<p>天皇も「こういうふうな心が乱れた状態を他人に見せたくない」と自分を落ち着かせるよう努めたが、とても大変だった。最初に彼女とかかわりを持った頃の思い出からとらせて、あらゆる全てを限りなく思い出して彼女を生活からほんの少し遠ざけるまで私にとってとてもたいへんに思えて、今こうして一人で生きていこうかと考えることで、人という生き物はちっぽけで、かりそめのものだなあとまで思うようになった。「故人はダイナゴンの遺書を破らず、天皇の宮殿で働く偽りの無い気持ちを実行させてあげた感謝の礼として、いつでもコオイを小妃にして差し上げようと考え続けてくるまで、彼女は今やいつになっても実行できないことになった」と天皇はおっしゃってほしい女の母に同情し、誤りだと責めたりしなかったのであった。</p>
<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憚に思う「いとかうしも〜」(1504 /一六⑩/三四)</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼしづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよろづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかなくなりしを、かくても月日は経にけり。あさましようぼしめさる。「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」 とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>御自分とても、何とかしてかような様子を人に見られまいと、泳えてごらんになるのですけれども、とても辛抱がおできになりません。始めてお逢いになった年ごろのことまでも取り集めて、いろいろとお思いつけになり、あの時分は束の間も離れていると気が揉めたものだが、よくまあこういう風にして月日を送ってられるものよと、不思議なようにもお感じになります。「故大納言の遺言を違えず、宮仕えの本意を立て通してくれた礼には、それだけの報いをして上げようと、いつもそう思っていたのに、それも甲斐なくなりました」と仰せになって、たいそう不憚にお思いになります。</p>	<p>王様も“こんな風に気持ちが混乱していることを他の人々に見せたくない”と自分を慰めようとしていたがとても苦しかった。初めて彼女に会った時の思い出をはじめ、色々なことを限りなく思い出していて、彼女が生きていた時にちょっとでも離れたら私が淋しかったのには今一人で生きていけるかと思ったら人間って小さい、虚偽なんだとまで思うようになった。「亡き父ダイナゴンの遺書を破らずに、皇居に勤めたいとの夢を果たしてあげた感謝として、いつかコオイを最後の側室にしようと思ってきたが、それは今けって果たさぬことになった」と王様が述べて愛人の母親を可愛そうに思い、悪くしなかった。</p>	<p>天皇も「こういうふうな心が乱れた状態を他人に見せたくない」と自分を落ち着かせるよう努めたが、とても大変だった。最初に彼女とかかわりを持った頃の思い出からとらせて、あらゆる全てを限りなく思い出して彼女を生活からほんの少し遠ざけるまで私にとってとてもたいへんに思えて、今こうして一人で生きていこうかと考えることで、人という生き物はちっぽけで、かりそめのものだなあとまで思うようになった。「故人はダイナゴンの遺書を破らず、天皇の宮殿で働く偽りの無い気持ちを実行させてあげた感謝の礼として、いつでもコオイを小妃にして差し上げようと考え続けてくるまで、彼女は今やいつになっても実行できないことになった」と天皇はおっしゃってほしい女の母に同情し、誤りだと責めたりしなかったのであった。</p>

<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くとこそ思ひ念ぜぬ」などのたまはす。 かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思はずも、いとかひなし。 尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>「でもまあ、自然若宮が成人したら、老母にも時節が巡って来るであろう。せいぜい長く生きるようにすることだね」などとおっしゃいます。命婦がさっきいただいて来た贈り物をお目につけて、昔臨こうホ(工へんに叩の右側の字、正しくは叩)の道士とやらが、亡き人のすみかへ尋ねて行って貰って来たという証の叙であるならば、などとお思いになりますのも甲斐ないことです。 尋ね行くへまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>“コオイがいなくなっても皇子が王様になるとき来れば亡き娘に側室を追及できるでしょう。それまでに生きて生きようとうき娘の母も思っているだろう”と王様が述べた。ミョウフ コオイの母の述べたことを王様に伝えた。それを受け取って王様はタン国の皇后で天に行ったヨウキが天国を旅していた手品師に愛するゲンソウ王に届けてもらった彼女のお土産となる宝のヘアペンのように悲しく思っていたに違いない。 天国に行ってしまった皇后をそこで探して会った手品師私の前に現れて欲しい、彼女に挨拶をしてもらいたい</p>	<p>「コオイがいなくなったが、皇太子を天皇の座に任じる日が来れば、仏になった人々は妃の位を請求し得ることができのだったね。 それまでは生きていようと、婦人も考えているんでしょうね」と天皇はおっしゃった。 ミョーフはコオイの母親の述べた事柄を天皇に語り申し上げた。 それを聞いて天皇は唐国の皇帝の妃が天に飛んだ(死んだ)ヨーキを仏の国で探し、会って来た魔法使いに愛する皇帝のゲンソウに送った彼女の贈り物の宝石のついたハサミのようだと思に至ったのは当然である。 天の国に行った妃をそこから探し会った魔法使い私の前に現れたまえ、彼女の息災をきかせてほしいものだなあ(2行ずつ頭韻)</p>
<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>絵に画いた楊貴妃の顔かたちは、どんなに上手な絵師の作でも、筆の力に限りがありますから、決して色香に富んでいるとは申せません。太液池の芙蓉や未央宮の柳によく似ていたというかの妃の唐風の装いを凝らしたところもさぞ美しかったでしょうが、御息所のなつかしくも愛らしかったのを思い出されますと、花の色にも鳥の音にも何として比べられましようぞ。 朝夕の睦言に、「天にあつては比翼の鳥、地にあつては連理の枝」とお約束をなされたことの、空しい夢となってしまったはかない運命の限りない恨めしき。</p>	<p>ヨウキ皇后を描いた人はどんなに有名な画家であっても絵で表現するには限りがあるのでそんなに、珍しく、美しく見えなかった。 大水の池の菊の花やビオウ・キュウ 宮殿の柳と本当に似ていたとチョウゴンカに唄われているヨウキ皇后の姿やタン国の服などが非常にきれいだったでしょう、しかし、コオイの生きていた時の可愛い姿を思い出せば、愛する彼女を花の色とも、鳥の鳴き声とも比べられない。 お互いにいつも“天には翼を広げて飛ぶ比翼の鳥、地上には二本の木の一つの枝でいよう”とチョウゴンカの詩の一行で永遠の愛の誓いをするがこれを実現できなかった愛する彼女の運命の薄いことを永遠に思い出して王様が小鼻が落ちている。</p>	<p>ヨーキ妃を描いた人はかなり有名な画家だが、絵の表現には限界があるのでそれほど驚くべき美しさの全きようには見えなかった。 大いに水のある池の睡蓮の花および、ビオウ・キュー 宮殿の柳の木に本当に似ていたとチョウゴンカで称えられているヨーキ妃の容姿は唐国の服が本当に装飾的で美しかったでしょうに、しかしコオイの生前のか弱いかわいらしい容姿を思い出して、彼女を花の色にも、鳥のさえずりにも比べる法は無いのだ。 誰と誰に対しても常に「空でなら並んで飛ぶづがいの鳥、地上でならベアの木の一つの枝となろう」とチョウゴンカの詩の一行で、永遠の愛を誓い合うがこれを履行することができなかった彼の運命の薄さを終わりに無く思い起こし天皇は鼻先の両側のくぼみを痛めた。</p>
<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615 / 一七⑩ / 三五)</p>	<p>風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。</p>	<p>風のおと、虫の音につけても、眼に触れるものが一途に悲しく思えますのに、弘徽殿では久しく上の御局にも伺候なさらず、月の面白夜のことなので、更けるまで管絃の遊びに興じておられるのです。 その陽気らしいもののお音をお聞きになって、たいそうぶしつけなど、気持を悪くなさいます。ほんにこのごろの帝の御様子を見奉る殿上人や女房などは、弘徽殿のなされる方を苦々しく思うのです。 もともとのお方は、ひどく我の強い、角々しいところがあまりになるので、何の構うことがとあって、そんな振舞いをなさるのでしよう。</p>	<p>秋の風の音、甲虫の鳴き声を聞いても王様にこの世の全てが悲しく思われていたのに正室コキデンが王様の言うことを無視しセイリョウ宮殿の正室の部屋にいてなく夜のお月様の美しさを眺め夜中まで音楽を引き遊んでいた。 王様に直接届くこの楽しい音色を聞いて“なんと、冷たい人や、残念”と心が痛むのである。その時の王様の気持を観察していた皇居の人々や他の側室たちもこの正室の行動を嫌がっていた。 もともとこの正室は負けず嫌い、冷たい人で王様の傷ついた心を無視し、コオイの死など私の気持に関係ないということわざと表していたのである。</p>	<p>秋風の音、甲虫の声をも聞いた天皇にはこの世の全てのものが悲しく思えて、コキデン大妃は天皇のお言葉を無視してセイリョウ宮殿の妃の宮殿においでにならず、夜中の月の美しさを愛で、夜遅くまで音楽を奏でて楽しんでた。 天皇に直接触れる喜ばしい音楽のこの旋律を聴いて「どういっても厳しい心を持った人の子供であろうか、かわいそうに」と 心が痛んでいるのだった。その時の天皇の心の有様を見て、注意していた宮殿の人々および他の妃たちも大妃のこの性格を恐ろしく思った。そもそもこの妃は負けず嫌いで、冷たい心を持つ人であって、天皇の傷ついた心を気遣うこともなくコオイの死は私の心を当惑させることがないことを必然のようにしていたが、それがまさにこのことだった。</p>

<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて 悲しみ歌う帝は、眠ることす らできない「月も入りぬ〜」 (1660 / 一八③ / 三六)</p>	<p>月も入りぬ。</p> <p>雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿</p> <p>おぼしめしやりつつ、燈火（ともしび）をかかけ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。</p>	<p>と、月も隠れてしまいました。</p> <p>雲のうへも涙にくる秋の月 いかですむらん浅茅生のやど</p> <p>かの母君の家のあたりを想像なさりながら、燈心が尽きて 燈明が消えてしまっても、まだ起きておいでになります。 右近の宿直奏ホの声が聞えるのは、もう丑の刻になったの でしょう。人目に立たないようにと、御寝所におは いりになりましても、まどろむことはおできになりません。</p>	<p>まもなくお月様が見えなくなり暗くなった。</p> <p>雲の上の秋のお月様 涙に負われて 草したの</p> <p>と愛する娘の家を想像して、チョウゴンカにゲンソウ王が 秋の光が無くなる時 睡眠が無くなる との詩に書かれたように燈が消え、夜が明けても王様が起 きていた。 ウコネフの指揮者は警備の名前を呼ぶのは聞こえるのが夜 中1時になっているみたい。王様はトイレに行き、寝るた めに部屋へ上がったが静かに寝れるようがなかった。</p>	<p>まもなく月が隠され暗闇になった。</p> <p>雲の上には秋の月 涙の被いがかかる 草の下にはの家 心の安寧あり（頭韻なし）</p> <p>と愛する人の家を思い描き、チョーゴンカでゲンソー皇帝 が 秋の光が消えるとき 眠気もどこかへ行ってしま う と詠んだのと同じく明るく喜び朝日の白むまで天皇は目が 覚めていた。 ウコネフの上官が監視塔の名前を呼ぶのが聞こえる夜のと ある時間の頃だったろう。天皇は馬をみて（トイレに行って） 寝ようと宮殿にいらしたが、ぐっすり静かに休み眠るいろ いろが全くなかった。</p>
<p>41 帝は政治まで疎かにしか ねない悲しみの中で食事も召 し上がらない「朝に起き〜」 (1693 / 一八⑦ / 三六)</p>	<p>朝に起きさせたまふとも、 「明るも知らで」 とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたせたまひぬべか めり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさ せたまひて、大床子の御膳などは、いと遥かにおぼしめし たれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たて まつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわ りなきわざかな、 と言ひ合はせつつ嘆く。</p>	<p>朝お起きになりましても、 「明るも知らで」へと、昔を恋しく思し召されて、朝政を 怠り給うようになります。 召し上りものなどもおすすみにならず、朝餉もほんの真似 ごとに箸をおつけになるだけで、大床子の膳部などは長い こと遠のけておられますので、陪膳に伺候するすべての人々 が、お傷わしい御様子を見ては歎くのです。誰も彼も、お 側近くに仕える限りの男や女が、困ったことだと言ひ合わ せてためいきを吐きます。</p>	<p>朝、目覚めるや否や、 愛する彼女の生きていた時の姿が浮かんで、二人で夜が明 けたのを着付かず色々なことを話し合い、朝の儀式をサ ボっていたことを思い出す。 今はコオイと出会った愛情に溢れた日々を思い出して、朝 の儀式の参加を断っている。 ご飯も食わず、朝のお茶に口をつける程度でセイリョウ宮 殿に行われる正式な食事会に目を向けず、手も付けない ので、食事に来た、また付き人たちは可愛そうに思い、男 女も「本当に可愛そうになったな」と大声をだす。</p>	<p>朝黒い目が開いたかと思うと 愛する女の生前の姿形を思い出し、二人で朝日の白むのも 気付かずあらゆるものを語り明かし、朝の儀式よりも時々 遅れて席についでいたのを思い出す。 今になってコオイと関わった愛の日々を思い返して朝の儀 式に参加するのが億劫になってしまった。 お食事召し上がらない、朝の僧の食事に口をつけるくら いであるのとセイリョウ宮殿で行われる公式のお食事を手 に取る儀式もほとんど見ることもなく、手もつけないので 僧の食事を差し上げ、おつきの全ての人の心が病み暗くな り、男女の別なく「本当に大変になった」と声をもらすのだ った。</p>
<p>42 帝に奉仕する者たちも政道 放棄を嘆き楊貴妃の例まで引 合いに出る「さるべき契〜」 (1731 / 一八⑩ / 三七)</p>	<p>「さるべき契りこそおはしましめ、そこの人の譏り、恨 みをも憚りせたまはず、この御ことにふれたることをば、 道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思 ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざな り」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。</p>	<p>やはりこうなる約束事だったのでしょうか、多くの人の非 難や恨みも憚り給わず、このことについてはものの道理も 失い給い、今はまた、こんな具合に世の中のことを思い捨 てられたようになって行くのは、全く困ったことだと、外 国の帝の例まで引き出して、嘯き合い歎き合うのでした。</p>	<p>“前世の出会い、運命だったのかな。王様は女中が生きてい た時に人々の嫉妬を無視し、宮殿はそのまま揺れていたが、 天国に行った今もこうしてこの世の仲の全てを無視してい るのは本当に大変だ”など他の国の皇居を例にして噂をし ていた。</p>	<p>「若い時からの運命であったのだろうか。天皇は女中が生きて いる時人々の舌、口、ねたみそねみを気にすることもなく、 宮殿はその声で揺れていたが、天に召されたこの時にもこ のように世の全てのものを眼中に入れず地面を捨てている のは本当に苦しくなった」などと異国の皇帝の宮殿の例ま で挙げてひそひそ言い合うのだった。</p>

<p>43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762 /一九〇/三七)</p>	<p>月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。明るる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちおみたまひぬ。</p>	<p>月日が過ぎて、若宮が内裏へお上りになりました。いよいよこの世のものではないようにお綺麗に、大きくお上りになりましたので、薄気味悪くさお思いになります。明るる年の春春宮が定まり給う時にも、このお方に一の御子を越えさせたくお思いになりましたけれども、おん後見をする人もなく、また世間も承知しそうにないことなので、かえってために悪いであろうと懸念なされて、気振りにもお出しにならずにしまったのを、あんなに可愛がっていらっしやっても、ものには際限があるのだと、世の人々も噂を申し、女御も安心なさるのです。</p>	<p>月日が立ち、まもなく小さな皇子源氏が父になる王様の皇居に来た。この世にこんなに美しさもあるんだねと言うぐらいの本当に可愛い皇子に育っているし、この美しさによって死ぬかもとまで王様が思うのでまた、気持ちが落ち着かないいつも心配していた。来る春、王様の後を継ぎトオグーに誰を決めるかとの時期か来るので王様が何とかして長男をパスして次男になるこの小さな皇子をトオグーに上がらせようとの隙間に密かに思っていたが小さな皇子を後ろから応援する人がいない、または定期的な儀式を無視して他に認めるのは難しい、それどころか皇子自身に悪いことが起こるかもしれないと思ひ、心の中に思ったものを表面に出す勇気がなかった。“こんなに、可愛そうに親しく愛しているが物事に理由があるように、物事に限りがあるから後を継ぐ皇子に選ばれるのはないだろう”と人々口々に噂し、正室のコキデンが始めて安心した。</p>	<p>月日が過ぎ去りまもなく小さな皇太子はゲンジ氏の父子となる皇子の宮殿に来た。この世でこれほど美しいとってあまりあるといたいほど美形の全き、本当にかわいいご子息によく育っていて、この見た目麗しいせいで死んでしまわないかとまで天皇は考えたので、また心がおだやかにならない時が続く心配している。次の年の春、天皇の座を相続させるトオグーに誰を奉ずるかを定める時が来たので天皇はどうにかこうにか長男を混乱させて次の息子はこの小さな皇太子をトオグーに任じようとしてと心でひそかに思っていたが小さな皇太子の後ろから支援する人がおらず、また確立した慣例を考慮しないのは他の人に受け入れてもらうのに障害で、それによってのみならず皇太子に彼自身のために悪いことになると思ひ、心に思ったことを明らかにする勇気が出なかった。「こうなるまであわれなほど溺愛していたが、“ものには理由が矢にはギチル(矢の両端につく木片)が”すべて限りがあって、後出自が受け継がれる皇太子によって奉じるのは違うでしょうよ」と人々は口々に騒いでコキデンの大妃は初めて心が安寧になったという。</p>
<p>44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」(1805 /一九〇/三七)</p>	<p>かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。</p>	<p>かの祖母君北の方は、慰む術もなく憂いに沈んでいらっしやって、亡き人のおられる所へでも尋ねて行きたいと祈っておられた験があったのでしょうか、とうとうお亡くなりなされましたので、またこれを限りなくお悔やみになります。御子が六つにおなりになった年ですから、今度は様子がお分かりになるので、恋い慕うてお泣きになります。祖母君も、年ごろ自分に馴れ親しんでおられたのを、みすみす後にお残し申してこの世に暇を告げる悲しさを、繰り返して仰せになったのです。</p>	<p>小さな皇子のお婆さんは気持的に落ち込んで太陽を見ずに、不吉なきざし、“一日も早く亡き娘のいる所に行きたい”と祈って、祈り通りになったか間もなく天国に行った。王様はまた哀悼に陥った。小さな皇子は6歳になったのでお婆さんの死をよく理解していて、孤独になり涙を流していた。お婆さんは今まで隣にいて育ててくれたので本当に慣れて、後ろに残してこの世を去っていることに極めて苦難であることを周りの皆に話していた。</p>	<p>小さな皇太子の祖母は意気消沈し太陽を見上げず、虫の知らせに心配しつづけ「たった一日前にあった故人である娘のいる場所を見つけて行ったのを考えています」と祈り続けて、彼女の望みによるものだったのかどうか、機会も無く仏の国に行ってしまった。天皇もまた悲嘆にくれた。小さな皇太子は6歳に達したのでこの度になって祖母は母の死を実感し大変切望し涙が止まらずにいた。祖母は今になるまで近くにおいて育てたので大変慣れ親しみ、人民を保ちこの世と分かれているときに、限りなく悲しんでいるのを親しい身内に話していた。</p>
<p>45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」(1844 /一九〇/三八)</p>	<p>今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧す。「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」と、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはす?</p>	<p>もうそれからは、若君は内裏にのみばかりいらっしやいます。七つになられたので読書始などをなさいましたが、たぐいなく聡く、賢いので、恐ろしいようにお思いになります。「今は誰も誰も憎むことはできまい、せめて母君のいない後だけでも、可愛がってお上げなさい」とおっしやって、弘徽殿などへお渡りになる時にもお供にお連れになり、そのまま御簾のうちへお入れになります。猛き武士や仇敵でも、見れば微笑みずにはいられないお姿なので、女御もよう知らぬ顔もなさいません。</p>	<p>皇子はこの時から皇居にずっと生活することになった。7歳の誕生日の時に読み書きする儀式を行い、まもなく頭が物凄いいいことが明らかになったので王様は怖いぐらいびくくりして、観察していた。「今は誰もこの子に嫉妬することができないだろう。母が亡くなったとまでして可愛そうに思ひ、愛情を注いでください」と王様がおっしやってゴキデン宮殿にお越しになる時一緒に連れて行って、更に神様の仏壇にまで連れて行くようになった。多大に強い英雄の男、侵略者の敵もこの皇子を見れば、見ず知らずに微笑むぐらいの可愛い男の子で、それどころか正室のコキデンまで冷たい言葉言えなかった。</p>	<p>皇太子はこのときから天皇の宮殿で永住することになった。7歳のお祝いの席上で読み書きを学ぶ儀式を行ったのと遅れずに精神が非常に晴れたのが知らされたのではほとんど恐怖のように驚き、見て確かめていた。「今では、誰もこの息子を憎むことができないでしょう・彼の母は亡くなったのだなあと言ういいたるまで哀れみ愛してあげてくださいね」と皇帝はコキデン宮殿にいらっしやるときも一緒に連れて行き、さらに仏を祀る小さなほこらにまでも連れてはいるのだった。並外れて強い英雄、独裁的な敵までこの皇太子を見れば知らず知らず笑顔になるかわいいう男の子で、それを言わないコキデン大妃まで冷たい言葉を捨てられなかった。</p>
<p>46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮「女御子たち〜」(1904 /二〇〇/三九)</p>	<p>女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしく恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。わがとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。</p>	<p>実はこの方のおん腹にも、女御子たちが二所いらっしやいますが、とても比べものにもならないのです。多くの女御更衣のおん方々も、この若君に対しては、恥かしがって隠れなどはなさいません。今からなまめかしく、様子あげていらっしやいますので、面白いようで気の置ける遊び相手であると、誰も誰も思っいらっしやいます。正式の御学問はいうまでもなく、琴笛の稽古をなすつても、空までひびく音色を出されますし、すべて一つ一つ教えて行くと、あまりことごとくして嘸らしくなるくらいに、才能のめでたいお方なのです。</p>	<p>正室の生んだ二人の王女も美しさで皇子と比べないぐらいいだった。知識や漢字能力はすぐれていて、琴や笛の練習に小さな皇子を天に昇るまでびくくりするぐらいの音色を出し、皇居の人々をびくくりさせていた。こうして小さな皇子のことを話しても話しても終わらない、話し続けていて疲れる一人になる。</p>	<p>大妃の生んだ2人の姫も見た目の麗しさでは皇太子と比べるわけには行かなかった。学問、漢字の能力で抜き出ているのみならず、ヤトガ(モンゴルの箏)、リムベ(モンゴルの横笛、チベット語起源の語)の練習でも小さな皇太子は天まで驚かせようかというそのような甘露の旋律を出し、宮殿の人々をうっとりさせたのだった。このように小さな皇太子の側に話しても話しても終わらない、話し続けて疲れて疲れ切るまでになった。</p>

<p>47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を視て不思議が「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)</p>	<p>そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕まつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしむ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。</p>	<p>その時高麗人が来朝しましたなかに、すぐれた人相見がある由をお聞きになりましたが、宮中へお召しになることは宇多の帝の御遺誠がありますので、非常に内密に、鴻臚館へこの御子を遣わしました。おん後見という形で仕えている右大弁の子のように仕立てて、お連れ申して行きますと、人相見は驚いて、たびたび首を傾げていぶかるのでした。「国の親となって、帝王の上なき位に登るべき相のあられる人ですが、しかしそういう風に取っては、御本人が心配なさることもありましよう。公の重い職について天下の政を助ける人という方にとって見れば、どうも相が違うようです」と言います。</p>	<p>当時、朝鮮の使者が来て、彼らの中には優れた占星術者がいらしていることを王様に伝えた。皇居に占い師を招くのはウダ 大王の遺書通りに禁止されていたのでかれらの泊まったコオラ宮殿に小さな皇子を密かに連れて行った。随行員のウダイベン が付き人、奴隸のような格好させて皇子を連れて行った。占い師は皇子を見て、声を出してびっくりし、頭を振った。「びっくりしても仕切れない。この子は天の指示で王様になる運命があると占いに出ているのに、そうしたら王国が混乱し、全ての国民が苦難に陥る。しかし、王国の賢い大臣になって国の権力を一緒に持っていけばちょっと違った占いが出ている」と言った。</p>	<p>その時真鍮国(?)の代表者たちが来て、彼らの間で焼いた肉を間違えず、占い師が来ているのを天皇に奏上した。天皇の宮殿に占い師たちを招くのは、ウダ 大帝の家より掟によって禁じられていたので彼らの投宿したコーラ宮殿に小さい皇太子を極秘に連れて行った。延臣のウダイベン 側近の息子のように皇太子に服を着せて連れて行った。占い師は皇太子を見てすぐ、声を漏らし驚き頭を振ったという。「驚き驚くのみではない。この男の子は天の意向により皇帝の座に任じる運命にある、と託言が下ったのにそのように言えば天皇と国政は乱れ、全人民は衰弱すると出ていた。しかし国政と国の賢臣となり国権を執ればまた別の結果になる」ということだった。</p>
<p>48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑩ / 四〇)</p>	<p>弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交したることも多し、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰りに去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたまへる。朝廷よりも多くの物たまはす。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。</p>	<p>右大弁もかなり才のある賢い博士でしたから、いろいろと談話を交換した中には、たいそう興味のある事柄もあったのでした。詩を作り合ったりして、今日明日にも帰国しようという間に、こういう稀な相の人に対面したのは喜ばしいけれども、お別れ申した後ではかえって悲しいであろうという心持を、巧みに詠じ出しましたので、御子もたいそう情趣の深い句を作ってお示しになると、限りなくお褒め申し上げて、立派な贈り物などを献上します。朝廷からもこの高麗人に多くのものを賜ります。帝はこのことを誰にもお漏らしになりませぬけれども、春宮の祖父大臣などは、何ぞお考えがおありになるのではないかと、疑っておいでなものでした。</p>	<p>ウダイベンと言う付き人が自分かなり知識人なので二人で意味深い話をずっと話し合っていた。詩の一行をお互いに書きあって、占い師は「すぐ故郷に帰ることになって、こんなに珍しい占いが出る方に出た嬉しさ、別れる悲しさを避けてくれた」と言った。小さな皇子も彼に意味深い詩を作り、直ぐに返事を出したので占い師はほめるにほめて、応援してお土産もあげた。</p>	<p>ウダイベンという側近は自身大いに高い学問教養を持っている人なので2人で内容の深い話を長くし、話し合っていたという。詩を書きあって占い師は「今日となく故郷に帰ってこのように稀なる幸運な託言が下る貴人と会い関わりを持った喜び、別れる悲しみを話して驚かせてやろう」という。小さな皇太子も彼に深い内容の詩をやって直接答えたことに対し、占い師の称えた上にも称え、熱烈に愛し贈り物を差し上げたのだった。</p>
<p>49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)</p>	<p>帝、かしこき御心に、優相を仰せておぼしよりける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。</p>	<p>帝は深いお心がおありになって、日本流の人相を見させてごらんなされて、夙に心づいていらしゃった(ママ)ことがあればこそ、今までこの君を親王にもせずに置かれたのですが、あの高麗の人相見はほんとうに偉い者であったと思ひ合わされるにつけても、外戚の後押しのない無品親王にしておいて、身の振り方に困るようなことにはさせたくない、自らの御代もいつまで続くやら定め難いことであるから、臣下に下して朝廷の補佐をさせた方が将来にも希望が持てるかと分別なすって、いよいよ道々の学問を習わせていらっしやるのです。</p>	<p>ナン</p>	<p>ナン</p>
<p>50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際こと〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)</p>	<p>際ことにかしてきて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勤へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。</p>	<p>際立って聡明なので、尋常人にするのは非常に惜しいのですけれども、親王になられたら世の疑いを受けそうな形勢ですし、宿曜の道に詳しい者に考えさせても、同じように申しますので、源氏にして上げることに決めておいでになるのでした。</p>	<p>ナン</p>	<p>ナン</p>
<p>51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」(2147 / 二一⑬ / 四一)</p>	<p>年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々(大島本「人々を」)参らせたまへど、なずらひにおぼさるだにいとたかき世かな、と疎ましようのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします。</p>	<p>年月がたつにつれて、御息所のことはお忘れになる折もありません。少しは慰められもするかと、相当な方々をお召しになっても、かのおん方に擬えられるほどの相手すらも、めったにいない世の中よと、どなたを御覧なされても、疎ましくばかり感じていらっしやいましたが、折から先帝の四宮として、すぐれてお顔立ちの美しいと評判のお方がありました。</p>	<p>月日が過ぎてても王様が愛する愛人キリツボのコオイを一秒も忘れることがなかった。悲しみは少しでも消えるかなと美しい女性を見せても「亡き彼女に比べる人がこの世にいないのだ」と王様が落ち込んでいるしかなかった。ある日亡き前の王の第4の側室の部屋に素晴らしく美しい女性がいると王様に伝えた。</p>	<p>日、月が過ぎていったが天皇が愛する人のキリツボのコオイを忘れたことは一瞬たりともなかった。悲嘆が小さくなって晴れるだろうか、と頬の美しい女たちを見せても、「故人の彼女と比べられる人はこの世にはいないのだ」と天皇は落胆するだけだった。あるとき仏になった前代の天皇の第4の姫の宮殿に驚くほど美しい女性がいると天皇に知らせたという。</p>

<p>52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」(2173 / 二二② / 四一)</p>	<p>母后世になくかしづきこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとおぼえて生ひ出でさせたまひけれ。ありがたき御容貌人になん」</p> <p>ありがたき御容貌人になん」</p>	<p>母后がまたとなく大切にかしづいていらっしやいましたが、帝にお付き申している典侍は、先帝の時から御奉公をしていた人で、かの母後の御殿にも親しくお出入りをし馴れていますので、まだ小さい時分から顔を存じ上げ、今も仄かにお目にかかることがあります、「三代のあいだ宮仕えをしておりますけれども、お亡くなりなされた御息所のお顔立ちに似ておられるお方をお見かけ申したことはございませんが、后宫の姫宮こそ、御成人なさるに従って、生き写しのようにおなりなさいました。珍しい御器量のお方です」と奏上しましたので、ほんとうかしらとお心が留まって、入内をおさせになるように、ねんごろにおっしやってお上げになりました。</p>	<p>娘を母が可愛がって育てた。王様の付き人となるナインノスケが前の王の付き人をもしていたので、彼の母が側室の部屋に出入りしていたので、あの娘を幼い頃から知っていた。今もたまに出会い、顔を良く知っていたので王様にこう伝えた。</p> <p>“天に行ったあの子と極めて似ている人を三世帯に王に付き人としている私は全然見たことないのに側室の部屋に彼女にそっくりの人がいたのを知った。この世に珍しく美しいのである。”と伝えたら、王様が本当かなとドキドキし、母なる側室に挨拶してあの娘を皇后に正式に入れるのを敬意を払って頼んだ。</p>	<p>娘を母親は大変大切に守り育ててきた。</p> <p>天皇に付き添うナインノスケは前天皇の時代にも側近となっていたのでその母妃の天皇によく入って出（出入り）しているのですその娘を小さく幼いときから知っていた。今でも時々会っていて、顔色を知っているため天皇にこのように知らせたという。</p> <p>「天に召された婦人と振る舞いや姿が非常に似た人を3代にわたり天皇の側に仕えている私が全く見つけれられていませんが、母妃の宮殿に彼女に限りなくそっくりな人がいらっしやっているのを知りました。世に稀な見た目麗しく生まれたのです」と知らせると、天皇は本当だろうかとお心ゆれ、母妃に尊敬の意を示す儀式をして娘を妃の宮殿に公式に下らせることを強く願った。</p>
<p>53 帝を巡る女たちの怖さと言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)</p>	<p>母后、</p> <p>「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、おぼしつみで、すがすがしうもおぼしたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。</p>	<p>母后は、まあ恐ろしい、春宮の女御が意地悪をして、桐壺の更衣がああいうむごい最期を遂げた前例があるのに、とお思いになると、そうお気軽には決心がつきかねておられましたが、そのうちにその母后もお薨れになりました。今では姫宮が一人で心細そうにしておられますので、「全くわたしの女御子たちと同列に扱って上げましょう」と、再びねんごろなお言葉がありました。</p>	<p>母なる正室は“難しいのだ。コキデンの性質は性格は難しい、前キリツボの女中を入れる所ないぐらいに排他して、結局こんな可愛そうな運命にあったというそれって言えないぐらいの例が目の前にあるのに”と嫌がっていながらまもなく病死した。</p> <p>残された王女は一人で悲しんでいることを王様が聞き、“浴室と言うよりも私の実の娘たちの親戚として親の代わりに世話をしよう”と皇居に正式に住むことを命令した。</p>	<p>母妃は「障害は大きいですが、コキデン大妃は性格が気難しく、前にキリツボの女中の女が暮らす術がなくなるまで無視し、最後にはこのように不運な結末を見た彼女の言いようも無い例が目の前にあるのに」と嫌がり躊躇していて間もなく病を得て仏になった。</p> <p>あとに残された姫は一人で心の苦しみを味わっているのを天皇は聞いて「妃というよりも私の生まれた（実の）娘の親戚と思って母父の代わりに面倒を見よう」と天皇の宮殿に公式に住まわせるのを勅命としたという。</p>
<p>54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑩ / 四二)</p>	<p>さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしますさんよりは、内裏住みさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。</p>	<p>近侍の者どもや、おん後見の人々や、兄君の兵部卿宮なども、こうして寂しく暮らしていらっしやるよりは、内裏住みをなすった方がお気晴らしになるとお考えなされて、宮中へお上げになりました。</p> <p>藤壺のおん方と申し上げます。いかさま、お顔も、お姿も、あやしきまでに似ていらっしやいます。</p>	<p>娘の付き人や世話している人々、兄になるヒョウブキョウたちが“こうして気持ちが落ち込んで、悲しんで生活するよりは皇居に行けば気持ちも落ち着かないか”と薦め、第4の王女を皇居に側室にした。</p> <p>この女性を側室フジツボと名付けた。本当に顔や体や歩き方もキリツボの女中にそっくりで、信じられないぐらい似ていた。</p>	<p>娘の家臣たち、女中たち、見て向かっている人々、彼女の兄であるヒョーブキョー公らは「このように心が痛み、悲しみながら暮らす代わりに天皇の宮殿に行けばお前の気持ちは上向かないのか」と説得し、第4の姫を天皇の宮殿に妃として下したという。</p> <p>この女をフジツボ小妃と命名した。本当に顔色、体、歩き踏みしめる姿はキリツボの女中の女の皮をはいのように、確信するしかないほどそっくりだった</p>
<p>55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしいに移動「これは人の〜」(2295 / 二三③ / 四三)</p>	<p>これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うげばかりあかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやになりしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。</p>	<p>この方は御身分が高いせいか、はたの気受けもよろしく、誰あつて貶める者もおりませんので、何事も存分になすつて御不満なことはありません。亡き御息所は、なかなか人がそうさせて上げなかったのに、あいにくと御寵愛の度が深かったのです。帝も、あの時分のことをお忘れになったのではありませんが、いつとはなしに御心が移って、この上もなく慰まれるようになって行きますのも、浮世の常というものでしょうか。</p>	<p>位も上位なので、それでなのか他の側室は嫉妬することが出来ない。側室フジツボはとにかく自由であって、物不足になる苦難は味わわなかった。</p>	<p>位階もまた一つ上なのでそのせいであろうか他の妃たち女たちは憎しみ嫉妬を向けることができなかった。フジツボ妃は何かあっても気まぐれで、足りずぐずぐずするような苦しみは見られなかった。</p>
<p>56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)</p>	<p>源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いつれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。</p>	<p>源氏の君は、帝のお側をお離れになりませんので、ましてしげしげとお召しに与るお方は、そうそうきまり悪がって隠れていらっしやるわけにも行きません。いずれのおん方々も、自分が人に劣っているとお考えになりますでしょうか。皆とりどりにお綺麗なことですけれども、お年を召した方々の中に、一人だけたいそう若く美しい藤壺は、ひどくはにかんで、見られないようになさるのですが、源氏の君は自然隠見なさることもあります。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>57 3歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)</p>	<p>母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとお似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとおはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。</p>	<p>母君の御息所の面影も、実は少しも御記憶にないのですけれども、非常によく似ていらっしやいますと典侍が申すものですから、子供心にもなつかしく存じ上げ、いつもお側近くへ行って、馴れ馴れしくさせていたいただきたいものよと、思っていたらっしやるのです。</p>	<p>実の母親の顔を全然思い出さないのか「側室フジツボはあなたの亡き母と本当にそっくりである」と周りの人々の話を聞いた皇子が子供の気持で側室フジツボを“本当に心に親しい人”と思うようになり“いつもこの人の近くにいたい。もっと親しくなる”と言っていた。</p>	<p>実の母の姿かたちを少しも思わせないせいでだろうか「フジツボ妃、あなたの亡くなった母親と本当にそっくりですよ」と近い人々が話すのを聞いて皇太子は幼い子供の心でフジツボ妃を「本当に心の近い人」と思うようになり「いつかこの人と近くなりたいものです。更にもっと慣れ親しみます」と述べるのだった。</p>

<p>58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396 / 二三④ / 四四)</p>	<p>上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。</p>	<p>帝にとっても、このお二人は大切な思いものなので、「この児をよそよそしゅう扱うて下さるな。どういうわけか、あなたはこの児の母のような心地がする。無縁な者と思わないで、可愛がってやって下さい。眠つきや顔立ちなどが、母はこの児にそっくりでしたから、あなたと母子のように見えても不似合いではありません」などとおっしゃいますので、源氏の君も幼いながら、ちょっとした花紅葉の折につけても親愛の情をお見せになり、</p>	<p>王様も二人に限りなく親しくするようになり、側室フジツボに「何があってもこの子に冷たくしないで、どんな理由か分からないが、あなたはこの子の亡き母のように思われた。礼儀正しくない人間と思わずに可愛がっていて。この子の母は顔や目つきが子供とそっくりの人だった。なのでこの子と二人は親子のように見えるのが運命じゃないと言えないのだ」など慰めるのと頼むように言うので、これを聞いていた源氏は幼い気持で春の花、秋の黄色い葉っぱ束を女性に送り、暖かい気持を見せ親しくなっていた。</p>	<p>天皇も二人に限りなく親しくなりフジツボ妃に「何があってもこの子に冷たくじめじめしたことをしないでください、どんな理由があるうともです、あなたはこの子の仏になった母親のように思えました。礼儀知らずな生き物と思わず同情し憐れんでいてくださいね。この子のお母さんは顔色、見た目などで息子ととてもそっくりの人だったのですよ。ですからこの子とあなたの二人は母子のように見えるのは道理ではないとはいえないのでしょね」などと機嫌をとるのと同時に頼んでおっしゃったのでそれを聞いていたゲンジの息子は幼い心で春の花々、秋の黄色く色づいた葉の束を女に送って親しみの心を示して打ち解けたのだった。</p>
<p>59 弘徽殿と藤壺が陰悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四④ / 四四)</p>	<p>こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにばはしさはたとへん方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。</p>	<p>この上もなくお慕い申しておりましたが、そうなる弘徽殿の女御は、また藤壺ともおん仲が巧く行かぬのに加えて、古いお憎しみも燃え出して、源氏の君を面白からずお思いになるのです。帝が世にたぐいぬいぬいと御覧になり、一般にも評判の高い藤壺の御器量に比べても、源氏の君もあでやかさは一層たえようもなく美しいので、世間の人は光君とお呼び申しています。また藤壺もそれと並んでとりどりの御寵愛でしたから、これはかかやく日の宮と申しています。</p>	<p>正室コキデンの嫉妬な気持は側室フジツボへ向かっていたが彼女に親しむ源氏を見たらキリツボのコオイに対する嫉妬が復活し、源氏皇子に新たな嫉妬を持つようになった。皇子のこの世にないぐらい美しい顔が人々の中に評判が高い側室フジツボの顔に比べれば源氏の清い美しさが明白に現れていて、比較出来ないぐらい愛したいので人々は「光の息子」と呼んでいた。フジツボ女性も側室として王様の愛情を引くので源氏と同じように彼女を「明るい日の王女」と読んでいた。</p>	<p>コキデン大妃の疑いの気持ちはフジツボ妃の方に向かっていたがその方にはゲンジを見るたびにキリツボのコーイに向けた昔の憎悪がよみがえりゲンジ皇太子に新しく憎しみがまわりつき妬みそねみは頂点に達した。皇太子のこの世に無いというべき見た目の全き顔を人々の間で口（評判）のよいフジツボ妃の容姿と比べるとゲンジの澄み切った見た目麗しい明々白々ははっきりとしていて、例えようもなく愛すべきために人々は「光り輝く男子」と呼んでいた。フジツボも妃の立場で天皇の愛を非常に引きつけるのでゲンジと同じく彼女を「光の日の妃」と呼んでいた。</p>
<p>60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)</p>	<p>この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕まつれる、おろそかなることぞ、ととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕まつれり。</p>	<p>この君の童姿を変えてしまうのは残念なお思いになりましたが、十二歳で元服なさいます。自ら手を下して世話を焼きになり、限りある儀式の上にさらに儀式をお加えになります。先年春宮の元服が、南殿において行われましたが、その時の騒ぎにも負けないようにお命じになります。ところどころの響宴など、内蔵寮や穀倉院などが普通の公事として取り扱うと、とかく疎略になりがちであるからと、特別に仰せ下されて、結構ずくめにおさせになります。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537 / 二四⑥ / 四五)</p>	<p>おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結ひたまへつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕まつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。</p>	<p>清涼殿の東の廂の間に、東向きに椅子を立てて、冠者の御座、加冠の大臣の御座をその前に設けます。申の時に源氏が席につかれます。髪をみづらに結うておられる容貌、顔の匂いなど、形をお変えになるのが惜しいようです。大蔵卿が御ぐし上げの役を勤めます。清らかなおん黒髪の端を削ぐ時、いたいたしそうにしていますのを、帝は御覧になりまして、御息所がこれを見たらばとお思い出しなされて堪えがたい心地がなさいますのを、じっと我慢していらっしやいます。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみなは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)</p>	<p>かうぶりしたまひて、御休み所にまかてたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましうつくしげさ添ひたまへり。</p>	<p>加冠の儀が終って、御休息所に退出されて、装束をお替えになってから、階を下りて拝舞をなさる様子に、誰も涙を落します。帝はまして辛抱がおできならず、ものにまぎれて忘れていらっしやる折もあった昔のことを、また取り返して悲しく思い出されます。こんなに若くて元服をすると、見劣りするようなことがと案じていらっしやいましたのに、あきれるまでに美しさを増されました。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの～」(2623／二五⑥／四六)</p>	<p>引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添い臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおほしたり。</p>	<p>加冠の大臣は、宮家の出である北の方との間にお儲けになったただ一人のおん娘を、大切を守り立てていらっしやって、春宮が御所望なすった時にも決っておられましたのは、この君に差し上げた心があったからなのです。かねて帝の御内意をお伺いしてあったことですから、「ではこの場合おん後見もないようであるから、副臥にも」という御催促がありましたので、大臣もそのおつもりでおられます。</p>	<p>ゲンフク 式を指揮した左大臣の正室は王様の血統の王女で一人娘がいた。小さな王女をととても可愛がって育てたが、すでにトオグー宮殿からお嫁に頼まれたいの言葉を聴かされたが受け取らず、返事を出さなかったのは最初から源氏のお嫁にしたかったかもしれない。王様にこの意見を言って、言葉を望んだが“そしたらゲンフク式の後、彼女を世話する人が必要なので、式の夜王女を連れて来てお嫁に下さい”と言った。</p>	<p>ゲンフク の儀を行う儀式を取り仕切った左の大臣の大妃と天皇の血統の姫で彼女は一人の娘がいた。小さな皇太子を大変かわいがり育ててあるときトオグー宮殿から嫁を嫁がせるつもりで言質を発表したが受け入れないという答えをよこすのもためらったのは母親からゲンジに伝えるつもりだったからのようだ。 天皇にこの考えを明らかにしその意向に興味を抱くと「それならゲンフクの儀式の後の頃に彼を世話して世話をする人が必要なので儀式の夜に姫を親しくならせて奥方にせよ」とおっしゃった。</p>
<p>64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに～」(2658／二五⑨／四六)</p>	<p>さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、ものの慎ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大袿に御衣一領、例のことなり。</p>	<p>人々が待所に退出されて御酒宴が始まる時、源氏の君も親王たちの御座の末にお着きになりました。大臣はそっとそのことを匂わしてごらんになりましたが、まだ恥かしい年頃のことで、とかく返答もなさいません。内侍が宣旨を承り伝えて、大臣がお召しになりましたので、御前へ参られます。御祿のものを、お上付きの命婦が取次ぎをして下し賜われます。白い大袿に御衣一領は例の通りです。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで～」(2703／二五⑩／四七)</p>	<p>御盃のついでに、 いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや 御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。</p>	<p>おん盃のついでに、 いときなき初元結に長き世を ちぎる心はむすびこめつや これはお上がお心持を含めて御注意遊ばしたのです。 むすびつる心も深きもとゆひに こきむらさきの色しあせずば と、左大臣は奏上して、長階から庭上に降りて舞踏されます。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>66 左大臣や親王たちは祿を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の～」(2730／二六④／四七)</p>	<p>左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連へて、祿ども品々にたまはりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まさり。なかなか限りもなくいかめしうなん。</p>	<p>左馬寮のおん馬、蔵人所の鷹を据えて下されます。親王たちや上達部も階の下に並んで、それぞれの身分に応じた祿どもを賜われます。その日の御前の折櫃物、籠物などは、おん後見役の右大弁が承って調えたのです。屯食や祿の唐櫃りなど、置き切れぬまでに飾り立てて、春宮の御元服の時よりも数が多うございました。どうしてなかなか盛大な御儀なのです。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜～」(2768／二六⑧／四七)</p>	<p>その夜、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆうつくとしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしとおぼいたり。</p>	<p>その夜大臣の里に、源氏の君が退出して来られました。御婚礼の作法など、世に珍しいまでにして、丁重にお迎えになりました。婿君がたいそう子供々々していらっしやるのを、非常に可愛らしくお思いになります。女君はまた、御自分が少し年嵩でいらっしやるのに、婿君がひどくお若いので、不似合いで恥かしくお感じになるのです。</p>	<p>その夜中、左大臣の宮殿に源氏皇子にとってかなりめんどろくさくて長い夜になった。結婚式はこの世に珍しいと言うぐらい素晴らしく盛大な式典になった。左大臣は息子を良く世話することを王様に伝えた。義理の息子はまた子供なので左大臣は本当に可愛がっていた。王女は源氏よりちょっと年上なので若い皇子は自分に合わないとした、心配していた。</p>	<p>その夜左大臣の宮殿でゲンジ皇太子にとって非常に退屈な、疲れる夜となった。婚礼の儀礼は世に稀なというべき驚くべき儀式が完全に秩序付けられ、左大臣が娘婿として息子を良く見守ることを天皇に申し上げた。娘婿は子供でほとんど幼児であったので左大臣はとてもかわいがりのだった。姫はゲンジより少し年上だったのでとても若い皇太子は私には釣り合わないと思わずかしがり、無駄なことにも内心心配する。</p>
<p>68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の～」(2800／二六⑩／四八)</p>	<p>この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いづ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。</p>	<p>この大臣は帝のおん覚えもたいそうめでたい上に、北の方は帝と同じ后腹のお方ですから、どちらから見ても花やかな御身分なのに、今またこの君がこんな具合に婿におなりなさいましたので、春宮の御祖父として遂には天下の政を執り給うべき右大臣の勢いは、ものの数でもなく気壓されてしまわれました。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)</p>	<p>御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。</p>	<p>多くのおん方々の腹に公達が大勢いらっしゃいます。宮のおん腹のお子は蔵人の少将で、たいそう若く綺麗でしたが、仲のよくない右大臣も、さすがにそれをお見逃しなさらないで、可愛がっておられる四番目の姫君に配せられました。そして、こちらでも源氏の君に劣らずその少将を大切になさる御様子は、そうあって欲しい御両家のおん間柄なのでした。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)</p>	<p>源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。</p>	<p>源氏の君は、帝が常にお側にお召し寄せになりますので、ゆっくり里に退っていらっしゃる暇ありません。心のうちには、ただ藤壺のおんありさまを世にたくいもないものと存じ上げて、妻にするならあいうお方でなければならぬ、さてもさても似る人もなくおわしますことよ、大殿の君の方は、可愛らしく大切にされている姫君とは見えるが、性が合わないような気がするとお思いなされて、生一本な子供心のひたむきに、苦しいまでに考え悩んでいらっしゃいます。</p>	<p>源氏皇子を王様は隣からちっとも離さないで妻の家のそんなに行けなかった。しかし源氏の心に側室フジツボの美しい顔が何よりも浮かび、こんな人を妻にしたい、彼女のような女性はこの世にないだろう。左大臣の王女は愛情に溢れて育った、良い貴族の家に生まれたと言うことを認めるが、ただ性格を良く知らないのではたまには合わないと思われど密かに思い、幼い心にはフジツボのことを思い、悲しく愛するようになった。</p>	<p>ゲンジ皇太子を天皇は自分の側から全く離そうとしないため奥方の家寝所に全く通うことができなかった。しかしゲンジの心にフジツボ妃の見た目麗しき容姿は最上に思えこのような人を母としたいと思い、彼女にそっくりの女の人はこの世にいないのだ。左大臣の姫は愛と加護の下でかわいがられて育ったよき出自の家族に生まれたというのを受け入れた性格をそれほどよく知らないの時々気が合いそうにないように思えるど内心ひそかに思い小さな心臓にフジツボ妃を思い続けて悲しみ思い描くようになった。</p>
<p>71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912 / 二七⑥ / 四九)</p>	<p>大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めて、内裏住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづききこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選(え)り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおぼしいたつく。</p>	<p>でも、元服をなされてからは、帝も以前のように御簾の内へもお入れになりません。君はわずかに管弦のおん遊びのおりおりに、琴笛を合わせて音を通わせ、ほのかなお声の漏れて来るのに慰められて、内裏住みばかりを好ましく思っておられます。そして、五日六日も御前に待うて、大殿の方へは二日か三日という風に、絶え絶えにお越しになるのですけれども、今は小さいお年ごろですから、お里方では何の罪もないことと、ねんごろにもてなしておられます。婿君の方にも、姫君の方にも、並々でない女房たちを、選りすぐって侍わせていらっしゃいます。お気に入るような催しごとをなすったりして、精いっぱい御機嫌を取られます。</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976 / 二七⑩ / 五〇)</p>	<p>内裏には、元の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らすさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りのしる。かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしようぼしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝へたるとなむ。</p>	<p>内裏にいらっしゃっても、もとの淑景舎をお部屋になされて、母御息所にお仕え申した女房たちを、今も散らすずに使っていらっしゃいます。昔の御息所のお里の御殿は、修理職、内匠寮に宣旨が下って、またとなく立派に造りかえられます。もともと植込みや築山の風情が面白い所でしたのに、池の面をさらにひろくする工事が始まって、人夫どもが賑やかに立ち働いています。それにつけても、こういう所へ心に叶うような人を据えて住んでみたらと、そんなことばかり思いつづけて溜息を吐いておられます。光君という名は、高麗人がこの君をお褒め申してお附けしたのでであると、言い伝えられていますとやら。</p>	<p>源氏皇子にキリツボ コオイの宮殿をそのままに渡したが母親の付き人していた随行人たちをも引き続き随行させるようにした。王様の命令でコオイの部屋に宮殿の装飾や建設所から以前なかったぐらゐの素晴らしい装飾をした。元々宮殿の前の公園にはきれいな植物、花以外に人工の山、川がある、かなりのきれいなところで、更に池を拡大し、かなりきれいに組み合わせた。源氏皇子はこのニジョウ宮殿を見て“このきれいな宮殿に好きな人を連れて来て二人で一緒に住めばなんて幸せであろう”と悲しく思うようになった。“光の息子”と言うこの名前を朝鮮の占い師、源氏の美しさや彼の才能をほめて与えた名前であると言われている。</p> <p>第一章が終る。</p>	<p>ゲンジ皇太子にキリツボのコーイの宮殿をそのまま与えたのと彼の母に付き従っていた従者を引き続き付き添わせることになった。天皇の命によりコーイの宮殿に宮殿の意匠装飾、建築の役所から先にも後にも（後にも先にも）ないような驚くべき意匠を施した。もともと宮殿の前面の庭園はきらびやかな植物や花の他に人口の山や水が非常に美しい場所であってさらに池を大きくして大変な美しさを積み重ねた。ゲンジ皇太子はこのニジョウ宮殿を見て「この素晴らしい宮殿に心がひかれた人を連れてきて2人で一緒に暮らせばどうだろう、幸福であろうか」と考えをめぐらせるのだった。「光り輝く男子」という名前を真鍮国の占い師はゲンジの見た目の完全な美しさ、才能を舌打ちし（モンゴルでは「わが意を得たり」と賛意を示す意味を持つ）称え愛用した名前であったとこの頃言い合ったのであった。</p> <p>第1部完（ここでの「完」を表す動詞 jargakh は太陽が「沈む」灯が「消える」の意で用いる）。</p>

●英訳『十帖源氏』データ

小見出し	十帖源氏 校訂本文	十帖源氏 現代語訳	十帖源氏 (英語・母語話者／カーン先生訳)	十帖源氏 (英訳・非母語話者／緑川先生)
ナシ	<p>1 丁裏・2 丁表</p> <p>光源氏物語は、村上天皇女十宮大斎院(村上天皇)の十番目のお姫さまである(選子内親王(大斎院))が、(一条院)の後である(藤原彰子(上東門院))に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりまして、「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にうかびければ、先、須磨の巻より書たると也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひしを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観血脉許可也。堤中納言兼輔—惟正〔傍・= 因幡守〕—為時〔傍・= 越前守〕—女〔傍・= 紫式部〕母は為信〔傍・= 摂津守〕女堅子〔「四には」から2丁表〕</p>	<p>『源氏物語』の誕生</p> <p>(村上天皇)の十番目のお姫さまである(選子内親王(大斎院))が、(一条院)の後である(藤原彰子(上東門院))に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりまして、「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にうかびければ、先、須磨の巻より書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は五十四巻)、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていたのを、この物語の一部で「紫の上」のことをとてすばらしく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が変えられたのです。〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脉を許されたのです。紫式部の系図</p> <p>堤中納言兼輔—因幡守惟正—越前守為時—女(紫式部)母は摂津守為信女の堅子です。</p> <p>(注) 一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。</p>	<p>The Birth of the Tale of Genji</p> <p>Senshi, The 10th princess of Emperor Murakami (also called the Great Kamo Priestess), asked hopefully of the Empress of Emperor Ichijō, Fujiwara no Shōshi (Jōtōmon-in), “Do you have any new tales?” Shōshi called in Murasaki Shikibu and said, “Please work hard to create a new tale for me.” Murasaki Shikibu was staying at Ishiyama Temple, and prayed about this. Then the full moon of the 15th night of the 8th month shone on the surface of Lake Biwa, and the idea of a tale came to her mind. Thus, it is said, she first wrote the “Suma” chapter. The sixty chapters of the Tale of Genji were based on the sixty volumes of the writings of Tendai Buddhism. The names were named on the basis of the “four gates”: the “visible gate,” the “invisible gate,” the “visible and invisible gate,” and the “neither visible nor invisible gate.” The chapters were decided in four ways: the first was to take a word from the prose parts of the chapter, the second was to take a word from a poem, the third was to take a word used in both the prose and poetic parts of the chapter, and the fourth was to use a word appearing in neither the prose nor the poetic parts of the chapter. The author was original called Tō Shikibu, but she was given the name Murasaki because the section of the Genji dealing with Lady Murasaki was especially well written. Murasaki Shikibu may have been an incarnation of the Buddha Kannon. She was allowed to be in the bloodline of the Tendai masters by the priest of the Dana Temple.</p> <p>Murasaki Shikibu's lineage: The Tsutsumi Middle Counselor Kanesuke – Nobumasa, the governor or Harima – Tamesuke, the governor of Echizen – Murasaki Shikibu. Her mother was the daughter of Tamenobu, the daughter of the governor of Settsu (her name was Katako).</p>	<p>1 verso</p> <p>The birth of The Tale of Genji</p> <p>Emperor Murakami's Tenth Princess, Daisaiin (the Great Priestess) [Senshi-Naishinnō] asked Jōtōmonin [Fujiwara Shōshi], “Are there any new tales?” Then Shōshi summoned Murasaki Shikibu and told her, “Please do compose a new tale.” Murasaki Shikibu confined herself to Ishiyama Temple, and prayed for this. Just then, as the full moon of the Eighth Month shone on the surface of Lake Biwa, the idea of the story occurred to her, and so, it is said, she started writing the story from the “Suma” chapter. The number of the chapters of The Tale of Genji is based on the sixty volumes of Tendai sutras. [The Tale of Genji now consists of fifty-four chapters.] In naming the chapters, she used as reference the methods of the Four Noble Truths. [All things exist, no things exist, things both exist and do not exist, things neither exist nor not exist.] Number one: chapter titles that come from the text of the tale. Number two: those from waka poems. Number three: those from both texts and poems.</p> <p>2 recto</p> <p>Number four: chapter titles taken neither from texts nor poems. In the beginning, she was called Tō Shikibu, but because in some parts of this tale the character Lady Murasaki is depicted in a wonderful way, the author's name was changed to Murasaki Shikibu. Murasaki Shikibu is also said to be an incarnation of Kannon. She learned the teaching of “threefold contemplation in a single mind” from a high ranking priest of Danna'in.</p> <p>Family tree of Murasaki Shikibu Kanesuke, Tsusumi Middle Counselor — Koremasa, Governor of Inaba — Tametoki, Governor of Echizen — daughter (Murasaki Shikibu). Her mother was Kenshi, daughter of Tamenobu, the governor of Settsu.</p>
ナシ	<p>2 丁裏</p> <p>絵</p>	<p>〈絵1〉八月十五日の夜、石山寺で、紫式部が、『源氏物語』を書きはじめた場面</p> <p>(2 丁裏)</p>	<p>(Picture 1) Murasaki Shikibu begins to write the Tale of Genji at Ishiyama Temple, on the night of the 15th day of the 8th month</p>	<p>2 verso</p> <p>[Picture 1] The scene when Murasaki Shikibu started writing the Tale of Genji at Ishiyama Temple on the night of the fifteenth of the Eighth Month.</p>

<p>1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する 「いつれの御時〜」(0001 / 五① / 一七)</p>	<p>3丁表 いつれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける 中に、いとやんどなきゝにははあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。〔割・いつれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きりつぼの更衣」の事也。〕 梨壺、照陽舎。 桐壺、淑景舎。 藤壺、飛香舎。 梅壺、凝花舎。 雷鳴壺、襲芳舎。 此きりつぼにすみ給ふかうみを、御てうあひあれば、きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうみそねみて、 (「いつれ」から3丁表)</p>	<p>(桐壺) いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとても愛されていらっしやる女性がいました。〔「いつの時代」とは、醍醐天皇の時代のことです。帝に愛されていらっしやる女性というのは、桐壺の更衣です。〕 宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お後の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前と呼びます) この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを〈桐壺の帝〉ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日〈桐壺の更衣〉が帝の近くにいることに、嫉妬をしてばかりいました。</p>	<p>“Kiritsubo” I wonder what reign it was – among the many ladies known as Consorts and Intimates, there was a woman who was not of a particularly high rank, and who was loved greatly by the Emperor. (“What reign it was” was the reign of Emperor Daigo. The woman who was loved greatly by the Emperor is the Kiritsubo Intimate.) The wing of the palace known as the Nashitsubo is another name for the Shōyōsha. The building known as the Kiritsubo is another name for the Shigeisha. The building known as the Fujitsubo is another name for the Higiyōsha. The building known as the Umetsubo is another name for the Gyōkasha. The building known as the Kannari no Tsubo is another name for the Shūhōsha. (The women who live in these buildings are each known by the building they live in.) The Emperor loved the Intimate who lived in the Kiritsubo, so he is known as the “Kiritsubo Emperor.” Many of the Consorts and Intimates were envious, and every day the Kiritsubo Intimate was with the Emperor, so they were very jealous.</p>	<p>3 recto (Kiritsubo) In what emperor's era was it? Among the large number of His Majesty's consorts and intimates, there was a lady of not very high rank who was loved especially by the emperor. (“In what emperor's era” means the era of Emperor Daigo [884–930]. The lady “loved especially by the Emperor” is the Kiritsubo Intimate) [Names of the wings of the Palace.] Nashitsubo is another name for Shōyōsha. Kiritsubo is another name for Shigeisha. Fujitsubo is another name for Higiyōsha. Umetsubo is another name for Gyōkasha. Kannari-no-tsubo is another name for Shūhōsha. (The consorts were called by the name of the wing where they were living.) The Emperor favoured the Intimate who lived in Kiritsubo, so the Emperor at that time was called the Emperor Kiritsubo. Many consorts and intimates felt vexed with her. They felt very jealous that Kiritsubo Intimate spent everyday next to His Majesty.</p>
<p>2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱なる 「朝夕の宮仕〜」(0031 / 五④ / 一七)</p>	<p>3丁裏 あさゆふの御みやづかへにつけても、心のみうごかし、うらみををふつもりにや、あつしく成ゆき、〔割・をもき / 病也〕物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれにおぼして、人のそしりをも、えはゞからせ給はず (「おぼして」から3丁裏)</p>	<p>そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていきました。〔重い病気です〕心細い感じがして、実家に帰っていることが多い〈桐壺の更衣〉のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っても、愛情をお止めになることができません。</p>	<p>Perhaps because so many other women bore a grudge towards her, she became weak (had a serious illness), and seemed lonely, and she frequently returned to her home. The Emperor loved the Kiritsubo Intimate much more than before, and so even though people criticized him, he was not able to stop his love for her.</p>	<p>Perhaps it was because she was resented so much by the other ladies, but presently she became weaker physically. (It was a grave illness). Feeling increasingly feeble and unhappy, the Kiritsubo Intimate returned very often to her own home. This made the Emperor feel more longing for her than ever. 3 verso He did not care what people might think about him, no matter how much his advisors cautioned him.</p>
<p>3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る 「唐土にも〜」(0073 / 五⑧ / 一七)</p>	<p>「もろこしにもかゝる事のおこりにこそ、世もみだれ、あしかりけれ」と、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしもひき出つべう成ぬ。</p>	<p>中国でもこういう恋愛関係が原因となって、世も乱れ、とんでもないことにもなったと、世間の人もおもしろくない気がして、人々の悩みの種にもなり、中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました。</p>	<p>In China as well, due to romantic relationships, the world had fallen into chaos and serious things had happened – the people of the world thought of this without amusement, and this became a seed of worry for many people. It seemed certain that this would be compared to the Chinese Emperor Xuánzōng's infatuation with Yáng Guīfēi.</p>	<p>In China, a love relationship like this had caused chaos and trouble in the land. People disapproved and it became a general worry. The situation was compared to how Emperor Xuanzong of China had become infatuated with Yang Guifei.</p>

<p>4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」(0103 / 五⑫ / 一八)</p>	<p>此かうみの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼にもとり給はねど、事とある時は、より所なく、心ぼそげ也。</p>	<p>この〈桐壺の更衣〉の父はすでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。</p>	<p>The father of this Kiritsubo Intimate had already died, and her mother (his principal wife), had been born to a high-ranking family, and behaved like a person of old. She tried to make sure that her daughter would not lose out to the Emperor's other women. However, whenever there was an important function, she had no one to rely on, and seemed lonely.</p>	<p>The Kiritsubo Intimate's father had already died and her mother, his principal wife, was born in a decent family and old-fashioned in her character, so she made an effort for her daughter to keep up with the other consorts of the Emperor. When there were problems, however, the mother had nobody she could depend on. She seems to have felt a bit helpless.</p>
<p>5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」(0136 / 六① / 一八)</p>	<p>さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよなる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。〔割・其を光君と／いふ也〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまうけの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、ならび給ふべくもあらず。</p>	<p>〈桐壺の帝〉と〈桐壺の更衣〉は前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〉といいます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いなく皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)〉の美しさには、とうてい勝つことができません。</p>	<p>The Kiritsubo Emperor and the Kiritsubo Intimate perhaps had a deep bond in a past life, for a prince like a beautiful jewel was born. (This person is called the Shining Genji, or the Shining Lord.) The Emperor's first prince had been born to the Consort who was the daughter of the Minister of the Right, and everyone treated him importantly, certain that he would become the next Heir Apparent. However, he could not match the beauty of this young child (the Shining Genji).</p>	<p>Perhaps the Kiritsubo Emperor and the Intimate had a deep bond from the previous life, for a jewel-like prince was born between them. (We call this prince Hikaru Genji, the Shining Genji, or Hikaru kimi, the Shining Lord.) The Emperor's first son was born of the consort who was the daughter of the Minister of the Right, and thus the people cherished him as the child that was sure to be the Crown Prince. However, the beauty of the young lord, Hikaru Genji, could not be surpassed.</p>
<p>6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く「はじめより〜」(0184 / 六⑦ / 一九)</p>	<p>4丁表 此みこ生れ給て後は、みかど御心ことにをきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、一のみこの女御は、おぼしうたがへり。 (「御心」から4丁表)</p>	<p>〈光源氏(若君)〉が生まれてからというもの、帝はこの〈光源氏〉をととても大切にしていられましたので、〈光源氏〉が、皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である后は、心の中で心配しています。</p>	<p>After Genji's birth, the Emperor treated him with great importance, and so the mother of the Crown Prince (the Emperor's first son), felt uneasy in her heart, wondering if Genji would become the Heir Apparent.</p>	<p>As the Emperor had treasured him since he was born, the first prince's mother was very worried that Hikaru Genji might be appointed as the Crown Prince.</p>
<p>7 「人より先に〜」(0248 / 六⑬ / 一九)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」(0288/七③/二〇)</p>	<p>あまたの御かた／＼を過ぎせ給ひ、ひまなき御前わたりに、人の心をつくし給ふも、ことほり也。あまりうちしきりまうのぼり給ふおり／＼は、うちはしわた殿、こゝかしこの道にあやしきわざをして、御をくりむかへの人のきぬのすそ、たへがたう、まさなき事ともあり、又ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。</p>	<p>帝が、たくさんの后たちの部屋の前を素通りして、何度も何度もお通いになることに、他の后たちが嫉妬しているのも、もっともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる回数が増えていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、あちらこちらの道にいたずらがされていました。それは、見送りや出迎えの侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、絶対通らなければならぬ中廊下の扉を開けて、こちらとあちらで協力し、〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。</p>	<p>The Emperor passed right by the rooms of many of his other women, going over and over again to Kiritsubo's room, so it's only natural that the other women felt jealous. The Kiritsubo Intimate was called on many times by the Emperor. Therefore, when Kiritsubo crossed the bridgeways and crosswalks of the palace, there were mean things done to her here and there on the way. The things that were done to the sleeves of the gentlewomen who accompanied her were quite impossible to put up with. Then another time, they shut a door to a passageway that Kiritsubo had to pass through, and through the work of several people she was locked in – there were many things done to vex and trouble her.</p>	<p>It was only natural that the other ladies felt jealous when the Emperor went past their rooms many times to see the Kiritsubo Intimate. The Kiritsubo Intimate was summoned to the Emperor so often that they scattered unpleasant things here and there on places where she would pass on palace corridors like crossbridges and bridgeways. Ladies-in-waiting accompanied her to and from the Emperor's chambers, and the bottoms of their robes were disgustingly soiled. This was an unbearable humiliation. On many other occasions, the other ladies made the Kiritsubo Intimate suffer and caused her trouble by locking the doors to the middle corridor she had to go through, with ladies on both sides collaborating to shut her in.</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」(0344/七④/二〇)</p>	<p>4丁裏みかどいとゞあはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ。かうみい、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」(「そのうらみ」から4丁裏)</p>	<p>帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思って、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることはありません。</p>	<p>The Emperor felt more and more pity for her, and so he had a low-ranking woman who lived in a room called the Kōrōden moved to another place, and that was made a second room for Kiritsubo. The anger of the woman who was displaced from her room was unquenchable.</p>	<p>The Emperor took more and more pity on her and moved her to the palace wing called the Kōryōden, giving her another room by making the lower ranking lady who was living there move to another place. 4 verso The resentment of the lady who was moved must have been very great.</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎みが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378/七⑤/二一)</p>	<p>みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもをとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。</p>	<p>〈光源氏(若君)〉は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めったにないほど素晴らしいので、〈光源氏(若君)〉を他の后たちも憎むことができません。</p>	<p>The year that Genji turned three, he had his Donning of the Trousers ceremony. The ceremony was equal to the one done for the First Prince. Genji's looks and bearing were unusually splendid, and so the rest of the Emperor's women could not hate him.</p>	<p>When Hikaru Genji turned three years old, he performed the ceremony of wearing the trousers (Hakama-gi). The ceremony was as superb as the ceremony held for the first prince. His appearance and character were so excellent that other ladies could not dislike him.</p>
<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439/八②/二一)</p>	<p>其年の夏、御母御休所〔割・更衣の事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまささらにゆるさせ給はず。日々をを宮中に残しをもり給て、いとよはうなれば、更衣の母、なく／＼そうして、みこをほとゞめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。</p>	<p>その年の夏、母の御息所〔桐壺の更衣〕のことです。は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながらお願いをして、〈光源氏(若君)〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣(御息所)〉だけ帰ることになりました。</p>	<p>The summer of that same year, his mother the Haven (the Kiritsubo Intimate) became ill and tried to go home, but she had always been sickly, and the Emperor was used to it, so he absolutely would not let her leave. The next few days, the illness grew worse and worse, and she became very weak, so her mother petitioned in tears. Thus Genji was left at the palace, and only the Kiritsubo Intimate returned back.</p>	<p>In the summer of the same year, his mother, the Haven (the Kiritsubo Intimate) was taken ill and tried to return to her mother's house, but the Emperor was used to being weak all the time, and did not allow her to leave. Day by day her condition worsened. When she was gravely weakened, her mother begged in tears for her to be allowed to come home leaving young master (Hikaru Genji) behind at court.</p>

<p>12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣を御覧になるにつけ途方に暮れる 「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)</p>	<p>5 丁表 うつくしき人の、おもやせあるかなきかにきえものし給ふを御覧じて、きしかたゆくすゑ、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげにて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、をくれさきだゝじとちぎらせ給けるを、打すてゝはえゆきやらじと、の給はするを、 (「にて」から5丁表)</p>	<p>帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をするすることもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行くことと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、</p>	<p>The Emperor looked at the beautiful Kiritsubo Intimate, who was weakened and barely conscious. He made many vows about the past and the future, but Kiritsubo could not respond. She had a look of suffering on her face, and appeared to have lost consciousness. The Emperor said, "You cannot leave me alone, when we pledged to take the road to death together."</p>	<p>As the Emperor saw his beloved worn out and about to faint, he spoke about their past and for future, making many promises, but she could not answer. With agony reflected on her face 5 recto and she fainted. The Emperor said, "you cannot leave me behind. We promised to die together."</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する 「輦車の宣旨〜」(0537 / 八⑩ / 二二)</p>	<p>女も、いみじと見奉りて、かぎりとして わかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。 ※「てくるまのせんじ」は本文(池田本)では、更衣の歌より前におかれている。</p>	<p>〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。 かぎりとしてわかるゝみちのかなしきはいのちなりけり 帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。</p>	<p>Kiritsubo was very happy on hearing this, and she read the following poem to the Emperor: Kagiri to te wakaruru michi no kanashiki ni ikamahoshiki wa inochi narikeri The Emperor gave Kiritsubo permission to ride in a hand cart, and she returned home.</p>	<p>She was very touched, and recited the following poem: It is so sad being parted, ending like this, and yet I hope I might still live. His Majesty gave permission for a hand carriage to be used for her. She went back to her mother's home.</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる 「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)</p>	<p>みかど、御むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかつぐる程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事もおぼしわかれず。</p>	<p>帝は、胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。</p>	<p>The Emperor's heart was filled with sorrow. Before the Emperor's messengers could even get to her home and back, he was told "During the night, Kiritsubo drew her last breath." The Emperor was stunned, and did not know what was happening.</p>	<p>His Majesty's heart was choked with sorrow. She died in less the time that it took for His Majesty's messenger to take a message and arrive back with the news, "the Kiritsubo Intimate took her last breath just after midnight." His Majesty was stunned and unable to understand what had happened.</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する 「御子は〜」(0644 / 九⑪ / 二四)</p>	<p>5 丁裏 みこをばかくても御らんぜまほしけれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも何事もおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙のひまなくなかれおはしますを、あやしと見奉給ふ。(「ひまなく」から5丁裏)</p>	<p>帝は、〈光源氏(若君)〉をこんな時でも御覧になりたいと思うけれど、喪中の人が宮殿にいることは前例がないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていっしやるのを、何だか変だと思えます。</p>	<p>He wanted to see Genji even now, but there was no precedent for someone in mourning clothes to be in the palace, so he had Genji return to his mother's home. Genji did not understand what was happening. He thought it was strange that the gentlewomen were sobbing, and that even the Emperor was unable to stop his tears.</p>	<p>Although he wanted to see Hikaru Genji, the young prince, even at a time like this, there was no precedent for a person in mourning to stay in the Palace, so he sent the prince back to the grandmother's home. The prince himself did not quite understand what had happened. Seeing that the ladies-in-waiting around him were crying and His Majesty 5 verso could not stop his tears, he looked puzzled.</p>

16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒にと泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684 /一〇②/二四)	かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ぼうの車に、したひのりて出給ふ。	きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。	The funeral, as normal, was held at a place called Otagi. Kiritsubo's mother wished to become the smoke of her cremation and disappear, she rode crying in the cart of the gentlewomen, as if chasing after her daughter.	The funeral was performed following the customary rites at the place called Otagi. In tears, the old woman wanted to disappear like smoke from the pyre of her daughter. Catching the carriage of a lady-in-waiting, she followed the funeral procession.
17 「むなしき〜」(0712 /一〇⑤/二四)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 /一〇⑧/二五)	内より御使ありて、三位のくらみをくり給ふ。	帝から使者があつて、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。	A messenger from the Emperor came, and the deceased Kiritsubo was raised to the third rank.	His Majesty sent a messenger to confer the Third Rank on the dead Intimate.
19 聡「もの思ひ知〜」(0775 /一〇⑩/二五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
20 「はかなく〜」(0809 /一一①/二六)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 /一一⑤/二六)	みかどは、一の宮を見給ふにも、わか宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ぼう、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす	帝は、第一皇子を御覧になつても、〈光源氏(若君)〉を恋しく思い出せばかりいて、侍女や乳母などをつかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕暮れに、〈靱負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。	Even when the Emperor looked at the First Prince, he only thought longingly of Genji. So he sent gentlewomen or wet nurses to ask after Genji. On a cold, windy night, he had a gentlewoman known as Yugei no Myōbu go to the house of Kiritsubo's mother.	Whenever he saw the first prince (the Crown Prince), he fondly remembered the young prince, Hikaru Genji. He would send a lady-in-waiting or nurse to enquire about how the boy was. One cold evening when there was a strong wind, a gentlewoman in the Emperor's service called Lady Myōbu was sent to the house of the Kiritsubo Intimate's mother.

22 「夕月夜の～」(0877 /一〇⑨/ 二六) ~ 25 『しばしは～』(0987 /一〇⑦/ 二八)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え～」(1043 /一〇⑬/ 二八)	勅書の歌 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそやれ	帝からの手紙に書いてあった和歌です。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそやれ	This is a poem that was in the letter from the Emperor: Miyagino no tsuyu fukimusubu kaze no oto ni kohagi ga moto o omoi koso yare	This is the poem in the letter from His Majesty: In the sound of the wind carrying the dew drops of the Miyagi field, I think about the small bush clover, the hagi flower— the little boy.
27 「命長さの～」(1094 /一三⑥/ 二九) ~ 30 「上もしか～」(1256 /一四⑩/ 三一)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える 「月は入り方～」(1315 /一五④/ 三二)	6丁表 命婦、かうみの母にあひて、 すゞむしのご糸のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな 〈うは君〉 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (「すゞむし」から6丁表)	〈鞍負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会って詠んだ和歌です。 すゞむしのご糸のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな 〈うは君〉 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人	This is the poem that Myōbu read to Kiritsubo's mother: Suzumushi no koe no kagiri o tsukushite mo nagaki yo akazu furu namida kana (Kiritsubo's mother said the following poem in response to Myōbu's poem:) Itodoshiku mushi no ne shigeki asaju ni tsuyu o kisouru kumo no uebito	This is the poem the gentlewoman gave to the late Intimate's mother: 6 recto Even the bell crickets cry with all their force. Tears flow without stopping through the long night. Then the Intimate's mother, Prince Hikaru's grandmother, sent this poem in reply to the Emperor: In these shallow grass fields the crickets cry more loudly still. More dewdrops (tears) fall, brought by the person in the clouds (the Palace).

<p>32 鞆負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358 /一五⑩ /三二)</p>	<p>をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうゐの残しをき給へる御さうぞく御くしあげのてうど、そへ給ふ。</p>	<p>良い贈り物をする場合ではありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。</p>	<p>This was not a situation to give good presents, so the mother sent clothing and a hairpin that her daughter had left behind.</p>	<p>There were no adequate keepsakes, so the mother accompanied the letter with garments and decorations used by the late Kiritsubo Intimate.</p>
<p>33 「若き人々〜」(1378 /一五⑩ /三二)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」(1420 /一六③ /三三)</p>	<p>みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざいの花御覧するやうにて、女ばう四五人さぶらはせて、御物語せさせ給へり。</p>	<p>帝は夜更けになってもおやすみならず、庭先に植えてある花を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をしていらっしゃいました。</p>	<p>Although it was late, the Emperor was not yet asleep. He had four or five gentlewomen chatting with him as he gazed at the garden plants.</p>	<p>His Majesty had not yet gone to sleep even though it was late in the night. He had several ladies around him. As he looked out on the flowers in the garden in front of his chamber, he had them tell stories.</p>
<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」(1469 /一六⑧ /三三)</p>	<p>御返し奉るうば君の歌。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝるなき</p>	<p>帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝるなき</p>	<p>This is the poem Kiritsubo's mother wrote in response to the Emperor's letter: Araki kaze fusegishi kage no kareshi yori kohagi ga ue zo shizugokokoro naki</p>	<p>This is the poem the Intimate's mother wrote earlier in response to the Emperor's poem: Since the protection of the wild wind is gone, I could not rest in peace thinking of the boy, the little bush clover.</p>
<p>36 「いとかうしも〜」(1504 /一六⑫ /三四)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の鉸に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)</p>	<p>6 丁裏 うば君の物語わか君の事などそうして、をくりもの御らんぜさすれば、 〈御〉 たづねゆくまぼろしもがなつてに ても玉のありかをそことしるべく 〔うば君〕から6 丁裏</p>	<p>〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や〈光源氏(若君)〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。 〈帝〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく</p>	<p>Myōbu told the Emperor what Kiritsubo's mother had said, as well as telling him about Genji. When the Emperor looked at the presents, he said the following poem: Tazuneyuku maboroshi mogana tsute ni te mo tama no arika o soko to shirubeku</p>	<p>6 verso The gentlewoman in His Majesty's service told him about the late Kiritsubo Intimate's mother and the boy, showing him the keepsakes. He recited this poem: If I only had the wizard who went in search of Yang Guifei, I would send him to find where her soul resides.</p>
<p>38 「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615 / 一七⑩ / 三五)</p>	<p>一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへの御つばねに参り給はず、月のおもしろきにあそび〔傍・あ=管絃〕をぞし給ふ。人々かたはらいたしと、きゝけり。</p>	<p>第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。</p>	<p>The mother of the First Prince, the Kokiden Consort, had not been called to the Emperor's side in quite a while, so she was playing music under the beautiful moonlight night. The palace men and gentlewomen said "How troublesome!" as they listened to the music.</p>	<p>For a long time the first prince's mother (the Kokiden Consort) was not summoned by His Majesty. She played musical instruments with her gentlewomen in the beautiful moonlit night. Hearing the music, the court officials and ladies-in-waiting thought, "It is rather inappropriate." Worried about the boy's grandmother,</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660 / 一八③ / 三六)</p>	<p>みかど、うば君のもとをおぼして、雲のうへもなみだにくるゝ秋の月 いかですむらんあさぢふのやど</p>	<p>帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月 いかですむらんあさぢふのやど</p>	<p>The Emperor worried about the life Kiritsubo's mother was leading, and read the following poem: Kumo no ue mo namida ni kururu aki no tsuki ika de sumuran asaju no yado</p>	<p>His Majesty composed the following poem: Even in this court, above the clouds, tears darken the autumn moon. How do they live in the house in the shallow grass?</p>
<p>41 「朝に起き〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>42 「さるべき契〜」(1731 / 一八⑫ / 三七)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>43 若宮参 内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵 「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)</p>	<p>7丁表 月日へて、わか君参り給ぬ。きよらにおよづけ給へば、いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮にさだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、世のうけひくまじき事を、はゞかり給て、色にもいひさせ給はず。 (「さだまり」から7丁表)</p>	<p>月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出しません。</p>	<p>Months and days passed, and Genji arrived at the palace. He had grown up to be quite handsome, and so the Emperor thought with unease that he might be spirited away by a god. In spring of the next year, the First Prince was made the Heir Apparent – even then the Emperor wanted to pass over the First Prince in favor of Genji, but the world would not accept it, and so he restrained himself, not letting it show on his face.</p>	<p>Time passed, and the young prince, Hikaru Genji, came to the court. He had grown so beautifully that people felt anxious, fearing that he might be abducted by a god. The next spring, when the first prince 7 recto was appointed as the Crown Prince, His Majesty wanted Hikaru Genji to be chosen in his place. As he knew that no one would accept this, he restrained himself and showed no sign of his wish in his face.</p>
<p>44 祖母君 は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去 「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)</p>	<p>彼うば君、なぐさむかたなきゆへにや、うせ給ぬれば、又これを、かなしびおぼす。</p>	<p>あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、またしても帝は、悲しいことだと思いにあります。</p>	<p>The mother of the Kiritsubo Intimate, perhaps because she had no way to soothe her heart, passed away. The Emperor's sorrows were only increased.</p>	<p>Inconsolable after the Intimate's death, the young prince's grandmother died. His Majesty was again deeply saddened.</p>
<p>45 若宮七歳の読書始めの後、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服 「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)</p>	<p>若君七つに成給へば、文はじめさせ給て、</p>	<p>《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、</p>	<p>Genji turned seven years old, and so they did the ceremony of his first reading.</p>	<p>When Hikaru Genji was seven years old, His Majesty had him perform the ceremony of the First Reading.</p>
<p>46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮 「女御子たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)</p>	<p>御がくもんはさる物にて、琴笛のねにも、雲井をひゞかし給へり。</p>	<p>勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。</p>	<p>He was good not only at studying, but at playing the koto and flute, surprising the people in the palace.</p>	<p>The young prince astounded everyone at court, not only by his academic ability but also by his musical skill on stringed koto and flute.</p>

47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を覩て不思議がる「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)	其比こまうどのさうにん奉りて、	そのころ《高麗人の相人》がやってきて、	At this time, a seer from Koma had arrived.	At that time in the capital, a Korean physiognomist was visiting.
48 「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑬ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
49 「帝、かしてき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)	此君のざえかしく、かたちのきよなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、をくり物どもさゝげけり。此君をたゞ人にはあたらしけれど、源氏にしたてまつるべくおぼしをきてたり。	この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この《光源氏(光る君)》を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。	He praised Genji for having excellent talent and learning and a handsome appearance, named him "The Shining Lord," and gave presents. The Emperor thought it was regrettable to remove Genji from the imperial line, but he decided to make him a commoner with the Minamoto surname.	He saw how the youth excelled academically and he praised his beauty. He named him Hikaru Kimi, the Shining Lord, and gave him presents. His Majesty regretfully decided to remove the boy from the imperial family and make him a commoner with the surname of Minamoto (Genji).
ナシ	7 丁裏 絵	〈絵2〉光源氏七歳のときに、迎賓館で、光源氏が高麗の相人に占いをしてもらっているところ(7 丁裏)	(Second picture: The 7-year old Genji, at the State Guest House, has his future told by the seer from Koma.)	7 verso [Figure 2] Hikaru Genji at the age of seven when he received divination from the Korean physiognomist at the Palace for Foreign Guests.
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思ふ帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月こそへ〜」(2147 / 二一⑬ / 四一)	8 丁表 年月こそへて、御休所の御事わすれさせ給はず、御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐれ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。〔割・其を藤つほと／申也〕(「年月」から8 丁表)	年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しいということ、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。〔その人を、〈藤壺〉といいます。〕	Even after some years passed, still the Emperor could not forget the Kiritsubo Intimate, and was unable to soothe his heart. A Dame of Staff serving the Emperor told him that the fourth princess of a previous Emperor was extremely beautiful. (This person is called Fujitsubo.)	8 recto Even with the passage of time, His Majesty did not forget the Kiritsubo Intimate (the Kiritsubo Haven), and could not console himself. A lady-in-waiting told him about a former emperor's fourth princess, who was very beautiful. (The princess was called Fujitsubo.)

52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく～」(2173 / 二二② / 四一)	昔の御休所によく似給て、	昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、	She greatly resembled the Kiritsubo Intimate,	She looked very similar to the late Kiritsubo Intimate (the Kiritsubo Haven)
53 「母后、「あな～」(2233 / 二二⑧ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
54 「さぶらふ人々～」(2264 / 二二⑩ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしたいに移る「これは人の～」(2295 / 二三② / 四三)	人のきほもまさり給へば、をのづから御心うつりにけり。	身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ちに移っていきました。	and was very high ranking, so the Emperor's feelings naturally shifted to Fujitsubo.	and was also high born. His Majesty's affections gradually turned to her.
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は～」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、みかどの御あたりさり給はねば、藤つぼにもしげくわたり給ふ。	〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところにも《帝》と一緒によくついでいきます。	Since Genji never left the Emperor's side, he was often with the Emperor in Fujitsubo's quarters.	As Hikaru Genji stayed close beside His Majesty, he often accompanied the Emperor when he visited Fujitsubo.
57 「母御息所も～」(2370 / 二三⑨ / 四三)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

58 「上も、限りなき〜」 (2396 / 二三① / 四四)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
59 弘徽殿と藤壺が陰悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃 「こよなう〜」 (2433 / 二四① / 四四)	光君に立ならび、御おぼえもとリ／＼なれば、かゞやく日の宮ときこゆ。	〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとても愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。	The Emperor greatly loved both Genji and Fujitsubo, so Fujitsubo was called the "Princess of the Shining Sun" to match with Genji's title of the "Shining Lord."	As Hikaru Genji and Fujitsubo were both greatly loved by His Majesty, people called Fujitsubo a Shining Princess to match Hikaru Genji, the Shining Lord.
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う 「この君の〜」 (2483 / 二四⑤ / 四四)	源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、	When Genji turned twelve, he had the coming of age ceremony known as the genpuku.	At the age of twelve, Hikaru Genji went through the ceremony of Coming of Age initiation or Genpuku, as it is known.
61 「おはします〜」 (2537 / 二四⑩ / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
62 「かうぶり〜」 (2580 / 二五① / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする 「引き入れの〜」 (2623 / 二五⑥ / 四六)	ひきいれの大臣の、みこばらの姫君を、そひぶしにとさだめ給ふ。〔割・其あふひの上也〕	《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にすることが決定しました。〔その妻が〈葵の上〉です。〕	He was given as a wife the daughter of the Minister of the Left, whose mother was a princess. (This person is called Aoi.)	It was decided that he should take as wife the daughter of an imperial princess and the Minister of Left, who had conducted Genji's initiation. This wife was Lady Aoi.
64 「さぶらひに〜」 (2658 / 二五⑨ / 四六)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

ナシ	8丁裏 絵	〈絵3〉光源氏十二歳のときに、宮殿で光源氏が元服の儀式をした場面（8丁裏）	(Picture 3: The 12-year old Genji has his coming of age ceremony at the palace.)	8 verso [Figure 3] Hikaru Genji at the age of twelve, the scene of the ceremony of Coming of Age.
65 左大臣 は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拜舞する 「御盃のついで〜」(2703 /二五⑭ /四七)	9丁表 〈御〉 いとくなき はつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 左大臣御返し。 むすびつる 心もふかきもとゆひに こきむらさきの いろしあせずは (〈御〉から9丁表)	〈帝〉 いとくなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。 むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは	The Emperor read this poem: Itokinaki hatsumotoyui ni nagaki yo o chigiru kokoro was musubi kometsu ya The Minister of the Left said this poem in response: Musubitsuru kokoro mo fukaki motoyui ni koki murasaki no iro shiasezu ni	9 recto His Majesty: Into this, the first knot of young hair, did you bind a wish to enjoy long [married] life? The minister replied by reciting the following poem: As the colour of the ribbon binding the knot is dark purple, the colour of fate, I hope that the relationship will not fade.
66 左大臣 や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大 「左馬寮の〜」(2730 /二六④ /四七)	左のつかさの御馬、蔵人所の鷹すへて、給り給ふ。みはしのもとに、上達部みこたちつらねて、ろくどもしなへに給り給ふ。	左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。	The Emperor gave the Minister a horse from the Left Imperial Stables, and a perched falcon from the Chamberlain's Office. Then the noblemen and princes lined up at the stairs to receive gifts from the Emperor befitting their station.	The minister received a horse from the Imperial Stables of the Left with a falcon belonging to the Chamberlains' Office. Senior nobles and princes lined up at the steps of the palace and received gifts according to their rank and status.
67 元服し その夜、おとゞの御里に源氏の君また光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚 「その夜〜」(2768 /二六⑥ /四七)	その夜、おとゞの御里に源氏の君また光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚 「その夜〜」(2768 /二六⑥ /四七)	その夜、〈左大臣〉の家に〈光源氏〉は行きました。〔〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です。〕	That night, Genji went to the Minister of the Left's house (Genji is 12, Aoi is 16 years old).	That night, Hikaru Genji went to the residence of the Minister of the Left. (Hikaru Genji was twelve and Lady Aoi was sixteen.)
68 「この大臣の〜」(2800 /二六⑩ /四八)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
69 左大臣 家のおとゞの蔵人少将には、右大臣殿の家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う 「御子ども〜」(2833 /二七① /四八)	おとゞの子蔵人少将には、右大臣殿の家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う 「御子ども〜」(2833 /二七① /四八)	〈左大臣〉の息子の〈蔵人少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。	The Minister of the Left's son, a Chamberlain Lieutenant, was married to the fourth daughter of the Minister of the Right.	The Minister's son, the Chamberlain Lieutenant, was married to the fourth daughter of the Minister of Right.

70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 /二七④ /四九)	9 丁裏 源氏の君は、うへのつねにめしまつはさせ給へば、心やすく里ずみもし給はず。藤つぼの御ありさまをたぐひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見めにるものなくもおほしけるかなとおぼせば、おほいどのゝ君には心もつかず。(「里ずみ」から9丁裏)	〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆっくりと〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめったにないものと思って、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思うので、〈葵の上(大殿の君)〉とはあまり親しくなりません。	Genji was always with the Emperor, so he was not able to leisurely spend time at the Minister of the Left's house. Genji thought that Fujitsubo was like few other woman in the world, and he wanted to marry someone like Fujitsubo. He wondered if there could be another woman like Fujitsubo, and so he didn't think of Aoi very fondly.	Hikaru Genji was ordered to attend His Majesty at all times, so he could not relax at the residence of the Minister of the Left. Thinking that no one in the world was like Fujitsubo, Hikaru Genji often wished that he were married to a lady like her. He did not feel much affection to Aoi, the lady at His Excellency's residence.
71 宮中で の光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う 「大人になり〜」(2912 /二七⑨ /四九)	おとなになり給てのちは、有しやうにみすの内にもいれ給はず。御あそびのおり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、ほのかなる御こゑなぐさめにて、内ずみのみこのましようおぼえ給ふ。	大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。	Once Genji had become an adult, he could no longer go into the blinds to see Fujitsubo the way he had done as a child. At music-making times, he felt the tone of the koto or flute, and the faint voice of Fujitsubo comforted him, and he only spent time in the palace.	His Majesty would not let Hikaru Genji come inside the blinds where Fujitsubo was. Hikaru consoled himself by accompanying her koto with his flute whenever there was a concert, or by listening to her faint voice. He spent as much time as he could in the palace.
72 「内裏には〜」(2976 /二七⑭ /五〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
140326_伊井小見出し付加	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

●ロシア語訳『十帖源氏』データ

小見出し	十帖源氏 校訂本文	十帖源氏 現代語訳	"Десять буклетов о Гэндзи" (ロシア語・母語話者 / マサイ・セリモフさん訳)	Краткое содержание «Повести о Гэндзи»; сокращённый до десяти томов вариант (ロシア訳・非母語話者 / 土田久美子さん)
ナシ	<p>1 丁裏・2 丁表</p> <p>光源氏物語は、村上天皇女十宮大斎院より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子や侍る」と、御所望の時、式部をめして「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にかほければ、先、須磨の巻より書たると也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひしを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観血脉許可也。堤中納言兼輔—惟正〔傍・=因幡守〕—為時〔傍・=越前守〕—一女〔傍・=紫式部〕母は為信〔傍・=摂津守〕女堅子〔「四には」から2丁表〕</p>	<p>『源氏物語』の誕生</p> <p>〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王(大斎院)〉が、〈一条院〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は五十四巻)、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌も本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていたのを、この物語の一部で〈紫の上〉のことをとてもらさしく書いていたことから、「紫式部」と呼ぶ名が変えられたのです。〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脉を許されたのです。</p> <p>紫式部の系図</p> <p>堤中納言兼輔—因幡守惟正—越前守為時—一女(紫式部) 母は摂津守為信女の堅子です。</p> <p>(注)一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。</p>	<p>""Двор Павлоний""</p> <p>Десятая дочь императора Мураками, которую звали Сэнси Найсинно (Дайсайин) однажды спросила у жены Итидзё: императрицы Фудзивара-но Акико (Сёто:монин): ""Были ли написаны новые произведения?"". Императрица Акико обратилась с просьбой к придворной даме Мурасаки Сикибу: ""Пожалуйста, постарайся написать новое литературное произведение"". Пребывая в храме Исияма, Мурасаки Сикибу молилась о том, чтобы к ней снизошло вдохновение. И в ночь пятнадцатого августа, когда на водной глади озера Бива отразилась полная луна, на неё снизошла идея написать свиток ""Сумако"".</p> <p>Свитки ""Повести о Гэндзи"" имеют в своей основе шестнадцать свитков учений буддийской школы Тэндай (ныне ""Повесть о Гэндзи"" насчитывает пятьдесят четыре свитка). Также следует отметить, что свитки получили свои названия по текстам четырёх благородных истин буддизма: ""у:мон, ку:мон, яку:якуку:мон, хиухику:мон"". Она решила определить названия свитков следующим образом: первый – текст повести, второй – вака, третий – текст и вака, четвёртый – отсутствие вака и текста. Изначально [поэтесса] называла себя ""Фудзи Сикибу"", но необыкновенно переданный ею образ Мурасаки в одной из частей повести повлиял на изменение её имени на ""Мурасаки Сикибу"". Существует также легенда о том, что Мурасаки Сикибу является воплощением богини Каннон. Верховный священнослужитель признал её распространительницей ""трёх догм"" школы Тэндай.</p> <p>Генеалогия Мурасаки Сикибу:</p> <p>Цуцуми Тю:нагон Канэсукуэ, Инаба-но ками Корэмаса, Этидзэн-но ками Тамэтоки, Придворная дама (Мурасаки Сисибу). Мать – Сэццуками Тамэсиннэ-но Катако.</p>	<p>Краткое содержание «Повести о Гэндзи»; сокращённый до десяти томов вариант (ロシア訳・非母語話者 / 土田久美子さん)</p> <p>Рождение «Повести о Гэндзи»</p> <p>Принцесса Сэнси, десятая дочь императора Мураками (Дайсайин; Великая принцесса, служащая в храме Камо), изволила попросить Сёси Фудзивара, монахино-императрицу Дзётэмонъин (супруга-монаха бывшего императора Итидзё), «Есть ли у вас какая-нибудь новая повесть?». Императрица вызвала Мурасаки Сикибу и велела ей, «Сочини как-нибудь новую повесть.» Мурасаки Сикибу была в храме Исияма и молилась об этом. Как раз в это время полная луна 15-го августа по лунному календарю отразилась в озере Бива, и сцена повести пришла ей на ум. Передают, что именно поэтому она сначала писала том «Сума». Количество томов «Повести о Гэндзи» основано на 60-томных канонах буддийской секты «Тэндай» (А нынешняя «Повесть о Гэндзи» состоит из 54 томов), и названия томов происходят от буддийского учения «Четырёх истины» – для того, чтобы достигнуть истины, есть следующие ворота; ворота «У», ворота «Ку», ворота «Якуякуку», и ворота «Хиухику».</p> <p>[Вторая сфальцованная страница, лицевая сторона]</p> <p>Названия томов даны, во-первых, от текста повести, во-вторых, от стихотворений «вака», сочинённых в данном томе, в-третьих, и от текста и от стихотворений, а в-четвёртых – ни от текста, ни от стихотворений.</p> <p>Первоначально автора этой повести звали «То Сикибу». Так как в этой повести есть сцены, где прекрасно описано о госпоже Мурасаки, писательница переименовалась в «Мурасаки Сикибу». Одна легенда говорит, что она является олицетворением «Каннон» - буддийского святого спасителя. Высший монах, живший в храме Данна, дал ей позволение наследовать учение буддийской секты Тэндай «Иссин-санган»</p> <p>Родословие Мурасаки Сикибу</p> <p>Канэсукуэ (Тайный советник, дом которого находится недалеко от мола реки Камо) – Корэмаса (губернатор префектуры Инаба) – Тамэтоки (губернатор префектуры Этидзэн) – дочь (Мурасаки Сикибу)</p> <p>Её мать – Кэнси, дочь Тамэнбу, губернатора префектуры Сэццу.</p> <p>(Примечание) Частью оно отличается от общепринятого мнения. Схожее родословие помещено в комментарии «Повести о Гэндзи» под названием «Когэцу-сё».</p>
ナシ	<p>2 丁裏</p> <p>絵</p>	<p>〈絵1〉八月十五日の夜、石山寺で、紫式部が、『源氏物語』を書きはじめた場面 (2丁裏)</p>	<p>Рис. 1. Сцена о том, как Мурасаки Сикибу начала писать «Повесть о Гэндзи» в ночь на пятнадцатое августа в храме Исияма.</p>	<p>[Вторая сфальцованная страница, оборотная сторона]</p> <p>Иллюстрация 1: Сцена, когда ночью 15-го августа по лунному календарю в храме «Исияма» Мурасаки Сикибу начала сочинить «Повесть о Гэндзи».</p>

<p>1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する 「いづれの御時〜」(0001 / 五① / 一七)</p>	<p>3 丁表 いづれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける 中に、いとやんごとなきゝはにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。〔割・いづれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きりつぼの更衣」の事也。〕 梨壺、照陽舎。 桐壺、淑景舎。 藤壺、飛香舎。 梅壺、凝花舎。 雷鳴壺、襲芳舎。 此きりつぼにすみ給ふかうみを、御てうあひあれば、きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうみそねみて、 〔「いづれ」から3丁表〕</p>	<p>(桐壺) いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとても愛されていらっしやる女性がありました。〔「いつの時代」とは、醍醐天皇)の時代のことです。帝に愛されていらっしやる女性というのは、〈桐壺の更衣)です。〕宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お后の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前と呼ばれます) この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを〈桐壺の帝)ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日〈桐壺の更衣)が帝の近くにいることに、嫉妬をしてばかりいました。</p>	<p>Двор Павлоний В какую пору то произошло? Среди множества придворных дам и фрейлин, прислуживающих при дворах императриц, была барышня не особо высокого ранга, но сумевшая удостоиться высочайшей любви императора. [""В бакую пору"" - имеются в виду годы правления императора Дайго. А барышня сумевшая удостоиться большой любви императора - дама, прислуживающая при дворе Павлоний]. Грушевый двор при дворце по-другому именовался ""Сё:ё:ся"" Двор Павлоний - ""Сигэйся"" двор Глициний - ""Хигё:ся"" Сливовый двор - ""Гё:ка:ся"" двор Раскатов Грома - ""Сю:хо:ся"". (Знатных дам именовали по названиям тех или иных дворов, при которых они жили). Высочайшей любви Государя удостоилась дама, жившая при дворе Павлоний, потому нынешнего Государя стали величать императором двора Павлоний.</p>	<p>[Третья сфальцованная страница, лицевая сторона] «Кирицубо» – Павильон в саду павлонии войлочной При каком государе то было?... Среди многих таких государских наложниц как «Нёго» и «Кои», была одна – не особо высокого происхождения, и чрезвычайно любима государем. (То было при императоре Дайго[897-930 н.э.]. Любимца государя – Кирицубо-но Кои, «наложница, живущая в павильоне в саду павлонии войлочной в государском дворце».) Павильон «Насицубо» является иным названием павильона «Сё-ё». А павильон «Кирицубо» – иное название павильона «Сигэй», павильон «Фудзицубо» – иное название павильона «Хигё», павильон «Умэцубо» – иное название павильона «Гёка», павильон «Каминари» – иное название павильона «Сихо». (Государских наложниц прозывают за павильоны, где они живут.) Так как нынешний государь любил Кои, которая живёт в павильоне «Кирицубо», он получил прозвище «Государь Кирицубо». Многие Нёго и Кои завидовали ей и постоянно ревновали к тому, что только она служила Государю каждый день.</p>
<p>2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる 「朝夕の宮仕〜」(0031 / 五④ / 一七)</p>	<p>3 丁裏 あさゆふの御みやづかへにつけても、心をのみうごかし、うらみををふつもりにや、あつしく成ゆき、〔割・をもぎ／病也〕物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれにおぼして、人のそしりをも、えはゝからせ給はず 〔おぼして〕から3丁裏)</p>	<p>そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていきました。〔重い病気です〕心細い感じがして、実家に帰っていることが多い〈桐壺の更衣)のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っている、愛情をお止めになることができません。</p>	<p>Множество придворных дам и фрейлин мучились завистью и ревновали, что каждый день барышня из двора Павлоний находилась подле императора. Сглаз придворных дам дал о себе знать, барышня стала чахнуть. [Тяжелая болезнь] Чувство беспокойства заставляло проводить её всё больше времени в родительском доме. Думы императора о даме из двора Павлоний становились невыносимы и, не глядя на злословие окружающих, непоколебима была любовь Государя.</p>	<p>Может быть, в результате того, что она возбудила ревность в других наложницах слишком часто, она ослабела. □ Она тяжело больна. □ Она чувствовала беспокойство и часто возвращалась в родной дом, [Третья сфальцованная страница, оборотная сторона] и Государь испытал жалость к ней всё больше и больше – несмотря на людской упрёк, он не мог удержать свою любовь к ней. Поскольку в</p>
<p>3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る 「唐土にも〜」(0073 / 五⑧ / 一七)</p>	<p>「もろこしにもかゝる事のおこりにこそ、世もみだれ、あしかりけれ」と、あぢきなう、人のもてなやみくさになりて、楊貴妃のためしひもき出つべう成ぬ。</p>	<p>中国でもこういう恋愛関係が原因となって、世も乱れ、とんでもないことにもなると、世間の人もおもしろくない気がして、人々の悩みの種にもなり、中国で〈玄宗皇帝)を夢中にさせた〈楊貴妃)の話に例えられそうになりました。</p>	<p>- Воспомните, что подобная же любовная связь стала причиной смут в Китае, - молвили. Средь окружения пошли волнения, и это было поводом для огорчения. Уподобляли сей случай тому, что произошёл в Китае, когда император Суань-Цзун потерял голову от [любви] к Ян-гуйфэй.</p>	<p>Китае такими любовными отношениями вызывались восстания и беспорядки, люди были недовольны этим положением и это служило для них предметом сетования – Кирицубо-но кои была чуть не уподоблена знаменитой китаянке Ян Гуйфэй, любимая наложница императора Сюань-цзуна.</p>
<p>4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活 「父の大納言〜」(0103 / 五⑩ / 一八)</p>	<p>此かうみの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼にもをとりに給はねど、事とある時は、より所なく、心ほそげ也。</p>	<p>この〈桐壺の更衣)の父はすでに死んでいて、母親の〈北の方)は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けずにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。</p>	<p>Отца дамы из двора Павлоний уже не было в живых, а мать, являлась его главной женой. Она обладала благородным происхождением и являлась приверженкой былых традиций, почему делала всё, чтобы [её дочь] ничем не уступала другим знатым особам высокого происхождения. Однако, всё же случись что-то важное, ей не на кого будет положиться.</p>	<p>Её отец уже не был в живых, а её мать, госпожа в северном помещении, благородного происхождения и придерживалась старинных обычаев, поэтому она прилагает усилия, чтобы её дочь не уступила другим государским наложницам. Однако, при каких-нибудь важных церемониях у неё не на кого опереться и она в беспомощном состоянии.</p>
<p>5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの第宮を寵愛する 「前の世にも〜」(0136 / 六① / 一八)</p>	<p>さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよなる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。〔割・其を光君と／いふ也〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまうけの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、ならび給ふべくもあらず。</p>	<p>(桐壺の帝)と〈桐壺の更衣)は)前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〕といひます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御)が生んだ子供なので、間違いなく皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)の美しさには、とうてい勝つことができません。</p>	<p>(Император двора Павлоний и барышня из двора Павлоний) Не потому ли вместе они, что связывает их судьба? И родился у них принц, красотой своей подобный драгоценному нефриту. [Его назвали блистательным Гэндзи (Блистательным принцем)]. Первый принц был рождён придворной дамой, дочерью Правого министра, и не было сомнений, что именно он станет наследным принцем, посему все чрезвычайно заботились о нём. Но красота блистательного Гэндзи (юного принца) могла взять верх.</p>	<p>Может быть, государь и Кирицубо-но кои были тесно связанным в предыдущей жизни? ...у них даже родился такой красивый принц – словно драгоценный камень. □ Его зовут Хикару-гэндзи или Хикару-кими. □ Первый принц родился у Нёго, дочери правого министра, и люди относятся к нему бережно – ведь он же непременно будет назначен наследным принцем, но в красоте он не идёт ни в какое сравнение с Хикару-гэндзи (юным господином). После того, как родился Хикару-гэндзи (юный господин), государь</p>

6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く「はじめより〜」(0184 / 六⑦ / 一九)	4 丁表 此みこ生れ給て後は、みかど御心ことにをきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、一のみこの女御は、おぼしうたがへり。 (「御心」から4丁表)	(光源氏(若君))が生まれてからというもの、帝はこの(光源氏)をととても大切にしていられしやいましたので、(光源氏)が、皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である后は、心の中で心配しています。	С самого рождения блистательный Гэндзи (юный принц) был лелеем Государем, что вызывало беспокойство в душе императрицы, матери первого принца: "Не случится ли такого, что блистательный Гэндзи станет наследным принцем?".	[Четвёртая сфальцованная страница, лицевая сторона] относился к нему так бережно, что у наложницы-матери первого принца нет покоя на сердце, подозревая, что вдруг Хикару-гэндзи будет назначен наследным принцем.
7 「人より先に〜」(0248 / 六⑩ / 一九)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」(0288 / 七③ / 二〇)	あまたの御かた／＼を過させ給ひ、ひまなき御前わたり、人の心をつくし給ふも、ことほり也。あまりうちしきりまうのほり給ふおろし／＼は、うちはしわた殿、こゝかしこの道にあやしきわざをして、御をくりむかへ人のきぬのすそ、たへがたう、まさなき事ともあり、又ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。	帝が、たくさんの后たちの部屋の前を素通りして、何度も何度もお通いになることに、他の后たちが嫉妬しているのも、もつともなことです。あまりに(桐壺の更衣)が帝に呼び寄せられる回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、(桐壺の更衣)が通る、あちらこちらの道にいたずらがされていました。それは、見送りや出迎の侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、(桐壺の更衣)が、絶対通らなければならぬ中廊下の扉を閉めて、こちらとあちらで協力し、(桐壺の更衣)を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。	Государь, минувя покои многих придворных дам, вызывал их ревность, и она усиливалась с каждым разом, когда он проходил мимо. Слишком часто он стал приглашать к себе даму из двора Павлоний и количество этих посещений становилось лишь больше. На своём пути дама из двора Павлоний отовсюду, на перекидных мостиках, переходах, дворцовых коридорах слышала шутки, опускающиеся в её сторону. Отчего подолы кимоно фрейлин встречавших и провожавших её были больше не в силах этого вынести. Порой, чтобы дама из двора Павлоний не могла пройти, они запирали створки коридоров, а иногда, сговорившись, и вовсе запирали её,	Государь изволит посещать Кирицубо-но кои много и много раз, проходя мимо покои многих наложниц – это же естественно, что они завидуют. Становилось слишком чаще и чаще, что Государь вызывает её к себе. Тогда неприятности были сделаны там и сям в таких коридорах государского дворца, как, на переносных мостах и мостах с крышами между павильонами, где ходят Кирицубо-но кои; провожающие и встречающие служанки делали ей совершенно невыносимые, возмутительные вещи своими подолами кимоно. К тому же часто случалось также, что служанки на той и другой сторонах сообща закрыли дверь в внутреннем коридоре, куда ей необходимо пройти, и заперли её, ставя её в тяжёлое, затруднительное положение.
9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」(0344 / 七⑩ / 二〇)	4 丁裏 みかどいとゞあはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ。かうみを、ほかにうつし、此かうみのうへつばねに給はる。そのうらみ、ましてやらんかたなし。 (「そのうらみ」から4丁裏)	帝はますます(桐壺の更衣)をかわいそうに思つて、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、(桐壺の更衣)のもう一つの部屋としました。部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることがありません。	""часто ставя в неловкое положение. Государь, в конце концов, сжалившись над ней, приказал перевести её во дворец Корё.; переселив в другие покои придворную даму низкого звания. Дама же из двора Павлоний стала обладательницей еще одних покоев. Ненависть придворной дамы, которую переселили так и не утихла. ""	Государь пожалел её ещё более – он перенёс в другую комнату наложницу низкого положения, которая жила в комнате павильона «Коро» и подарил её Киццубо-но кои. [Четвёртая сфальцованная страница, обратная сторона] Ненависть той перемещённой наложницы никак не рассеяется.
10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378 / 七⑪ / 二一)	みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもをとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめぐらしまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。	(光源氏(若君))は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めったにないほど素晴らしいので、(光源氏(若君))を他の后たちも憎むことができません。	В год, когда блистательному Гэндзи (юному господину) исполнилось три года, была проведена церемония надевания широких штанин Хакама. [По своей пышности] это событие ничем не уступало церемонии первого принца. Так редко встречается столь прекрасная внешность и характер, что ни одна придворная дама не питала ненависти к блистательному Гэндзи.	Когда Хикару-гэндзи (юному господину) исполнилось 3 года, совершалась церемония первого надевания «хакама»-шаровар. Она не уступила в пышности той же церемонии наследного принца. Внешность и характер Хикару-гэндзи (юного господина) такие редкие, прекрасные, что даже другие наложницы не могут питать ненависть к нему.
11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439 / 八② / 二一)	其年の夏、御母御休所〔割・更衣の事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまさらにゆるさせ給はず。日々ををり給て、いとよはうなれば、更衣の母、なく／＼、そうして、みこをはとゞめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。	その年の夏、母の御息所〔桐壺の更衣〕のことです。〕は、病気になるって実家へ帰ろうとしますが、(桐壺の更衣)がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、(桐壺の更衣)の母は、泣きながらお願いをして、(光源氏(若君))を宮中に残したまま、(桐壺の更衣(御息所))だけ帰ることにしました。	Летом того же года мать-Миясудокоро (дама из двора Павлоний) захворав, решила вернуться в родительский дом. Но император уже привыкший к тому, что ей часто нездоровиться не позволил ей уехать. С каждым днём болезнь усиливалась, [Миясудокоро] зачухла, почему её мать в слезах молила: ""оставь ты во дворце блистательного Гэндзи (юного принца), лишь бы ты (Миясудокоро) могла вернуться домой"".	Летом этого года его мать, Миясудокоро Кирицубо-но кои заболела и собиралась вернуться в родительский дом, но государь, привыкнув, что она постоянно слабая, никак не давал ей позволение уйти из дворца. С каждым днём её болезнь становилась тяжелее и тяжелее, и она совсем ослабела – поэтому её мать со слезами убедительно попросила Государя и было решено, что возвращается в родительский дом только Кирицубо-но кои (Миясудокоро), оставляя Хикару-гэндзи (юного господина) в дворце.

12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)	5丁表 うつくしき人のおもやせあるかなきかにきえものし給ふを御覧じて、きしかたゆくす糸、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげにて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、をくれさきだゝじとちぎらせ給けるを、打すとゝはえゆきやらじと、の給はするを、(「にて」から5丁表)	帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をするのもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行こうと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、	Государь, глядя на Миясудокоро, отчётливо осознал, что любимая его госпожа из двора Павлоний была истощена. Забыв о былом и о будущем, он клятвами стал усыпать её, но, увы, ответить она была уже не в силах. Лик её был наполнен горечью, а тело немощно. Государь промолвил: ""Мы обещали друг другу быть спутниками [в этой жизни] и вместе покинуть этот мир. Вы не можете меня оставить"".	Государь, увидев, что прелестная Кирицубо-но кои осунулась и потеряла сознание, даёт ей клятвы о прошлом и будущем, и т. д., а Кирицубо-но кои не может даже вымолвить ответа. У неё мучительное лицо
13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537 / 八⑩ / 二二)	女も、いみじと見奉りて、かぎりとして わかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。 ※「てくるまのせんじ」は本文(池田本)では、更衣の歌より前におかれている。	〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。 かぎりとしてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり 帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。	Душа её наполнилась радостью, и она сложила следующие строки: - Конец, разлуки печальный путь, А ведь так хочется жить. Император позволил ей сесть в паланкин, и она отправилась в родительский дом. Государь же наполнился печалью, и в его груди всё ждалось.	[Пятая сфальцованная страница, лицевая сторона] и нет сознания. Государь сказал, «Мы же поклялись вместе отправить и в дорогу к смерти, не оставляй меня», и Кирицубо-но кои (женщина) была так благодарна, что сложила следующее стихотворение. かぎりとしてわかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり Государь позволил ей ехать на государственной ручной двуколке «тэгурума», и она уехала в родительский дом.
14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)	みかど、御むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかくぐる程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事もおぼしわれず。	帝は、胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。	Государев гонец, посланный проведать больную, ещё не вернулся. - Как перевалило за полночь, дыхание её иссякло, - сообщили ему. Горечью наполнилось сердце Государя, а разум помутнел.	Он был так опечален, что у него шемило сердце. Даже ещё до того, как посланец, отправленный государем для сочувствия и справки о её здоровье, не успел вернуться обратно в дворец, его осведомили, «Кирицубо-но кои скончалась поздней ночью». Он перепугался и потерял рассудка.
15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)	5丁裏 みこをばかくても御らんぜまほしけれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも何事ともおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙のひまなくなかれおほしますを、あやしと見奉給ふ。(「ひまなく」から5丁裏)	帝は、〈光源氏(若君)〉をこんな時でも御覧になりたいと思うけれど、喪中の人が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていってしまうのを、何だか愛だと見えています。	Хоть и желал он видеть блистательного Гэндзи (юного принца), но во дворце соблюдался траур и во избежание прецедентов, ребёнка было решено передать семье матери. Маленький принц ничего не осознал. Он лишь наблюдал за странной картиной, как дамы горюют, и Государь сдержат не в силах слёз.	Он желал видеть Хикару-гэндзи (юного господина) и при таких обстоятельствах, однако, не было прецедента, когда присутствуют в дворце те, кто в трауре, поэтому он вернул сына в дом матери. Хикару-гэндзи (юный господин) даже не понимает, что случилось. Он подозрительно смотрит, как громко плачут окружающие прислужницы и слёзы у государя не [Пятая сфальцованная страница, оборотная сторона] прекращаются ни на минуту.
16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)	かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ばうの車に、したひのりて出給ふ。	きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。	Было принято решение провести похоронный обряд в местечке под названием Атаго. Мать рыдала: ""Ах, если бы могла я исчезнуть вместе с дымом от погребального костра!"" Нагнала и села она в паланкин с дамами, провожавшими [останки].	Как положено, состоялся похоронный обряд в Отаги. Мать Кирицубо-но кои, со слезами говоря, что она хотела бы вместе с дочерью превратиться в дым от кремации и исчезнуть, еле отправилась, как будто она догнала двуколку провожающих прислужниц.
17 「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)	内より御使ありて、三位のくらみをくり給ふ。	帝から使者があつて、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。	Прибыл и государев гонец с вестью о том, что покойной был присвоен третий ранг.	Государь направил посланца и присвоил покойной Кирицубо-но кои третий ранг.

19 聡「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑪ / 二五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
20 「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に鞍負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)	みかどは、一の宮を見給ふにも、わか宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ばう、めのとなどをつかはし、ありさまきこしめす。野分たちはた寒き夕ぐれ、ゆげいの命婦をつかはさる。	帝は、第一皇子を御覧になつても、〈光源氏(若君)〉を恋しく思い出してばかりいて、侍女や乳母などをつかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕暮れに、〈鞍負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。	Несмотря на то, что первый принц был подле императора, Государь всё равно вспоминал любимого Гэндзи, и то и дело посылал фрейлин и кормилиц справляться о нём. Однажды вечером, поднялся сильный ветер и похолодало, в дом матери покойной барышни из двора Павлоний была послана придворная дама Югэй-но Мё:бу.	Государь, видя первого принца, лишь с тоской вспоминал Хикару-гэндзи (юного господина) и осведомлялся о нём через прислужниц и кормилиц. Однажды вечером, когда дул сильный ветер и в коже чувствовалась прохлада, он послал в дом матери Кирицубо-но кои государскую служащую Югэй-но мёбу.
22 「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六) ~ 25 「『しばしは〜』(0987 / 一二⑦ / 二八)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった「目も見え〜」(1043 / 一二⑬ / 二八)	勅書の歌 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそやれ	帝からの手紙に書いてあった和歌です。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそやれ	При ней было государево письмо с вака: - По дворцовым садам капли росы разметались, шум ветра... И думаю я о маленьком кустике Хаги.	В его письме написано следующее стихотворение. みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそやれ
27 「命長さの〜」(1094 / 一三⑥ / 二九) ~ 30 「上もしか〜」(1256 / 一四⑩ / 三一)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)	6丁表 命婦、かうみの母にあひて、 すゝむしのご糸のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな 〈うは君〉 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (「すゝむし」から6丁表)	〈鞍負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会つて詠んだ和歌です。 すゝむしのご糸のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな 〈うは君〉 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人	Югэй-но Мё:бу встретившись с матерью дамы из двора Павлоний, сложила вака: - Как нет предела стрёкоту сверчков. Льются слёзы мои в эти долгие, осенние ночи. (В ответ на вака, сложённое Югэй-но Мё:бу, мать барышни из двора Павлоний (госпожа бабушка) ответила следующими строками). Госпожа бабушка: - Беспokoит нас стрёкот сверчков, что живут среди трав. Так и она, из-за облаков окропляет нас росью.	А Югэй-но мёбу, встречаясь с матерью Кирицубо-но кои, сложила стихотворение; [Шестая сфальцованная страница, лицевая сторона] すゝむしのご糸のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな Мать Кирицубо-но кои (уважаемая бабушка юного господина) ответила на её стихотворение; いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人
32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)	をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうみの残しをき給へる御さうぞく御くしあげのてうど、そへ給ふ。	良い贈り物をする場合ではありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。	Было неприято обмениваться дорогими дарами, и к письму она приложила кимоно и драгоценности, оставшиеся от дочери.	Поскольку это не было случай, когда дарят роскошный подарок, она подарила вместе с письмом кимоно и украшение, оставленные Кирицубо-но кои.

33 「若き人々 〜」(1378 / 一五⑩ / 三二)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
34 桐壺帝は 女房と語り明か し恨歌の絵を 見ながら命婦の 帰参を待つ 「命婦は〜」 (1420 / 一六③ / 三三)	みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざ いの花御覧するやうにて、女ばう四五人さぶ らはせて、御物語せさせ給へり。	帝は夜更けになってもおやすみならず、庭先に植えてある花 を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をし ていらっしやいました。	Наступила глубокая ночь, но император еще не лёг почивать. Он любовался цветущими в саду цветами и коротал часы ожидания за беседой вместе с четырьмя - пятью придворными дамами.	Государь ещё не почивал несмотря на то, что уже наступила поздняя ночь – он вызвал к себе несколько прислужниц и поговорил с ними, глядя на цветы в саду.
35 帝は里邸 の様を命婦から 聞き、とり乱し た祖母君の返書 に心を遣う 「いと細やか〜」 (1469 / 一六⑧ / 三三)	御返し奉るうば君の歌。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこは ぎがうへぞしづごゝるなき	帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづ ごゝるなき	[Югэй-но Мё:бу] передала стихи, написанные матерью барышни из двора Павлоний в ответ на письмо Государя: - Вот и исчез силуэт, оберегавший от суровых ветров. Беспокойно мне от того лишь, что же станет с кустиком Хаги?	Вот стихотворение, сложенное матерью Кирицубо-но кои в ответ на письмо государя. あらし風ふせぎしかげのかれしより こはぎがうへぞしづごゝるなき
36 「いとかう しも〜」(1504 / 一六⑩ / 三四)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
37 帝は若宮 の将来を約束 し、贈物から長 恨歌の紋に思い を重ねて歌う 「かくても〜」 (1543 / 一七③ / 三四)	6 丁裏 うば君の物語わか君の事などそうして、をく りもの御らんぜさすれば、 〈御〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉 のありかをそことしるべく (「うば君」から6 丁裏)	〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や〈光源氏(若君)〉のことな どを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠まし ました。 〈帝〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても 玉のありかをそことしるべく	Рассказала она о матери (госпоже бабушке) дамы из двора Павлоний, о блистательном Гэндзи (юном принце), и показала переданные подарки. Император в следующий же миг сложил строки: - Хочу, чтоб был гадатель, готовый отправиться на поиски её. Тогда б узнал я, где её душа.	[Шестая сфальцованная страница, оборотная сторона] Югэй-но мёбу рассказала ему о матери Кирицубо-но кои (уважаемой бабушке) и о Хикару-гэндзи (юном господине) и показала подарки. Тут он сочинил следующее стихотворение. たづねゆくまぼろしもがなつてにても 玉のありかをそことしるべく
38 「絵に掛け る〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
39 帝の心を 踏みしめるよう に、弘徽殿女御 は傍若無人な遊 び事に耽る 「風の音〜」 (1615 / 一七⑩ / 三五)	一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへの御つ ぼねに参り給はず、月のおもしろきにあそび [傍・あ=管絃]をぞし給ふ。人々かたはらい たしと、きゝけり。	第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、 月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、 「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。	Мать первого принца, придворная дама Кокидэн, которая уже давно не приглашалась в государевы покои, в эту пленительную ночь начала музыцировать. Придворные и фрейлины обсуждали, что нехорошо наслаждаться этой музыкой.	А у матери первого принца, Кокидэн-но нёго, долго не званая к себе Государем, музицируют ночью, когда луна красива. Благородные служачие и прислужницы слушают эти звуки, думая «Как это неудобно!».
40 更衣の里 邸に思いを馳せ て悲しみ歌う帝 は、眠ることす らできない 「月も入りぬ〜」 (1660 / 一八③ / 三六)	みかど、うば君のもとをおぼして、 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかで すむらんあさぢふのやど	帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の生活を心配して、次のよ うに和歌を詠みました。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月 いかですむらんあさぢふのやど	Император же переживая о том, как живётся матери дамы из двора Павлоний (госпоже бабушке), сложил следующее вака: - Даже над облаками лик осенней луны от слёз поблек. Так как же он может быть ясен в доме, заросшем травой?	А государь, беспокоясь о жизни матери Кирицубо-но кои (уважаемой бабушки), сложил следующее стихотворение. 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月 いかですむらんあさぢふのやど
41 「朝に起き 〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
42 「さるべき 契〜」(1731 / 一八⑩ / 三七)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)	7丁表 月日へて、わか君参り給ぬ。きよらにおよずけ給へば、いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮にさだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、世のうけひくまじき事を、はゞかり給て、色にもいひでさせ給はず。 〔さだまり〕から7丁表)	月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出ません。	Пронеслись дни и месяцы, и блистательный Гэндзи (юный принц) прибыл во дворец. При виде его красоты всех охватывал трепет, и они задавались вопросом: ""Не божество ли это?"". Весной следующего года, пришло время назвать первого принца наследным. Государь задумался над тем, что блистательный Гэндзи превосходит первого принца, но придворные бы не поддержали его, почему он воздержался и даже видом этого не показал.	Прошло время, и Хикару-гэндзи (юный господин) появился в дворце. Он вырос до того красиво, что люди очень боялись, как бы Бог не увёл его. Весной следующего года, когда первый принц был назначен наследным принцем, [Седьмая сфальцованная страница, лицевая сторона] государь желал, чтобы Хикару-гэндзи опередил первого принца, однако он воздержался – ведь с этим свет не согласился бы – и он не выразил своё желание на лице.
44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)	彼うば君、なぐさむかたなきゆへにや、うせ給ぬれば、又これを、かなしびおぼす。	あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、ましては帝は、悲しいことだと思ひになります。	Мать дамы из двора Павлоний (госпожа бабушка) скончалась. Не потому ли, что не смогла успокоить своё сердце? И снова Государь опечалил.	А что касается матери Кирицубо-но кои (уважаемой бабушки), может быть, из-за того, что она не могла утешить своё сердце, скончалась – и опять государь опечалился.
45 若宮七歳の読書始めの後には、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)	若君七つに成給へば、文はじめさせ給て、	《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、	Блистательному Гэндзи (юному принцу) исполнилось семь лет, и была проведена церемония первого чтения.	Когда Хикару-гэндзи (юному господину) исполнилось 7 лет, совершилась церемония первого чтения.
46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音楽にも秀でる超人さを發揮「女御たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)	御かくもんはさる物にて、琴笛のねにも、雲井をひゞかし給へり。	勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。	До этого [юный принц] не обучался и поэтому обитатели дворца были сильно удивлены тем, как мастерски он владеет и играет на музыкальных инструментах: кото и флейте.	Он поразил людей в дворце своим умением играть на таких музыкальных инструментах как котои флейта, не говоря уже о умении учиться.
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を覩て不思議がる「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)	其比こまうどのさうにん奉りて、	そのころ《高麗人の相人》がやってきて、	Однажды был приглашен физиономист-гадатель из Когурё,	В то время приехал физиономист из Кореи и он,
48 「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑬ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
49 「帝、かしこき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)	此君のざえかしこく、かたちのきよらなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、をくり物どもさゝげけり。此君をたゞ人にはあたらしけれど、源氏になしたてまつるべくおぼしをきてたり。	この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この〈光源氏(光る君)〉を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。	поведавший, что блистательный Гэндзи (юный принц) обладает выдающимися способностями к наукам. Расхвалив лик и фигуру принца, он назвал его ""Блистательным принцем"" и преподнёс дары. Прискорбно, но Государь принял решение исключить блистательного Гэндзи (Блистательного принца) из членов императорской династии, сделав его подданным и присвоив фамилию Гэндзи.	похвалив Хикару-гэндзи (юного господина) за способность к учёбе и красивую внешность, прозвал мальчика «Хикару-кими» и сделал ему подарок. Несмотря на то, что государю жаль исключить Хикару-гэндзи («Хикару-кими») из членов императорской фамилии, было решено, что он делается простым поданным, получив фамилию Минамото.
ナシ	7丁裏 絵	〈絵2〉光源氏七歳のときに、迎賓館で、光源氏が高麗の相人に占いをしてもらっているところ(7丁裏)	Рис. 2. Блистательному Гэндзи (юному принцу) семь лет. Физиономист-гадатель ворожит ему в доме приёмов.	[Седьмая сфальцованная страница, оборотная сторона] Иллюстрация 2: Сцена, когда корейский физиономист гадает Хикару-гэндзи в возрасте 7 лет в Доме приёмов.

51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝の宮の噂が届く「年月こそへ〜」(2147 / 二一⑬ / 四一)	8 丁表 年月こそへて、御休所の御事わすれさせ給はず、御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐれ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。[割・其を藤つほと / 申也] (「年月」から8丁表)	年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しいということを、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。[その人を、〈藤壺〉といいます。]	Проходили годы и месяцы, но император не мог смириться с потерей дамы из двора Павлоний (Миясудокоро), и сердце его не могло найти покоя. Однажды, придворная дама по имени Найсиносукэ, прислуживающая Императору, сообщила ему, что четвёртая дочь предыдущего императора невероятно красива. [Её звали Фудзицубо].	[Восьмая сфальцованная страница, лицевая сторона] Прошло время, однако, государь не на миг забывал о Кирицубо-но кои (миясудокоро) и не мог утешиться. Государская служащая в должности «Найси-но сукэ» осведомила своего хозяина, государя, что четвёртая принцесса предыдущего государя чрезвычайно хороша собой. [Её зовут «Фудзицубо».]
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」(2173 / 二二② / 四一)	昔の御休所によく似給て、	昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、	Очень уж она была похожа на покойную даму из двора Павлоний (Миясудокоро)	Она очень похожа на покойную Кирицубо-но кои (миясудокоро),
53 「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
54 「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑩ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしいに「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	人のきほまさり給へば、をのづから御心うつりにけり。	身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ち移っていきました。	и так как была она и высокого положения, то Государь естественным образом проявил к ней интерес.	кроме того, она высокого происхождения, и его чувство само собой переходило к ней.
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、みかどの御あたりさり給はねば、藤つぼにもしげくわたり給ふ。	〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところに《帝》と一緒によくついでいきます。	Блистательный Гэндзи постоянно находился рядом с Государем, поэтому он вместе с ним частенько посещал Фудзицубо.	А Хикару-гэндзи, не отойдя от государя, следовал за ним к Фудзицубо.
57 「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
58 「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑩ / 四四)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
59 弘徽殿と藤壺が陰悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	光君に立ならび、御おぼえもとりなれば、かゝやく日の宮ときこゆ。	〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとでも愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。	И блистательного Гэндзи и Фудзицубо, каждого по-своему любил император, и так как блистательного Гэндзи называли "Блистательным принцем", Фудзицубо стали именовать "Солнцем, освещающим дворец".	Так как и Хикару-гэндзи, и Фудзицубо – любимцы государя, её прозвали и «Принцесса сияющего солнца» в контрасте с его прозвищем «Хикару-кими (блестящий уважаемый господин)».

60	光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、	В двенадцать лет блистательному Гэндзи была проведена церемония совершеннолетия,	Когда Хикару-гэндзи исполнилось 12 лет, совершилась церемония совершеннолетия, «Гэнпуку».
61	「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
62	「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
63	左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	ひきいれの大臣の、みこばらの姫君を、そひぶしにとさだめ給ふ。〔割・其あふひの上也〕	《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にすることが決定しました。〔その妻が《葵の上》です。〕	и было принято решение сделать его женой дочь Левого министра (исполнявшего обряд совершеннолетия), матерью, которой была кровная принцесса. [Его жену звали Арухиноу].	Было решено, что он женится на девушке, которая родилась у левого министра [Этот левый министр надел головной убор для взрослых на Хикару-гэндзи в церемонии совершеннолетия.] от принцесса. [Её зовут «Аои-но уэ».]
64	「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
ナシ	8 丁裏 絵	《絵3》光源氏十二歳のときに、宮殿で光源氏が元服の儀式をした場面 (8 丁裏)		Рис. 3. Сцена о том, как во дворце по достижении блистательным Гэндзи двенадцатилетнего возраста, проводится церемония совершеннолетия.	[Восьмая сфальцованная страница, оборотная сторона] Иллюстрация 3: Сцена, когда Хикару-гэндзи в возрасте 12 лет совершил церемонию совершеннолетия, «Гэнпуку», в дворце.
65	左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑩ / 四七)	9 丁表 《御》 いときなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろは むすびこめつや 左大臣御返し。 むすびつる 心もふかきもとゆひに こきむらさきの いろしあせずは (《御》から9丁表)	《帝》 いときなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 《左大臣》は返事として次のように歌を詠みました。 むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは	Император: - Детские волосы впервые связаны. Поклявшись вечным миром, готов ли ты связать сердца? Левый министр в ответ сложил следующее вака: - Крепко свяжу и сердца и волосы. И не поблекнет ярко-лиловый цвет.	[Девятая сфальцованная страница, лицевая сторона] Стихотворение государя; いとкинаきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや В ответ левый министр сложил следующее стихотворение. むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは
66	左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730 / 二六④ / 四七)	左のつかさの御馬、蔵人所の鷹すへて、給り給ふ。みはしのもとに、上達部みこたちつらねて、ろくどもしな／＼に給り給ふ。	左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、《左大臣》にあげました。宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。	Из левой императорской конюшни привели коня, из государева архива принесли сокола и вручили левому министру. У лестницы императорского дворца собрались знатные аристократы и принцы королевских кровей и получили дары от императора сообразно чинам.	Государь дал левому министру коня, принадлежащего левому управлению кормления коней, добавив сокола, принадлежащего управлению «Куродо-докоро».
67	元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768 / 二六⑥ / 四七)	その夜、おとゞの御里に源氏の君まかまでさせ給ふ。〔割・源は十二才／あふひは十六也〕	その夜、《左大臣》の家に《光源氏》は行きました。〔《光源氏》は十二歳、《葵の上》は十六歳です。〕	В эту же ночь блистательный Гэндзи отправился в дом Левого министра. [Блистательному Гэндзи было двенадцать лет, а Арухиноу - шеснаццать].	У лестницы дворца принцы и высшие аристократы стояли в ряд и получили подарки, соответствующие своему рангу. Ночью этого дня Хикару-гэндзи отправился в дом левого министра. [Ему 12 лет, а «Аои-но уэ» 16 лет.]
68	「この大臣の〜」(2800 / 二六⑩ / 四八)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	おとゞの子蔵人少将には、右大臣殿の四の君をあはせ給へり。	〈左大臣〉の息子の〈蔵人少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。	Сын левого министра Куродо-но сё:сё: был женат на четвёртой дочери Правого министра.	Было решено, что сын левого министра, «Куродо-но сёсё» женится на четвёртой дочери правого министра.
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	9 丁裏 源氏の君は、うへのつねにめしまつはさせ給へば、心やすく里ずみもし給はず。藤つぼの御ありさまをたぐひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見め、にるものなくもおほしけるかなとおぼせば、おほいどのゝ君には心もつかず。 (「里ずみ」から9丁裏)	〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆつくりと〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめったにないものと思って、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思うので、〈葵の上(大殿の君)〉とはあまり親しくなりません。	Блистательный Гэндзи никак не мог обосноваться в доме левого министра. Причиной тому было то, что Государь постоянно вызывал его к себе. Блистательный Гэндзи в то время редко встречался с Фудзицубо, он мечтал жениться на девушке, похожей на неё, но подобной было не сыскать, потому он стал близок с Арухиноуэ (госпожой Оотоно).	Так как государь постоянно вызывает к себе Хикару-гэндзи, он не может [Девятая сфальцованная страница, обратная сторона] долго остановиться в доме левого министра. Он считает Фудзицубо редкостным в мире человеком и думая, «Я хотел бы жениться на такой женщине, как она. Не найдётся хотя бы сходная с ней женщина», не сближается с Аои-но уз (дочь левого министра).
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めると、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	おとなになり給てのちは、有しやうにみすの内にもいれ給はず。御あそびのおり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、ほのかなる御こゑなぐさめにて、内ずみのみこのましようおぼえ給ふ。	大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々に、琴や笛の音色に気持ちをごめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。	Когда блистательный Гэндзи возмужал, ему как в юные годы уже было не дозволено входить в покои Фудзицубо и других дам. Музыцируя, он вкладывал в нотки кото и флейты свои чувства, и едва доносившийся голос Фудзицубо утешал его, и лишь потому блистательный Гэндзи так хотел жить во дворце.	После того, как он стал взрослым, ему не разрешается войти внутрь занавеса к Фудзицубо. Когда они музицируют, он играет на кото и флейте, вложая своё чувство в их звучание, и утешаясь еле слышанным голосом Фудзицубо, он проводит время только во дворце.
72 「内裏には〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
140326_伊井小見出し付加	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

●ヒンディー語訳『十帖源氏』データ

小見出し	十帖源氏 校訂本文	十帖源氏 現代語訳	十帖源氏 (ヒンディー語・非母語話者/菊池さん)
ナシ	<p>1 丁裏・2 丁表</p> <p>光源氏物語は、村上天皇女十宮大斎院より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子や侍る」と、御所望の時、式部をめてして「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にかびければ、先、須磨の巻より書たと也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひしを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観血脉許可也。堤中納言兼輔—惟正〔傍・=因幡守〕—為時〔傍・=越前守〕—女〔傍・=紫式部〕母は為信〔傍・為=摂津守〕女堅子</p> <p>(「四には」から2丁表)</p>	<p>『源氏物語』の誕生</p> <p>〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王(大斎院)〉が、〈一条院〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は五十四巻)、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていましたのを、この物語の一部で〈観音の上〉のことをとてますます詳しく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が変えられたのです。〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脉を許されたのです。</p> <p>紫式部の系図</p> <p>堤中納言兼輔—因幡守惟正—越前守為時—女(紫式部) 母は摂津守為信女の堅子です。</p> <p>(注) 一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。</p>	<p>[1 丁裏]</p> <p>गॅजि की कहानी</p> <p>"गॅजि की कहानी" का जन्म</p> <p>जापान के सम्राट मुराकामि की दसवीं राजकुमारी सेन्शिनाइशिन्नो (दाइसइइन) ने सम्राट इचिजोइन की रानी फुजिवरानो शोशि (जोतोमॉइन) से पूछा, "क्या आपके पास कोई नई कहानी है?" रानी शोशि ने मुरासाकिशिकिबु को बुलाकर बताया, "आप हमारे लिए एक नई कहानी लिखने का प्रयास करें"</p> <p>मुरासाकिशिकिबु इशियामादेरा मंदिर गई और वहाँ ठहर कर नई कहानी के लिए प्रार्थना की। 15 अगस्त की पूर्णिमा की रात को बिवाको सरोवर में उसने चंद्रमा की परछाई देखी। इतने में उसके मन में कहानी की कल्पना उमड़ने लगी और उसने प्रथम खंड "सुमा" को लिखना शुरू किया। बौद्ध धर्म की टीयंटाइ शाखा में 60 सूत्र बताए जाते हैं, उसी के आधार पर गॅजि की कहानी के भी 60 खंड लिखे गए। (वर्तमान की "गॅजि की कहानी" के सिर्फ 54 खंड पाए जाते हैं) बौद्ध धर्म में चार सत्य का सिद्धान्त बताया जाता है कि "अस्तित्व, शून्य, अस्तित्व एवं शून्य और गैर अस्तित्व एवं गैर शून्य"। उनके आधार पर "गॅजि की कहानी" के खंडों का नाम रखा गया। प्रथम खंड का शीर्षक उसकी कहानी के आधार पर रखा गया, द्वितीय खंड का शीर्षक उसकी कविता के आधार पर रखा गया, तृतीय खंड का शीर्षक उसकी कहानी और कविता दोनों के आधार पर रखा गया और</p> <p>[2 丁表]</p> <p>चौथे खंड के शीर्षक का उसकी कहानी और कविता से कोई संबंध नहीं है। मुरासाकिशिकिबु पहले "तोशिकिबु" नाम से जानी जाती थी। उसने गॅजि की कहानी में रानी "मुरासाकिनोउए" की सुंदर अभिव्यक्ति की, इसलिए उसे बाद में मुरासाकिशिकिबु के नाम से बुलाया जाने लगा। ऐसी किवंदती है कि "मुरासाकिशिकिबु" अवलोकितेश्वर का अवतार है। उसने पुरोहित दान्नाइनसोजो से टीयंटाइ के सिद्धान्त पर आधारित प्रबोधन की दीक्षा ली।</p> <p>मुरासाकिशिकिबु का वंशवृक्ष</p> <p>त्सुत्सुमिचूतगोनकनेसुके - इनाबानोकामिकोरेमासा - एचिजेननोकमितामेतोकि - पुत्री (मुरासाकिशिकिबु)</p> <p>माता का नाम कैशि है जो सेत्सुनोकमितामेनोबु की पुत्री है</p> <p>टिप्पणी; उपर्युक्त वंश वृक्ष के कुछ अंश प्रचलित मान्यता से भिन्न हो सकते हैं। "गॅजि की कहानी" की टीका "कोगेत्सुशो" में उपर्युक्त वंश वृक्ष का लगभग समान रूप पाया जाता है।</p>
ナシ	<p>2 丁裏</p> <p>絵</p>	<p>〈絵1〉 八月十五日の夜、石山寺で、紫式部が、『源氏物語』を書きはじめた場面</p> <p>(2 丁裏)</p>	<p>[2 丁裏]</p> <p>〈絵1〉</p>

<p>1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する 「いづれの御時〜」(0001 / 五① / 一七)</p>	<p>3 丁表 いづれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける 中に、いとやんごとなきゝはにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。〔割・いづれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きりつぼの更衣」の事也。〕 梨壺、照陽舎。 桐壺、淑景舎。 藤壺、飛香舎。 梅壺、凝花舎。 雷鳴壺、襲芳舎。 此きりつぼにすみ給ふかうみを、御てうあひあれば、きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうみそねみて、 (「いづれ」から3丁表)</p>	<p>(桐壺) いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとても愛されていた女性がいきました。 〔「いつの時代」とは、(醍醐天皇)の時代のことです。帝に愛されていた女性というのは、〈桐壺の更衣〉です。〕 宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お后の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前前で呼びます) この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを〈桐壺の帝〉ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日〈桐壺の更衣〉が帝の近くにいることに、嫉妬をしてばかりいました。</p>	<p>{3丁表} (キリツスボ) प्राचीन काल की बात है, उस समय किले में संजली रानी, छोटी रानी आदि कई पदों की रानियाँ एक साथ रहती थीं । सम्राट को एक रानी से बहुत प्यार हुआ, पर वह बहुत ऊंचे कुल की नहीं थी । (यह कहानी सम्राट दाइगो के युग की है और उस रानी का नाम छोटी रानी किरित्सुबो है) किले में रानियों के कई कमरे थे और प्रत्येक कमरे का नाम भी था । रानियों को अपने कमरे के नाम से बुलाया जाता था । एक रानी के कमरे का नाम नाशित्सुबो था और उसका दूसरा नाम शोयोशा था । ठीक उसी प्रकार, किरित्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम शिगेइशा था, फुजित्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम हिग्योशा था, उमेत्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम ग्योकाशा था और कमिनारिनोत्सुबो नामक कमरे का दूसरा नाम शूहोशा था । उस समय का सम्राट किरित्सुबो नामक कमरे में रहने वाली छोटी रानी से बहुत प्यार करते थे, इसलिए उनको "किरित्सुबो का सम्राट" नाम भी दिया गया । किरित्सुबो की छोटी रानी हमेशा सम्राट के साथ रहती थी, इसलिए अन्य रानियाँ उससे बहुत खिझती थी और ईर्ष्या से जल रही थी.</p>
<p>2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる 「朝夕の宮仕〜」(0031 / 五④ / 一七)</p>	<p>3 丁裏 あさゆふの御みやづかへにつけても、心をもみうごかし、うらみををふつもりにや、あつく成ゆき、〔割・をもき／病也〕物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれにおぼして、人のそしりをも、えはゞからせ給はず (「おぼして」から3丁裏)</p>	<p>そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていきました。〔重い病気です〕心細い感じがして、実家に帰っていることが多い〈桐壺の更衣〉のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っている、愛情をお止めになることができません。</p>	<p>शायद उसी के कारण होगा कि किरित्सुबो की छोटी रानी कमजोर होने लगी । (काफी बीमार हो गई) रानी घबरा गई और अक्सर मायके में चली जाने लगी । सम्राट किरित्सुबो की छोटी रानी को और भी चाहने लगे । {3丁裏} किले में लोग सम्राट के व्यवहार की निंदा करने लगे, परंतु वे प्रेम को नहीं रोक सके ।</p>
<p>3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る 「唐土にも〜」(0073 / 五⑧ / 一七)</p>	<p>「もろこしにもかゝる事のおこりにこそ、世もみだれ、あしかりけれ」と、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしもひき出つべう成ぬ。</p>	<p>中国でもこういう恋愛関係が原因となって、世も乱れ、とんでもないことにもなると、世間の人もおもしろくない気がして、人々の悩みの種にもなり、中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました。</p>	<p>लोग उस घटना की याद कर बहुत चिंता करने लगे कि किसी जमाने में चीन में सम्राट गेंसो (क्षंजोन) और रानी योकिहि (यन गुइफै) के प्रेम के कारण समाज बहुत बर्बाद हो गया था ।</p>
<p>4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活 「父の大納言〜」(0103 / 五⑩ / 一八)</p>	<p>此かうみの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼にもをとり給はねど、事とある時は、より所なく、心ほそげ也。</p>	<p>この〈桐壺の更衣〉の父はすでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。</p>	<p>किरित्सुबो की छोटी रानी के पिता का स्वर्गवास हो चुका था । उनकी माता कुलबधू थी और पारंपारिक विचार की थी, इसलिए अपने को अन्य रानियों से कम न दिखने के लिए हमेशा खयाल रखती थी । परंतु कभी कभी उनको बड़ा काम अकेला निपटाना पड़ता है, तो कोई आश्रय न होने के कारण वह अकेलापन महसूस कर उदास हो जाती थीं</p>

<p>5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する 「前の世にも〜」(0136／六①／一八)</p>	<p>さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよなる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。〔割・其を光君と／いふ也〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまうけの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、ならび給ふべくもあらず。</p>	<p>〈桐壺の帝〉と〈桐壺の更衣〉は)前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〉といいます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いなく皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)〉の美しさには、とうてい勝つことができません。</p>	<p>किरित्सुबो का सम्राट और किरित्सुबो की छोटी रानी के पूर्व जन्म का गहरा संबंध रहा होगा, दोनों के बीच बहुत सुंदर राजकुमार का जन्म हुआ और उसे हिकारुगेजि (हिकारुनोकिमि) का नाम दिया गया । उससे पहले उपमहामंत्री की संझली रानी के यहाँ प्रथम राजकुमार का जन्मा हुआ था, इसलिए उन्हीं को युवराज माना जाता था और लोग उनका सम्मान करते थे । फिर भी हिकारुगेजि (वाकागिमि) के सौन्दर्य के सामने उनकी छवि भी क्षीण हो जाती थी ।</p>
<p>6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く 「はじめより〜」(0184／六②／一九)</p>	<p>4丁表 此みこ生れ給て後は、みかど御心ことにきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、一のみこの女御は、おぼしうたがへり。 (「御心」から4丁表)</p>	<p>〈光源氏(若君)〉が生まれてからというもの、帝はこの〈光源氏〉をととても大切にしていられましたので、〈光源氏〉が、皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である后は、心の中で心配しています。</p>	<p>जब से हिकारुगेजि का जन्म हुआ, तब से सम्राट उस पर विशेष ध्यान रखने लगे [4丁表] प्रथम राजकुमार की माता बेचैन होने लगी कि कहीं हिकारुगेजि को युवराज का पद न दिया जाए ।</p>
<p>7 「人より先に〜」(0248／六③／一九)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける 「御局は桐壺〜」(0288／七③／二〇)</p>	<p>あまたの御かた／＼を過させ給ひ、ひまなき御前わたりに、人の心をつくし給ふも、ことはり也。あまりうちしきりまうのぼり給ふおり／＼は、うちはしわた殿、こゝかしの道にあやしきわざをして、御をくりむかへの人のきぬのすそ、たへがたう、まさなき事ともあり、又ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、はしたなめづらはせ給ふ時もおほかり。</p>	<p>帝が、たくさんの后たちの部屋の前を素通りして、何度も何度もお通いになることに、他の后たちが嫉妬しているのも、もっともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、あちらこちらの道にいたずらがされていました。それは、見送りや出迎への侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、絶対通らなければならぬ廊下の扉を開けて、こちらとあちらで協力し、〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。</p>	<p>अन्य रानियाँ ईर्ष्या से जलती थी, क्योंकि उनके कमरों के सामने से निकालकर सम्राट केवल किरित्सुबो की छोटी रानी के पास बार बार जाते थे । सम्राट भी किरित्सुबो की छोटी रानी को बार बार अपने पास बुलाते थे । किले में उचिहाशि और वातादोनो नामक रास्ते से निकल कर किरित्सुबो की छोटी रानी सम्राट के पास जाती थी, उस रास्ते पर कई अप्रिय काम किए जाने लगे वह हृद से बाहर हो गया जब परिचारिकाएँ रानी को छोड़ने और लेने के लिए उसी रास्ते पर आती थीं तो उनके कपड़ों का किनारा बेहद खराब हो जाता था । ऐसा भी हुआ कि जब किरित्सुबो की छोटी रानी को जिस रास्ते से निकालना था, उसी रास्ते के आगे और पीछे वाले दरवाजों को किसी ने बंद करवाया और रानी को उसी रास्ते पर काफी समय तक खड़ी रहना पड़ा । इतना ही नहीं, अन्य अनेक तरीकों से उनको परेशान किया जाता था ।</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す 「ことにふれ〜」(0344／七④／二〇)</p>	<p>4丁裏 みかどいとゞあはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ。かうみを、ほかにうつし、此かうみのうへつばねに給はる。そのうらみ、ましてやらんかたなし。 (「そのうらみ」から4丁裏)</p>	<p>帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思って、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることがありません。</p>	<p>यह देख कर सम्राट को किरित्सुबो की छोटी रानी पर और भी दया आई । गोर्योदेन नामक जगह में एक नीचे कुल की रानी का कमरा था । सम्राट ने उस रानी के लिए दूसरे जगह पर कमरा दिलवाया और उस कमरे को किरित्सुबो की छोटी रानी को दे दिया । अब किरित्सुबो की छोटी रानी को दो कमरे मिल गए । [4丁裏] उस रानी को बहुत बुरा लगा और किरित्सुबो की छोटी रानी से बड़ी घृणा हुई</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる 「この御子三つ〜」(0378／七⑤／二一)</p>	<p>みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもをとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。</p>	<p>〈光源氏(若君)〉は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めつたにないほど素晴らしいので、〈光源氏(若君)〉を他の后たちも憎むことができません。</p>	<p>जब हिकारुगेजि (वाकागिमि) की उम्र 3 साल की हो गई, तब उनके हाकामागि-संस्कार का आयोजन हुआ । ["हाकामागि" पाजामा जैसा जापानी पोशाक है, जिसे इस संस्कार में लड़के को पहली बार पहनवाया जाता है और इस संस्कार के साथ लड़का किशोरावस्था से युवावस्था में प्रवेश करता है] इस से पहले प्रथम राजकुमार के लिए उस संस्कार का बड़ा आयोजन हुआ था, परंतु आज का आयोजन उससे भी कम नहीं था । हिकारुगेजि (वाकागिमि) का अनोखा रूप-सौन्दर्य और अनन्य व्यक्तित्व था, ऐसी एक भी रानी नहीं थी जो उसकी बुराई कर सके</p>

<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出 「その年の夏〜」(0439/八②/二一)</p>	<p>其年の夏、御母御休所〔割・更衣の事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまささらにゆるさせ給はず。日々にをもり給て、いとよはうなれば、更衣の母、なく／＼そうして、みこをはとどめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。</p>	<p>その年の夏、母の御息所〔〈桐壺の更衣〉のことです。〕は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながらお願いをして、〈光源氏(若君)〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣(御息所)〉だけ帰ることになりました。</p>	<p>उस साल की गर्मी के मौसम में मिसोकुंदोकुरो यानि हिकारुगेजि की माता (किरित्सुबो की छोटी रानी) बीमार हो गई और उसने मायके पर जाना चाहा । किरित्सुबो की छोटी रानी अक्सर कमजोर रहती थी, इसलिए सम्राट ने उसका खास ध्यान नहीं दिया और मायके जाने की अनुमति नहीं दी । धीरे धीरे उसकी हालत गंभीर होने लगी और बहुत कमजोर हो गई । किरित्सुबो की छोटी रानी की माता ने रो रो कर सम्राट से अनुरोध किया कि किरित्सुबो की छोटी रानी (मिसोकुंदोकुरो) को मायके पर भेज दें और हिकारुगेजि (वाकागिमि) को किले में अपने पास रखें ।</p>
<p>12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣を覧になるにつけ途方に暮れる 「限りあれば〜」(0488/八②/二二)</p>	<p>5丁表 うつくしき人の、おもやせあるかなきかにきえものし給ふを御覧じて、きしかたゆくす糸、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげにて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、をくれさきだゝじとちぎらせ給けるを、打すてゝはえゆきやらじと、の給はするを、 (「にて」から5丁表)</p>	<p>帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をすることもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行こうと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、</p>	<p>सम्राट ने अनुमति दी और उनको अचानक यह पता चला कि उनकी प्यारी किरित्सुबो की छोटी रानी बहुत कमजोर हो चुकी है, बेहोश सी पड़ी हुई है । वे पिछले दिनों और भविष्य के बारे में रानी से बात करने लगे और तरह तरह के वादे भी किए, (5丁表) परंतु किरित्सुबो की छोटी रानी की हालत इतनी खराब हो गई कि ठीक से उत्तर भी नहीं दे पा रही । उसका चेहरा असहनीय दर्द को बता रहा था और बेहोश हो रही थी । सम्राट ने कहा, "तुमने वादा किया था कि हम दोनों यमलोक की यात्रा साथ करेंगे, तुम मुझे छोड़कर नहीं जा सकती ।</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する 「輦車の宣旨〜」(0537/八④/二二)</p>	<p>女も、いみじと見奉りて、かぎりとして わかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。 ※「てくるまのせんじ」は本文(池田本)では、更衣の歌より前におかれている。</p>	<p>〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。 かぎりとしてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり 帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。</p>	<p>यह सुनकर किरित्सुबो की छोटी रानी को बहुत आनंद मिला और उसने एक कविता लिखी । (和歌) सम्राट की अनुमति से किरित्सुबो की छोटी रानी गाड़ी पर चढ़ कर मायके पर वापस चली गई ।</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる 「御胸つと〜」(0608/九②/二三)</p>	<p>みかど、御むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかすぐる程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事もおぼしわかれず。</p>	<p>帝は、胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。</p>	<p>सम्राट का कलेजा कट रहा था । उन्होंने एक दूत को किरित्सुबो की छोटी रानी के साथ भेजा । वह दूत वापस भी नहीं आया, तब सम्राट को यह खबर मिली कि आधी रात को किरित्सुबो की छोटी रानी की मौत हुई । सम्राट एकदम घबरा कर विचलित हो गए ।</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する 「御子は〜」(0644/九①/二四)</p>	<p>5丁裏 みこをばかかても御らんぜまほしけれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも何事ともおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙のひまなくなかれおはしますを、あやしと見奉給ふ。(「ひまなく」から5丁裏)</p>	<p>帝は、〈光源氏(若君)〉をこんな時でも御覧になりたいと思うけれど、喪中の人が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていっしやるのを、何だか変だと見えています。</p>	<p>सम्राट को हिकारुगेजि (वाकागिमि) से मिलने की बहुत इच्छा हुई, परंतु उसको अपनी माता के घर भिजवाने की जरूरत थी, क्योंकि इस समय उसका किले में रहना अशुभ माना जाता था । हिकारुगेजि (वाकागिमि) को कुछ समय में नहीं (5丁裏) आया और असुविधा महसूस हुई कि सारी परिचारिकाएं जोर से रो रही थी और सम्राट का भी आंसुओं का तार बह रहा था ।</p>

16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる 「限りあれば〜」(0684 /一〇②/二四)	かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ぼうの車に、したひのりて出給ふ。	きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。	परंपरानुसार अतागो नामक जगह पर उसका दाह संस्कार किया गया। किरित्सुबो की छोटी रानी की माता ने अपनी बेटी के साथ वहीं अपने को भी खत्म करना चाहा। पर वह रोते रोते किसी तरह परिचारिकाओं के साथ गाड़ी में बैठ गई और रवाना हुई।
17 「むなしき〜」(0712 /一〇⑤/二四)	ナシ	ナシ	ナシ
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す 「内裏より御使〜」(0741 /一〇⑥/二五)	内より御使ありて、三位のくらみをくり給ふ。	帝から使者があつて、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。	सम्राट ने वहाँ दूत भेजा और किरित्सुबो की छोटी रानी को "संमि नो कुराई" नामक पद देकर सम्मानित किया।
19 聡「もの思ひ知〜」(0775 /一〇⑩/二五)	ナシ	ナシ	ナシ
20 「はかなく〜」(0809 /一一①/二六)	ナシ	ナシ	ナシ
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす 「一の宮を〜」(0850 /一一⑤/二六)	みかどは、一の宮を見給ふにも、わか宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ばう、めのとなどをつかはし、ありさまきこしめす。野分たちはた寒き夕ぐれ、ゆげいの命婦をつかはさる。	帝は、第一皇子を御覧になつても、〈光源氏(若君)〉を恋しく思い出してばかりいて、侍女や乳母などをつかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強く肌寒い夕暮れに、〈靱負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。	जब भी सम्राट प्रथम राजकुमार से मिलते हैं, तो उनको हिकारुगेजि (वाकागिमि) की याद आती है। वे हिकारुगेजि (वाकागिमि) की खबर लेने के लिए परिचारिकाओं और आयाओं को वहाँ बार बार भेजते हैं। एक दिन शाम को हवा तेज चल रही थी और मौसम ज़रा ठंडा था, सम्राट ने युगेइनोम्योबु नामक परिचारिका को किरित्सुबो की छोटी रानी की माता के पास भेजा।
22 「夕月夜の〜」(0877 /一一⑨/二六) ~ 25 「『しばしは〜』」(0987 /一二⑦/二八)	ナシ	ナシ	ナシ
26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え〜」(1043 /一二⑫/二八)	勅書の歌 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをと に小萩がもとをおもひこそやれ	帝からの手紙に書いてあつた和歌です。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそやれ	सम्राट के पत्र में एक कविता थी। (和歌)

27 「命長さの〜」 (1094 / 一三⑥ / 二九) ~ 30 「上もしか〜」 (1256 / 一四⑪ / 三一)	ナシ	ナシ	ナシ
31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える 「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)	6丁表 命婦、かうみの母にあひて、 すゞむしのご糸のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな 〈うは君〉 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (「すゞむし」から6丁表)	〈鞍負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会って詠んだ和歌です。 すゞむしのご糸のかぎりをつくしても ながき夜あかずふるなみだかな 〈うは君〉 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに 露をきそふる雲のうへ人	किरित्सुबो की छोटी रानी की माता से मिल कर युगेइनोम्योबु परिचारिका ने एक कविता लिखी । (6丁表) (和歌) युगेइनोम्योबु परिचारिका की कविता का उत्तर देते हुए किरित्सुबो की छोटी रानी की माता (नानी) ने एक कविता लिखी । (和歌)
32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る 「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)	をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうみの残しをき給へる御さうぞく御くしあげのてうど、そへ給ふ。	良い贈り物をする場合ではありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。	माता को इस समय सम्राट के लिए उपहार भेजना अनुचित लगा, इसलिए किरित्सुबो की छोटी रानी के कपड़े, गहनें आदि निशानियों को पत्र सहित भिजवा दिया ।
33 「若き人々〜」 (1378 / 一五⑫ / 三二)	ナシ	ナシ	ナシ
34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ 「命婦は〜」(1420 / 一六③ / 三三)	みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざいの花御覧するやうにて、女ばう四五人さぶらはせて、御物語せさせ給へり。	帝は夜更けになってもおやすみにならず、庭先に植えてある花を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をしていच्छायました。	उधर सम्राट को आधी रात तक नींद नहीं आई । चार पाँच परिचारिकाओं को पास बुलाकर बाग के फूलों को देखते देखते बातें कर रहे थे ।
35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う 「いと細やか〜」(1469 / 一六⑧ / 三三)	御返し奉るうば君の歌。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき	帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき	सम्राट के पत्रोत्तर के रूप में किरित्सुबो की छोटी रानी की माता ने एक कविता भेजी । (和歌)
36 「いとかうしも〜」(1504 / 一六⑫ / 三四)	ナシ	ナシ	ナシ
37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う 「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)	6丁裏 うば君の物語わか君の事などそうして、をくりもの御らんぜさすれば、 〈御〉たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく (「うば君」から6丁裏)	〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や〈光源氏(若君)〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。 〈帝〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく	(6丁裏) सम्राट ने किरित्सुबो की छोटी रानी की माता (नानी) और हिकारुगेजि (वाकागिमि) के बारे में सुना और किरित्सुबो की छोटी रानी की निशानियां देखी । उन्होंने एक कविता लिखी । (和歌)

38 「絵に描ける～」 (1572 / 一七⑦ / 三五)	ナシ	ナシ	ナシ
39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る 「風の音～」(1615 / 一七⑩ / 三五)	一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへへの御つばねに参り給はず、月のおもしろきにあそび〔傍・あ＝管絃〕をぞし給ふ。人々かたはらいたしと、きゝけり。	第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。	सम्राट ने प्रथम राजकुमार की माता, कोकिदेन की संझली रानी को काफी समय से नहीं बुलाया, इसलिए संझली रानी सुदर चाँदनी रात को संगीत का आयोजन कर आनंद ले रही थी । किले में परिचारिकाओं और अन्य लोगों को असमय संगीत सुनकर असुविधा महसूस हो रही थी ।
40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない 「月も入りぬ～」(1660 / 一八③ / 三六)	みかど、うば君のもとをおぼして、雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど	帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど	सम्राट ने किरित्सुबो की छोटी रानी की माता (नानी) के जीवन की चिंता करते हुए एक कविता लिखी । (和歌)
41 「朝に起き～」 (1693 / 一八⑦ / 三六)	ナシ	ナシ	ナシ
42 「さるべき契～」 (1731 / 一八⑩ / 三七)	ナシ	ナシ	ナシ
43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵 「月日経て～」(1762 / 一九② / 三七)	7丁表 月日へて、わか君参り給ぬ。きよらに およづけ給へば、いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮にさだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、世のうけひくまじき事を、はゞかり給て、色にもいさせ給はず。 (「さだまり」から7丁表)	月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出しません。	कुछ महीने बाद हिकारुगेजि (वाकागिमि) किले में वापस आए । वह इतना सुंदर हो गया और लोगों को बहुत चिंता होने लगी कि कहीं ईश्वर उसे अपने पास न ले जाए । अगले साल के वसंत में प्रथम राजकुमार को युवराज के रूप में [7丁表] निर्धारित किया गया । सम्राट मन में चाहते थे कि हिकारुगेजि ही युवराज बन जाए, लेकिन उन्हें यह भी पता था कि दुनिया नहीं मानेगी, इसलिए उन्होंने अपनी इच्छा का किसी को भी पता होने नहीं दिया ।
44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去 「かの御祖母～」(1805 / 一九⑥ / 三七)	彼うば君、なぐさむかたなきゆへにやうせ給ぬれば、又これを、かなしおぼぼす。	あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、またしても帝は、悲しいことだと思いに なります。	इतने में किरित्सुबो की छोटी रानी की माता (नानी) अपनी बेटी के पास चली गई, शायद वे जीवन से विमुख हो गई थी । सम्राट को बहुत दुख हुआ ।
45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服 「今は内裏に～」(1844 / 一九⑩ / 三八)	若君七つに成給へば、文はじめせさせ給て、	《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、	अब हिकारुगेजि (वाकागिमि) सात साल का हो गया और उसके लिए पाठ आरंभ करने का संस्कार किया गया ।

46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音楽にも秀でる超人さを発揮 「女御子たち〜」(1904/二〇②/三九)	御がくもんはさる物にて、琴笛のねにも、雲井をひゞかし給へり。	勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。	वह न केवल पढ़ाई में ही अच्छा था, बल्कि कोतो, बांसुरी आदि जापानी शास्त्रीय वाद्यों को भी बहुत अच्छा बजाता था, जिसे देख कर किले के लोग हैरान हो जाते थे ।
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を覩て不思議がる 「そのころ〜」(1955/二〇⑥/三九)	其比こまうどのさうにん奉りて、	そのころ《高麗人の相人》がやってきて、	एक दिन कोरिया से मुखाकृति शास्त्री आया
48 「弁も、いと〜」(2019/二〇⑬/四〇)	ナシ	ナシ	ナシ
49 「帝、かしこき〜」(2075/二一⑤/四〇)	ナシ	ナシ	ナシ
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断 「際ことに〜」(2120/二一⑩/四一)	此君のざえかしこく、かたちのきよなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、をくり物どもさゝげけり。此君をたゞ人にはあたらしけれど、源氏にしたてまつるべくおぼしをきてたり。	この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この《光源氏(光る君)》を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。	उसने हिकारुगेजि (वाकागिमि) की प्रतिभा और सौन्दर्य की बहुत प्रशंसा की और उसे "हिकारुकिमि" का नाम देकर कई उपहारों की भेंट की । सम्राट हिकारुगेजि (वाकागिमि) को राजपरिवार से अलग नहीं करना चाहते थे, परंतु करना जरूरी हो गई और मुसीबत में उन्होंने उसे गेंजि का कुलनाम देकर अनुचर के रूप में अपने पास रखने का तय किया ।
ナシ	7 丁裏 絵	〈絵2〉光源氏七歳のときに、迎賓館で、光源氏が高麗の相人に占いをしてもらっているところ (7 丁裏)	[7 丁裏] किले के स्वागत कक्ष में कोरिया का मुखाकृति शास्त्री सात साल के हिकारुगेजि को देखता है ।
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く 「年月にそへ〜」(2147/二一⑬/四一)	8 丁表 年月にそへて、御休所の御事わすれさせ給はず、御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐれ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。〔割・其を藤つぼと申也〕 〔「年月」から8丁表〕	年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しいということ、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。〔その人を、〈藤壺〉といいます。〕	[8 丁表] कई साल बीत गए, परंतु सम्राट किरित्सुबो की छोटी रानी (मिसोकुंदोकोरो) को बिलकुल नहीं भूल सके और बहुत उदास रहते थे । नाइशिनोसुके नामक परिचारिका ने सम्राट को बताया कि पूर्व सम्राट की चौथी रानी बहुत सुंदर है । (उस रानी का नाम फुजित्सुबो है)
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の氣を引く 「母后世になく〜」(2173/二二②/四一)	昔の御休所によく似給て、	昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、	वह ठीक किरित्सुबो की छोटी रानी (मिसोकुंदोकोरो) जैसी थी
53 「母后、「あな〜」(2233/二二⑧/四二)	ナシ	ナシ	ナシ

54 「さぶらふ人々 〜」(2264 / 二二⑩/ 四二)	ナシ	ナシ	ナシ
55 藤壺は皇女の身 ゆえに誰に気兼ねもな く、帝の寵愛もしだい に移る 「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	人のきほもまさり給へば、をのづから 御心うつりにけり。	身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ちに移っていきました。	और ऊंचे कुल की थी । धीरे धीरे सम्राट फुजित्सुबो से आकर्षित होने लगे ।
56 源氏の君は常に父 帝の傍にいて、若く美 しい藤壺の姿を透き見 する 「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、みかどの御あたりさり給 はねば、藤つぼにもしげくわたり給ふ。	〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところにも《帝》と一緒 によくついでいきます。	हिकारुगेजि हमेशा सम्राट के साथ रहता था और फुजित्सुबो के पास भी उनके साथ जाया करता था ।
57 「母御息所も〜」 (2370 / 二三⑩/ 四三)	ナシ	ナシ	ナシ
58 「上も、限りなき 〜」(2396 / 二三⑪/ 四四)	ナシ	ナシ	ナシ
59 弘徽殿と藤壺が陰 悪な中、世の人は光る 君とかかやく日の宮と 賞讃 「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	光君に立ならび、御おぼえもとリ／＼ なれば、かゞやく日の宮ときこゆ。	〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとても愛されているので、〈藤壺〉 のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。	सम्राट को हिकारुगेजि और फुजित्सुबो दोनों से प्यार था, इसलिए जैसे वे हिकारुगेजि को "हिकारुकिमि" नाम से बुलाते थे, वैसे ही फुजित्सुबो को "कागायाकुहिनोमिया" नाम से बुलाने लगे ।
60 光源氏は十二歳で 兄東宮に劣らぬ元服の 儀式を帝の主導で執り 行う 「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、	बारह साल की उम्र में हिकारुगेजि का "गेंपुकु" नामक वयस्क का संस्कार हुआ और विवाह के लिए एक राजकुमारी चुनी गई ।
61 「おはします〜」 (2537 / 二四⑩/ 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
62 「かうぶり〜」 (2580 / 二五①/ 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
63 左大臣は娘を春宮 ではなく光源氏の元服 の添い臥しに心積もり する 「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	ひきいれの大臣の、みこばらの姫君を、 そひぶしにとさだめ給ふ。〔割・其あふ ひの上也〕	《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にする ことが決まりました。〔その妻が〈葵の上〉です。〕	उसके पिता महामंत्री थे जो "हिकिइरे" यानि ताज पहनवाने का महत्वपूर्ण कर्मकांड करने वाले थे और माता राजमहिला थी । उस रानी का नाम आओइनोउए था ।

64 「さぶらひに～」 (2658 / 二五⑨ / 四六)	ナシ	ナシ	ナシ
ナシ	8 丁裏 絵	〈絵3〉光源氏十二歳のときに、宮殿で光源氏が元服の儀式をした場面 (8 丁裏)	(8 丁裏) किले में बारह साल के हिकारुगेजि का गेंपुकु नामक संस्कार किया जा रहा है ।
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する 「御盃のついで～」 (2703 / 二五⑭ / 四七)	9 丁表 〈御〉 いとくなき はつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや きよを ちぎるこゝろは むすびこめつや 左大臣御返し。 むすびつる 心もふかきもとゆひに こきむらさきの いろしあせずは (〈御〉から9丁表)	〈帝〉 いとくなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。 むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは	(9 丁表) सम्राट ने ऐसी कविता लिखी । (和歌) महामंत्री ने उत्तर देते हुए कविता लिखी । (和歌)
66 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大 「左馬寮の～」(2730 / 二六④ / 四七)	左のつかさの御馬、蔵人所の鷹すへて、 給り給ふ。みはしのもとに、上達部み こたちつらねて、ろくどもしな／＼に 給り給ふ。	左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。	सामार्यो नामक सरकारी दफ्तर में घोड़े की देखभाल की जाती थी, वहाँ से एक घोड़ा महामंत्री को भेंट किया गया । कुरोदोदोकोरो नामक सरकारी दफ्तर में बाज का इंतजाम किया जाता था, वहाँ से एक बाज उन्हें दिया गया । इस शुभ अवसर पर किले की सीड़ियों पर अभिजात लोग और कई राजकुंअर खड़े हो जाते थे और सम्राट सभी को अपने पद के अनुसार विभिन्न भेंट देते रहे ।
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚 「その夜～」(2768 / 二六⑥ / 四七)	その夜、おとゞの御里に源氏の君まかでさせ給ふ。〔割・源は十二才／あふひは十六也〕	その夜、〈左大臣〉の家に〈光源氏〉は行きました。〔〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です。〕	उस रात को हिकारुगेजि महामंत्री के घर गया । हिकारुगेजि बारह साल का था और आओइनोउए सोलह साल की थी
68 「この大臣の～」 (2800 / 二六⑩ / 四八)	ナシ	ナシ	ナシ
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制合う 「御子ども～」(2833 / 二七① / 四八)	おとゞの子蔵人少将には、右大臣殿の四の君をあはせ給へり。	〈左大臣〉の息子の〈蔵人少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。	महामंत्री के पुत्र कुरोदोनोशोशो के विवाह के लिए उपमहामंत्री की चौथी राजकुमारी चुनी गई ।

<p>70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠 「源氏の君は～」(2863 /二七④/四九)</p>	<p>9 丁裏 源氏の君は、うへのつねにめしまつはさせ給へば、心やすく里ずみもし給はず。藤つぼの御ありさまをたぐひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見めにるものなくもおはしけるかなとおぼせば、おほいどのゝ君には心もつかず。 (「里ずみ」から9丁裏)</p>	<p>〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆっくと〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめつたにないものと思って、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思うので、〈葵の上(大殿の君)〉とはあまり親しくなりません。</p>	<p>सम्राट ने हिकारुगेजि को हमेशा अपने पास रखना चाहा, 〔9丁裏〕 इसलिए हिकारुगेजि को महामंत्री के घर पर ठहरने के लिए ज्यादा समय नहीं मिल रहा था । हिकारुगेजि का फुजित्सुबो से खास आकर्षण था इसलिए वह फुजित्सुबो जैसी रानी से विवाह करना चाहता था । लेकिन उसको वैसी रानी कहीं नहीं दिख रही थी, आओइनोउए (ओतोनोनोकिमि) से भी ज्यादा आकर्षित नहीं हो रहा था ।</p>
<p>71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う 「大人になり～」(2912 /二七⑨/四九)</p>	<p>おとなになり給てのちは、有しやうにみすの内にもいれ給はず。御あそびのおり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、ほのかなる御こゑなぐさめにて、内ずみのみこのましようおぼえ給ふ。</p>	<p>大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々に、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。</p>	<p>जब छोटा था तब वह फुजित्सुबो के पर्दे के अंदर आ सकता था, परंतु अब बड़ा हो गया, ऐसा करना मना था । संगीत समारोह में दूर बैठी हुई फुजित्सुबो के लिए वह कोतो वाद्य और बांसुरी बजाता है और उनकी हल्की सी आवाज सुनने का प्रयास करता है । इस प्रकार हिकारुगेजि का समय अक्सर किले में ही बीत जाता था ।</p>
<p>72 「内裏には～」(2976 /二七⑬/五〇)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>140326_伊井小見出し付加</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

●ウルドゥー語訳『十帖源氏』データ

小見出し	十帖源氏 校訂本文	十帖源氏 現代語訳	十帖源氏 (ウルドゥー語・非母語話者／村上さん)
ナシ	<p>1 丁裏・2 丁表</p> <p>光源氏物語は、村上天皇女十宮大斎院より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子や侍る」と、御所望の時、式部をめして「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にうかびければ、先、須磨の巻より書たと也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひしを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観血脉許可也。堤中納言兼輔一惟正〔傍・=因幡守〕一為時〔傍・=越前守〕一女〔傍・=紫式部〕母は為信〔傍・為=摂津守〕女堅子</p> <p>(「四には」から2丁表)</p>	<p>『源氏物語』の誕生</p> <p>〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王(大斎院)〉が、〈一条院〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は五十四巻)、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていましたのを、この物語の一部で〈紫の上〉のことをとてもすばらしく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が変えられたのです。〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脉を許されたのです。</p> <p>紫式部の系図</p> <p>堤中納言兼輔一因幡守惟正一越前守為時一女(紫式部) 母は摂津守為信女の堅子です。</p> <p>(注) 一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。</p>	<p>2</p> <p>بزار سال سے زیادہ پرانی بات ہے، جاپان کے باسٹھویں شہنشاہ "موراکامی" کی دسویں شہزادی "نوبوکو" نے چونستھویں شہنشاہ "اچی جو" کی ملکہ "اکیکو" سے فرمائش کی کہ کیا کوئی نئی کہانی نہیں ہے؟ ملکہ نے اپنی استانی "موراساکی شیکیبو" کو بلا کر کہا کہ کسی نہ کسی طرح نئی کہانی تصنیف کر کے لے آؤ۔ "موراساکی شیکیبو" نے "ایشی یاما" مندر میں گوشہ نشینی کرتے ہوئے دعا کی کہ مجھ پر نئی کہانی نازل ہو جائے۔ اگست کی چودھویں رات تھی۔ جب اس نے "بی و" جھیل کی سطح پر چمکتے چاند کا عکس دیکھا تو اس کے ذہن میں کہانی کے مناظر ابھر آئے اور بارہواں باب "سوما" سے کہانی لکھنا شروع کی۔</p> <p>اس کہانی پر بدھ مت کے "ٹینڈانی" فرقے کا بڑا اثر ہے۔ کہا جاتا ہے کہ اس فرقے کی مقدس کتاب ساٹھ ابواب پر مشتمل ہے لہذا "موراساکی شیکیبو" نے "گینچی کی کہانی" بھی ساٹھ ابواب میں لکھی تھی۔ لیکن موجودہ کہانی صرف چوٹن ابواب کی ہے۔ اس کہانی کا موضوع بھی بدھ مت کے چار حقائق سے لیا گیا، یعنی اس دنیا میں زندہ رہنے کا کوئی مطلب بھی ہے یا نہیں اور اس کا جواب ہاں بھی ہو سکتا ہے اور نہ بھی۔ باب کا نام پہلے تو کہانی کے متن سے، دوسرے نظم سے، تیسرے متن و نظم سے اور چوتھے کہیں اور جگہ سے لیا گیا۔</p> <p>در اصل مصنفہ "تو نو شیکیبو" کہلاتی تھی لیکن اس نے اس کہانی میں "گینچی" کی بیوی "موراساکی" کے بارے میں اتنے شاندار انداز میں لکھا کہ لوگ اسے "موراساکی شیکیبو" پکارنے لگے۔ یہ روایت بھی ہے کہ "موراساکی شیکیبو" انسان نہیں بلکہ رحم و کرم کی دیوی کا اوتار ہے۔ "ٹینڈانی" فرقے کے نامور پروفٹ "کاکوون" نے اسے اپنی شاگرد بنا کر "ٹینڈانی" فرقے کے عقیدے سے روشناس کرایا۔</p> <p>ر"موراساکی شیکیبو" کا سلسلہ نسب</p> <p>و"تسو تسومی چونگون" یعنی درمیانی درجے کا کونسلر "کانے سوکے" --- "اینابا" کا ضلع دار "کورے" "ماسا" --- "اچییزین" کا ضلع دار "تامے توکی" --- "موراساکی شیکیبو" اس کی ماں "سیتسو" کے ضلع دار "تامے نوبو" کی بیٹی "کاتاکو" ہے۔</p> <p>اس سلسلہ نسب میں مختلف خیالات بھی ہیں لیکن اس جیسا شجرہ نسب "گینچی کی کہانی" کی شرح "کوگے تسو شو" میں ملتا ہے۔</p>
ナシ	<p>2 丁裏</p> <p>絵</p>	<p>〈絵1〉 八月十五日の夜、石山寺で、紫式部が、『源氏物語』を書きはじめた場面</p> <p>(2 丁裏)</p>	<p>3</p> <p>(تصویر 1) اگست کی چودھویں رات کو "ایشی یاما" مندر میں "موراساکی شیکیبو" نے "گینچی کی کہانی" لکھنا شروع کی۔</p>

<p>1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する 「いづれの御時〜」(0001 / 五① / 一七)</p>	<p>3丁表 いづれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける中に、いとやんごとなきゝはにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。〔割・いづれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きりつぼの更衣」の事也。〕 梨壺、照陽舎。 桐壺、淑景舎。 藤壺、飛香舎。 梅壺、凝花舎。 雷鳴壺、襲芳舎。 此きりつぼにすみ給ふかうみを、御てうあひあれば、きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうみそねみて、 〔「いづれ」から3丁表〕</p>	<p>(桐壺) いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとても愛されていらっしやる女性がいました。〔「いつの時代」とは、〈醍醐天皇〉の時代のことです。帝に愛されていらっしやる女性というのは、〈桐壺の更衣〉です。〕宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お後の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前と呼びます) この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを〈桐壺の帝〉ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日〈桐壺の更衣〉が帝の近くにすることに、嫉妬をしてばかりいました。</p>	<p>4 کس شہنشاہ کا زمانہ تھا، شاہی محل میں بہت سی رائیائیں رہتی تھیں۔ ان میں سے ایک ، جس کا عہدہ کچھ خاص بلند نہ تھا، شہنشاہ کی منظور نظر بن گئی۔ (یہ زمانہ شہنشاہ "ٹائیگو" کا تھا اور یہ منظور نظر رانی "کیریتسوبو" تھی۔) شاہی محل کے اندر رائیوں کی کئی قیام گاہیں تھیں اور ہر قیام گاہ کا الگ الگ نام تھا جیسے "ناشی تسوبو"، "کیری تسوبو"، "فوجی تسوبو" وغیرہ۔ اور رائیوں کو بھی اسی قیام گاہ کے نام سے پکارا جاتا تھا جہاں وہ مقیم ہیں۔ چونکہ یہ شہنشاہ "کیری تسوبو" میں رہنے والی رانی سے بہت پیار کرتا تھا اس لیے لوگ اسے شہنشاہ "کیری تسوبو" بھی کہتے ہیں۔ وہ رانی "کیری تسوبو" کو ہمیشہ اپنے پاس رکھتا تھا۔ دوسری رائیوں کو یہ بات بالکل پسند نہ تھی اور سب اس سے جلتی اور نفرت کرتی تھیں۔</p>
<p>2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる 「朝夕の宮仕〜」(0031 / 五④ / 一七)</p>	<p>3丁裏 あさゆふの御みやづかへにつけても、心をのみうごかし、うらみをふつもりにや、あつしく成ゆき、〔割・をもき／病也〕物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれにおぼして、人のそしりをも、えはゞからせ給はず 〔「おぼして」から3丁裏〕</p>	<p>そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていきました。〔重い病気で〕心細い感じがして、実家に帰っていることが多い〈桐壺の更衣〉のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っている、愛情をお止めになることができません。</p>	<p>5 اس طرح بغض و حسد کا شکار بننے کا نتیجہ یہ ہوا کہ رانی "کیری تسوبو" روز بروز کمزور ہوتی گئی اور آخر سخت بیمار ہو گئی۔ وہ اداسی اور پریشانی میں مبتلا ہو کر زیادہ وقت میکے میں گزارنے لگی۔ رانی کی یہ حالت دیکھ کر شہنشاہ پہلے سے بھی بڑھ کر محبت سے پیش آنے لگا۔ محبت کا یہ عالم دیکھ کر لوگ شہنشاہ کی برائیاں بھی کرنے لگے لیکن اس کو کوئی پروا نہ تھی۔</p>
<p>3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る 「唐土にも〜」(0073 / 五⑧ / 一七)</p>	<p>「もろこしにもかゝる事のおこりにこそ、世もみだれ、あしかりけれ」と、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしもひき出つべう成ぬ。</p>	<p>中国でもこういう恋愛関係が原因となって、世も乱れ、とんでもないことにもなったと、世間の人もおもしろくない気がして、人々の悩みの種にもなり、中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました。</p>	<p>6 لوگوں میں شکایتیں اور پریشانیاں پیدا ہو گئیں۔ کیونکہ چین میں اس طرح کی اندھی محبت ملک کی تباہی و بربادی کا سبب بن چکی تھی۔ لوگ "یانگ کونفی" کی مثال دینے لگے جو چین کے شہنشاہ "منگ ہوانگ" کی ملکہ تھی اور اسے اپنی اداوں کا غلام بنا کر برباد کر دیا تھا۔</p>
<p>4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活 「父の大納言〜」(0103 / 五⑫ / 一八)</p>	<p>此かうみの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼にもをと給はねど、事とある時は、より所なく、心ほそげ也。</p>	<p>この〈桐壺の更衣〉の父はずでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。</p>	<p>7 رانی "کیری تسوبو" کے باپ کا انتقال ہو چکا تھا۔ اس کی ماں ایک شریف خاندان سے تعلق رکھنے والی شائستہ بزرگ عورت تھی۔ شوہر کے نہ ہونے کے باوجود اس نے اپنی بیٹی کی پرورش کا اتنا خیال رکھا کہ اسے دوسری رائیوں کے مقابلے میں کوئی کمی محسوس نہ ہو۔ مگر جب کبھی کوئی مصیبت نازل ہو جاتی تو اسے تنہائی کا شدید احساس ہوتا تھا اور بے چین رہتی تھی۔</p>
<p>5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する 「前の世にも〜」(0136 / 六① / 一八)</p>	<p>さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよなる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。〔割・其を光君と／いふ也〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまうけの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、ならび給ふべくもあらず。</p>	<p>(〈桐壺の帝〉と〈桐壺の更衣〉) 前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〉といいます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いない皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)〉の美しさには、とうてい勝つことができません。</p>	<p>8 معلوم ہوتا ہے کہ پچھلے جنم میں بھی شہنشاہ اور رانی کے درمیان محبت کا مضبوط رشتہ رہا ہو۔ کچھ عرصے بعد اس رانی نے ایک چاند سا شہزادے کو جنم دیا۔ سب سے بڑا شہزادہ رانی "کوکیتین" کے پیٹ سے پیدا ہوا تھا جو وزیر یمن الدولہ کی بیٹی تھی۔ لوگوں کو کوئی شک نہیں تھا کہ یہی شہزادہ ولی عہد بنے گا۔ اس لیے سب اس کی عزت کرتے تھے۔ لیکن یہ اتنا خوبصورت نہیں تھا جتنا وہ چھوٹا شہزادہ۔</p>
<p>6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く 「はじめより〜」(0184 / 六⑦ / 一九)</p>	<p>4丁表 此みこ生れ給て後は、みかど御心ことにをきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、一のみこの女御は、おぼしうたがへり。 〔「御心」から4丁表〕</p>	<p>〈光源氏(若君)〉が生まれてからというもの、帝はこの〈光源氏〉をとても大切にしていच्छایا تھا،皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である后は、心の中で心配しています。</p>	<p>9 شہنشاہ اس خوبصورت شہزادے کو بہت چاہتا تھا۔ رانی "کوکیتین" کو یہ گمان ہونے لگا کہ کہیں شہنشاہ اس چھوٹے شہزادے کو ولی عہد نہ بنائے۔</p>

7 「人より先に〜」(0248 /六③/一九)	ナシ	ナシ	ナシ
8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける 「御局は桐壺〜」(0288 /七③/二〇)	あまたの御かた／＼を過させ給ひ、ひまなき御前わりに、人の心をつくし給ふも、ことはり也。あまりうちしきりまうのぼり給ふおり／＼は、うちはしわた殿、こゝかしこの道にあやしきわざをして、御をくりむかへの人のきぬのすそ、たへがたう、まさなき事ともあり、又ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。	帝が、たくさんの后たちの部屋の前を素通りして、何度も何度もお通いになることに、他の后たちが嫉妬しているのも、もつともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、あちらこちらの道にいたずらがされてきました。それは、見送りや出迎えの侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、絶対通らなければならない中廊下の扉を閉めて、こちらとあちらで協力し、〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。	1 1 شہنشاہ دوسری رائیوں کی قیام گاہوں کے سامنے سے گزرتے ہوئے صرف رائی "کیری تسوبو" کے یہاں آیا کرتا تھا۔ دوسری رائیاں کیوں نہ چلتیں۔ جب شہنشاہ اس کو بار بار اپنے پاس طلب کرتا اور یہ بلاؤ حد سے بڑھ جاتا تو رائی "کیری تسوبو" کو پریشان کرنے کے لیے اس کے راستے میں طرح طرح کی حماقتیں کرنے سے دل کا غبار نکال دیتی تھیں۔ کبھی اس کے راستے میں گندی گندی چیزیں پھیلا دیتیں۔ حالانکہ وہ خود تو پالکی میں چلتی تھی مگر اس کے ساتھ چلنے والی کنیزان کے لباس اتنے گندے ہو جاتے کہ برداشت کرنا ہی مشکل تھا۔ کبھی اندر کی رابداری کے آگے بچھے کے دروازوں پر قفل لگا کر اسے پھنسا دیتیں۔
9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す 「ことにふれ〜」(0344 /七⑨/二〇)	4 丁裏 みかどいとゞあはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ。かうみを、ほかにうつし、此かうみのうへつぼねに給はる。そのうらみ、ましてやらんかたなし。 〔「そのうらみ」から4丁裏〕	帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思つて、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることがありません。	1 2 رائی کی تکلیفوں کو دیکھ کر شہنشاہ کو رحم آ گیا۔ اور اپنی رہائش گاہ کے نزدیک "کوربوٹین" نامی محل میں اسے منتقل کر دیا۔ جو رائی پہلے سے "کوربوٹین" میں رہتی تھی اس کو دوسری جگہ منتقل ہونا پڑا۔ اس کے دل میں جلتی ہوئی آگ اور تیز ہو گئی۔
10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる 「この御子三つ〜」(0378 /七⑩/二一)	みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。	〈光源氏(若君)〉は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めつたにないほど素晴らしいので、〈光源氏(若君)〉を他の后たちも憎むことができません。	1 3 جب چھوٹا شہزادہ تین سال کا ہو گیا تو اسے پہلی بار رسمی لباس پہنانے کی تہنیتی تقریب اس قدر دھوم دھام سے منائی گئی کہ بڑے شہزادے کے وقت سے کچھ کم نہ تھی۔ یہ شہزادہ بے حد حسین اور نہایت خوش اخلاق تھا۔ اسی وجہ سے دوسری رائیاں بھی اسے نفرت نہیں کر سکتی تھیں۔
11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出 「その年の夏〜」(0439 /八②/二一)	其年の夏、御母御休所〔割・更衣の／事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまさらにゆるさせ給はず。日々ををもり給て、いとよほうなれば、更衣の母、なく／＼そうして、みこをほとゞめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。	その年の夏、母の御息所〔〈桐壺の更衣〉のこです。〕は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながらお願いをして、〈光源氏(若君)〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣(御息所)〉だけ帰ることにしました。	1 4 اس سال موسم گرما میں اس کی ماں یعنی رائی "کیری تسوبو" پھر بیمار ہو گئی اور شہنشاہ سے میکے واپس جانے کی اجازت مانگی۔ چونکہ وہ ہمیشہ بیمار ہی رہتی تھی اس لیے شہنشاہ نے نہ تو اس کی باتوں پر کوئی خاص توجہ دی نہ واپس جانے کی اجازت دی۔ اس کی صحت روز بروز خراب تر ہوتی گئی اور وہ نہایت کمزوری ہو گئی۔ اس کی ماں نے رو رو کر شہنشاہ سے فریاد کی کہ اب میری بچی کو گھر واپس بھیج دیا جائے۔ آخر کار یہ طے ہوا کہ رائی "کیری تسوبو" چھوٹے شہزادے کو چھوڑ کر اکیلی چلی جائے گی۔
12 帝は絶え入らなばかりの桐壺更衣を御覧になるにつけ途方に暮れる 「限りあれば〜」(0488 /八⑦/二二)	5 丁表 うつくしき人の、おもやせあるかなきかにきえものし給ふを御覧じて、きしかたゆくすゑ、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげにて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、をくれさきだゞじとちぎらせ給けるを、打すてゞはえゆきやらじと、の給はするを、 〔「にて」から5丁表〕	帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはつきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をするすることもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行こうと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、	1 5 وہ بہت دبلی پٹلی ہو گئی اور اس کے چہرے سے تو پتا ہی نہیں چل رہا تھا کہ وہ بوش میں ہے یا نہیں۔ اپنی پیاری رائی کی یہ صورت دیکھ کر شہنشاہ گھبرا گیا اور اس سے ماضی اور مستقبل کے بارے میں طرح طرح کے وعدے کرنے کی کوشش کی۔ لیکن رائی "کیری تسوبو" میں اب جواب دینے کی طاقت تک باقی نہیں رہی۔ اس کا چہرہ درد آمیز تھا اور وہ بے ہوش پڑی ہوئی تھی۔ شہنشاہ نے کہا "ہم دونوں نے قسم کھائی تھی کہ زندگی کا آخری سفر بھی ہم ساتھ ہی طے کریں گے۔ تم مجھے چھوڑ کر نہیں جا سکتی!"۔

13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する 「輦車の宣旨〜」(0537 / 八⑭ / 二二)	女も、いみじと見奉りて、 かぎりとして わかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。 ※「てくるまのせんじ」は本文(池田本)では、更衣の歌より前におかれている。	〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。 かぎりとしてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり 帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。	16 یہ سن کر رانی بھی خوش ہو گئی اور یہ شعر کہا۔ شعر کا مطلب: ہم دونوں زندگی کے دوراے پر کھڑے ہیں۔ اب الگ الگ راہ پر چلنا ہو گا۔ میں غم زدہ ہوں۔ کیا اچھا ہوتا کہ میں بھی حیات کی راہ پر چل سکتی۔ شہنشاہ نے رانی "کیری تسویو" کو پالکی میں بیٹھنے کی اجازت دے دی اور وہ اپنے میکے واپس چلی گئی۔
14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる 「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)	みかど、御むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかくする程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事もおぼしわかれず。	帝は、胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。	17 جب سے وہ چلی گئی شہنشاہ رنج و غم کے گہرے سمندر میں ڈوبتا رہا۔ اس نے رانی کی مزاج پرسی کے لیے شاہی قاصد بھیج دیا۔ اب زیادہ دیر نہیں ہوئی کہ وہ واپس آ گیا اور یہ خبر سنائی کہ آدھی رات کو رانی "کیری تسویو" کا انتقال ہو گیا ہے۔ یہ خبر سنتے ہی شہنشاہ کا ہوش باختہ ہو گیا۔
15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する 「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)	5 丁裏 みこをばかかくても御らんぜまほしけれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも何事とおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙のひまなくなかれおはしますを、あやしと見奉給ふ。「ひまなく」から5 丁裏)	帝は、〈光源氏(若君)〉をこんな時でも御覽になりたいと思うけれど、喪中の方が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていちゃるのを、何だか変だと見ています。	18 اسی حالت میں بھی وہ چھوٹے شہزادے کو دیکھنا چاہتا تھا۔ مگر ماضی میں کوئی ایسی مثال نہیں تھی کہ سوگ وار شاہی محل میں موجود ہو۔ لہذا چھوٹے شہزادے کو بھی نانی کے یہاں بھیج دیا گیا۔ شہزادے کی سمجھ میں نہیں آ رہا تھا کہ کیا ہوا ہے اور کیوں اسے نانی کے یہاں بھیجا جا رہا ہے۔ کنیزان کو چیخیں مار مار کر روئے ہوئے اور اپنے باپ شہنشاہ کو مسلسل آنسو بہاتے ہوئے دیکھ کر وہ عجیب سا محسوس کر رہا تھا۔
16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒にと泣き焦がれる 「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)	かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ぼうの車に、したひのりて出給ふ。	きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。	19 دستور کے مطابق ایک مقررہ جگہ "اتاگو" پر اس کی میت کو جلانے کی رسم ادا کی گئی۔ رانی کی ماں نے روئے ہوئے کہا "کاٹھ میں بھی اپنی بیٹی کی میت کے ساتھ دھواں بن کر خود کو مٹا سکتی!" اور اُن جہانی رانی کو الوداع کہنے کے لیے جو کنیزان موجود نہیں ان کی گاڑی میں وہ بھی سوار ہو کر "اتاگو" کے لیے روانہ ہو گئی۔
17 「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)	ナシ	ナシ	ナシ
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す 「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)	内より御使ありて、三位のくらみをくり給ふ。	帝から使者があつて、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。	21 شاہی محل سے ایک ایلچی آیا اور اُن جہانی رانی کو درباری منصب سوم عطا کیا۔
19 聡「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑩ / 二五)	ナシ	ナシ	
20 「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)	ナシ	ナシ	
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす 「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)	みかどは、一の宮を見給ふにも、わか宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ぼう、めのとなどをつかはし、ありさまきこしめす。野分たちはた寒き夕ぐれ、ゆげいの命婦をつかはさる。	帝は、第一皇子を御覽になつても、〈光源氏(若君)〉を恋しく思ひ出してばかりいて、侍女や乳母などをつかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕暮れに、〈靱負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。	بڑے شہزادے کو دیکھ کر بھی شہنشاہ چھوٹے شہزادے کو یاد کرتا تھا اور کوئی کنیز یا دانی کو بھیج کر چھوٹے شہزادے کی خبر پوچھتا رہتا تھا۔ ایک دن شام کو تیز اور ٹھنڈی ہوا چل رہی تھی۔ شہنشاہ نے اپنے ترکش بردار کی لڑکی کے ہاتھ اُن جہانی رانی کی ماں کے نام ایک خط بھیجا۔
22 「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六) ~ 25 「『しばしは〜」(0987 / 一二⑦ / 二八)	ナシ	ナシ	ナシ

26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え〜」(1043 / 一〇二八) (19 / 二八)	勅書の歌 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそやれ	帝からの手紙に書いてあった和歌です。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそやれ	2 6 اس میں یہ شعر لکھا ہوا تھا۔ شعر کا مطلب: جب میں محل کے پھولوں کو شبنم آلود کرنے والی خزانے ہواؤں کی آواز سنتا ہوں تو میرے غم زدہ دل میں ایک ننھے پودے کا خیال آتا ہے۔
27 「命長さの〜」(1094 / 一三⑥ / 二九) ~ 30 「上もしか〜」(1256 / 一四⑩ / 三一)	ナシ	ナシ	ナシ
31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える 「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)	6丁表 命婦、かうみの母にあひて、 すゞむしのご糸のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるな みだかな くうは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (「すゞむし」から6丁表)	〈鞍負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会って詠んだ和歌です。 すゞむしのご糸のかぎりをつくしても ながき夜あかずふるなみだかな くうは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに 露をきそふる雲のうへ人	3 1 اور ترکش بردار کی لڑکی نے اُن جہانی رانی کی ماں سے مل کر یہ شعر کہا۔ شعر کا مطلب: جس طرح جھینگر پورا لگا کر رات بھر جھیں جھیں کی آواز نکالتے ہیں اس طرح خزاں کی اس لمبی رات کو میری آنکھوں سے مسلسل آنسو بہ رہے ہیں۔ ماں نے جواب دیا۔ شعر کا مطلب: اس ویران اقامت گاہ میں جھنجھانے والے حشرات کی طرح میں ویسے ہی زار زار رو رہی تھی۔ تو پھر یہاں شبانی محل سے ایک پیامی آنسوؤں کی شبنم لانی ہے۔
32 鞍負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る 「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)	をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうみの残しをき給へる御さうぞく御くしあげのてうど、そへ給ふ。	良い贈り物をする場合ではありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。	3 2 چونکہ یہ شبنمشاہ کو اچھا سا تحفہ نذر کرنے کا موقع نہیں تھا اس لیے اس نے جوابی خط کے ساتھ اُن جہانی رانی کا روایتی لباس اور کچھ آرائش کی چیزیں ترکش بردار کی لڑکی کے ہاتھ بھجوا دیں۔
33 「若き人々〜」(1378 / 一五⑫ / 三二)	ナシ	ナシ	ナシ
34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ 「命婦は〜」(1420 / 一六③ / 三三)	みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざいの花御覧するやうにて、女ばう四五人さぶらはせて、御物語せさせ給へり。	帝は夜更けになってもおやすみならず、庭先に植えてある花を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をしていたらしゃいました。	3 4 رات گہری ہو چکی تھی مگر شبنمشاہ ابھی تک سویا نہیں تھا اور اُننگ میں کھلے ہوئے پھولوں کا نظارہ کرتے ہوئے چار پانچ کنیزان کے ساتھ باتیں کر رہا تھا۔
35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う 「いと細やか〜」(1469 / 一六⑧ / 三三)	御返し奉るうば君の歌。 あらき風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝるなき	帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。 あらき風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝるなき	3 5 ترکش بردار کی لڑکی نے اسے ماں کا خط دیا جس میں یہ شعر تھا۔ شعر کا مطلب: جب سے طوفانی ہوا سے بچانے والا درخت بے جان ہو گیا ہے مجھے تو اس نونہال کے احوال کی فکر رہتی ہے۔
36 「いとかうしも〜」(1504 / 一六⑫ / 三四)	ナシ	ナシ	ナシ
37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う 「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)	6丁裏 うば君の物語わか君の事などそうして、をくりもの御らんぜさすれば、 〈御〉たづねゆくまほろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく (「うば君」から6丁裏)	〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や〈光源氏(若君)〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みしました。 〈帝〉 たづねゆくまほろしもがなつてにても 玉のありかをそことしるべく	3 7 جب ترکش بردار کی لڑکی نے شبنمشاہ کو اُن جہانی رانی کی ماں اور چھوٹے شہزادے کا حال سنایا اور ماں کا دیا ہوا تحفہ دکھایا تو اس نے یہ شعر کہا۔ شعر کا مطلب: کاش کوئی ایسا جادوگر ہوتا جو اُن جہانی رانی کو تلاش کر لینا اور مجھے بتا دیتا کہ اس کی روح اب کہاں رہتی ہے۔
38 「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)	ナシ	ナシ	ナシ

39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る 「風の音〜」(1615 / 一七⑫ / 三五)	一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへの御つばねに参り給はず、月のおもしろきにあそび〔傍・あ=管絃〕をぞし給ふ。人々かたはらいたしと、きゝけり。	第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。	3 9 چونکہ بڑے شہزادے کی ماں یعنی رانی "گوکیٹین" کو مدت سے شہنشاہ کی خدمت میں حاضر ہونے کا موقع نہیں مل رہا تھا اس لیے اب چاندنی رات کو وہ کسی کے ساتھ ساز چھیڑنے میں لطف اندوز ہوتی تھی۔ درباری عہدے دار اور شاہی کنیزان اس خوف سے یہ نغمگی سن رہے تھے کہ یہ حرکت شہنشاہ کو ناپسندیدہ لگے۔
40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない 「月も入りぬ〜」(1660 / 一八③ / 三六)	みかど、うば君のもとをおぼして、 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど	帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月 いかですむらんあさぢふのやど	4 0 شہنشاہ نے ان جہانی رانی "کیبری تسوبو" کی ماں کی فکر کرتے ہوئے یہ شعر کہا۔ شعر کا مطلب: بادلوں سے بھی بلند مقام پر واقع شاہی محل سے بھی خزاں کا چاند آنسوؤں میں دھندلا دکھائی دیتا ہے۔ لمبی اور گھنی گھاسوں سے بھری مضافات سے کیسے صاف نظر آنے گا؟
41 「朝に起き〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)	ナシ	ナシ	ナシ
42 「さるべき契〜」(1731 / 一八⑫ / 三七)	ナシ	ナシ	ナシ
43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵 「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)	7丁表 月日へて、わか君参り給ぬ。きよらにおよづけ給へば、いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮にさだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、世のうけひくまじき事を、はゞかり給て、色にもいでさせ給はず。 (「さだまり」から7丁表)	月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出しません。	4 3 وقت گزرتا گیا اور آخر چھوٹے شہزادے کے شاہی محل میں واپس آنے کا دن آ گیا۔ وہ اتنا خوبصورت ہو گیا کہ لوگ کہنے لگے "خدا نہ خواستہ کہیں خدا بھی اس کی حسن سے متاثر ہو کر اپنے پاس نہ بلانے"۔ اگلے سال کے موسم بہار میں بڑے شہزادے کو ولی عہد مقرر کیا گیا۔ شہنشاہ چھوٹے شہزادے کو تخت کا وارث بنانا چاہتا تھا مگر اس کو معلوم تھا کہ اس خواہش کو دنیا تسلیم نہ کرے گی۔ چنانچہ وہ اپنے اظہار رائے میں محتاط رہا۔
44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去 「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)	彼うば君、なぐさむかたなきゆへにや、うせ給めれば、又これを、かなしびおぼす。	あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、またしても帝は、悲しいことだと思いになります。	4 4 چھوٹے شہزادے کی نانی پھر اکیلی ہو گئی۔ اب جینے کا کوئی سہارا نہیں رہا تو وہ بھی اس دنیا سے چل بسی۔ شہنشاہ پر پھر غم کے بادل چھا گئے۔
45 若宮七歳の読書始めの後、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服 「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)	若君七つに成給へば、文はじめさせ給て、	《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、	4 5 جب چھوٹا شہزادہ سات سال کا ہوا تو اس کی مکتب نشینی کی تقریب ہوئی۔
46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮 「女御子たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)	御がくもんはさる物にて、琴笛のねにも、雲井をひゞかし給へり。	勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。	4 6 نہ صرف پڑھنے میں بلکہ برہنہ اور بانسری بجانے میں بھی اس کی قابلیت اور مہارت دیکھ کر محل میں رہنے والے سب حیران رہ جاتے تھے۔
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を觀て不思議がる 「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)	其比こまうどのさうにん奉りて、	そのころ《高麗人の相人》がやってきて、	4 7 اس زمانے میں کوریا سے ایک چہرہ شناس آیا۔
48 「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑬ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ

49 「帝、かしこき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断 「際ことに〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)	此君のざえかしこく、かたちのきよなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、をくり物どもさゝげけり。此君をたゞ人にはあたらしけれど、源氏になしたてまつるべくおぼしをきてたり。	この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この《光源氏(光る君)》を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。	50 وہ چھوٹے شہزادے کی علمی صلاحیت اور شکل و صورت کی خوبصورتی کی تعریف کرتے ہوئے اسے "بیکارو" یعنی "روشن" کا نام دیا اور اس کے ساتھ بہت سے تحفے پیش کیے۔ دربار میں شہزادہ "بیکارو" کا کوئی سرپرست نہیں تھا اور اس کا شہزادہ رہنا ہی لوگوں کے شک و شبہ کا باعث بنتا تھا کہ کہیں اسے ولی عہد مقرر نہ کیا جائے۔ لہذا شہنشاہ افسوس کے ساتھ "بیکارو" کو شاہی خاندان سے خارج کرنے اور اسے "گینجی" کا خاندانی نام دے کر اپنی رعیت شاہی میں شامل کرنے کا فیصلہ کیا۔ 繪 2
ナシ	7 丁裏 繪	〈繪 2〉 光源氏七歳のときに、迎賓館で、光源氏が高麗の相人に占いをしてもらっているところ (7 丁裏)	(تصویر ۲) شاہی مہمان خانے میں کوریائی چہرہ شناس سات سالہ "بیکارو گینجی" کے قیافے اور بشرے کو دیکھ رہا ہے۔
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く 「年月にそへ〜」(2147 / 二一⑬ / 四一)	8 丁表 年月にそへて、御休所の御事わすれさせ給はず、御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐれ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。〔割・其を藤つぼと申也〕 (「年月」から 8 丁表)	年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しいということ、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。〔その人を、〈藤壺〉といいます。]	51 سال با سال گزر گئے۔ مگر وقت بھی اُن جہانی رانی کی یاد کو مٹا نہ سکا اور شہنشاہ ابھی بھی دکھی ہی رہتا تھا۔ ایک شاہی کنیز نے اپنے مالک شہنشاہ کو بتایا کہ سابق شہنشاہ کی چوتھی شہزادی کے حسن کی بڑی شہرت ہے۔ کچھ دنوں بعد اسے دربار میں پیش کیا گیا اور ملکہ "فوجی تسوبو" کہلانے لگی۔
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く 「母后世になく〜」(2173 / 二二② / 四一)	昔の御休所によく似給て、	昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、	یہ ملکہ اُن جہانی رانی "کیری تسوبو" کی جیتی جاگتی تصویر تھی
53 「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ
54 「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑫ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に氣兼ねもなく、帝の寵愛もしだいに移る 「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	人のきはもまさり給へば、をのづから御心うつりにけり。	身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ちが移っていききました。	اور اس کا عہدہ بلند تر تھا۔ یہ فطرت کی بات تھی کہ شہنشاہ کا دل آہستہ آہستہ ملکہ "فوجی تسوبو" کی طرف مائل ہونے لگا۔
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する 「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、みかどの御あたりさり給はねば、藤つぼにもしげくわたり給ふ。	〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところにも《帝》と一緒によくついていきます。	58 "بیکارو گینجی" اپنے باپ سے کبھی الگ نہیں رہتا تھا اور باپ کے ساتھ ملکہ "فوجی تسوبو" کی چلمن کے اندر بھی اکثر جایا کرتا تھا۔
57 「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	ナシ	ナシ	ナシ
58 「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑪ / 四四)	ナシ	ナシ	ナシ

59 弘徽殿と藤壺が陰悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃 「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	光君に立ならび、御おぼえもとり／＼なれば、かゞやく日の宮ときこゆ。 ナシ	〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとても愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。	5 9 شہنشاہ ان دونوں کو بہت چاہتا تھا۔ جس طرح لوگ "گینجی" کو اس کے حسن کی وجہ سے "بیکارو گینجی" کہتے تھے اس طرح اس حسین ملکہ کو "ملکہ خورشید" کہنے لگے۔
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う 「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、	6 0 بارہ سال کی عمر میں "بیکارو گینجی" کے بالغ ہونے کی تقریب منعقد ہوئی
61 「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
62 「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする 「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	ひきいれの大臣の、みこばらの姫君を、そひぶしにとさだめ給ふ。 〔割・其あふひの上也〕	《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にすることが決定しました。〔その妻が〈葵の上〉です。〕	6 3 اور اس کی شادی وزیر یسار الدولہ کی بیٹی "اؤنی" سے طے ہو گئی جس کی ماں خود شہزادی تھی۔
64 「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	ナシ	ナシ	ナシ
ナシ	8 丁裏 絵	〈絵3〉 光源氏十二歳のときに、宮殿で光源氏が元服の儀式をした場面 (8 丁裏)	(تصویر ۳) بارہ سالہ "بیکارو گینجی" کے بالغ ہونے کی تقریب ہوئی۔
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拜舞する 「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑭ / 四七)	9 丁表 〈御〉 いときなき はつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろは むすびこめつや 左大臣御返し。 むすびつる 心もふかきもとゆひに こそむらさきの いろしあせずは (〈御〉 から 9 丁表)	〈帝〉 いときなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。 むすびつる心もふかきもとゆひに こそむらさきのいろしあせずは	6 5 اس موقع پر شہنشاہ نے یہ شعر کہا۔ شعر کا مطلب: جب تم نے نابالغ طفل کے بالوں کو دھاگے سے باندھ دیا تب کیا تم نے یہ دعا بھی مانگی کہ یہ دھاگا دونوں گھرانوں کے رشتے کو ہمیشہ کے لیے مضبوط باندھ دے۔ وزیر یسار الدولہ نے جواب دیا۔ شعر کا مطلب: گہرے بینگنی رنگ کا دھاگا باندھتے وقت میں نے خلوص کے ساتھ جو وعدہ کیا تھا وہ ہمیشہ برقرار رہے گا بشرطیکہ اس دھاگے کا رنگ بدل نہ جائے۔
66 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大 「左馬寮の〜」(2730 / 二六④ / 四七)	左のつかさの御馬、藏人所の鷹すへて、給り給ふ。みはしのもとに、上達部みこたちつらねて、ろくどもしな／＼に給り給ふ。	左馬寮という役所が所有する馬に、藏人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。	6 7 شہنشاہ نے وزیر یسار الدولہ کو شاہی اصطبل سے ایک گھوڑا اور شاہی شکار خانے سے ایک شکار تحفے میں دے دیے۔ محل کے زینے پر دیگر شہزادے اور امرا بھی تحفے کے انتظار میں ایک صف بنا کر کھڑے ہو گئے اور شہنشاہ نے سب کو عہدے کے مطابق تحفہ دے دیا۔
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚 「その夜〜」(2768 / 二六⑧ / 四七)	その夜、おとゞの御里に源氏の君まかでさせ給ふ。〔割・源は十二才／あふひは十六也〕	その夜、〈左大臣〉の家に〈光源氏〉は行きました。〔〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です。〕	6 8 اسی رات کو "بیکارو گینجی" وزیر یسار الدولہ کی حویلی میں گیا۔ "بیکارو گینجی" بارہ سال کا اور "اؤنی" سولہ سال کی تھی۔
68 「この大臣の〜」(2800 / 二六⑫ / 四八)	ナシ	ナシ	ナシ

69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う 「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	おとゞの子蔵人少将には、右大臣殿の四の君をあはせ給へり。	〈左大臣〉の息子の〈蔵人少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。	69 وزیر یسار الدولہ کے بیٹے کی شادی وزیر یمن الدولہ کی چوتھی بیٹی سے طے ہو گئی۔
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠 「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	9 丁裏 源氏の君は、うへのつねにめしまつはさせ給へば、心やすく里ずみもし給はず。藤つぼの御ありさまをたぐひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見め、にるものなくもおはしけるかなとおぼせば、おほいどのゝ君には心もつかず。 (「里ずみ」から9丁裏)	〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆつくりと〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめったにないものと思つて、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思うので、〈葵の上(大殿の君)〉とはあまり親しくなりません。	70 شہنشاہ اب بھی "پیکارو گینجی" کو اپنے پاس رکھنا چاہتا تھا اس لیے اس کو وزیر یسار الدولہ کی حویلی میں آرام سے ٹھہرنے کا وقت نہیں ملتا تھا۔ ویسے بھی اس کا دل "اؤنی" سے نہیں لگتا تھا۔ وہ اپنے دل کی گہرائیوں میں سوچتا تھا کہ "ملکہ" فوجی تسوبو" واقعی بے نظیر ہے۔ کاش میری شادی بھی ایسی لڑکی سے ہوتی۔ مگر آخر ایسی لڑکی ہے کہاں؟"
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う 「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	おとなになり給てのちは、有しやうにみすの内にもいれ給はず。御あそびのおり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、ほのかなる御こゑなぐさめにて、内ずみのみこましようおぼえ給ふ。	大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。	71 بالغ ہونے کے بعد وہ ملکہ "فوجی تسوبو" کی چلمن میں پہلے کی طرح داخل نہیں ہو سکتا تھا۔ اس لیے جب وہ ساز بجاتا تھا تو اپنی محبت کو برہبط یا بانسری کی سریلی نغمگی میں ہم آہنگ کر کے ملکہ کے پاس پہنچانے کی کوشش کرتا تھا۔ اور کبھی کبھی چلمن کے اندر سے آہستہ آہستہ سنائی دینے والی ملکہ کی آواز سے تسکین حاصل کرتا تھا۔ چنانچہ "پیکارو گینجی" ہمیشہ شاہی محل میں ہی رہتا تھا۔
72 「内裏には〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)	ナシ	ナシ	ナシ
140326_伊井小見出し付加	ナシ	ナシ	ナシ

執筆者一覧 (敬称略・掲載順)

伊藤 鉄也

(国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授)

土田 久美子

(東京工業大学および青山学院大学・講師)

雨野 弥生

(株式会社三省堂 辞書出版部・古語辞典編集者)

菊池 智子

(ヒンディー語翻訳者)

村上 明香

(インド国立アラールハーバード大学大学院 博士後期課程)

浅川 槇子

(国文学研究資料館・研究員)

◆ 編集後記

『海外平安文学研究ジャーナル』第4号をお届けします。

今号は、近年、経済成長が著しいインドに関する論稿を集中的に掲載しました。サヒタヤアカデミーが主となって取り組んだインドの8言語に翻訳された『源氏物語』について、および最近のインド事情に関する論稿です。

そして『源氏物語』に関しては、第6回の研究会において『十帖源氏』をとおして扱ったロシア語についての論稿も掲載することができました。大正時代の翻訳と、古典からの翻訳が存在する貴重な言語の1つです。

また、初年度から継続的に取り組んでいるスペイン語訳に関しては、著名な平安文学のひとつと言える『伊勢物語』に関する論稿を掲載しました。まさに、大陸の東から西までを網羅するラインナップとなっております。最終年度を目前に控えたふさわしい内容となりました。

年度末というご多忙の中、原稿をお寄せくださった方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。第5号もよろしく願い致します。

(浅川槇子)

今回は、ヒンディー語とウルドゥー語という、ふだなじみの少ない言語でのDTPを担当しました。このふたつの言語は、会話ならお互い通じるのに、書き表すと文章始まりの方向、文字の種類など、まったく類似性がないかのように見えることに驚かされました。「伝える」ツールとしての役割だけでなく、言語には文化や歴史、使用する民族の想いといったさまざまな事柄が内包されていることを実感した次第です。

初めて知ることも多く、行き届かない部分もあるかと思います。こうしたことをよく理解して、5号以降の編集に当たりたいと考えています。今後ともよろしく願いいたします。

(加々良恵子)

研究組織

研究代表者

伊藤 鉄也 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授)

研究分担者

海野 圭介 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・准教授)

野本 忠司 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・准教授)

連携研究者

マイケル, ワトソン (明治学院大学・教授)

清水 婦久子 (帝塚山大学・教授)

荒木 浩 (国際日本文化研究センター・教授)

ラリー, ウォーカー (京都府立大学・准教授)

藤井 由紀子 (清泉女子大学・准教授)

高田 智和 (国立国語研究所・准教授)

研究協力者

高木 香世子 (マドリード・アウトノマ大学・准教授)

緑川 眞知子 (早稲田大学・講師)

土田 久美子 (東京工業大学および青山学院大学・講師)

須藤 圭 (立命館大学・助教)

川内 有子 (立命館大学・大学院生)

テレサ, マルティネス (立命館大学衣笠総合研究機構・客員研究員)

庄 婕淳 (立命館大学・大学院生)

畠山大二郎 (國學院大學・講師)

村上明香 (インド・アラハバード大学・大学院生)

浅川 槇子 (国文学研究資料館・研究員)

加々良 恵子 (国文学研究資料館・補佐員)

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 2013 年度研究報告書
「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」
課題番号 [25244012] 研究代表者 伊藤 鉄也

海外平安文学研究ジャーナル4.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.4.0

2016 年 03 月 30 日 発行

〈非売品〉

発行所 人間文化研究機構 国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

電話 050-5533-2900

<http://www.nijl.ac.jp/>

編集兼発行者 国文学研究資料館 伊藤鉄也

<http://genjiito.org/>

(「海外平安文学研究ジャーナル」 <http://genjiito.org/journals/>)

I S S N 2 1 8 8 - 8 0 3 5

© 伊藤鉄也

本書を無断で複写・複製・転載することは
法律で認められた場合を除き禁じられています。